明治三十五年六月五日發行
每月一回五日發行
明治三十三年二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第二巻第七號

口繪



女學世界第貳巻第七號目次

講義

小説

雜録

名家談叢

雜俎

才媛詞藻

雜報



二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり
Nihachi Water.
中瓶一本拾五錢
登錄商標
花王石鹸
本品縮圖
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舗（電話特浪花九二三）長瀬富郎

西施



近信春城氏筆

和蘭アムステルダム府



春宵怨



小川一眞製

梶田半古氏筆

(雜錄欄參照)



奧村五百子女史

（甲の一）

傳染病研究所長醫學博士 北里柴三郎先生
同部長醫學士 柴山五郎作先生 著

通俗 結核豫防書

◉菊判洋裝金文字入全一冊 價壹圓八拾錢郵稅拾錢郵券代用一割增の事

在獨逸醫學士丸山秀雄
東京板橋病院長守川南洋
日本藥學協會講師鴫田修治 三先生著

通俗衛生顧問 全一冊

一名諸藥獨劑術

紙數三百頁正價金九十五錢郵稅六錢◉上製金文字入正價一圓卅錢郵稅十錢

●書中目次大略如左●

食傷、食滯、胃弱、溜飲、癪のさしこみ、腸加答兒、霍亂、腸痛、便秘、痔疾、痳氣、眞田蟲、蛔蟲、蟯蟲、黄疸、腹膜炎、眼病、腰痛、腎臓炎、膀胱加答兒、遺尿、腎虚、遺精、淫欲亢進、痳病、疳瘡、梅毒、咽喉加答兒、扁桃炎、感冒、鼻血、喉頭加答兒、馬脾風、氣管枝加答兒、喘息、咯血、肺炎、肺癆、肋膜炎、心臓病、痛風、僂麻質私、脳病、中風、癲癇、舞踏病、依小兒經兒、脊髓癆、頭痛、偏頭痛、痲疹、風疹、水痘、疱瘡、腸窒扶斯、ペスト、インフルエンザ、コレラ、赤痢、脚氣、實布垤里、切創、刺創、挫創、止血法、銃創、丹毒、破傷風、狂犬病、鼠咬病、疔、根太、癰、瘰癧、疣贅、疥癬、田蟲、いんきん田蟲、なまづ、汗疹、夏月斑、飛火、水蟲、はたけ、にきび、癩病、そばかす、ほくろ、わきが、眼臼、眼瞼縁、ものもらひ、さかまつげ、はやり目、トラホーム、雀目、近視、耳漏、耳鳴、子宮内膜炎、子宮實室炎、月經不順及び閉止、歇私的里等此外卅有餘病記載せり

◉婦人科專門ドクトル宮田守治君
◉中央看護婦會長松本安子先生 著

男女生殖健全法

一冊四六判密書數個入 定價一圓十錢郵稅六錢

本書は日新醫學の原理に依り之を詳說せるものにて先づ生殖器の解剖生理を說き且つ其疾病を述べ夫婦とは如何なるものなるや情交とは如何なるものなるや解釋し情交に關する諸障害を論じ後に小兒養育の事を記載せり世の夫婦たり父母たるものの必ず座右に備ふべき寶典なり

發行所 東京市神田表神保町 修學堂書店

血塊月やく

忽ち下る 確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ惡血毒血を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんとを乞ふ

わきが(腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにて誓て根治し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增しの事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房(電話本局二二五四六番)

理科春秋

中川霞城君序文
木村小舟君著作
（新刊發賣）

菊判全壹冊　正價金貳拾錢　郵稅四錢

本書は理學界の未來を一篇の小説に寓して怪異の現象を説き興味津々たる裡に少年少女の理學志想を開發せんとするものなり、また附するに理科小篇を以てし、自然界の樂しみの如何に大なるかを敎ふ、既にお伽噺冒險譚を味ひたるもの更に此書を繙かすんばあらず

密書數葉挿入美本

●文武堂藏版●

家庭唱歌

巖谷小波君校閲
木村小舟君作歌
田村虎藏君作曲譜

全拾貳冊目次

1 桃太郎
2 舌切雀
3 松山鏡
4 花咲爺
5 浦島太郎
6 文福茶釜
7 勝々山
8 羅生門
9 一寸法師
10 猿蟹合戰
11 俵藤太
12 瘤とり

價壹冊六錢郵稅三冊迄貳錢

出版定

發兌元　東京市本町三　博文館

英學新報

（毎月二回發行）

編輯顧問　哲學博士 農學博士 新渡戸稻造
編輯　エム、シー、レナード。津田梅子
主任　エー、エム、ベーコン。櫻井鷗村

定價金八錢 拾貳部九拾錢 廿四部壹圓七拾錢 郵稅五厘宛

第十四號　五月一日發刊要目

〜肖像〜著者ダニエルデフオー！ロビンソンクルーソー

〜社説〜時間の經濟法、古今の偉人物が如何に時間を節約して大成したるかを述べて讀者に勸告す〜寄書〜愛する色彩（短詩）▲ヤモール孃……新渡戸博士寄稿〜講義〜英語研究法、高等師範學校敎授本田增次郎述

〜時報〜内外の會、運動會▲新事件〜話〜簡易會話〜註釋〜武士道〜譯〜雛嫁和譯、故吹風行〜譯〜若松賤子譯▲和文英譯指南、農府大學試驗員哲學博士杉浦貞次郎述

▲懸賞英作文 當選披露●●●●●新懸賞問題發表

〜講説〜英語新論、コロンジア大學〜其他、マシウス氏述▲作文の要訣〜質疑、笑話等記事豐富

前號には（日米學生の問題に關する通信交換）（計論）を發表しました 新和文英譯指南を續載し杉浦博士講述

本號より本田增次郎氏講述英語研究法の一部を揭ぐ 其他▲簡易會話

發賣元　東京神田表神保町　東京堂書店　電話本局貳四八番

（甲の三）

幸德秋水君著

兆民先生

（製本既成）

全壹冊 洋裝菊判 正價二十錢 郵税四錢

●先生の肖像書畫眞蹟等寫眞版挿入

著者其先師を悼むの情に堪へず涙を揮ふて大筆を驅り一篇豪宕淋漓の文を成す傳記乎否評論乎否弔辞乎否只見る年少の書生として革命家として議員として商人として文士學者としての兆民先生の面目紙上に活躍する者あるを既に『一年有半』に依て先生の議論文章を見たるの人は更に本書に依て其人物閲歴性行の如何を知らさるべからず先生の友人大石正己君の先生を哭する大演説の筆記亦附して巻末にあり眞に字々是れ涙句々是れ血

中江兆民先生著

一年有半

（廿二版） 正價三十五錢 郵税八錢

本書は中江先生の絶筆なり書中述ぶる所政治、經濟、道德の説より民俗、文藝、演劇の事に至る迄取て以て材と爲さゝるはなく、滔々娓々、萬丈の奇氣絶て篤疾を抱く人に似ず。眞に經國の大文章也

中江兆民先生著

續一年有半

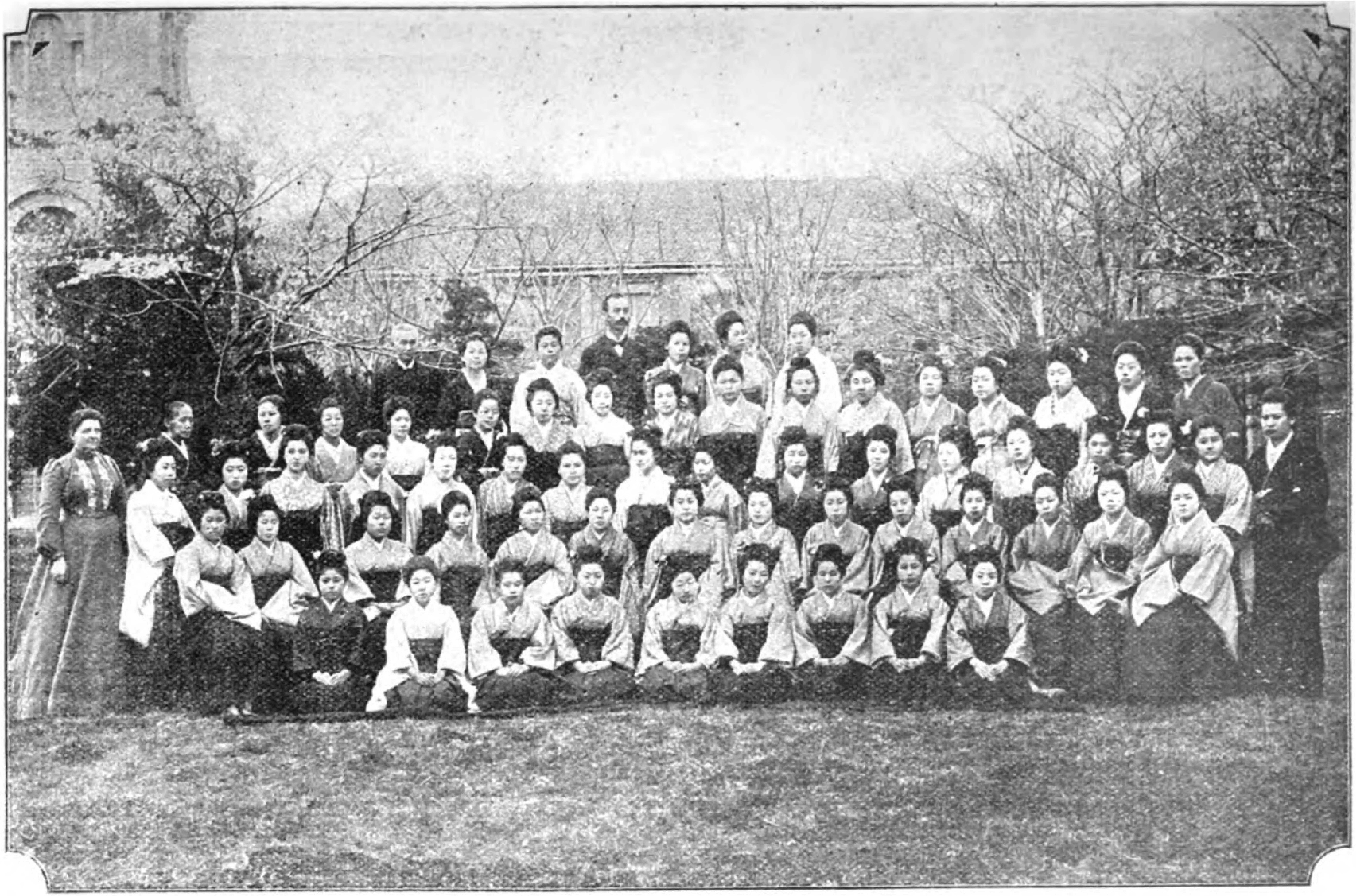
（十八版） 正價三十八錢 郵税八錢

此著前編とは頗る其趣を異にし、學理の見地と實例とを以て古今聖賢の所説を縦横論駁罵倒して殆ど完膚ならしめ以て先生一家の哲學を創建したるもの先生が五十年間の蘊蓄一に此書に依て發揮し盡せり

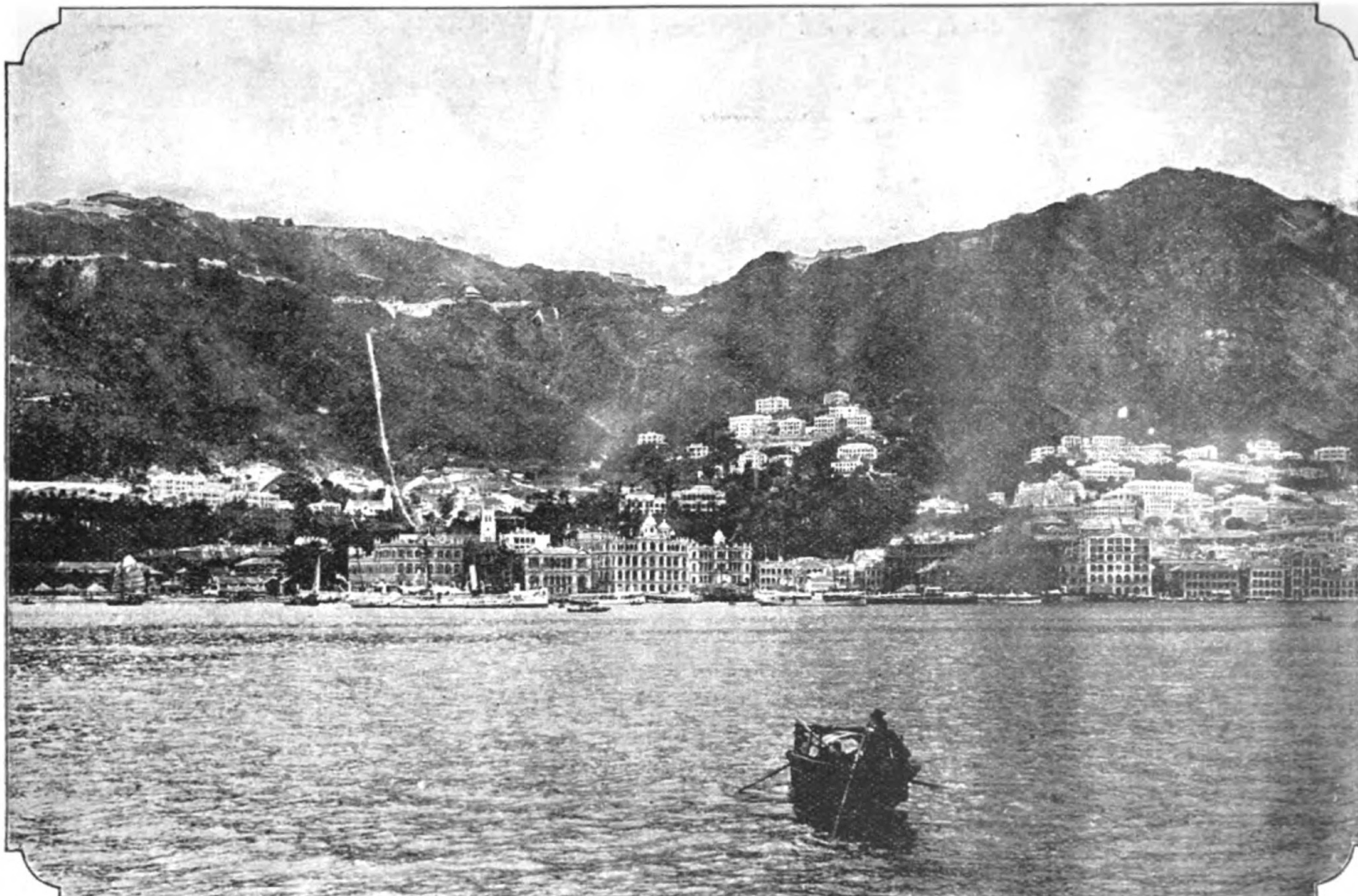
發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（甲の四）

東京女學館卒業生（普通科）



清國香港

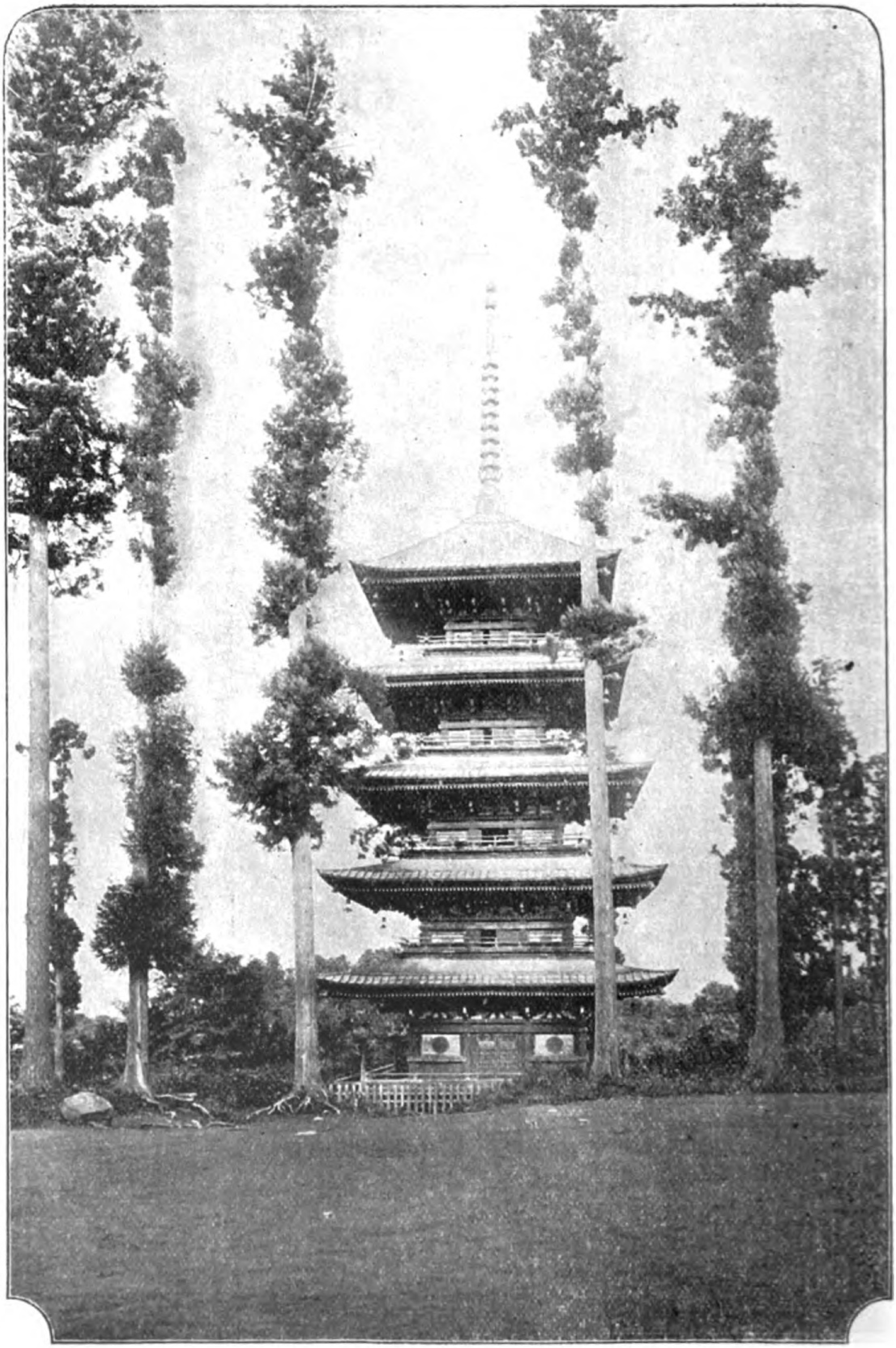


（光村利藻氏撮映）

成女學校第二回卒業生



弘前八坂五重塔

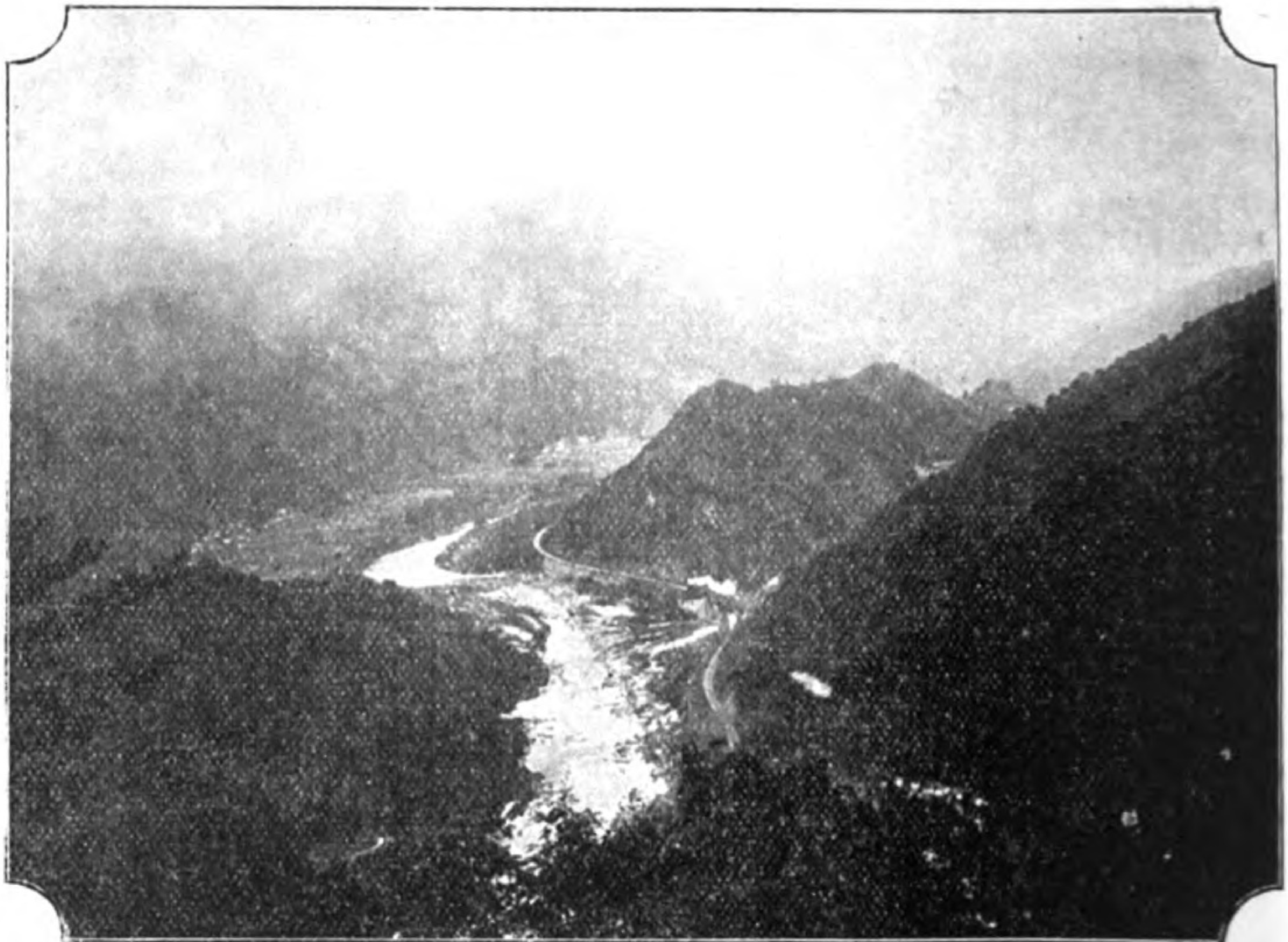


（光村利藻氏撮映）

日本女子大學生徒（國文科生）



霧中の木津川



（大坂 荘馬留三氏撮影）



（京都 關嘉十郎氏撮影）

菜種の心つみ

(雜報參照)



鯉城鐵嶺女史

中古衣服模様

（三井呉服店参考品）



（雑報参照）

博文館創業第拾五週年紀念

普通太陽二冊大
特別美装製本
正價 金六拾錢
郵税 金六錢

太陽臨時增刊 海之日本

六月十五日發行

口繪

●有栖川宮殿下●山階、華頂、小松三殿下●三崎の波浪●横濱港●浦港、元山釜山●室蘭、小樽●夷港、宮津、敦賀●伊豆及上總海岸●長崎、神戸、箱館稅關所●大將三人●浦賀、横須賀、三菱造船所●大阪川口、尾道、高松●那覇港及小笠原島大村港●富士、八島、敷島三艦●基隆、長崎兩港●浦戸、宇和島、細島

●日本海全沿岸と北海道……坪谷水哉君
●東奥沿岸と東京灣……大町桂月君
●東海沿岸より大阪間の航路……田山花袋君
●中國内海と上海及長江航路……國府犀東君
●四國全沿岸と九州東海岸……中内蝶二君
●九州西海岸……江見水蔭君

海上に於ける日本の位地を紹介し全國民に海國思想を皷吹せんが爲め周く人を沿海に派遣し詳に水路國防貿易産業風景風俗の實况を視察し痛快の筆を以て之を叙す正に沿海各港繁昌記と海上漫遊案内とを兼ぬ况んや當代第一流專門諸名流の海事に關する意見と文士の小説隨筆を加へたるは錦上の花となす

(乙の二)

東京日本橋區本町三丁目

博文館發兌

歌舞伎座新狂言脚本

福地櫻癡居士新作

山中平九郎

附 求馬塚身替新田

（製本既成）

全壹冊洋裝
菊判頗美本

正價參拾錢
郵税六錢

元祿享保の間に名優の譽を博したる山中平九郎が怨靈に扮する面の隈取を工夫し得たる逸話を居士の名案を以て脚色し尾上菊五郎の絶伎を以て之を演す即ち名優にして名優を寫す拍案叫奇痛决絶妙

求馬塚は市川團十郎初て之を演し公衆の喝采を得たる名劇にて今度之を再演す忠勇貞烈悲愴憤慨紙上に溢る讀み來れば宛然歌舞伎座の塲を觀るの想なり

福地櫻痴居士作

㊂ 芳哉義士譽

全壹冊洋裝菊判美本
正價三十錢郵税六錢

發兌元 東京本町 博文館

多田親愛先生筆

々暁村をの初霜發
松ゐるからかれ中にもし擺
折ゝ一二三しらかへらむ
中ゝ落花の世しく作ると
も詠莫ゝ乎ゝ世外宮

何事清添削下寸髮

此後福至中你從治好

來了

好些了

此致

敬禮

毛澤東

坂正臣先生筆

橘をよめる歌二首

大伴家持

常世ものこの
橘のいやてり
にわご大君は今も
見るごと

おほきてこゝろふかきにけり
ありそむたちはなの
とのゝかをりなれし
ひとそりけれは
たちはなたるきゝても
宮ゐも風ゐもかはりけや
とまりにし村のこゝろほし

坂正臣先生筆

茂林驟雨



夏山雨後

野口小蘋女史筆



菖蒲



新樹小禽

野口小蘋女史筆



各宗本山名所圖會

（全部廿四冊洋裝菊判石版畫表紙寫眞銅版石版木版密畫挿入）

石倉翠葉君著

（新刊）

本派本願寺名所圖繪

全一冊洋裝菊判
寫眞版石版木版
各種密畫挿入
正價金六十五錢
郵税金拾錢

著者一度各宗本山名所圖會の編纂を企つるや各本山何れも該擧を讃せられ或は資料の供給を熱心し或は數千部の買上げを豫約せらるゝなど大に囑望せられつゝあるが就中是れが第一編として眞宗本派の本山たる西本願寺名所圖會を發刊せんと欲し著者一度これが資料採集と實地採査の爲め全本山へ出張したる際の如きは本山擧つて之を讃同せられ史料の供給と材料の詮索に盡力せられ從つて著者亦深く考ふる所あり滯在數十日大は本山創建の沿革より小は庭前一松の傳説に至る迄微細苟もせず全歷史と實地に參照し文は極めて通俗に振假名を付して編述し且境内の建築物實物古文書室内の裝飾庭園等に至る迄皆之を精巧緻密なる寫眞銅版及石版木版とし殆んど二百餘種を挿入したれば史家の好參考書たるは勿論吾信徒百萬の同胞が座右欠くべからざるの珍寶にして又本書を措き決して他に斯る良書はあらざるなり

續刊

- 第二編 東本願寺名所圖會
- 第三編 佛光寺名所圖會
- 第四編 善光寺名所圖會
- 第五編 身延山名所圖會
- 第六編 高野山名所圖會
- 第七編 成田山名所圖會
- 第八編 妙心寺名所圖會
- 第九編 智積院名所圖會
- 第十編 比叡山名所圖會

（以下續出印刷の都合により各編或は變更す）

（其の一）

發兌元　東京日本橋本町　博文館

娯樂と實益の寶藏

農學士 東條秀介君校閲

東京農學園主 江原春夢君著

果樹草花
盆栽庭造

園藝全書

（製本出來發賣）

●寫眞銅版畫……牡丹培養 農家稼植の圖

●着色石版圖……果物。草花。蔬菜七返刷十二面

全壹册

洋裝菊判美本

正價金六拾錢

郵稅金八錢

園藝の進歩は是れ社會の進歩なり**花卉。盆栽。造庭**等其高尚にして巧なるときは社會の嗜好も高尚にして複雜に赴ける時あり**蔬菜**や**果實**や鮮にして美なるもの、食卓に上る時は蓋し衛生智識の發達したるを證するに足らむ今や文運日に旺んにして人智の年々に進み社會次第に高尚の域に達せんとせり**園藝**の事茲に於てか世人の大に注目るす所となれり蓋し**園藝**は無邪氣にして娯樂の業たると共に又一方には比較的利益多くして愉快なる事業の最逸なる者なり本書は**東條學士**精細の校閲にして江原氏實驗上の要説なるを以て其の**趣味**と**利益**の**大**なることはいふを要せす且つ挿圖數十個**口繪七返刷**の美麗なるものあれは必要上**園藝者**は一本を坐右に備へ置かざるべからず今や此の**園藝術**は世上一般の注意する所なれは此書の如き有益の冊子を得ること蓋し昭代の珍籍といふべし

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（丙の三）

内田不知庵君著 口繪（美人夢に惡魔に惱む）コロタイプ版（小峯大羽君筆）

社會百面相

全一冊

洋裝大判紙數五百五十頁
正價五十五錢
郵稅八錢

犀利鋭拔の觀察精緻流麗の文筆と相待つて巧に現代社會の眞相を穿ち文壇近時の寂寥を賑はしむる者是れ本書即ち不知庵先生の百面相にあらずや卷を開けば政事家あり紳士あり商人あり書生あり學者あり軍人あり醫者あり社會のあるとあらゆるものは悉く先生の筆中に收められて表裏前後左右より其妍醜を照破し巧みに眞相を寫す況や其文趣味豐富にして讀下無限の興を添へ喜怒哀樂の情に耐へざらしむる者あり乞ふ一本を左右に備へられよ

佐々木信綱先生編

竹柏園集

第二編
全壹冊洋裝
正價三十五錢
郵稅八錢

心の强き人、弱き人、美くしき人、淸き人、さま〴〵の人相あつまりて、竹柏會は組たてられぬ。會員の中には、專ら詩神に生涯を献ぐるあり。詩歌には縁遠き病理學を專門とせるあり。畫工あり。ピアノ彈く人あり。看護婦あり。夫人令孃あり。僧侶あり。林檎畑の主人あり。山水の景勝をめでて旅に暮せるあり。印幡沼のほとりに且耕へし且歌ふ農夫ありて月毎の研究會、春毎の大會に、相つどひ相語り、歌文を研究する事すでに數年。其會員の短歌、新体詩、日記、紀行文、スケッチ類をあつめ、玆に第二編を上梓す。素より會員相互に研究せむとする爲の一小冊子なりと雖も、あるは心なやめる人の友となり、あるはさびしき旅窓の好侶伴たるべきなり。

發兌元 東京本町 博文館

（丙の四）

新刊

法學士富塚玖馬君編

土地法令大全

全壹册洋裝
紙數五百頁
正價五拾錢
郵稅拾錢

本書は富塚法學士が十數年間訴訟事務を執るの傍事に臨み用に應じて採録彙集せる物にして其數三百有余上は本州より下は北海道臺灣沖繩諸島に至る迄苟も土地に關する現行の法令は收めて遺すなく且排列序次整然として索引自在に携帯至便なり故に法典家は之に由て捜索の勞を省き携帯の便を得へし一般人は各自主義の所在を暗知するの利あるべく共に座右の寶典として必らず一本を備ふるの要あるべし

既刊類書

● 博文館編輯局校訂 十二版 增訂 現行日本法令大全
全壹册脊皮總クロース金文字入 正價四圓五十錢 小包送一貫目

● 博文館編輯局校訂 改正增補 帝國六法全書
全壹册洋裝總クロース金文字入 正價九十錢 郵稅十四錢

● 堤一馬君編纂 現行罰則大全
全壹册洋裝總クロース金文字入 正價二圓 小包送料百匁

● 博文館編輯局編 現行警察法典
全壹册洋裝總クロース金文字入 正價四十錢 郵稅六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(丙の五)

受驗問答叢書

目次

松原岩五郎君編

新撰東洋歷史問答

（第四編近刊）

此書官私立學校受驗者の便を圖りて編述したるものにて上は唐虞三代より下は清朝に至る迄歷史上に顯はれたる重大の事件は悉く之を網羅して逐次問答体に記述し別に中央亞細亞東西兩印度朝鮮西部亞細亞諸國の興亡沿革をも併せて記述し更に最近東洋史上の一問題となりたる支那本部と域外諸民族との關係并に十七世紀の末造歐州勢力の東漸以來亞細亞大陸に影響せし顛末英魯佛獨の勢力の衝突せし事項をも洩す所なく記述したれば初學者の爲めに益する所蓋し尠からさるべし

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

第壹編 新撰日本地理問答 既刊

第貳編 新撰日本歷史問答 既刊

目次

（丙の六）

● 正價 一冊 廿錢 ● 六冊 一圓十錢 ● 十二冊 二圓十錢 ● 二十四冊 四圓 ● 郵稅 一冊 四錢 ●

發兌元 東京市本町三 博文館

理學士 西芳菲山人校閲
木村小舟君著

（新刊）

春夏秋冬 理科手引草

全壹册

●洋装大判頗美本紙數三百餘頁●正價金卅八錢
新素極彩色刷四季動植物圖挿入●郵稅金六錢

●春の巻（自三月至五月）……百四十題
●夏の巻（自六月至八月）……二百五題
●秋の巻（自九月至十一月）……百二十八題
●冬の巻（自十二月至二月）……百十題

本書は專ら動植物兩界に重きを置き少年諸君か日常の玩讀に供せんと為に章句を極めて簡單にして可成丈其趣味を深からしめんことを期せり故に避暑の山海旅行散歩の好益友として一本を所持するの必要あるのみならず少年諸子が四季其折々に起れる日常問題の實驗觀察に便する樣其趣向を凝らせり請ふ續々御注文あらんことを

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

研堂 石井民司君著

理科十二ヶ月

●全十二冊洋装菊判美本
●正價一册拾錢全部壹圓拾錢郵稅壹册金四錢宛

●第一月……新風船
●第二月……雪達磨
●第三月……花の錦
●第四月……汐干狩
●第五月……植物園
●第六月……蜻蛉祭
●第七月……游泳臺
●第八月……富士詣
●第九月……暴風雨
●第十月……銃獵者
●第十一月……幻燈會
●第十二月……歸省錄

發兌元 東京 博文館

（丙の七）

女學世界

第貳卷　第七號

明治三十五年六月五日發行

紀元二千五百六十二年　西暦一千九百〇二年（壬寅）

論説

中等家庭の危機

塚越停春

國家今日の最大問題は經濟問題なる如く、家庭今日の最大問題も經濟問題也。國家今日の經濟問題は事業膨脹資金不足の結果に苦むに在る如く、家庭今日の經濟問題も家計膨脹收入不足の結果に苦むに在り。而して國家に於て今日首として事業膨脹資金不足の結果に苦むものは最も多く中等の事業家に在る如く、家庭に於て今日首として家計膨脹收入不足の結果に苦むものも最も多く中等社會に在り。今日は實に中等社會の家庭に取りて一の危機に臨めるものと謂ふべし。

明治廿七八年役大勝利の結果、償金は散じて國家の新位置に副ふべき幾多の大經營となり、國内の人氣俄に揚り、事業は勃興し、生活の程度は進み、八千萬圓九千萬圓の間に在りたる國家經濟が一躍二億萬圓三億萬圓となりたる如く、個人の經濟も亦俄に激甚なる膨大を致したるは、戰後兩三年の實況なりしに非ずや。然るに其後償金は漸く盡きて增税となり、事業は資本を固定せしめたるのみにして、未だ之が運轉を開始するに

及ばず。是れ其首として事業家の苦みを來したる所以にして、殊に專ら資本の繰り廻はしに依賴したる中等事業家の最も手痛たき影響を蒙りつゝある所以たり。之と同時に他方に於ける社會一般の生活は戰後の景氣に伴ひて著しく昂進したれども、之が收入に未だ見るべき程の增加をなすに至らず。是れ其首として家庭理財の困難を來したる所以にして、殊に收入增加の割合少なき中等家庭の最も手痛き影響を蒙りつゝある所以たり。

試に近き數年に於て、我が社會が如何に奢侈を昂進せしめ、國民の生活を高め、國民の生活費用を增大せしめたる乎を見るに、奢侈品及び生活程度の上昇に伴ひて增加すべき物品中、酒類、烟草類、砂糖類、石鹼類、綿布類、生絲及び絹布類、毛絲及び毛織類、交織類、其他諸布及び絲類、衣服及び附屬品類、粧飾品及び家具類、皮骨角甲牙及び其製品類、懷中時計、寫眞器、紫檀。麝香の如き、年一年より輸入額を增進せしめつゝあるに非ずや。明治廿七年に於ける以上諸品の輸入價額は三千百七十八萬餘圓なりしに、翌廿八年は三千八百餘萬圓となり、戰後に及び一躍昂進して、廿九年には五千五百餘萬圓、三十年には五千百廿五萬餘圓、卅一年には六千九百六十三萬餘圓、卅二年には五千七十餘萬圓、卅三年には七千五百九十三萬餘圓となれるを見る。即ち明治卅三年度を以て前七年目の戰前二十七年に比すれば、實に一倍三割餘の增加をなしたる也。其增加力の激甚なる事ろ驚くに足るのみならず、七千五百九十三萬餘圓を國民全數に頭分すれば、一人平均一圓七十二錢を國外に支拂ひ、以て此等の物品を需用しつゝある割合なるを知る。單に輸入品のみにて已に此くの如し、社會の奢侈が著しく昂進し、國民の生活が著しく高まりたること察すべきのみ。

加之東京市内のみにても、遊藝其他奢侈に關する

生業を爲すもの、料理店四千五百餘、待合一千三百餘、遊船宿三百餘、飮食店九萬七千餘、寄席四百餘、遊藝師匠一千二百餘人、遊藝稼人二千三百餘人、俳優八百餘人、相撲三百餘人、藝妓二千四百餘人、娼妓四千四百餘人の多きを有するを見て、其一斑を知るに足る。

元來生活の昂上と云ひ、奢侈の増進と云ふ、或る意味より言へは則ち文明の進歩にして、必ずしも嫌惡すべき限りに非ざるのみならず、場合に依りては寧ろ之を喜ぶべきものたり。然れども此くの如き場合の生活昻上奢侈増進は、もと民業の發達國民收入の増加したる結果ならざるべからず。若し然らずして一時の景氣に乘し、收入の膨脹に比例せざる生活の膨脹をなし、奢侈の擴大をなすに於ては、恰も根なき花と一般にして、到底永續すべき生活に非ず、凋零せざる奢侈に非ず。然り而して今日の家計膨脹は、實に此の收入の増加に伴はさるの家計膨脹なるを知らずや。

然りと雖、詳に之を察すれは、今日の家計膨脹たる、獨り個人か贅澤を増したる爲のみならず、社會全體の生活を高めたる結果にして、物價の騰貴に依り、如何に低廉なる生活をなさむと欲するも能はざる如き場合少なからず。譬へは明治廿年一月の相場を一百と假定したる内地重要品四十種の平均物價を見るに、廿一年は百二、廿二年は百十一、廿三年は百十六、廿四年は百十一、廿五年は百十四、廿六年は百廿一なりしに、戰役以來俄に其速力を増し、廿七年には百卅四、廿八年には百四十二となり、戰後の廿九年には百五十九となり、卅年には百六十九となり、卅一年には百八十一となり、卅二年には百九十三となり、殆と加倍するに至りたるのみならず、品に依りては三倍以上に及びたるものもあり。而して卅三年の十二月には百八十となり、卅四年の十二月には百七十となり、多少下落の趨勢を示さるに非されども、之か下落には自ら限りある也。現に東京

市内に於て廿七八年頃家賃十圓を要したりし家は、一時三十圓以上の家賃となり、今猶廿圓を下るに至らざるに非ずや。其他萬事之に準じ、嘗に一個月十圓乃至十五圓の家賃を出して、ほゝ中等家庭を住ましめ得たりしものが、今は二十圓乃至三十圓の家賃を出さざれば中等家庭を住ましむるに足らず、嘗に一箇月五十圓乃至七十圓にしてほゝ中等の生活を爲し得たりしものが、今は八十圓乃至百圓にあらざれば到底中等の生活を爲すに足らさる也。又世間の交際突合に關する經費の如きも、嘗に通常集會の會費一圓乃至三圓にして、學生の集會の如き會費五十錢を普通としたりしに、今は會費三圓乃至五圓を其常とし、學生の集會にても一圓の會費は當然の事となれり。生計の膨脹も殆ど已むべからざるもののあるを見るへし。

之に反して他方に於ける收入に至ては、未た決して支出の膨脹に比例して膨脹するまでには至らざる也。上等の生活をなしつゝあるものは措て論せず。下等社會勞働者の如きは、物價の騰貴と共に賃錢も亦騰貴し、諸傭平均賃錢明治廿年に一百なりしものが二十五年に一百八となり、戰後一躍して廿七年に百廿九、廿八年に百卅四、廿九年に百五十五、卅年に百七十九、卅一年に百九十七、卅二年に二百四十となり、殆ど一倍半の收入を得るに至りたり。獨り中等社會に至ては、事業の中止、所有株の下落等より啻に收入の増加を見るのみならず、寧ろ資産の價格を減低したるもの少なからず。又俸給に衣食するものに在りては、一方に物價の騰貴一倍に近からむとするに拘らず、依然として舊の如く、中には多少の増額を見たりとするも、其額は殆と言ふに足らさる程の小額也。此の日に於て中等社會の家政を料理せむと欲するも、寧ろ容易の事ならむや。之を經濟上に於ける中等家庭の危機となす、亦必ずしも過言に非さるへし。たとへ精密なる意義に於て、所謂危機の

絕頂に立つに非ざるまでも、未た決して之を經過し了りたるものとなすべからざるは論なからむとす。是の時に當りて中等家庭の財政を料理するには、之を如何せば則ち可ならむ。積極方法を以て出來得る限り收入の增加を圖ると共に、消極方法を以て出來得る限り節儉を勉むるの外、別に奇想天外より落つる如きの名法あるに非ざる也。去れば一方に積極方法にして之を執り得べき餘裕あらば、如何にもして之を執らざるべからざることと言ふまでもなしと雖、而も今日の場合未だ十分に積極方法を執り得ざるものありとせば、則ち先づ消極方法を執りて支出の節減を勉むるより始めざるべからざるべし。

必ずしも爲し難きに非ざるが如くして爲し易からざる節儉也。一本の薪を節するより二箇所の暖爐を設くるが易きは人情也。眞に節儉の實を擧けむと欲せば、則ち須らく一家一致の上ならざるべからず。一家中止せざるの決心をなしたる上ならざるべからず。米澤の莅戶太華翁が、儉約は先王の道にて、上天子より下、下々まで常に心を付べきものにて候、儉約はいやなものにて、家内上下落あわねばならぬものにて候、只々家内むつまじく、機嫌よく、にこにこ笑い語るより、目に見へぬ儉約は出ると、心得可被申候と云へるは、旨あるの言と謂ふべし。

斯く一家打揃ふて愈節儉をなさむと期するに於ては則ち一方に出來得る限りの勤勉を以て收入の增加を圖ると同時に、一方には二宮尊德等が好て慣用したりし如く、先づ其家平均の收入支出を精査し、以て、一家經濟の豫算を定め、成るべく行はれ易き點に向て節約を加へ、斷じて收支相償ふて多少の餘財を生ずべきものたらしめ、誓て豫算以內に於て生活せざるべからず。此くの如くにして一月、此くの如くにして三月、此くの如くにして半年、此くの如くにして一年、次第に慣るゝ

に至り、斯に所謂節儉も案外に行ひ易きものと成るべし。困難は唯之が當初の節儉に着手せむと欲するの際に在るのみ。

是を要するに、各家收入の増加漸く大にして、遂に社會生活の進度と互に均衡を得るに至らば、所謂中等家庭の危機は斯に過了すべしと雖、生活程度の日一日より高まるべきは亦社會進歩の必然的結果也。而して一方に事業の盛衰位置の變動等より、收入の程度を守るを難しとするは、何れの家に在りても然りとする所に非ずや。常に節儉の慣習を存し、以て不時の備へをなすこと如何なる場合に於ても斷じて爲さゞるべからざるの所たるのみならず、殊に今日の如き中等家庭の危機とも謂ふべき場合に於て、最も切に之が必要を感ずるを見る。(完)



花看半開(下)

棚橋絢子

先日或人が參つて女學校を拵へやうといふ事であつたが、私はおもふに女學校を拵へるのは大變結構である、けれども今の女學校はどれもこれも皆な教師を養成する方が主になつて居る、生徒に一家を修むる所の人を仕入れる主義のが少い、習ひに行く者も教師になるが宜い、學校に行くならば教師になつて口過ぎするが宜いと云ふ主義で、親もそれ子もそれに連れてさうなつて居るけれども、私は教師となつてお金を取るが本當の獨立と思ふては大變の違ひであると思ふ、口過ぎして居ればそれが獨立と思ふのは間違である、女は進取に長じて居るか保守に長じて居るかと云へば、保守に長じて居て進取に乏しい、其の長じた所を以て養ひ立

て丶行かねば大變不利益である、人間各ゝ長所がある、それを棄て丶短所を取つて伸ばして行かうと云つても性質に叶はぬから勞して功が少い、譬へば自分の仕來り仕事は、珍らしくないゆゑ、棄て丶置いて、人の上手に面白く出來る事を見て容易に思ひ、自分の技倆をもはからで不得手な所に手を出し、いたづらに名譽を博せりとするは木に緣りて魚を求むると同じ事であるから、矢張り人は人、自分は自分と短所の骨が折れて結果が惡い事を執らうより長所を以て女の中で貴ばれ其の



摸範となれば足れり、これこそ眞の獨立なり、又男は男で官途なり何なり其の仲間で頭を擧げ人に尊敬せらる丶樣勉強するが肝要である、故に各ゝ其の團體の内で頭にならるれば滿足して宜からうと思ふ、然らば男子は進取主義を執り、女は保守にして内部の事に萬事改良を加へ不便なき樣注意し、且つ圓滿なる家庭を作り出さばそれは立派なものであつて、男子から攻擊を受くるともなく、且つ外向の事までも相談相手となるに至るもので、あながち金を取つて來ぬとて卑しまれ

るものでない、自分で金を取らねでも良人に金を取らす樣にして自分は內を守つて能く經濟を立てゝ行けば、一家の金は自分の金に同じである、金は取つても不經濟で富有にならねば何の効能もない、近來女敎師が足らぬ所から敎師を拵へる學校が多い、又之を拵ると言はねば流行らぬ、何を卒業すれば何々の敎員になるゝと云へば多くの女生徒が這入つて來る 一家の家內になるだけと云ふと耳新らしくないから入學者が少ない、其處で時の流行を追ふて行く樣になる けれども流行は長持はない、長持がなければ一國の不經濟である、金を取つて來ても諸雜費を引けば經濟上多分の得がない、よし得があるとしても將來望みを屬する子供を他人に任さねばならぬ、自分が十分の敎育を加へても兎角出來損ふが多いに、無敎育なる者に任せ漸く朝晩に聊か世話をする位にては中々思ふやうな子は出來ぬつまり、家に居て始終氣を附けて善く仕やうと熱心に思ふて育てた子と、學校に任せて朝夕ばかりに世話した子とは大に其差がある、女敎師にても成つて居る人は學校用の外交際に費す時間もありて迚も子供の敎育は十分に出來ない、(家に居ても下女に任さねばならぬ事は免かれぬと思ふ) 然らば自分の意思通りに行かぬ、なぜならば下女などはよいものにても唯ゝ子供の氣に入る一遍にして前後の辨へがないから自然と惡い癖が附き、三ッ子の心百まで到頭其癖が脫けないで育て損ふ事ある習ひ、遂には一家の不幸となる、一家の不幸は一國の不幸となるからドウしても一家の細君たる者は經濟の思想を永遠にし一國の精粹たる子女の敎育に力を盡くし將來の幸福を得んことを思はねばならぬ。

然り乍ら人各ゝ幸あり不幸あり、豫ねて其の覺悟をして置かねばならぬから、何か自分の長所があるなら其長所を以て萬一の不幸を救はねばならぬ、それゆえ藝能は修めて置かねばならぬ、餘力あれば以て文を學ぶと云ふ意氣込で何處までも進み學ばねばならぬ、けれども初めから敎員をせねば獨立てない、敎員をして金を取らねばいかぬと云ふやうでは人間が卑しくな

る、さういふ風であれば女子の位置を高めると云ふ事は出來ぬ、表向き先生々々と言はるゝけれども根性が低いものになる。

昔しの言葉に肩あつて着ずと云ふ事なく、口あつて食はずと云ふ事なしとある、用意さへして置けば難儀するものでない、世間から喧ましく言つて抛つて置きはせぬ、人間がそれだけに出來て居れば随分世話のやきてが出來て來るものである、自分で一生懸命にやつて居れば彼是と人から出るやうにして呉れます、人からして呉れるでなければ面白くない、自分から出やうとしても出られぬ時は却て面目を失ふ、私共の若い時分は家ばかりに居るものと云ふ押へ付け主義であつたから世間の事に闇かつたけれども段々と人から斯うもしたら宜からう、アーもしたら宜からうと此方で考へも附かぬ事を向うから考へて持つて來て呉れた事がある、故に世の中は精出して居れば金も何も無くても暮らして行かるゝものであり、子供の教育もドウか斯うか身分相應に出來て行くものである、幾ら金がありても精を出さねば世の中に用ひられぬ如才なく一向に働けば彼の人ならばと思はれ一方を任かされる、さういふ樣になれば人が與へて呉れる、人が與へて呉れるを待つて暮らすが安氣で一番宜いです。

不幸に逢ふた時は成るだけ靜かにして愼み働くが上分別である、尺蠖が引込んで伸びると云ふ通りで、扣へて居れば何れにか伸びらるゝ譯である、若い方は其處に氣が附かないから私共の申す事は有り觸れた事ですとて耳を留めぬ、が實際其の方が徳用と思ふ、耳には有り觸れて居ても爲る段になれば有り觸れたところが極く新しく人は耳だけて又かと仰つしやつても自分はそれが。一本槍てす、漢籍を少々聞きかじつて居るから進取主義は自分てやり得ない、保守で此の年まで來たからそれで通さうと思ふ、故に其の主義で話して置けば又これを賛成して呉れる人もある時節があらうと思ふ、それを待つより外はないであります。(完)

牡丹芍藥

九皐生

▲婦人の特性

婦人は其の容貌に於て、其の性質に於て、花の如く美しく、倶に優しく、情に於て濃やかに、注意の周密なるを以て其の特性としてある。けれども、固婦人の性質は極めて柔順なるもの成るだけに、時としては或ひは其の敎育の不完全と、境遇の不順等に依つて不具的過度の神經質に失する事がある。去れば婦人に於ては自から力めて注意すべき事で、殊に婦人の性質が、其の子供に注がれる事の、比較的男子よりも多いものなれば——尤も是れは子供の幼時に於ける母の敎育に依るもので、若し其の母たる人の性質不健全にして、病身、或ひは無敎育なる時は、到底健全なる國民を造り爲すことが出來ぬ。と云つてお轉婆は決して婦人の名譽では無い。婦人の特性は花の如く美しく、雪の如く淸らかなるを以て、月の如き光りあるものである。

▲家庭敎育

然れば人の母たるには、其の智識に於て、其の學問に於て、又衛生的にも十分子供を敎育するだけの資格を要するのである。若し母たる人の不幸にして始終病床に在り、其の不快の顔色や、苦痛の唸き聲を子供に見聞きさする時は、自然子供の發達すべき精神を壓迫するから、知らず〳〵の中に不活潑のものに成らしめ、一方には其の良人に對して慰藉を缺くから、家庭に溫情が湧かなく成る。隨つて双互の間に不愉快を感じ、遂に家庭の平和を破り、世間に聞かれまじき夫婦喧嘩を爲すが如きは、幼兒の敎育上に多大なる惡影響を及ぼすもので、人の親たるの威信を損ずる原因である。猶其の外、子供から動物や植物の事に就いて尋ねられても、母たる人が夫れを說明するだけの敎育が無かつたなら、これ又大いに親の威信を落すものなれば、婦人に普通の敎育は尤も缺くべからざるものである。

▲婦人の心得

それから婦人に缺くべからざる心得の第一は裁縫で

ある。尤もこれは其の境遇に依つて、强ち自から針を持つ事をするの必要はあるまいが、縫ひ方——裁ち方の善惡から、自分の躰に合はせるまでの指圖をする心得が無くてはならぬ。若し夫れだけの心得が無く、着物は一切他人任せに、仕立ての善惡も見分けるほどの智識が無かつたなら、自然友達の侮蔑を受け、召使ひ等の不信を招き、嫁しては姑小姑に疎まれ、果ては良人にさへ愛憎を盡かされて遂に琴瑟相和せざる底の破鏡嘆を見るに至る。又子供に對しては親の威信を失ふのである。

猶嫁して必要なるは料理の心得である。是れは外國ても、日本でも、久しき以前から其の必要を認められたもので、既に日本には茶の湯に於て料理法を設け、雛祭りを以て献立て其の他の諸禮式を心得させたるが如きは、尤も進歩したる家庭教育である。



又吾人の驚嘆せるは男女の交際法である。日本に茶の湯の起りたる其の原因は、未だ十分調べた譯で無いから判斷は分らないが、是れは道義上の或る反動ではあるまいか。其の當時に於ては、最早や男女七歳にして席を同じうせず底の、極めて愚論なることを知覺した痕跡が瞭々と彼の茶道の上に見はれてゐる。けれども惜いことには、これを誹する——

所謂宗匠なるもの丶、未だ頑才固陋にして夫れを知るの明なく、徒らに古人の繩墨に依り、茶道を講ずるにあらずして弄し來たつたので、折角展開され懸つた男女の交際法は、依然として其の門戸を閉鎖されて了つた。

▲男女の交際

て、男女は成るべく親しく交際した方が可い。今日まで此の交際が餘り嚴格過ぎた爲に、却つて種〱なる弊害を生じたのであつた。と云ふのは、男性は男性、女性は女性と云ふやうに、お互ひに離隔してゐては、何時までも兩間に緻密なる性格を知ることが出來ぬ。それて百年の苦樂を偕に爲やうと云ふのだから、隨分危險極まるもので、丁度富籤を買ふやうな譯だから、旨く當れば一攫萬金の僥倖を得る事が出來やうが、一つ外れたなら一生悲境に終らなければ成らぬ。隨つて婦人には聞〱貞操を破棄する間違ひが起るのである。

▲細君の役目

是れは云ふまでも無く、良人を慰藉し、子供を育て丶一家を管理するのであるが、身分と境遇に依つては中〱暇も無い人もあらう。然し成るべくは暇の無いやうに力めるが肝心で、若し暇のある人はお茶なり音樂なり、或ひは語學――習字――繪畫等は尤も學ぶべき事で、社會の慈善事業は都て婦人の義務として、敢へて男子を煩はすべきものでは無い。婦人は素多血性のものなれば、其の身の餘り閑散なる時は、遂に健康を損じ婦人特有の多感は高じてヒステリーと成るとあれば、出來得る限りは躰に暇なく、適宜の運動を爲し、成るべく感覺を冷靜に守らば、健康を害することは稀れなるべく、又意志の强硬をも求めることが出來る。由來婦人の意志は薄弱に過ぎる。然しながら、俄かにそれを改めるに、注意の周密を欠き、同情を忘却するにはあらす。婦人は婦人の優しき同情と注意は飽くまで維持せざるべからざるは云ふまでも無く、其の召使ひ、或ひは食客等に對しては、尤も深き同情と周密なる注意を要す。

▲宗教の必要

婦人は一般に迷信家であるが、迷信は決して貴すべきもので無い。けれども宗教の信念は尤も必要てある。是れは婦人自身の安慰を求めるにも、子供を教育するにも、極めて確かなる根據たるべく、夫れに依つて良人の慰藉を計ることも出來。家庭の團欒をも得ることが出來る。

この家庭の不和合ほど人生悲慘なものは無い。而して其の元は多くは婦人である。が、去りとて罪は強ち婦人に歸するので無い。寧ろ罪は男子にあらうが、詰り原素は男子に在つて、醱酵するのは婦人に在るのであるから、婦人たるもの注意すべきである。

▲服制の改良

從來しば／＼絕叫された言葉であるが、未だ今日まで善良なる改良策の行なはれないのを見ると、極めて重大なる難題と見へる。最も太古作昔からの習慣であるから、急に改めることの出來ないのは無理もないが、一つには是れまでの改良策なるものが極めて不完全であつたからでもあらう。先頃も或る繪師が改良服の圖案を發表した事があつたが、吾人は大いに彼の意見の眞僞を疑ぐつた。若し洒落ならば、斯る重大なる問題に就いて、假にも洒落れ戯るゝは無遠慮なる惡戯と云ふべく、又眞面目なる意見とすれば、實に狂躰極まる服制である。

第一服制を改良するには、今日の家屋から先改良して懸らねば成らぬことを記憶しなければならぬが、それは到底急に行はれぬ議論で、目下のところ、改良と云ふよりは寧ろ各自に於て注意する方が穩當である。

其の注意の要點は、成るべく肌を見はさぬやう。夏冬に限らず。足には必らず下穿と足袋を穿くこと、縮緬の三枚重ねを着たるは如何にも立派なれど、風に裾を煽られ、若くは階段等を登る時は、ニヨキ／＼素足の露はるゝは甚だ見憎くいものである。又着物は餘り長くなく、袖は成るべく薄く男物と同じなること、帶も同樣成るたけ薄く手輕るなるものとすれば、股引を穿いても小用を達すにさほどの困難を感ぜぬ。裾が長いと自然細紐で腰の廻りへ、アゲをするやうに成るから、渾て

が難事に成る。外國でも一時は非常に裾長が流行つたことがあつたさうだが、不經濟なるは云ふまでも無く人間が極めて不活潑に成ると云ふことから、頗る物議を釀したが、婦人社會では夫れにも關はらず。僅かな虛飾に依つて相變らず流行してゐた時に、或る貴婦人が大道中惜氣も無く長い裾を引摺つて行くのを、靴直しの子僧が惡作にも其の後から往來に捨てゝあつた破靴を拾つて、ソツと其の貴婦人の長い裾に載せたのを、貴婦人は恁くとも知らず、市中の大通りに此の恥辱を曬したので、それから長い裾はバツタリ廢つたと云ふ話がある。

又脇開きから臂や肋の見へるのも甚だ見苦しい。これも何とか工夫を施したいものであるが、此處はまだしも、帶さへ改める事が出來るなら、袖付けに依つて怎にでも成るが、脛ばかりは一日も早く下穿を穿いて此の醜態を改めたいものである。(完)

婦人の常習便秘に就て　(一四)

醫學士　石原笠軒

世間には男子でも、御婦人方でも、兎角便秘して、困ると云はるゝ人は、隨分、澤山のものでありまして、之が療治に就きましては、醫者も甚だもてあますのです、此常習便秘の療治に用ゐる藥と言つたら數多くありまた、藥でなくとも色々の外達的の手段方法でもつて、これを癒さうとすることもあります、これ畢竟、此常習便秘を來す原因が種々雜多である爲めと思はれます、それゆゑ、一ツの藥、一ツの手段を用ゐるにしてもそれぞれ原因に應じて、極適當の分を撰ばなければなりません、惣じて、下劑の用ゐ方は、醫者の方では、一寸容易の樣であるけれども、實際は、中々、注意を要することでありまして、大に、學識の深淺、經驗の多寡によツて、其成績に良否を來すことが知れる程であります、

便秘のある場合に、素人の考でもつて、下劑を服用することは、往々、あるやうに見受けますが、之は、隨分危險

の虞あるもので、大に愼まなければならないのであります、例之ば以前、便秘の時に、醫者から「リチ子」油を貰ッたからとか、或は硫酸麻偶涅矢亞を呉れたから、そして是等は、誰れでも買ひ求めることが出來るからと云ッて、自分の身體の具合もよくわからないのに、之を服用するなどであります、無論、是等は、比較的弊害の少い藥品てあるからして、非常に恐ろしい失策もないかもしれませぬが、時とすれば、甚だ、よろしくない結果にてッくわすことがあるでしやう、それゆゑ、こんなことでも、能く〳〵注意せねばなりません、私は、皆さんに、藥品を以て便秘を治療することは御知らせ申さぬのであります、すなはち右様の危害に遭遇することがないとも限らぬからであります、唯今此處で御はなし申すのは、便秘、殊に、常習便秘の素人療治であッて、誰でも出來て、また些少も危害のない、そして有效のものを御話致しましやう、尤も、小兒にも、よく便秘が起ッて、其母たる人の困ることも澤山あることですが、是は別として、何れ機會を得ば御話申すこととし、此處では、唯、皆さんだけの御參考となることに止めます、それに先ちて、少々、常習便秘の原因に就き一言致したいのてす、けれども、あまり六ケ敷い病氣が原因であるぶんは略しまして普通のものだけ、しるしませう、



御承知の通り、腸には蠕動作用と申して、腸壁が、丁度、蟲の這ひ動くやうに上の方から下の方即ち胃の方から肛門の方に向ひて、徐々にうねり動くのであります、此運動につれて、食べたものが、胃から下へ〳〵とゆき、其間に、有用のものは消化せられて身の內に吸ひ取られ、不用の不消化物は、滓となッて下りてくることが出來るのてす、便秘と申すのは、主に、此蠕動作用が弱くなる爲

めに起るのでありまする、是ぞ、即ち、便秘の本體であるのです、處でかくなる原因と云へば何であらうか、種々の疾病で、全身の衰弱と脱力との爲めに來るのは別として、食物の分量があまり少な過ぎること、殊に其食物が、液質を含むこと多量なること、又腸を刺戟する性質に乏しき食物なる時(植物性の纖維、例へば靑菜の筋などは不消化物なれども腸壁を刺戟して蠕動機能を亢進するものより)床に就く時間多くして運動することと少き時等には兎角便秘を起し易きものであります、肉體に變調なくしても神經の方の調子がくるッてまゐる時、例えば、普通に、人がよく知ッてゐるものでは、神經衰弱症とか、「ヒステリー」とか、鬱憂症とかにも往々にして常習便秘を來すのであります、如斯人には、一寸、外觀では、健康に見へて毎日の仕事にも、別段、差支ふる程でもないけれども、どうも當り前の人々の樣に、通じがよろしくなる、三日目か四日目でなければ、これにをられない、そして、何事も物憂く、うるさくてたまらない、頭がぼんやりとして、何處か押付らるゝ樣な感じがする、手足がひやッこく、胸が呼吸ぐるしいなぞと云つて來るのが澤山あるのであります。

職業も大變便秘と關係があります、運動不足勝に在るもの例之ば終日坐業をやッてゐる、和服の裁縫職等も其一例です、其ほか、之に類似のものに就きては皆さんの思ひ當りになることでしよう。

此ほか尚澤山の原因がありまするがあまり醫者の方に深入りするやうですから、省略することにして療法の方に說き及ぶことゝ致します。

運動の不足なるお方は、それ相當に、適度の運動をなすことが必要であります、之は別に、喋々を俟たぬのです。

それからまた、何れの書物にも記載してある通り譬へ便通があらうが、なからうが、毎朝一定時刻に、必ず、厠に上ることを務とめねばなりません、そうすると、之が習慣となつて、其内には、通じがよくなるやうになるのであります。

また、早朝起きて、空腹の時に、冷水を一合餘り飲むか、

或は、冷水一合に、重炭酸曹達二瓦(半匁)を溶きたるもの、或は食鹽を同量にとかしたるものを服用し、それからすぐに散歩をするとか、或はまた下腹を兩手にて揉み下したり、或は腰と膝とを屈してかゞみ又立つことを數十回(是一種の躰操法なり)反覆する、そして、厠に上りみる、一回にして効能があらはれぬとも決してやめず、何度も〳〵試むるのであります、

それからまた度々溫湯に這入ることを務め、其時にも、下腹を兩手にて揉み下げる、また、夜分床に就く前に、濕布をあてる、即ち、よく水の浸む晒木綿とか「フラチル」などの類を丁度腹巻になる位に調製し、之を微溫湯にひたして、すぐに腹部に巻き、其上から乾きたる腹巻をあて丶、水分の外部に漏る丶のを防ぐのであります、其他、常に按摩を招きまたは、自分でもつて、腹部を按摩することも必要であります、



それから、溫泉もよろしいのです、溫泉場ゑゐきて若し其溫泉の成分が適當のものならんには、空腹時々、之を飲用するを良とす、獨逸で有名なるは皆さんも御承知であるべきカルルスバードなどこれであります、日本では、鑛泉誌の類もありますが、まだ〳〵、調査がゆき届きません、鑛泉の飲用は、初めには一回二三勺位より漸〳〵増量して二合近くに達するのです、前に記るしたる如く之を飲用したる後散歩及び前述の躰操法其他を行ふべし、我邦で、便秘に服用して効ある鑛泉は、鑛泉分類上より云ふと、鹽類泉の種類中で殊に芒硝泉が適當であつて、浴用內用(服用)共に奏効ありと云はる丶のです、私は實驗したのではありませんが、鹽類泉として記載してあるぶんは、塔ノ澤、宮ノ下、底倉、木賀、湯川(共に神奈川縣)熱海、和田(共に靜岡縣)有馬(兵庫縣)伊香保、澤渡(共に群馬縣)日光、相ノ湯(栃

木縣）鍵湯（山口縣）湯原（岡山縣）平田（大分縣）岩井（鳥取縣）玉造（島根縣）其他澤山あります、

食物上の注意は殊のほか大切なる事項であつて前にも申述べたる如く、腹壁を刺戟する性質の食物に乏しき場合には便秘を招き易いのてすから、此點に着目致しまして食物の膳立を改める必要を見るのてす、無論、不消化の度が甚しいものは避けなければならぬてすが、普通の意味で云ふ所の野菜類中、新らしき蔬菜の類てやはらかなるものは至極適當であります．其例をあげて見やうならば菜葉の內て、京菜、小松菜、つさ、きやべつ、烏菜、蕪菜、唐菜、鶯菜其ほか葱、芹などもよいのてす、此等は消化は良いが、其纖維が腸壁を刺戟して所謂蠕動機能をたかめ、早く通ずるやうにする働をもつてをりますけれども、此の如き物ばかりては滋養分が足りないから、混食法てもつて、肉類、魚類等をも食べなければならぬです、けれども、比的較上記の野菜類を多く混ぜるやうにするのてあります、

また、お汁は、なるべく、少くたべるやうにし、お茶もあまり飲まないのをよしとす、牛乳は、人によりては通じのしまると云ふ人と、通じをよくすると云ふ人とあります、前の特性の人はよして、後の方の人はのむことと致しましやう、

神經の方から來る便秘は、それ〳〵醫者によりて、其治療を受くると共に、可成、自分て、氣分の靜まることを務め同時に上記の事項を試みるのてあります。

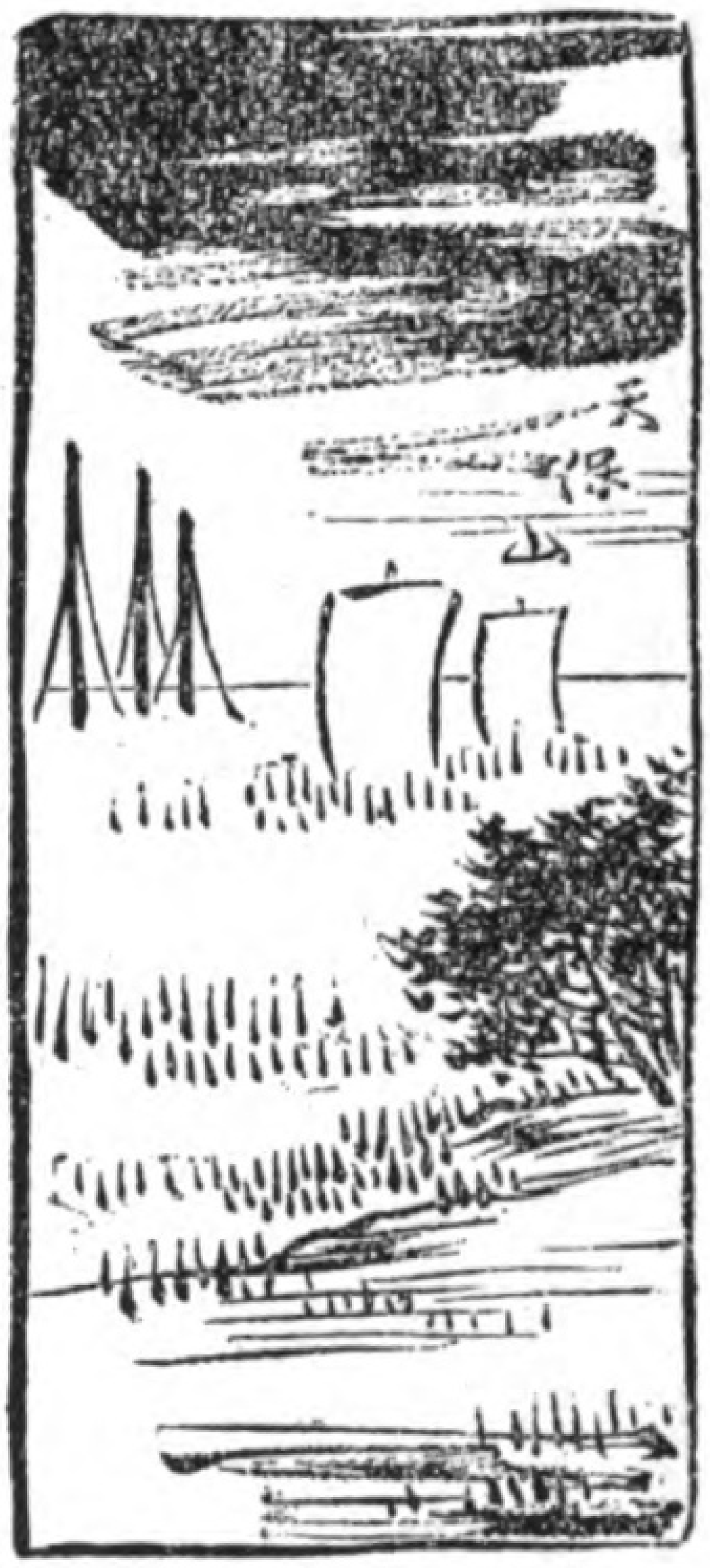
此にか、又、普通行はるゝ方法ては、灌腸注腸てあッて、「リスリン」に湯をわりたるもの、石鹸水、「リッチ」油などを丁度體溫位の割合に溫め、灌腸器注腸器によりて送るのです、是等は、また、後日、小兒の便秘に就き述べる時に詳細御話致すことゝしましやう、

私は、此間、近刊の獨逸婦人雜誌を讀みましたが、其內に、便秘の療法が二ッばかり載せてあるのをめッかりました、其一ッは、ワイマールの博士なるクンプレヒト氏の『便通を容易ならしむる外達的手段』と云ふのと他の一ッはベルリンの、ドクトル、スチルンベルヒ氏の『便通を容易ならしむる一方法』でありました、丁度

此處て、都合よい序でありまするがゆゑに、左に、それを譯述して、附加することゝ致します、

(一)先頃エブスタイン氏は、婦人科病の診察をなす場合に當り、必要に應じて、大腸下部の內容物、即ち、糞便の蓄積せるものを驅出し、且つ、「マッサーヂ」(按摩法)によりて、其部の驅出機能を强盛にする一方法を案出せり、先づ、臀部の皺裂の處で、指をもッて、皮膚の上からして、糞柱のあることを觸知したれば、其時、物やわらかに、後方より前方に向ひて押壓するなり、是れ、エブスタイン氏方法なり。

グンプレヒト氏は、之に類せる方法を考案したり、直腸(大腸の最下端にして肛門の上なり)の內容物を、排泄するに、可成、痛みのなきやうにせんことを目的としたり、世間には徐々輕度の痔疾(出る方の痔なり、孔のあく方に非ず、痔は峙にして凸起物の義なり)を患ふる人



あり、是は、左程、大病と云ふ程のものに非れども、また、往々、便通毎に、隨分、烈しき痛みを發する場合あり、グンプレヒト氏の方法は、かゝる場合に適用すべきものとす、之を行ふには、患者自から爲すを可とす、此方法の目的は、便通に臨み、肛門部位の緊脹を輕減する爲めに、手を以てそれを壓迫することなり、而して、堅固なる糞柱をば、手尖の働にて壓出するなり、其の仕方は次の如し、

先づ、便通を催したる時、患者は、その左の手の平を薦骨(脊柱の最下端の骨を尾骶骨と云ふ其の上なるは即ち薦骨なり)の上に置き指端が丁度尾骶骨より、も少し、長く出るやうにす、糞便が直腸より脱出せんとすれば、指端の處が、膨起するゆへ、指端にてこれを感知し得らる、此時、指端にて、だん〳〵つよく押壓を加ひて、其處の膨起を無くするやう爲すべし、次に、薦骨端の處で、指を鈎狀に曲げ、前の方に向け

て押しつゝ糞柱を切斷するなり、次に、之を肛門の方に驅除ずべし、如此ことを一回の便通に、度々、繰り返し、疼痛なく容易に便通を終るを得べし、而も、指端を不淨にすることとなし、

（二）本法は、多年頑固なる便秘を患ふる一婦人ありて、久しく、苦心して其堅硬にして、且つ、乾燥せる糞柱が、痛み無くしてわけもなく出て得る方法をがもなと思ひ、種々と自から研究せる末に案出したるものなり、故に、其方法たるや、決して驚くべき妙法にてもなけれども、兎に角に、其婦人が、知らず〳〵考ひ付けりとも云ふべき一種の簡便法より、他にあらず、先づ厠に上りて、便通の初めに當り、痛みを覺へなば、すぐに指を膣に挿入し、上の方、即ち、奥の方より、下の方、即ち、前の方に向ひ、押さへながら引くことゝなり、言を換へて云へば、糞柱を、前方より後方に向ひて壓するなり、如斯、單簡の一方法を案出して以來と云ふものは、大に、便通を輕易ならしめ得て、獨りそのよく内服藥なり外用藥なりの効能に優ることと數等なることを喜びぬ、

此方法は、エプスタイン氏の方法と能く似たれども、エプスタイン氏の方法は、糞柱を後方より前方に向ひて押壓するがゆへに、其の押し方の向が全く反對なり。

（完）

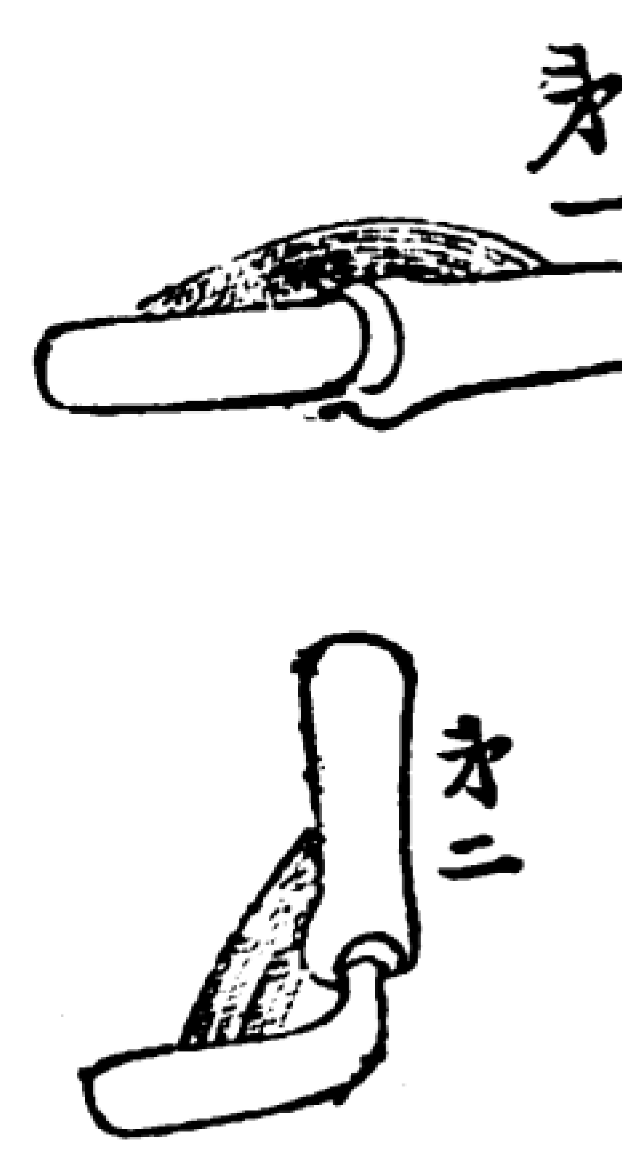
素人看護法

運動機關の話（つゞき）

淑德女學校講師醫學士　佐藤恒久

◎運動機關の第二に屬するもの……は筋及び腱であります。筋とは俗に云ふ赤肉でありまして是は隨分太い物を形造つて居るともありますけれども、其を顯微鏡で視ると、極小い糸の樣なものが集つて、一箇の大な肉の固りを爲して居るのであります。殊に鑵詰の牛肉などを視ると、糸の樣になつて分離れるのが知れます。つまり筋と云ふものは微細の纖維から成立つて居るものであります。然うして其基は必ず骨に附着して居るもので、先づ圖の如く關節で結び付けられて居る二箇

の長い骨がありまして、其間に筋が附着して居るものとして、若し此筋が収縮して短くなると云ふと、両方の骨を引張るからして、關節は其所で作用を起して第二圖の如く曲つて來、筋の収縮が延びさへすれば、又元の如く長い眞直なものとなるので、即ち運動は筋の収縮と云ふ事に依つて出來るのであります。



才一

才二

其から腱と云ふものは堅靭なる白い筋であつて、よく肉類の中に白く光つたものがありまして、其を引張つて見ると、其先端の附着して居る筋や骨が動く事があります。之を腱と云ふのであります。而して其腱は大抵筋の両端に着いて居て、骨と筋とを結び付けて居るのであつて、何時も骨と筋との間にあるものでありますが、是は矢張筋の一部であると思ふて居れば宜しいのです。

前申した通り、關節の運動する時には、必ず筋が収縮します。収縮した筋は固く、太く且短かくなりますから、例へば手を振ら下げて居ると、筋が少しも働いて居らないからぶら〳〵して居るが、其手を働かすと固くなり、同時に關節が働き出すのであります。要するに、關節の運動と云ふのは、御承知の通り、關節を曲げると云ふのと、捻ずるのと、延ばすとの三つの外はありませんが、此三種の運動は、どの運動にも必要なのでありまして、是等の運動には何時も筋腱が働いて居るのであります。其では其筋が什麼云ふ理由で収縮するかと云ふと、其は運動機關の第三に屬する、運動神經と云ふもので、是が在つて始めて収縮する事が出來るのであります。其運動機關の基たる神經と云ふものは什麼ものかと云ふと、是は白い糸の様なものでありまして、太さは種々ありますが、其出て参りました源は、脳及び脊髓から分れて出て來るのでありまして、段々先に行くに従つて、細くなつて居ります。其一番終りの所が筋の中に入つて來るのでありまして、どの神經がどの筋肉に入ると云ふ事は、ずつと規則の立つて居るので

あります。運動神經は恰も電信線の様なものでありますからして、先づ腦髓の方で運動しようと云ふ心が起ると、其を神經が筋に傳へます。すると筋が運動を始めるのであります。斯く腦髓と筋との間を取持つて居るものは神經でありますからして、若し神經に病があつたり、切られて仕舞つたりすると、神經は腦髓の命令を筋に傳へる事が出來ないからして、筋は腦髓から命令が下つたのを知らないで居て、運動を始めません。之を痲痺と云ふ。併し此痲痺は今申した通り、神經に障りがあつたばかりて出來るものではありません。腦或は脊髓の方に病氣があつても痲痺する事があります。即ち腦の方に病氣があれば手を動かせと云ふ命令が起りませんから、神經や筋が備つて居ても運動は出來ません。恰も中央政府の官吏が或事情の爲政務を執る事が出來なかつたならば、下の役人は何も出來ないと同じ事てあります。其から又腦髓、脊髓、運動神經筋等が病氣に因て刺戟され筋が、俄に收縮する事があります。即ち俗に筋が詰ると云ふ事は往ゝある事であります。其を痙攣と云ふ。是は前申した痲痺とは全く反對て、收縮しようと思はないで、收縮するのでありますが、痲痺の方は神經が通じて呉れないので、あります。要するに運動機關と云ふものは、第一が骨及び關節、第二が筋及び腱、第三運動神經でありまして、是等のものが一致して働くと、人間の躰が自由に動くのであります。

江湖雜感

野中千代子

世の中を見渡すに、善におもむくものは誠にすくなく、惡にすゝむものは極めておびたゝし、其あしき中にも、生たるものゝ命をそこなふは、古今いづれの世とても、極惡の第一となさゞるはなし、まして世の開けゆくにつれて、物の命を貴ぶにいたるは、人智發達の結果にして、實に教育普及の賜に外ならずといふべし、今の世の人は皆この有がたき聖代に生れ、古人の想ひ及ばぬ

ほどの訓を、見もし聞きもし得べき世に在るは、よく〳〵果報めでたしとこそいふべけれ、さるに世に憚ある婦人、あるは貧しき家に兒あまた出來ぬれば、之をはぐゝみやしなふ資糧に乏しとて、ひそかに胎内にて害するものありとかや聞く、ましてや一旦この世にいでたるものを害ふにおいては、是ほど大なる罪はやはかあらじ、凡生としいける虫けらまでも、一切の生類みな刀杖をおそれ命を愛せざるはなし、人の命をうばふほどの所爲をなして、なにとて報なくて過し得らるべき、必ずや其身ならずは其家に惡報をうくるに至らんこと、ゆめ疑あるべからず、豈無慚ならずや。



おのれ曾て父の任に、桑都となんよびて宮城の西の方十里あまりあるところに假住居せられしころ、その膝下に在りけるが、隣家に四十路あまりの夫婦のものありけり、三四人の機織る女を使役して、絹を織ることを渡世とせしが、其家もさ豊かなりといふにはあらねど、さすがに日々の活計に苦しむほどにはあらざりし、夫婦が中にあげし子供は、もはや六七人に及ぶとか聞きしが、今産れるは女子をかしらとして僅に三人、こゝろ細くも共稼して、冬の朝秋の夕の目覺などには、定めて親の無情を嘆くらん、そも此の夫婦は一見如何にも貞實に見ゆれども、金錢には眼のなき吝嗇家にして、糠を舐りて米に及ぼし、脂を剝で髓を推すもの、其の心や家の如く、絲毫の利に走りて其の汚れを厭はざる、所謂甕中の虫とも謂はんか、されば家族の殖えんことを憂へての淺猿しき心からにや、おろかにも其妻の孕むごとに互に談りあひ、呱々の聲をも聞かぬ間に、密かにある手段もて、無殘にも闇より闇へ葬りしことは、はやたび〳〵なるよし、人の噂にちらと聞きゝ

しかば、扨も昔噺に聞きたりし鬼とやんも、かゝるものをこそいふらめ、あなおそろしの夫婦やな、實におそるべきものは人の心にぞある、外面如菩薩内心如夜叉とは誰がいひけん、實に金の草鞋をはきしめて、三千世界をかけまはるとも、人の心ほどおそろしきものはやはかあらじな、此夫婦がかくまでに獸物におとる所爲するも、むげに慾と色てふ煩惱のためにやあらんずらんと思へば、實にあさましきことの限りにて、筆にするさへ穢はしけれども、もとこれ社會の重大なる論題にして、心あらん人は男女の別なく、等閑に看過すべきことにあらずと思ふがゆえに、かくはものしつるなり。

夫れ生命を貴み重ずるは開化の俗にして、是を輕んじ之を賤むは蠻野の弊習なり、況や人と生るゝことは、よく／＼の善縁にして、實にたやすからざる果報なるぞかし、殊に親子は人倫の源泉なるに、其の親として其の子を殺し、得たり顔して過すこと、天道いかでか之をゆるしたまはんや、孕める兒出生して、其の怜悧きこと蒲衣伯益が才も及はず、忠臣孝子ともならば、國のため家のため、如何ばかりの恩やむくはん、さるを其の親とたのみをうけし甲斐もなく、無慚にも之を殺さば、彼の獵人に畏れて懷に入りし鳥を、おのれと殺さんよりも、其の罪はるかに大なるべし、いかでか其の子其の親に怨を結び仇を報はざらんや、或は又おのが家貧うして、兒をはぐゝみ養ふ力なしと思ふは、あまりにあさましき心なり、天祿とて此土へ生れ出づるもの、おの／＼其の身の果報は自然に備はるものなり、殊に其の子出生し、天運强くして家富みさかえ、分に從ひて其の業を勵み、ひたすらに餘念なきものをこそ、其の父母いかで老の樂みならざらんや、素より親となり子となるは、深き宿世の緣なり、そも母の胎内に不足ありて產るゝもあれど、心身一として缺くところなく、月日の光を見るべきを、非道愚痴の心より、闇より闇に失ふとは、豈人間の爲すべき所爲ならんや、天道は還すことを好むと言へれば、いかで惡報なくて過すことを得べき、近頃彼の夫婦の家は、去る年の大火に全燒したりと聞く、實に天の配劑觀面に來るを知るべし、さりながら我等は

徒らに天の配劑を待つべきにあらず、須らく教育の普及を促がし、以て德義の何たるを知らしめ、社會の制裁を強くし、人心を文化して、一日も速に惡鬼を退治せんこと渴望の至りになん。（了）

女子の作法

禮法講習會教師　田島秀子

吉事凶禮

吉事の禮は女子の身に取りて、先づ第一に重しとするは婚儀の事、次は出產の祝ひ、其外の年始年賀轉居目出たき出發等の慶事は、男女とも同じ事さうして、禮儀作法の必要なるは、一生一度の大禮と云ふべき婚姻の時にありますれば、先づ其折の事を旨と致し、餘は大抵其要の概略ばかりを簡單に御話致しませう、又凶事は男女共親戚朋友其他の人の死亡葬送の禮、及び忌服中の心得及び追善の事を申しませう、前にも申したる通り、婚姻は人間一生の大禮なれば、最も重んずべき事であります、さうして婚の字を用ふることは、古き書に依るに娶るに必らず昏時を以てすとある故、昔は必らず昏時に引移りし習はしなりしが、世の風俗につれて今は其時刻が隨意になりました、又婚姻を姻嫁とも姻繼ともかけり、之れは子孫をまうけて其家を繼ぐべき所以なりとぞ、先づ我が國にては結納、引移り、三日の祝ひを重しと致します。

結納之れはもと「云ひ納れ」と云ふ事で婚姻の事を申し入るゝ意なれば「いひいれ」にて「ゆひいれ」にはあらぬを何時の程にか過りて「結納」と申す樣になりました、之れは皆身分の高低により其贈物に差ひはあれど結納の徵を入れて祝ふは禮を致し先づ中等の風俗にては女へ小袖帶端物等に樽、肴を添へ其の父母へも端物綿など贈るを例とす又之れをもつと略せば女へ帶地、樽、肴を贈り其父母へは贈らぬ事もあり、又極めて略なる時は帶地料として金子に酒肴を添ふる事もあり、何れも身分によりて計らふべし、結納の贈物には目錄を添へ、なるべく年長けて物なれたる人を使とす、若し其贈

物多き時は釣臺にのせて上おほひをかくる事、使者は緣女の方へ至り、口上を述べ目錄を添へて、徵納の物を取次人へ渡す、取次之れを緣女の父母へ報じ、使者をかりて應接所へ通し、茶菓を進めおき、其間に結納の物を別の客室へ双べ、父母先づ着坐の上使者をこれに案內して對面し、吸物、酒を進め相當の引出物與ふ然し緣女は其席へ出でぬその緣女方よりは結納を受け其答禮として別に使者を遣し、樽肴を贈る又結納を女の方よりも種々送る事と心得る人あれど、之れは大なるひがごとにて、結納は、男より女の方へ其家の整理其他の事をたのみつかはすの徵なれば結納(たのみ)とも云ふ故に女の方にては之れを受け其日親族集りて祝ふを例とし男の方も同じく女の方より答禮に贈りし樽肴を以て祝ふなり、結納は女の方を重しとす、又或る地方にては結納におくる小袖を迎ひ小袖と云ふ、これは其衣服をきて引移るが故なりとぞ、之れは正しきにはあらずも其意はかなつてをります、又附物は何れも紙に包み水引は引結びて一本つゝはしより卷き小袖は紙につゝみ雛ければ臺の上に紙を敷きて其上に飾る臺は何れも白木の足打なり樽の手は包みて水引をかけ之れも臺を用ふ。

結納の贈物には、眞の熨斗蚫包又は眞行の熨斗蚫包を用ひ目錄は橫の方が古風にして本儀なれど、此頃の風俗に從ひ竪目錄をよしとす、然し橫には重ねを用ひ、竪のは一枚でよろし、さうして目錄はかな交りでかくべし、又樽を家內喜多留などゝかくは、俗にして正しき作法にはあらず、然し時の流行に從ふも差支なし、結納目錄は男より女へ贈る品なれど、小袖帶などはかるき御の字を用ひ引移り後は之れを用ひず、橫目錄は三つに折り、竪のは紙の大小にもよれど、大抵一寸七八分程の巾に卷くべし、何れも上包みをして上がきす、又は略して上包みをせざる時は、始めに目錄とかく、次は鯣の事之れを台につむには台の上に紙をしき鯣の頭を人の向うにして、手前の方へ段々につむもし數多き時は頭を人の左にして、橫向きに向の方へつむ事もあり次は鳥類　鴫、雉子、何れも用ふ雁は結納婚姻に用ふべか

らずと雖も、又秋は來雁なれば用ひて差支なしとも云ふ、次は魚の事　魚二尾の時は腹合せにして八文字形に双べてよし數ある時は何れも腹を左向にしてつむなり、扇子の事之れは末廣といふより祝賀の進物に用ふるなり金銀の地紙にして二握箱入にし白木の台に据うるを正式とす、但し都合に因りては一握づゝ折形したる紙に包みても、又は二握にも紙に包みてもよし、昆布の事之れは俗に「よろこぶ」ともいひ又「ひろめ」とも云へば祝ひに用ふることゝなれり台につむには緣の方を中へ折込みよき程重ねて端物の如く巻きて其上を昆布の細くたちたるを以て結ぶなり扨かくよろひたるを五把、七把都合によりて双べ台には紙をしくべし次に小袖の事之れは身分により一重ねより五重ねまでなり但色模様ともめでたきをえらぶ、又四季共に綿入を用ふるが法なり、上着は身分に因りちがひはあれど、普通は染模様の紋付に白小袖を重ねて、よし如何程略したる時にても小袖一枚は贈らぬ事、さうして小袖を台につむには、二重の時は上まへを上にし袖を其上に折りて右の方へ据ゑ今一重は下まへを上に袖も前の如くその上にし左右向ひ合せにし一重の時は上まへを上に前の如くしてよろし二重以上は前の如くにて左より右へ段〳〵につむ、帶は紙に包み水引をかけ台の上は双べ一筋なれば台の中央につみてよし綿はよろひ綿、袋綿、等種々あれどいづれも紙に包み水引をかれそのはしを卷く之れらは皆結納ならずとも平日も右の如くしてよろし、次は里出の心得より追々御話致しませう、先づ緣女實家を出る時は其父母と盃事ありて二獻目の時に父より訓戒ありて後家を出て行くを法とす、次は引移り當日婿方にては相當の飾をなし夫婦のかためをなす座敷を祝ひの間又は壽の間とも云ふ略式にても成るべく床には伊弉諾伊弉册の尊の御かけぢを掛けその前に瓶子の三方を据ゑその右に鏡餅の載せある三方瓶子の左に長熨斗三方を据ゑその前に口祝ひの三方鏡の前に土器の三方その兩様の所へ長柄の銚子及び提子を床より座敷の方へ前を向け提子は口を前にして直ぐ何れも白木の三方を用ふ若し此の外に種々の飾物ある時は床の上

ひろき時には皆載せてよろし夫婦着座せぬ前に酌二人出で瓶子の口の雌蝶を抜きて三方の上に仰向け置き次は雄蝶の口を取り前の雌蝶の上に伏せ瓶子の酒を提子へ移し口は元の通りになし銚子、提子を持ちて退き提子より銚子へ酒を加へて前の如く床に据ゑおく(但し略す時は、前にかげにて瓶子より酒を移しおきて床に据ゑてもよし)緣女は介添の人につれられ婿と同時に祝ひの間に入り床に向ひて右に婿左に嫁共に床に向ひ拜禮し次に向ひ合ひて座す此時本酌出で床に次の間より向ひて拜し進みて床の前に至り口祝ひの三方を持ち上座へまはり婿に進め次に嫁の前に至りて同じく進め三方を元の所へ据ゑて退く次に本酌、加への者二人出てゝ床の前に至り加へのみ、提子を持ちて退き次の間に控へ居る本酌は加への座に付くを見計らひ土器の三方と長柄を持ち婿の前に至り三方を据ゑて盃を取るを待ち婿土器を取り上げなば酒を注ぎ婿飲終るを待ちて又注ぎ又同じく注ぎ婿土器を納めなば次に嫁の前に至る介添人土器を取り嫁に渡す此時酒を注ぎ三度すみて介添人土器を納む本酌立ちて次の間に至り土器を組みかへ加への者提子より酒を加へ本酌又嫁の前に至り前の如くし婿の前に至り二の土器を進め同しく前の如く組みかへ三の土器を婿に同じく進め次に嫁に進めて床に据ゑ加へも共に据ゑて退く(此時媒妁夫婦同席するをよしとす)次に又前の如く床前に至りて拜し退く土器の三方には別の土器を一つ据ゑ直く之れは下を捨つる爲め)次に親類盃の事を御話致しませう。

室內裝飾

禮法講習會講師　近藤嘉三

▲見立もの

見立てもの。机にもせよ、手箱にもせよ、裝飾の器具調度を程能く見立てゝ使ふたのは、却て花瓶を花瓶、寫眞挾みを寫眞挾みとして極つた道に用ふるよりも遙かに面白味のあることもある。一寸譬へて申さば古銅の水次とか或は古く水に晒れた釣瓶などを花瓶に用ふるの

て、これに朝顔とか晝顔の樣なものの一二輪を無造作に挿し入れて蠟色の薄板位を敷て飾る。床には、句入の文の經語などの一行立ものを澁味のある更紗表裝にしたものか何かを掛けた洞床などの裝飾樣



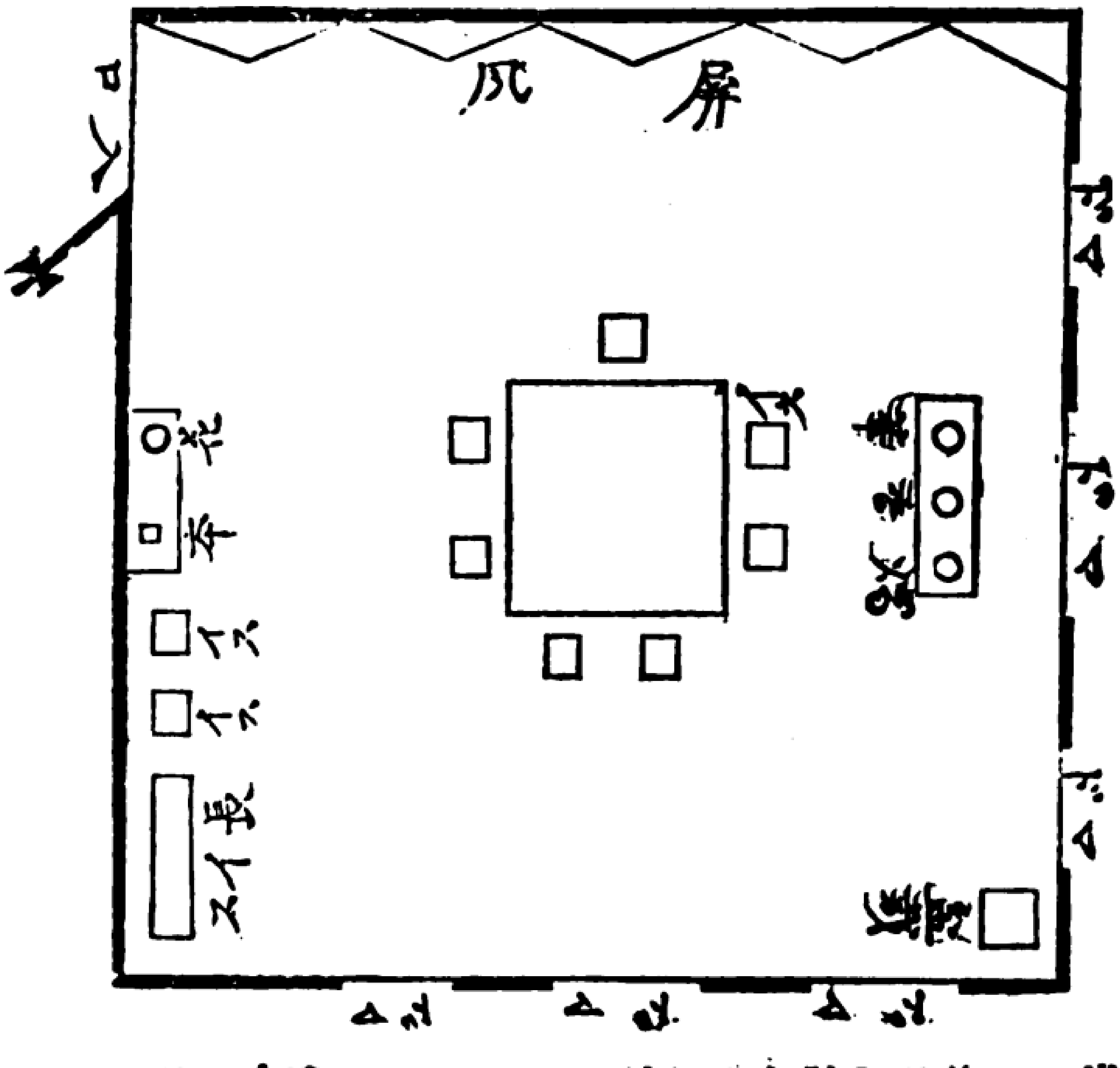
子と云ふものは云ふに云へぬ雅致がある。若しそれに軒先に葦簾でもかけて、釜の煮え音でも聴えたなればこれぞ誠に塵外の淸境で、調度は少くとも器物の價は貴からずとも、裝飾の上乘と申しても好かろふ。

この見立てものは……即ち道具の應用は茶人が一番上手である、若し器物が一度茶人の手に捕虜と成つた時は、どんな器物でも喜んで彼の奴僕と爲つて働て居る、故らに製作したものよりも用途に適ふ樣に見ゆる、これはその位置を得す事が巧みなので所謂活かして働かするからの事であろふ。

然りとて見立て物が好いと云へばとて、器物の種類用途も考へず流用せよと申すのでは無い彼の冠卓に沓を飾るが如きは大禁物であり。若し三四十年以前に外國の事情が今日の樣に能く分ち無かつた時分、彼方の嗽洗ひに菓子を盛つたり洗面盤に花を挿したり致した樣な事をする樣なことは、それは見立てゝも何でも無い誤用であるから申すまでも無いこれは是非避けねば成らぬ。

此の見立てと申すことは、獨り調度、器物の單獨の用途に就てのみ行ふ計りでなく。塲所、時、塲合に應じてそれを種々と活らしたいものであるが就中面白いのは一組に纒まつた裝飾を或る塲所に移して、その居室に新生面を開かすることとである。私が某伯爵夫人を訪問したる時に誘はれたるは二十疊敷程の西洋風の對客所で、床は一面の寄木張り、窓掛には金襴で蘭菊を織出したる昔しの婦人用の帶を如何にも面白く應用して飾り紐には薄紅梅色と純白の捻り、糸の帶〆を優たりと結んで掛け、一方の壁に沿ふて淸水港あたりから富士を望んだ風景畫の金屛風を立てられた、畫工は名に負ふ土佐光起、松原の遠近から朝霞が裾野を立ちこめた工合、天女の音樂でも聞えさうな高妙な畫樣、これ計りでも天晴な裝飾であるのに中央の朱檀製方形式の大卓に燃え立つ樣な眞紅の純子に扇面と能樂の面を種々織出したる卓被を掛けてこの大テーブルを圍んで四五脚の倚子を配置されて、その倚子は紫地天鵞絨に散り櫻を浮織にしたる裂張り。カーヘル上の鏡の前には二三鉄

の古法帖と鼓の胴を見立て〻花器としてそれに一莖の撫子の花が挿してある。カーへの正面、窓に倚つた方に南都邊りの古寺院にでもありそうな古式の長形大卓を据へて、その上に例の三つ具足を飾られたのであるが、この三つ具足飾を西洋風の室内の飾りに用ひられたのは中々面白い趣向で、特に窓掛や金屏風や卓被の美々しき華やかなるのに對比して、この古雅で加之も品致ある三つ具足飾りを用いたのは、恰も袞冕行中に藜杖的隱士を見る樣な趣があつて、その配合が非常に目新しく思はれたから、私は夫人に向てこの裝飾が何人の意匠に依りて飾られたかを尋ねた、すると夫人は未熟ながら有合せの道具で自分が裝飾したと云ふ答であつたが中々未熟どころか。專門のものも一歩を讓らねばならぬ位、その筈である夫人は元來美術的の素養のある上に永く巴理に滯在されて、彼國流行社會に行はる〻裝飾の趣味をも充分に會し居らる〻からの事でいはゞ當り前と云ふても好いのである。それから種々と室内裝飾の談が佳境に入つて、彼國の室内裝飾の樣子なども承はつた中に夫人は裝飾術の上から云ふて彼方の裝飾が日本風の坐敷飾りより優るとか劣るとか申すことは別問題として裝飾の嗜好に於ては兎ても日本人の及ぶ所では無い一寸した下宿屋などの下婢などでも裝飾には大層凝つたものであつて、毎朝部屋の掃除をしても一々書物や机の上などを種々に裝飾する、譬へばこの靑色の表紙の書には黑皮の表紙の書物を并べては、配合が惡いから紅皮の表紙



本を置くとか、机の上に置てある瓶花などでも白磁燒の花瓶には紅薔薇が取合ひが好いとか申して種々と置直しては考へて装飾を致す、それてどんな人の書齋に這入て見ても種々と意匠が變つて目新しく面白くて、先づ爽快を感ずる、私も日本に居た時分はこの装飾などの事は然まで心を留め無かつたのですが彼方へ參つてから室内装飾術は割烹や裁縫と同じ樣に婦人に必修の嗜であると云ふ事を悟りました、或はより以上の價値があるかとも思はるゝとの事で、私は夫人の話談を大變に面白く承はつたから夫人の應接間と幷せて讀者に紹介を致したのである。

どうか日本の婦人も今少しこの室内装飾と云ふことに心を用いて戴きたい。近着の評論の評論と云ふ雜誌にメンペス氏が日本人の美術思想に富んで居ると云ふことを激賞して若し美術や装飾の事に就て日英人を比較すれば英人は野蠻人と云ふても好いと書かれたが、どうも現時の日本の大官や紳士達の坐敷飾を見てはチト赤面の次第である。

▲簡易なる室内装飾

装飾の美は必ずしも器物の多少や装飾品の價の高下計りでは評せられぬ、高價な器物や美麗道具で派手に飾つた、丁度紅玉に彫琢を施した樣な装飾……これは勿論結構に相違ない、が然し又明窓の下、一基の淨几の上に二三の書冊と一個の香爐位を置たのも一種の趣味のあるもので、時としてはその素朴淡雅の風情は、優に金銀珠玉を以て装飾した貴族飾りを凌駕することもある。

室内の装飾は要するに、程能く居室の体裁を得るか否やにあるので、若し一個の卓子を圍む賓主兩個の倚子と、卓上にあるシガーの小箱許りの飾りでも、その室の權衡、時機に相應すれば立派な一廉の装飾と申して差閊が無かろふ。

先頃の事であつた、ヒユス孃が東海道を漫遊して名古屋へ參られた時に日本の室内装飾が道具の少ないのを見て不審に思ふてその理由を頻りに尋ねられたと申す事であるが、成る程濃厚的の歐風装飾に馴れた目には

日本の装飾が小淋しく物足らぬ様な心持が致したてあろふ然し、何別に理由も次第も無い、よし多少の理論があるとするも、それは自得すべく説明すべからざる底の事であつて遺憾ながら完全な明答は出來ぬ次第てある濃は淡の清趣多きに如かずの一語、稍この間の消息を漏したると云ふて好かろふか。九谷焼の花瓶に木蓮や海棠を挿し交えたのも悪く無い、然し芽出し山吹の莟み勝ちなるを籠花活にさして胴釘に掛たるも又た一種の風情がある、然しながら装飾の濃淡何れが好きかと云ふことに就ては人々の嗜好に由るものであれは。局外者から之を極めることは出來かぬる。が簡易淡雅の室内装飾は濃厚的のものよりは餘程面倒である。代りに此の術の修養には又格段の利益がある事は云ふまでも無い。

家庭小話

寒澤振作

（四）風流心と經濟心との調和

宋の林和靖の、風流心にて、梅を愛せしことは、史上著名なることとなるが、その風流心は、家事の經濟心と、調和したるものなりしとの、異聞を、曾て耳にせしことありき。

或先生の談に、林和靖は、その庭前屋後に、三百六拾五株の梅樹を植えて、疎影横斜水清淺の様を賞し、暗香浮動月黄昏の景をめでし外林氏一家の經濟法ありたり、即ち一株の收穫を以て、一日の家計の料に充てたり、その方法は、三百六拾餘本の、梅實を、成熟の頃、ことごとく賣却し、その惣高を、一年の日數にて除し、その商を一日の遣ひ錢に宛てしこと、説郛に見ゆ、とのことを聞きしが、其後多忙にて、大部なる説郛を、調査するに遑なく、過ぎ去れり、

かく林氏の如く、風流心と經濟心と調和することを得

ば、甚だ調法なる仕方と謂ふべし、若し庭園の美術上の趣味を害することなくんば、庭園税などの噂あるせち辛き今日にては、林氏の故智を學び、庭前の松、檜、青桐等に換ふるに、葡萄、桃、李、枇杷、柿、栗、橙等を擇び、各々其好みに任かせ、目を慰め心を樂ましむるの外、是等庭樹の果實にて、一年中の家屋敷地の地税なり、又は家屋税にても、辨ずることを得ば、甚だ便利なることとならん、かくするときは、果樹には、割合に手入を要すること少きが故に、松、檜などの如く、一年に二三回の手入に、植木屋を傭入るゝの費用も省けて、正に一擧兩得の利益なるべきか、倘ほ世人の一考を望む、

（五）　一家の生活費

或人の演説に、家計上の經濟談に關して、彼の有名なる學者、宋の朱熹の言に、凡そ人は、その所得の四分の一を、家計の費に宛て、其四の分三を儲へて、老後の資、子孫の計を爲し、且つ臨時の費に充つるとゝせば、困難窮迫に陷ることなく、時に窮途に泣くが如きことなし云々とあり、余はこの敎訓を服して、常に違ふことなし願くは滿場の諸君も、この敎訓を味ひ、遵奉あらんことを云々とありしが、演説後に至り、四分一の費用とは、餘りの積極的なり、迚も守らるべきことにあらずなど、區々の評論ありし、予は其席にては、默聽し居りしが、今つくづく考ふるに、其四分一と云ふも、畢竟程度の論に過ぎざることとなるべし、今、月に數千圓以上の收入ある人には、何の譯もなく、實行せらるべきも、僅々拾圓か、貳拾圓の薄給者の、貳圓五拾錢か、五圓の小額にて、いかで一家の生計を支へられ得べけんや、彼の新聞紙などにて、屢辨先生と惡口せらるゝ、判任官吏の如き、四分一說にては、實に無理なる注文にて、杓子定木の甚しきものと謂ふべし。抑々人は、其收入の幾分づゝを割きて、老後に孫の計を爲し、蓄ふべきものなるや、予は之を知らず、惟ふに、人々家屬の多少や、親屬の關係や、皆夫々その趣を殊にすべければ如何ぞ一概に其程度を定むべけんや、只其程度は、人々の境遇に依りて、異なるべきものなりと信ずるなり、併し人として、他の牛馬犬猫の類と同じく、

兵飲食して過治し、子孫を殖するのみにて、前途の計を爲すを知らず、茫然として朽果つる如きは、實に不甲斐なきものなれば、古聖賢の遺敎を奉じて、儲蓄の計を爲し、身の境遇と、時の收入とに考へ、極々切詰めたる積にて、夫婦相談の上、金圓を落手せし當座に、勇斷して、遞信省か貯蓄銀行等に投入すべきなり、若し入手の際、投入の勇斷を缺かば、止むを得ざるの費途追ひ至りて、煙の如くに散じ、霧の如くに消え跡なきに至るべし、古語に曰く、人遠き慮りなければ、近き憂ひありと、又西諺に曰く、人は遠きを見るの權利あり、故に之に備ふるの義務ありと、味あるかな言や、

（六）　我子の惡しきを知らぬ親と隱くす親貝原益軒先生の童子訓に、我をほめ、子をほめ、妻をほむるを、三愚とすと云へる說あり、誠にこれ等は、世間馬鹿の多き中に在りて、鼻の毛の長き、馬鹿の隊長とも申すべきか、古語に、人、その子の惡しきを知ることなし、その苗の碩なるを知るなしとあるは、是等馬鹿隊長などの眼にて、公平無私に、見ること能はざるを云ひしものならん、彼の、子供の喧嘩に親が出たなど、下賤の徒の、裏長屋の近所合壁と、大立廻はりを爲すなどは、この三愚の一ヶ條を實行したるものなるべし、それとこれとは、全く反對なる事柄なるが、宋の程子の母の曰く、子の不肖なるゆゑは、母そのあやまちを、おほひて、父しらざるによれり、といへり、前の子供の喧嘩に、親の飛出てゝ、大騷ぎを爲すは、大抵下流社會のことなれども、この程子の母の言は、重に社會の上流に位する、人々の陷る、弊害を云ひしものなりと信ず、いま之が說明を試みるに先ち、その程子の母の素性を語らんに、程子の母とは、宋の程明道、程伊川の母親なりしな り、兄弟ともに、有名なる學者にして、前話にありし朱熹は、その門人たりしなり、兄弟ともに、宋朝隨一の人物なりき、その母刀自の言にして、かくの如し、世間の母親たるもの、大に注意する所なからざるべけんや、抑々子供の腕白につき、捨置くべきことゝ、見遁すべからざる事柄との、二樣あるものなれば、能々見分け、捨つべきは措て問はず、其容赦すべからざる事と認めば、

未練の情を打拂ひ、父に告げて、惡癖の未だ長ぜざるに、撲滅を計ることは、恰も虎列剌病毒を掃ふが如くなるべきなり、若し父の折檻を恐れ哀み、包み隱くして、其惡習を長ぜしめば、古語に謂ふ所の、兩葉去らずんば、將に斧柯を用ゐんとすとの、荒療治を要する大事に至るべし、彼の大家の子などに、疳癖强きもの、又は我儘もの多く、成長の後も、人と圓滑の附合出來ざるもの多きは、そのふた葉の時に、摘み去らざりし咎にして、遂に第二の天性となりしものならんか、

（七）　おもひやり

このおもひやりとは、人の喜び悲み、憂ひ歎き、樂み苦み等に對して、あたゝかなる情を以て、愛憐の實を表す事をいふ、即ち新らしき語にて云へば、大に同情を表するなり、そもく人として、この情の多からんことは、望ましき次第なれども、取分け望ましきは、多く傭人を使ふ商家や、大家などの主人に在り、就中家庭の王たる主婦其人に望むや、尤も切なりとす、主婦のこの情に富む時は、家内の各人、愉々快々にして、ことく怨嗟の聲なきに至るべし、惟ふに古へより、義僕忠婦などゝ稱へて、閭里に旌表せらるゝとか、又今日にても、賞勳局にて、其善行を賞せらるゝ典あるは傭人男女の忠實なる行爲に出でしこと、勿論なれども、多くはこの主家のおもひやりの情と、傭人の忠實の情と、抱合して、一種の善行となりたる、所謂一種の化學作用ならんかと信ず。

今このおもひやりに付、紹介せんとする一の美談を讀書中に得たりしを以て、多く人を使役する所の主婦に、告げまいらせてその栞とせられんことを希望す、昔し江戸の俳句家、西島某の妻女、或雪ふりの夜に、良人の用事ありて、他出せんとする折、召遣ひの小僧を伴と爲し、出て行かんとしける時、妻はこの樣を見て、

わが子ならともにはつれじ夜の雪

と、一首の俳句を詠ぜしに、西島某も、この一句に感じて、小僧の伴を免じて、獨り出で行きしとなり、かく妻女のおもひやりは、良人の心を飜し、子供の難儀をいたわりしは、彼の古人の謂ひし、彼れも人の子なり、能

く之を過せよとの至言を信じ、居りしもの、一時に同情の涙となりて、せき出でしものならんか、

衛生經濟 素人料理法

華族女學校、實踐女學校 禮法講習會割烹教授 岩間芳松

家庭實務の必要より華族女學校を始め其外諸女學校に於ても目下割烹の課目を備へてあり升尚其他私立の割烹法教授所の設立もあり實物調理を教授致升が皆之は百聞一見にしかずの古語に依るので有ましやう今回女學世界記者より衛生と經濟に適する料理法を投ぜよとの依頼に就き料理の本旨より順を追ひ類を重ねて記載致升

和洋料理法の本旨

日本料理にては吸物、椀盛、茶碗盛、茶碗蒸其他種々の汁物を製するには清汁で有ます之はまづ鰹節を温ま湯に漬てさゝらにて能く洗ひ上皮及び血合等を削り取て別の器物に入れ置き赤身のよきところを薄く搔きて湯の沸騰したる中へ適ぎに入れまた沸騰したれば火の外におろして絹漉しにて用ひ次に煮出したる鰹節カラへ又々水を少し加へ能く煮出し(一番だしと云ふ)これも漉して下煮物等に用ひカスは捨て他の器物に煮出汁を少し取置て前記の上皮及び血合等を加へ能く煮て一番二番と煮出して合せ味噌汁或は煮物等に用ゆるのです。

肉羹汁は鰹節汁と反對にして鳥獸肉何れを問わず其内部に含む蛋白質を呼出して製するもの故弱き火て充分(四時間以上六時間位)長煮をするのです。

椀盛調理に用ふる鯛、鱸、鯰發魚、細魚、鰈、其他の白き身の魚を椀種に用ゆる心得は鱗及び腸等を去りて三まいおろし適宜の切身にして薄く鹽をふり置き湯の沸騰したる中へ入れ火を通し湯を捨て水を差入ひきあげて椀盛に入るのです。

椀盛に用ふる鳥の種心得鴨、鷄、家鴨鷺の類は切身にして二番煮出しへ醤油を少々差入れ沸騰したる頃切身を入れ火を通しひきあげて椀盛に入るなり。

椀妻物用ひ方　芹、みつ葉、花菜、其他青き菜の類は湯煮をして水にとり冷し引あげ或は芹の如き品は灰汁を抜き二番煮出して醬油を少し入れたる汁にて下煮をして椀盛へ入れ吸口は時候により見斗ひ用ふるのです。

日本料理をするに必要なる器具および鍋類の注意　鍋の性質を撰ぶのです眞鍮、唐銅鍋より金杓子に至る迄錫(シロミ)のはげたる品は有害です食器物販賣規則にも錫十分の七鉛三分にて掛たるを用ゆべしとあり然れども此錫の剝げ落たる器を顧見ずして調理に使用する時は綠青の浮出して人身に害をするなり其他ホーロー鍋にも衛生に適ふ瀬戸引鍋も有升故に鐵鍋にてかな氣の抜けたる鍋を最良と致升料理用具の内肝要品は煮出し漉て用ふる絹ごし、毛水篩、裏越し、味噌こし、蒸籠、敷笊、鍋蓋大小、鐵製の金串、鐵網、鐵炎等なり。

（扇房亭主人案）

新案鷄卵料理

岩崎勇

凡そ料理の中にて何が最も多きかといふに、鷄卵と豆腐に越すものあらず、これは何故かといふに鷄卵と豆腐とは、其一品の材料よりして種々様々なる料理に使はるればなり、何が故に然るか、取りも直さず、鷄卵と豆腐が百珍の料理に適用し得らるゝ性質を有すればなり、西洋の料理法中にても鷄卵は尤も多く使用せられ、西洋の家庭雜誌などを見るに、料理及菓子製造に鷄卵を材料に使ひたる方法多く記載しあり、但し豆腐は彼地になきものなれば、其料理の欠乏せるは遺憾なり、今茲に鷄卵と豆腐の百珍料理たるべき理由を示さん

（一）流動躰なる事　鷄卵と豆腐がいろ〳〵の料理に使はるゝ原因は其の流動躰に歸する所多かるべし、勿論豆腐を流動躰と言へば甚だ可笑しく聞ゆれど、豆腐は形はあれど、質は流動躰にも等しきものなり、何となれは豆腐の元素は元々流動躰より成立したるものなればたとひ一定の形を爲すと雖も、之を碎かば微分子となり流動躰にも變するは、臺所に經驗ある細君の能く知り玉ふ所なり、則ち鷄卵と豆腐とは其性質君子に等し

く其器ならざる所よりいろ〳〵の方角に應用が出來得るなり。

(二)無味なる事　鶏卵も豆腐も無味なり、勿論仔細に賞玩せば、味のなきことはあらず、併しながら此二品は外に藥味がなければ如何なる味といふ事を味ひ易からず、其者には味の淡きものなればこそ、却つて種々の料理につかはるゝなり。

(三)滋養分に富む事　鶏卵の滋養分に富むとは玆に言はずとも知れ渡れる事なり、豆腐も他の植物性食物に比し、又其價格の割には頗る滋養分に富めり、世の中には豆腐のみを常食とし、之を十二分の養生品と信じ、身躰の壯健、生命の長壽を保つも往々にして、俗言にも豆腐は鶏卵に亞ぐ養生品となせり、又之を理學的に分析をしても、其結果は他の植物性食物に讓らざるなり。

(四)時節を厭はざる事　此二品は時節を厭はず年が年中欠乏を見ざる點は、他の食物と大に趣きを異にせり、また不意に來客ありたる節などは、鶏卵などは、一寸打こわして吸物の主役にても、生鶏卵にしても間に合ひ、豆腐ならば奴豆腐にても煎豆腐にても食するに堪ゆるにあらずや。

右は鶏卵と豆腐が料理社會にて勢力を占むる重なる原因を擧げたるものなり、試にこれより如何なる料理が此二品によりてなさるゝかを記さん、

▲初霜やき鶏卵　雞卵を破りて殻を去りまだ黃色を攪きまぜぬ以前に蛋白分少許を分け取りて別器に移し(蛋白分を分け取る法は、破りたる殻の中にて充分行はるゝなり)斯くして後ち他の蛋黃白分は一緒に攪き交へ、普通の厚燒鶏卵となし、煮熟するを待ちて、曩きに分け置きたる蛋白分を平らに不同なく其の上に流すべし。

▲淡雪鶏卵　この料理を爲さんには、豫め松魚節の煎汁にて醤油を製し、之を煮立てゝ更に鶏卵の白分のみを別器に移し、茶筌樣のものにて、充分之を攪きまはし、器中のもの全く泡花と化するを待ちて右の醤液の中に注下すべし、其狀態宛然として春野の淡雪に髣髴たり、其味淡白なれど、一寸面白し。

▲かき鶏卵　これは「鶏卵とぢ」と大同小意の料理になり、唯異なる所は、稍其醬液を多量にして葛粉溶液をひき、鶏卵を入れて後充分に之を攪きまわすも、決して醬液の濁らぬ所が此料理の天狗といふ所なり。

▲海苔巻鶏卵　鶏卵を薄焼炙となし其の未だ濕氣を失なはぬ以内に、火とりたる淺草海苔の上に展ばし、ともぐ／＼に巻き、暫時壓重を施こして後、適宜の寸法に切りて食膳に供す。

▲三十日鶏卵　此料理は日本紙の稍厚きものを撰みて一寸立方前後の嚢を製し、只上部の一方面のみを除き、他の接合目は皆縫糸をもて細密に之を縫ひ合はせ、而して後靜に鶏卵を破りて其黄分と白分との混亂せぬやうに徐々右の嚢の内に容れ更に其の上面なる口の四邊をも縫ひ合せ、斜傾又は歪面にならぬやうに注意し、一方に沸かし置きたる鍋の中に嚢のまゝに容るべし、已に煮え凝りて後ち、周圍の紙を剝ぎ去れば、宛然天然の方形卵を煎たるの觀あり、蓋し三十日鶏卵の名の起りし所以は、娼婦の眞實のなきは三十日に月なきと鶏卵に四角なきと同じとの俗諺より出てたるものならん歟。

▲まるうち鶏卵　これは三十日鶏卵に似たる方法なり則ち先づ日本紙を以て細長形の嚢を製し、砂糖分量を加へたる鶏卵を攪きまはし、漏斗にて之を合の楮紙嚢に注下して、熱湯中に入れ煮たる後冷水に入れて外面の楮紙を剝ぎ去れば丸切の煮鶏卵が製せらるなり。

▲花形湯煮鶏卵　鶏卵の黄分と白分とのいりみだれぬやうにして、靜に花又は三日月などの摸したる型に入れ、鍋中にすべて湯煮をする。

▲木葉焼鶏卵　種々の木葉の形に擬したる型を製し、鶏卵の黄白分を攪和まぜて、これに入れ、普通の厚焼鶏卵を製すると同様の法を以て焼くを要す。但し此料理はいろ／＼の型を要すれば普通の家庭にては一寸面倒なり。

▲金銀接合焼鶏卵　鶏卵の黄分と白分とを別々に分ち始め蛋白分のみを鶏卵型に入れて火に上せ其の炙熟するを待ちて、爼板の如き平坦にして清潔なるものゝ上

に移し、次に黄分のみを右の炙卵型に上せて其のほと〳〵炙熟して唯だ上面のみ未だ全く凝固せざるを期とし、前に炙きたる蛋白分を取りて二たび其上に入れ、更に一二分時間を經て後、火より取り卸して俎板には食膳の上に移して放冷す、これは燒卵型さへあれば誰にても容易に出來得るものなり。

▲にしき鷄卵　鷄卵の殼のまゝに湯煮し、其殼皮を剝き去りて黄分と白分とに分ちて各個に擂鉢に入れてこまかに擂りつぶし、之に砂糖て味をつけ、白分の一半を取りて、之に食料用青粉を擂りあはし、更に臙脂を加へたるものと青粉を加へたるものとの各一半を取りてすり和する時は、都合五種の色彩を得べし、玆に於て壓搾箱を用ひ一種の色彩を一層とし、次第に五種を五層に重ねて輕く壓搾して後、適宜に小口切を爲す、能く料理屋にて口取に用ゐあるなり。

▲二色また鷄卵　これも鷄卵を殼のまゝに湯煮し黄と白とを分ちて、別々にこまかに擂りつぶし、更に砂糖の味を加へ、而して後、少しく水氣ある布巾を俎板の上に押しならし、次に黄分を其上に重ねたるまゝ徐て卷き終り、更に右の布巾を其外面に卷きて輕くおしつけ、布巾を解きて横切と爲す、これはにしき鷄卵に能く似て手數のかゝらぬ法なり。

▲母子炙卷たまご　鷄肉をきざみ鍋に入れて煮、醬油と砂糖にて味をつけ、之を笊に移して液氣を去り、又鷄卵をば普通の仕方によりて三分位の厚味に炙き、其の上面の全く流動體を失はざるに當り、右の鷄肉を其面にまき散らし、直ちに火より取り卸して徐に卷き輕く壓す。

▲柚子鷄卵　前法の如く殼のまゝ茹てゝ殼を去り、黄分と白分とを合せ擂鉢に入れて擂りつぶし、適宜に砂糖と少しの擦碎柚子と微量の鹽の三味を加へて擂り合はせ、適宜の木函に入れて、壓搾蓋子を用ゐて壓し圍む柚子の香氣ありて一種の趣味を存す。

▲たまご饅頭　鷄卵を茹てゝ殼を去り、其の白分と黄味とを各別に擂鉢にてすりつぶし黄分の方へは單に砂糖を加味して餡の料に充て、白分の方へは砂糖と葛

粉少許とを擂りあはして、以て外皮の料に充て然る後、白味を尋常の煎餅程に壓平し、之を黃分をつゝみて饅頭の形に製し、更に蒸籠にいれて ふかせば たまご饅頭出來す。

▲たまご羊羹　鷄卵もて羊羹を製するには、例に依りて黃分と白分とを分ちて、各個に擂りつぶし、其黃分の方へは食料用靑粉を擂りあはして綠色となし、白分の方へは食料用臙脂を擂りあはして紅色となし、兩方共適宜の砂糖、少量の葛粉、微量の食鹽の三味を加へ更に充分に擂りあはして後、各別に型に入れて羊羹の 形となし、蒸籠に入れて蒸かすなり。

▲靑海炙鷄卵　靑海苔を焙り揉みくづして粉末となし馬尾羅にかけて篩ひ、之と鷄卵と混ぜ合はして炙卵型に入れ火にかけて燒く。

▲つみいれ鷄卵　先づたまごを型に入れ團子程の丸さと爲して燒き、汁の實又は旨煮などの料となす、つみいれの名の起りたるは其の形の夫の魚肉にて製する小糕(卽ちはんぺん)に類すればなり。

▲油揚たまご　鷄卵を割りて能く攪き和し、之に麪粉少許を加へ、更に混ぜあはしてべと〱となし、食匕をもて適宜に掬ひ取り、熱油に入れて油揚をなし、之を食するには普通天麩羅に用ゆる醤液につけて食す（天麩羅の醤液は醤油に松魚節と味淋にて味をつけしものなり）

▲かばやき鷄卵　淺草海苔を適宜の長方形に切り、其一面には攪混したる鷄卵を附着し、油湯を爲したる後、更に稀醤油に浸し、焦げつかぬやう炙るべし、一寸した肴に妙なり。

▲磯炙たまご　鷄卵を解き淺草海苔の炙りて揉みくづしたるを適宜に混和し、鷄卵型に入れて炙くなり、其の食用法は普通の炙たまごと異ることなけれど、『水行や何にとゞまる海苔の味』といふ風味ありて面白し、（次號に豆腐料理を紹介せん）

化粧の話

藥劑師　清水如水

●皮膚を美麗ならしむる法

我國では昔しから、色が白ければ七難隱すなどゝ云ふ諺があるが、なるほど皮膚の奇麗なほど人の心に快く感ずる者はない、て愛を生命として居る婦人などは、殊更此皮膚を奇麗に保たせるの心懸けが第二の身嗜みてあうふと思ふ、抑も人の皮膚を奇麗にすると云ふはやはり鳥獸類の養ひ方に氣を注ぐのと同樣で滋養になるものを與ふれば毛色や羽色が奇麗になる通りに人間も食事や衛生に注意せねば、皮膚に眞の色澤を保たせることが出來る、けれども玆には餘白がないから、たゞ化粧のことばかりをお話し致しませう、若しなるべく衛生を守つた上に化粧を凝らしたなら、それこそ錦上花を添へるやうな者であらふ、それからも一つ呉々も氣をつけねばならぬのは化粧品を使つた爲めに、却つて皮膚があれると云ふことである、日本の婦人方は失禮ながら化粧をすることか下手で、折角の美質を段々と損じてしまふのである、化粧品を見別けるのでもそうてあろ只香氣とか色合とか味ひとか體裁とかばかりに氣を採むて、品質の良し惡しには少しも頓着せられぬやうで、まことに私は情けなく思つて居る、私は餘ほど此化粧品の改良には力を注いで見たこともあるが品質の良い物は其品質に金がいるので、體裁や香などが金を充分に使ふことが出來ぬ、そうすると賣れなくなると云ふ樣な次第で、最少し化粧の智識が進んで來んと、とても改良は出來ない、例令ば齒磨の如きものでも、木炭末や規那皮末などを使ふと、齒質を傷めずして象牙を磨いたやうに奇麗になつて、口中を防腐するの効能があつても、苦味があつたり、色が黒かつたりするので、直に嫌はれると云ふ樣なものである、扨て市中には色を白くする飲藥と云ふものがあるが私の信用する樣なものは一つもありません、亞米利加などでは

●色の白くなる藥

として往々ホーレル水を内服するさうである、此藥は「やうばいさう」の樣な皮膚病に特効があつて常に内服

藥として用ふれば非常に身體を强壯にし皮膚の營養の良くなるのを見ると、多少の効能はあるかも知れぬと思ふけれども 之は毒藥であるから、決して素人の取扱ふ可き者でない、ところで玆に誰にでも行へる極て安全な法がある、夫れは冷水浴と云つて、冷水で常に行水をするのである、かう云ふと諸孃は直に感冒の病を氣遣はれるかも知らぬが、決してさうでない、初めは微溫湯に濕したる手拭を以て、毎朝兩手位を摩擦し、それから腰肌を脫いで上半身を摩擦し、漸く慣るゝに從つて全身に及ぼし、漸次冷水とすれば、何んな寒中でも決して感冒の氣遣はない、之を久しく續けることが出來れば、身體はだん／＼と强壯になつて、必ず色澤が能くなるのである次に

●水の良し惡し

と云ふことも能く注意せなければならぬ、昔しから京美人とか云つて、京都の人の奇麗なのは、鴨川の水が良いからであると聞き傳へて居るが、まことに此理屈がある、夫れは友禪の樣な染物が京都の水でなければ、出來ぬと云ふことや、鹽水ばかり使つて居る海邊の人の色の黑ひと云ふことを見ても得心される、ては行水をしたり化粧をしたりするのには何んな水が能くて、何んな水が惡いかと云へば、鑛物質と云ふ者の溶解けて居ない水が良い、此物の澤山溶けて居る者ほど惡いのである、若し此鑛物質の澤山溶けて居る水で始終行水をすると皮膚は次第に荒れて、色澤を失ひ終には皹などが裂れる樣になる、染物でもこんな水を使つては決して立派なものは出來ぬ、夫れては其水の中に鑛物質が溶解けて居るか居らぬかと云ふことを、成べく容易く鑑定める方はどうかと云へば、先づ斯うてある、最初石鹼を削つて「アルコール」(藥屋にあり、二三錢位買へば三四十度試驗するほどあります)に溶かしたものを製らへて置てそれを少し水の中に落して見る、すると鑛物質の解けて居る水は白く濁つて牛乳の樣になる、それて雨水や河の水は、此石鹼液に濁らないから、良き水であると云ふことが知れる

●石　鹼

を使ふのにも餘ほど氣を附けなければならぬ、常に良き石鹼を使へば、皮膚はだん〳〵と柔軟かく、色澤も良くなるけれ共、下等の者を使ふと却つて、皮膚は粗糙になる、石鹼の流行出には今の支那行きの樣な、安物ばかりを皆稱用して居つたのであるが、今から思ふと、實にぞつとする樣である、一口に云へば石鹼は、脂肪と苛性曹達とを煑て製造したもので、若し苛性曹達の分量が過ぎて居ると、垢は能く除るけれ共、皮膚は必ず粗糙になつて多分などは其爲めに皸裂れを生ずるとがある若し其の過ぎた分量が澤山であれば、あるほど、下等で久しく經つと、表面に白き小さな斑が出來る樣になる、けれ共少々位過ぎて居るのは見たばかりでは知るとが出來ぬ、此場合にはヘノール、フタレインと云ふ藥を使ふのが一番宜ろしいので、それは此藥をアルコールに解かすと、無色の液躰となるから、之れを石鹼の削り口に着けて鑑ると、苛性曹達の過ぎて居る石鹼は直に其削り口が紅の樣に赤くなる、それから嘗めて鑑ると舌を刺す樣な感じがする、此外にも鹽とか、石灰とか、澱粉とか云ふ樣な物を混ぜたり、色着けに有毒な者、用いたりするとがあるけれ共、素人ては一寸鑑別けがむつかしからふと思ふ、只鹽の澤山混ぜてある者は、外部が汗かいた樣になつて、嘗めて鑑ると舌の先に塩鹹きを覺ゆるので知るとが出來る

◉洗粉

も種々出來て居るが、之もやはり只素人好きのする樣なものゝ方が多くて、善良なものは少ないから、正月のお慰みに御自分で製らへて見るのも亦一興であらうと思ふから、私が一番身躰の爲めに宜しい合せ方を、御傳授しやう

◉洗粉の製法

赤豆の粉四十匁、滑石二匁、石鹼末五匁、甘松四匁、龍腦一匁（藥品は皆な藥屋にあり）を各々細末として、混和すれば極めて善良なる洗粉となるのである、若し又風呂から出た時など始終顏などに塗布ると、

◉皮膚の肌理を細かにし白粉の延びを能くする最良の化粧品

は、ラノリン五十分、ワセリン八十五分、オレフ油四分、香油十四五滴を能く摺り合せたものである賣薬の効能を吹聽する樣であるが、之は必ず請合ひますから一つお試めしになつて御覽なさい

●にきび の出來た人は、石鹸で能く洗つて、指の爪先で内容栓を押し出した後に、リスリンに少し硫黄を混ぜた者を塗布するがよい、風呂に行つた時は絨布や海綿の樣なもので、能く摩擦すれば出來ぬと云ふとである

●そばかす を治するには、常に加里石鹸で洗滌して、日に照らされぬ樣にせなければならぬ、傘なしに炎天を歩行たりすれば、益々增加る一方である、冬よりも夏の方に澤山出來るのは全く此理窟である、夫れから婦人は殊更多き病は

●わきが と云つて、腋の下から、まことに厭やらしき惡臭のする汗を分泌するとてある、之は甚だしき人になると、衣類まで非常に惡臭が移つる樣になる、之れには、ナフタリン一分、酒精二十分、ベルガモット二十分の者を塗布すれば稍宜ろしいけれ共、良薬には乏しい樣である

（完）

◎讀書八則

一　職務を第一とす故に職務を廢して讀書すべからず
二　人の生命長きものにあらず故に無益の書物を讀むべからず有益のもののみを選擇して讀書すべし
三　粗雜に讀まず謹で熟讀すべし然らざれば毫も利益なし
四　讀書には沈思を要す故に發聲すべからず殊に發聲は他人の妨害となるものなり
五　長時間讀書すべからず之大に精神を勞すればなり
六　年齡及理解力に適せざる書物を讀むべからず之れ不消化物を食すると一般なり
七　利益ある書物は數回繰返して讀むべし繰返すこと數度に及べば始めて十分記憶するを得べし
八　家族等には讀み聞かせよ有益なる書物は殊に食後等に讀みきかすべし

英語實習　（話會）

江口操舟

I say, Nabe, it seems a lady calls on. Doesn't it?	これお鍋やどなたかお客樣が御出のようでないかね。
Yes, Madam, I'm just going to see.	はい只今參ゐる處で御座ります。
Good afternoon, my girl. Is Mrs. Nishi at home?	今日は。奧樣はお内でいらつしやいますか。
Yes, Madam, come in, if you please.	はい。どうぞお上り下さい。
It has become very hot, lately. Hasn't it?	近頃は隨分お暑くなりましたねー。
Yes, Madam. Thank you very much for your kindness to take trouble for me the other day.	はい左樣で御座ります。先日はいろいろお世話樣になりまして有り難う存じます。
No, Madam, not at all.	いーえ。どう致しまして。
To-morrow, we'll have a concert as usual. We'll be very glad if you be present, Mrs. Nishi.	明日例の音樂會を開きたう御座りますからどうぞいらつしやつて下さい。
The time and the place are just same as in the last time, you know.	時間や場所などは此前の通りで御座ります。
Thank you, Madam, I'll be very glad to be there.	はい承知致しました。ぜひ參ります。
Now, beg your pardon, I shell take leave, as I've another engagement.	けふは少し急ぎますから失禮で御座りますが是れでお暇致します。
Don't be in harry, Mrs. Naitō. Give my regards to your mother, please.	まあーお宜しでは御座りませんか。どうぞ御母樣へ宜敷。
If you happen to come in my direction I wish you to come and see us.	あちらへ御出掛の節はちとお立寄りください。
Yes, I shall. Thank you, good bey.	はい有り難う存じます左樣なら。

英語實習（單語動物の部）

Fish	魚
Smelt	鮎
Eel	鰻
Crap	鯉
Gold-fish	金魚
Rudd	鮒
Loach	鰌
Tunny	金鎗魚
Salmon	鮭
Gurned	火魚
Trout	鱒
Shark	沙魚
Mackerel	青魚
Perch	鱸
Sardine	鰯
Dolphin	海豚
Mullet	鯔
Globe-fish	河豚
Cod	大口魚
Flounder	比目魚
Bonito	堅魚
Herring	鯡

Beast	獸
Dog	犬
Cat	猫
Rat	鼠
Monkey	猿
Cow	牛
Horse	馬
Pig	豚
Elephant	象
Tiger	虎
Lion	獅
Wolf	狼
Sheep	羊
Hare	兎
Donkey	驢馬
Camel	駱駝
Fox	狐
Baboon	狒々
Giraffe	麒麟
Whale	鯨
Bear	熊
Deer	鹿

Bird	鳥
Cuckoo	杜鵑
Nightingale	鶯
Swallow	燕
Sparrow	雀
Dove	鳩
Sky-lark	雲雀
Crow	烏
Hen	鶏
Crane	鶴
Duck	鴨
Hawk	鷹
Eagle	鷲
Ostrich	駝鳥
Turkey	七面鳥
Conder	鷺
Quail	鶉
Wagtail	鶺鴒
Magpie	鵲
Parrot	鸚鵡
Pheasant	雉子
Peacock	孔雀

史傳

マダム、ド、スタエルの傳（中）

湘竹女史

夫人嘗て云へらく、「英國の婦人は、男子の前にて政治的辯論をすることなけれど、佛國にては男女の區別なく、政談するの習慣なれば、自然婦人の政治的思想を發達せしむるの自由あり。」と、さればかのラ、フエート、ナルポーン、及びタレーランドの若きも、常に婦人と談論せるが、かの宰相タレーランド氏の、千七百九十年に於ける文部の教育に關する報告の重要なる部分は、殆夫人が手に成りたりとぞ。ナルポーンをして國務大臣の職を得せしめ、またタレーランドの遠流せらるゝや、かれをして外務の任に當らしめしも、亦夫人の力なりき。

前途多難なる夫人にとりて、逼迫せる一の狀況とはなりたり。そは千七百九十二年、スウヰーデンの政府は、その大使派遣の命を中止せし事なり。かくて、スタエル夫人は、其友を救はんが爲、亡命の身となりて、暫時世を忍ぶ事となりぬ。當時は、巴里都下、到る處鮮血腥からざるはなく、マラー、ダントンの若き暴主を頂く七つの獄は、何れも囚人もて立錐の地なきまでに至れり。かくて死骸は、獄窓の下に堆かく、日夜積上げられたるその數は、一萬八千三百人の多きに達し、何れも斷頭臺上に血を流せるものゝみなりき。かくて警官は夫人の家を搜索することとはなりたるが、この家中にこそ、當時の國務大臣も、身を潛めてありけるが、夫人は警官に向ひ、假令にも、外國の使節に對し、其家中の秘密をあばくことなからん事を請求したり。而して其友が捕縛となりたる時は、殘逆なる主領の許にゆき、其雄辯を揮つて、彼等が保全に盡し、かくて數多の生命を救ふ事とはなりたり。

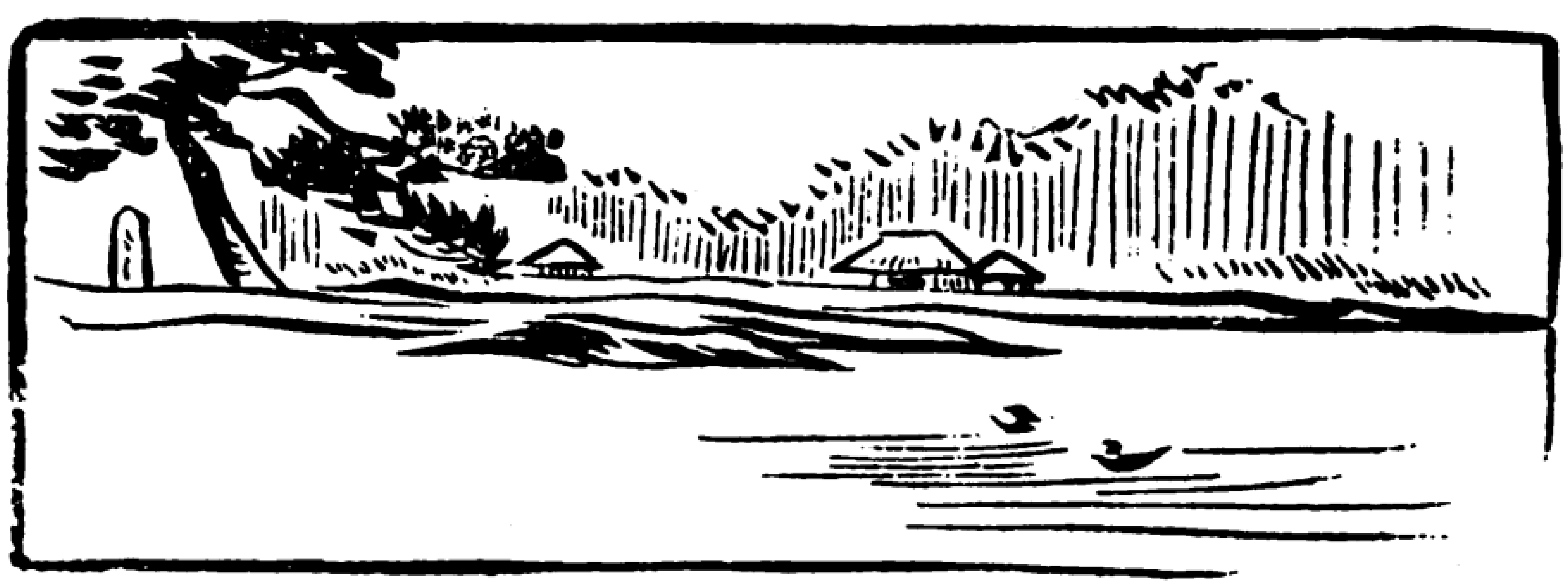
遂に夫人は、血の雨たえぬ巴里の都を距る事となりぬ

るが、なれし郷土を跡にして、さして行くべき道すがらも、いかなる危險にあはんも量りがたき夫人の胸中は、いかにありけん。夫人はかゝる時こそ、外國の使節たる名に對しても、餘りの暴行は加へられまじと、わざと六頭の馬車に一樣の服を着たる從者を從へ、出立しけるが、間もなく、馬前に身を投げ出して、道を遮るものあり。これ憔悴せる貧女の一隊にてありけるが、夫人を馬車より引おろし、會議の前に引連れたり。こゝにて有名なるロベスピールの前にたちて、自身の爲大に辯護することありしが當時の「コンシユーン」の決議をまつこと六時間なりしがこの間目に見しものは、鮮血滴る腕を現はして、夫人の窓下を通行する獄卒より外にはあらざりき。暴徒は群がりて、夫人の車を打破らん勢なりしが、幸にして勇悍なる一人の男の車上に座して、これら暴徒を打扞くものありければ、幸にして其打擊に抗することを得たり。この人こそ、この後皇帝路易十六世が死刑の宣告を受くるにあたり、其最後の一言が人民の耳に達せぬ樣にと、大皷の響をもて、帝の遺言を葬らしめし、惡むべきサンテールなりけれ。いかなれば、この惡人が、夫人を保護せし事なるか。嘗て前年大なる饑饉の年にあたり、夫人の父チツケル氏が、貧民どもに穀物を施與せしことありしが、サンテールは當時の有樣を目擊して、氏が貴ぶべき行爲に對し、今この危急にあたり、その一子を助くることをもて、チツケル氏の美俠に報ゆるの念なりしとは、後にぞ思ひ知られける。

夫人は遂に許されて、コペーに旅行をつゞくる事とはなりたり。されども、赤兒を伴へる婦人が、幾多の危險を冒して、漸く同處に着せし時、過勞の結果殆氣絕せんばかりなりき。夫人が蘇國の寓居は、やがて亡命の徒らのかくれ家とはなり、こゝに忠實なる案内者を使用しけるが、こはこの風土に熟達し、山道に委しきものなりければ、萬一の用意として、かゝる人をは備へ、置けるなり。明くれば、千七百九十三年、夫人は經來し危急に神經を勞せしこと一方ならざりければ、そが身心を休めん爲、暫時英國漫遊の途につきけるが、到る處、名

士貴女の非常なる歡迎をうけ、中にも「イブエリナ」の著者ファネーボルネーは、夫人に付き、「余はスタエル夫人の若き、いとすゝしき雄辯と、いと鋭き觀察と、煥發せる才氣と、殊に得も云ひがたき優美なる態度とを有せるものに、嘗て遭遇せしことなし。」と云ひて嘆賞せしとぞ。

同年一月廿一日、御運拙き路易王は、山なす人民の目前にて、あへなくも、斷頭臺上、一片の露とは消え玉へり。この時の有樣は、六人の手をもて板に縛し、而して血を見ぬうちは、必安からじといふいと殘忍なる群集の喝采の聲と共に王の御頭子は、御身と分たれたり。ネッケル氏會議の前に至り、王の辯護をせんとしたれども、許されざりき。スタエル夫人は、皇后マリア、アントネットの危ふき御身を救はんが爲、全心を注げる夫人の筆もて、人民に哀訴したれども、その哀訴



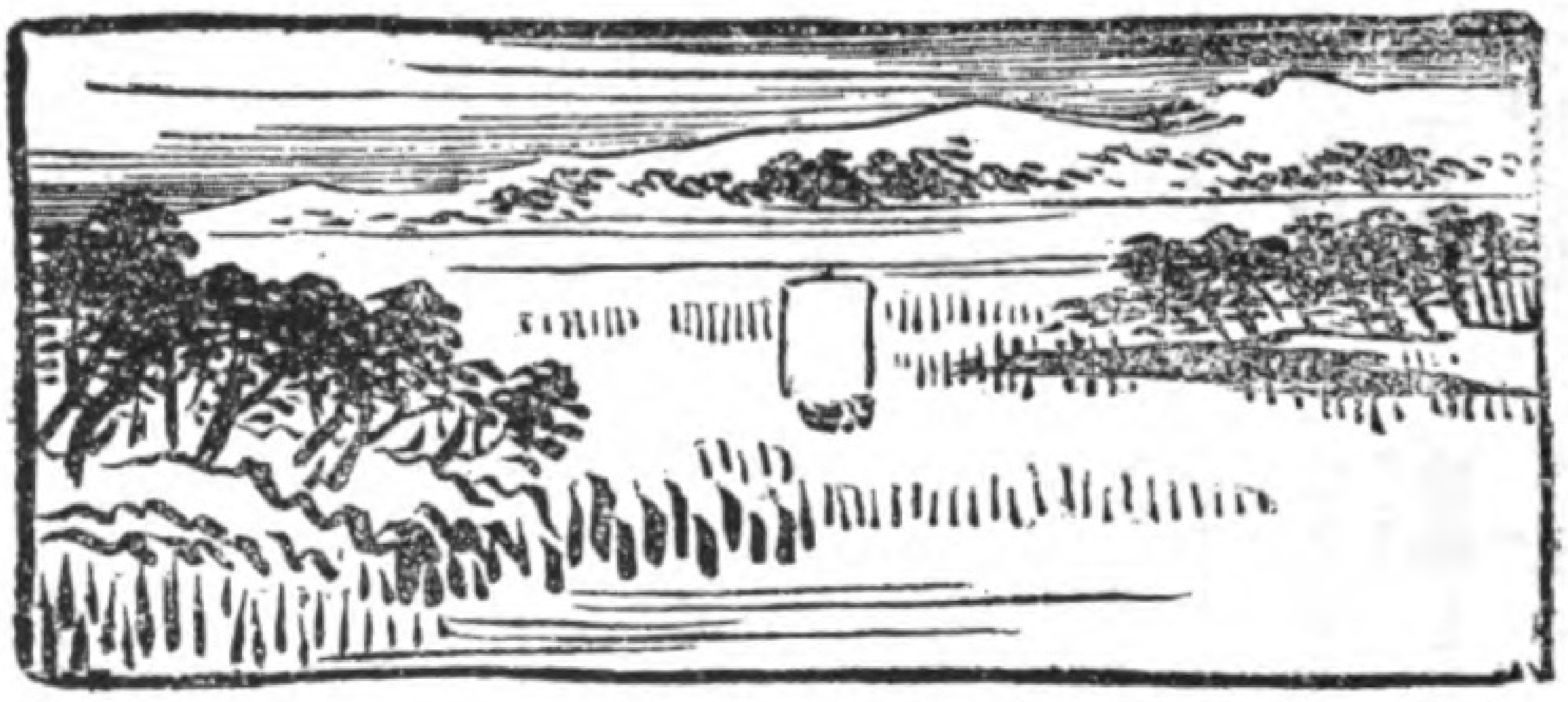
のかひも無く、同年九月十六日、同じ斷頭臺上にはかなくならせ玉ひぬるは、あはれと申上んもおろかなり。さても說話かはりて、再ネッケル氏の家庭をしるさんに、あくれば千七百九十四年、夫人の母、ネッケル氏夫人は、病の床にありけるが、遂にコペーにて永眠さるゝことゝはなれり。ネッケル氏の夫人に對する愛情は、最後に至るまで變ぜず、實に献身的の看護と、慰諭とを以て、夫人をいたはり、夫人をして病苦を忘れしめし、そが一例を擧ぐれは、夫人は長き病者の常とて、夜間の安眠を欠きければ、日中屢夫の腕にもたれては、うと〳〵と眠りしこともありけるが、かゝる時には、ネッケル氏はその傍に佇めるまゝ、身動きもせで、數時間に亘る事すら少からざりき。されば、いまはの際にも、いとかすかなる聲をもて、夫ネッケル氏に囁ける樣、「われらは天つみ國に再會せん。」と、か

くて天を仰ぎて、夫の祈りに耳を傾け、而して二世の契りのかためとて、夫が與へし賜ものなる、いまはのきはまで肌身はなさぬ、その指環を戀しき夫に示しつゝ、いと安らかに永き眠りには就きたりき。實にこの妻にしてこの夫あり。この夫妻にして、この女傑を生めり。天は人に私せざるものなりかし。

扨も、革命は其局を結び、佛國は愈共和政治となりたれば、瑞典は再スタエル男爵を大使として、巴里に派遣する事となり、妻もろ共に都の住居に立歸りしかば、夫人の客室は、又もや當時の豪傑等が、集合の中央部とはなりにけり。夫人は自由を愛し、從て共和政躰に同情を寄せたり。然して、夫人は革命の騷亂によつて、發奮したる一の著書あり。即「個人及國民の幸福に付て感情の勢力」てふ書にて、其論旨は、爭ふ可からざる根據を有し、其思想は實に卓越せるものなりき。夫人は、一子オーガストに心を注いて敎育なしけるが、自身の幼時を追懷して、餘り嚴格なる訓練をば與へざりき。されば、子も亦母の優しき敎へに對して、溫厚篤實なる人とはなり、いと熱信なる信徒にして、種々の善良なる事業に盡し、且生涯この母に對して、こよなき友にぞありき。

この時、スタエル夫人の眼中又映じ來れるは、かのコルシカの一小卒ボナパルトの、昇る朝日と進みゆく、その勢力のすさまじさにて、夫人は心中いと穩かならざりき。この時、行政權は、監督府の手に歸し、而してかれは軍事上に於ける全權を掌握せり。さるが上に、イタリアに於ける戰爭にては、いと花々しき大勝利を得、次てエジプト遠征軍の總大將とはなれり。かくて、巴里に凱戰の後「ディレクトリー」を解散し、兵力をもて、議事堂より五百名の議員を追出し、コンスル政治を設け、三人のコンスルを置き、自から其長となりて、チユーラレーに移りて、其起居恰も帝王のごとくなりき。かれが一擧一動に注目せるスタエル夫人は、かれが利己主義と、無情とを深て心に感したり。かくて憂國の士にして、心潜かに彼れが將來を恐るゝもの、期せずして夫人の堂に集まりけるが、これらの客中には、那翁の兄弟

たる、ルシアン及ジョセフの二人すらありけるが、これらは遂に那翁より、夫人の堂に出入することをば禁ぜられたり。かくて、夫人の堂に來る客は、その英氣、その雄辯、皆夫人の原動力によらざるはなく、共和黨中、最能辯なりと稱せらるるものは、皆夫人が思想、夫人が言語を假用したるものにして、實に夫人は當時政界の原動力とも稱すべきものなりしなり。ベンジャミン、コンスタンが、那翁に對する反抗演說も、皆夫人が指導の然らしめしものなりとの斷定により、かれは、夫人を恐嚇し云ひけるやう、「われは共和政治を愛せり。ゆへに、終始同主義を防禦することをつとむべし。」とかれ又云へり。「スタエルの家に入り、その說をきくものは、必多少われに對し敵愾心を起さゞるはなし。」とこの時にあたり、夫人が著書「社會組織の關係より論究せる文學」は世に公にされたるが、夫人が深遠なる智識と、富裕なる



思想とは、讀者をして驚歎せしむるの外なく、其書中グリシア及ラテンを初めとして、英、伊、獨、佛、等文學の解剖に於ては、讀者をして、そか婦人の手より成りたるの事實に對して、驚歎止む能はざらしめき。

この後ネッケル氏は、政治及經濟に關せる其最後の持論を出版しけるが、書中の眼目とする處は、個人の壓政に關せるなりき。ナポレオンは、直ちに手書を子ッケル氏に送りて、いひける樣、政治に關しては、佛國行政を司とれる「コンスル」の、その職にあたるものあれば、敢て他人の容喙を要せざるべしと。然して、この著書に助力なりしは、スタエル夫人なりとの嫌疑をもて、夫人を恐嚇するに、流遠の刑をもてせり。夫人は、幽囚の身とならんより、むしろ佛國を逃るゝにしかじと、急ぎコペーに至りたり。かくて數ケ月の後、夫人は再スタエル男を迎へんが爲、巴里に歸

鄕しけるが、氏はその途に死去りぬ。この凶事は、夫人がスタエル氏に離婚せし後の事にて、その離婚は、氏か夫人及兒女の財產を浪費せしによれりとぞ。

夫人が「デルフイン」てふ小說の著作ありしは、佛國退去の命を受けし後にして、この光彩ある小說は、廣く世人の知る處となりたり。而して、その「デルフイン」なる名の來れる原因を尋ぬれば、ある時緊急の用務をおび、夫人はナポレオンに對面せんとて、「モンテサン」の離宮に至りけるが、こゝは那翁がいと愛せし離宮とて、屢こゝに遊べるが、この時夫人は客室にありて、一人默然と坐を占めつゝありけるが、折ふし那翁は數多の宮女を從へて入り來りけるが、那翁の夫人に對せる憾惡の念を、誰知らぬものもなかりければ、主君の歡心を買はんか爲、誰一人婦人に注目するものなかりければ、夫人の當惑はたとふるに物もなかりきまづ中に一人のまだ年若き婦人は、夫人の困難を察しやり、その坐を離れて、夫人の側に來り、坐し其來意を問ふれば、夫人は其情に感し、「貴女の御名を知らせ給はらずや。」と問ひければ、「わらははデルフインと申すものにて侍り。」と答へける。この時夫人は、「今日の御情に報ひん爲、御身が名をは永朽に傳へまゐらせん。」と約したるが、夫人は果して其約を守りけるなり。このかしこき婦人はカフ、チン伯爵夫人にてありき。

コペーなる夫人の住家は、またもや數多の豪傑の倶樂部となり、「伊太利共和政治の歷史」幷に「南歐文學」の著者シスモンディー氏の若きも夫人の奬勵を得て、こゝに數多の名著を出せり。ボンステッテン氏は、數年この處を家とし、又シユレーゲル即當時の名たる大批評家は、夫人が兒女の師となり、且友ともなりけるとぞ。ベンジャミン、コンスタント(著作家幷に政治家)氏の若きも、こゝに寓居して、かゝる英勇が、晝は各その室に入りて著作し、夕に到れば共に集りて、哲學、文學、及政論をも鬪はすをもて、常とはなせり。ボンステッテンの云ひけるは、「彼女を見、彼女をきくに、われは一種のいひがたき感動を與へられざることなし。彼女は日々に益々俊傑にして、益々善良なる事を覺ゆ。されども

大豪傑の心は、大苦痛を有するなり。それは、彼等が世界に卓絶なるは、宛も「モント、ブラン」てふ峰の頂の若く他に比すべきものなければなり。」と

千八百〇三年の秋、巴里の都懸しさのやる方なきに、同處を隔つる十「リーダ」の地に閑靜なる一の家をば借りつるが、間もなく同志の客に訪問處となりて、このこと忽ち那翁の耳に達しければ、かれは直ちに使者を送り、自から記名せる書翰をもたらさしめ、廿四時間内に巴里の都を去る四十「リーグ」の地に退去すべしとの嚴命をば傳へたり。夫人は直ちに亡命の客となり、獨乙に身をよせけるが、フランクフオルドに於て、その小女は危篤の病に犯されけるが、異境の孤客たる夫人は、知友の助もなく、言語の不便さへある上に、病兒が命ともたのむべき醫師は佛語を了解せざりければ、いかにともせんすべなかりけるが、父はこの危急に臨み、ジエテパに於ける醫師に、その病狀を語り、その配劑の爲處方を送りければ、こゝに初めて愛兒の一命を救ふことを得たるなり。ウアイマルにて、夫人はギエテー、ウアイランド、シルレル及其他名家に出會せり。ベルリンに於ては、非常の歡迎を受け、嬋妍たる普國皇后ルイザの優待に預れり。この遠流の間、夫人が父ネッケル氏の世を去りけるが、氏が最後の息にも、「あゝわが子は、われを愛せり／＼」との言を遺しけるが、その病床より那翁に上奏して、孃が爲その冤をとれ、而して氏が著書に對し孃が一の責任をも有せざる事を明かにせんとしたれども、那翁はこれに對して一の返答も與へざるのみならず、傲慢にも、夫人が己れに媚びざるをもて十分の罪惡と認め、この罪によりて遠流に處するに足れりと思ひし也。スタエル夫人は、歎きの涙にその身もうく斗りなりけるが、嘗て肌身離さぬ父の寫影をば、僅に一度病床なるわが子の心慰さにもと分け與へたる事ありき。かくていへりき「そもじ病苦にえ堪ぬ時は只この寫影を見よ／＼」とぞ。

本朝名媛佳話

熊田千巵

（九）小町嘆花　倫子贈菊

小野小町は仁明天皇の御時の人なりける參議篁の孫なりとも云ひ、良實の女なりとも云ひ、又常澄の女なりとも云へど、其孰れか是なるを知らず、和歌の道に秀でゝ六歌仙の中にさへ加へられぬ、紀貫之が古今集の序にも古の衣通姫の流なりと評したらんが如く、小町は歌の心ばへの衣通姫に似たるのみかは、其容貌の麗はしきとも亦た衣通姫に讓らず、實に才色共に比類なしとて當時に持て囃されける、小町或る時春の花の雨に惱みて其色の褪せぬるを見て、

　花のいろはうつりにけりないたづらに
　　わが身よにふるながめせしまに

となん詠じぬ、我身の盛り過ぎぬるを嘆くのさま見えて特にあはれ深きを覺ゆ。

藤原倫子と云ふは陸奥守倫寧の女にして、關白兼家の北政所となり、右大將道綱を擧げゝる、和歌に巧みなるのみか、其容貌は本暦古今三美人の一人に數へらるゝ程なりければ、天暦八年の頃兼家がまだ兵衛佐と云ふ輕き身分にてありける時より其許に通ひて、度々歌を詠みかはしけるが、翌くる年の八月二十日に道綱を產みければ、程なく北政所にぞ直されける、天暦九年十月末つ方の事なりき、兼家三夜ばかり打續きて訪づれざりしが、或る日の曉がたに門の戸叩く音のなしける、扨てはおはせしよとは思ひけれども、此程より外に通ふ所ありげなれば態と門を明けさりける、斯くて翌く朝になりて

　嘆きつゝひとりぬるよの明くるまは
　　いかに久しきものとかは知る

と詠みて、うつろひたる菊の花に挿して贈りければ、兼家最と興あるとに思ひ、夜前そなたへ參りたれど門を明け玉はざる故、夜の明くるまで立つて待つべしと思ひつれど、禁裡より御使賜はりたれば、よんどころなく歸りぬとて

げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸も
おそくあけるをはびしかりける

ど返へしけりとなん、兼家の忍びて通ひたるほどの歌など自から書きあつめて蜻蛉日記と名づけゝるが、天暦八年より天延二年まで凡そ二十年に亘りけるとぞ。

(十) 周防移家 伊勢賣屋

周防内侍は周防守平繼仲の女にして葛原親王七世の孫なり、後冷泉天皇に仕へて女官となり、父の受領に依りて周防内侍とは呼ばれけるなり、和歌に堪能にして才名世に隱くれなかりけるが、或る時住み慣れたる家をはなれて外へ移るとて

住みわびてわれさへのきのしのぶ草
しのぶかた〴〵おほきやどかな

と家の柱に書きつけゝる、道は冷泉堀川の北と西の隅なりとぞ聞ゆ。



伊勢は伊勢守藤原繼陰の女なり、容貌の優ぐれたるとは言ふに及ばず、心ばせも亦た美くしく、特には敷島の道に堪能なりしと其時代に名高かりし紀貫之、凡河内躬恒にも劣らざりき、宇多天皇の皇后溫子に仕へまつりけるに、圖らずも天皇の寵幸を得て行明親王を產みまつりければ、尊ばれて伊勢の御息所とぞ申されける其後天皇御位をおりさせ給ひて法皇とならせ給ひ、大内山と申す所に入りて佛道をのみ行はせ給ふに依り、伊勢の御息所は世の中を味氣なく思ひて家にのみ閉ぢ籠り、折節は禁中の事ども思ひ出でゝ、哀れにも淋しく年月を送られける、一時は大方ならず世に愛でられたる身の、後には家をも賣られけるが、

あすか川ふちにもあらぬ我やどの

　せにかはり行くものにそありける
とは其時に詠み出でたる歌なりける、遷りゆくさまを言ひ出でゝ特にあはれ深し。

（十一）光明皇后　三條稱院

光明皇后は御名を安宿媛と申し、贈太政大臣藤原不比等の第二女に在はす、聖武天皇の天平元年秋八月をもて立てられて皇后とはならせ給ひける、是れまで本朝に於ては皇族にあらずして皇后に立ち給ひしとはあらず、蘇我氏の如き、藤原氏の如き、入つて女御となり、夫人となりたるはあれど、皇后には至らさりき、皇族以外にして皇后に立ち給ひたるは、此光明皇后を以て嚆矢とはするなり、是れ偏へに父不比等の功に依れりとなん。

東三條院と申すは御名を詮子と云ひ、關白藤原兼家の女なり、圓融天皇の女御となり、寵幸を得て皇子懷仁親王を產み給ひけり、之れを一條天皇となす、天皇位に即かせ給ふに及び、尊びて皇太后とぞ稱へまつりける、正曆二年圓融法皇の崩御あらせ給ふに及び、髮を削りて東三條院と號し給ひぬ、女院は此に始まるとぞ申しつ。

（十一）采女說恕　蚊屋勤儉

葛城王の陸奧に下り給ひけるとき、元の采女附き隨ひ參らせける、國司待遇の道を知らず、兎角に無禮の振舞のみなしければ、王深く心に憤ふり給ひ、押へんとすれば、するほど押へがたく、今や斯うよと見えさせ給ひにけれは、采女這は由々しき御大事ぞと見て取り、水と盃とを捧けつゝ、

　あさか山かげさへ見ゆる山の井の
　　あさきこゝろをわがもたなくに

と詠みければ、王其心を察して怒を忍び給ひ、事なく收まりける、後ち都に歸り給ひ、姓を賜はりて橘諸兄と申され、聖武、孝謙の二朝に事へて官は左大臣に陞り、位は正一位を極め玉へるは此王にて在はしましけるなり。

蚊屋采女と云ふは吉備の人なりけり、舒明天皇の采女

にてありけるが、才辯明かにして忠義の心極めて深く、天皇御あやまちあれば憚かる所なく諫めまつりぬ、左れは天皇の寵幸を蒙りて蚊屋皇子を產みまつりけれとも、身をへりくだりて少しも驕りたかぶるとなかりき、天皇崩御あらせ給ひて後ち皇極、孝德の二朝を歴て齊明天皇の御宇に至るまで尙ほ采女の列にあり、天皇土木を好ませ給ひ、丙辰の歳飛鳥岡に岡本宮を造り給ひ又田身嶺に兩槻、吉野の二宮を造り給ひ、香山の西より石上山に至るまで渠を鑿ち、船二百艘をもて山石を搬び、兩槻宮の東に石垣を築かせ給ひける、采女深く之れを憂ひて天皇を諫めまつりけるやう、古の聖王は民の心をもて心となし、茅をもて屋を葺き、土をもて階を造り給ひ、少しも奢り給へるとなかりければ、民皆其德を慕ひ、其仁に浴せざるはあらざりき、今君大に土木を好ませ給ひて、荐りに宮殿を造らせ給ひければ、其費誠に貲りかたく、人々愁に沈み、國々貢を怠り候ひぬ、今にして御心を改めさせ給はずんば其禍測りかたく候はんと憚かる色なく申しければ、天皇實にもと覺り給ひて其れより後ちは痛く儉素を尙び給ひて、只管政務に御心を勞し給ひきとなん。



(十二) 有智獻詩 紀氏題句

有智子內親王と申すは嵯峨天皇の皇女にて在はしまし御母を交野女王と申して、深く學事を好ませ給ひ、頗ふる和漢の史書に涉獵し給ひ、兼ねて詩文を善くし給ひぬ、弘仁元年內親王御年十七にして加茂の齋とならせ給ふ、時に平城上皇寵妃藥子の言に惑ひて、竊かに異圖を懷かせ給ひけるにぞ、天皇其が御心の和らがんとを禱らしめんとて扨てこそ此仰せの下りけるなれ、齋院を置かるゝと此に始まるとぞ聞ゆ、十四年二月天

皇内親王の山荘に幸し給ひ、文人に命して詩を賦さしめ給ひける、内親王韻を探りて堵光行蒼の四字を得給ひければ、即がて筆を執りて斯くぞ詠し給ふ、

寂寂幽荘水樹裏。仙輿一降一池塘。棲林孤鳥識春澤。隱澗寒花見日光。泉聲近報初雷響。山色高晴喜雨行。從此更知恩顧渥。生涯何以答穹蒼。

巫蒼宛がら唐賢應制が作を見るが如く、雨聯特に優くれて見えける、天皇御覽あらせて大に賞讃あらせ給ひ、位三品を授け給ひ、又御製の詩を書して之れを賜ひける。

内侍紀氏は貫之の女なり、父に似て和歌の道に秀てければ古今六帖と云ふ書を作りぬ、之れを紀氏六帖とも云ふなり、天暦年間淸凉殿の御前なる梅の樹枯れたりければ、村上天皇之れを惜ませ給ひ、詔して其代りとなるへき樹を索めさせ給ひける、會々西の京に色濃く咲きたる樹のありければ、詔を傳へて堀り取りけるに、此家のあるじの女、其梅の樹に之れを結ひつけて参らせ玉へとて、何か書きたるものを差出しければ、人々仔細あるとにやと思ひて、彼の結ひつけたる物を天皇の御覽に供へまつりける、天皇叡覽あらせけるに、

勅なればいともかしこし鶯の
　宿はと問はゞいかゞこたへん

と書きつけたりければ、あやしく思召されて何者の家ぞと尋ねさせ給ひけるまゝ、貫之のぬしの女の住む所にこそ候へと申しければ、天皇即がて彼の樹をば返へし遣はし給ひにける。

（十三）紀女想夫　乘女思父

大和の國に紀有常と云ふものありけり、其女は心さま最と優さしきものなりけるが、父母は既に身まかりて、頼りに思ふは唯夫のみなるに、其行ひ兎角に修まらず、河内の國に相知れる女ありて屢々其が許へ通ひける、女心に淺ましくは思ひけるものから、或は嫉妬とや思はれんと、深く愼みて色にも言葉にも顯はさず、夫の河内に行かんとするごとに其が言ふまゝにして出てし遣りければ、夫は却つて女の嫉み心のなきを怪しみ 若

しや我が留守がちなるを幸ひ、あだし男に身を任せるにはあらずやと思ひければ、月の面白かりける夜、是れより河内へ行くと言ひ做して我家を立ち出で、前栽の中に隱くれて竊かに容子如何にと窺ひ居ける、河內に行く途中に立田山と云ふがありて、其頃夜な〳〵惡漢ども出て丶路人を惱ます由の噂ありければ、女痛く夫の身の上を案し煩ひ、夜ふくるまで琴かき鳴らしつ丶打嘆きてありけるが、頓て障子を押明けゝれば、前栽に隱くれ居る夫、扨ては何處にや行くらんかと眸を凝らして見てあれは、女は傾ふく月影を見やりつゝ

風ふけはおきつしらなみたつた山
　夜半にや君がひとりこゆらん

と詠み、はたと障子をたて切りて寢にけれは、之れを聞きたる夫、我身を無情とも思はで斯ばかり深く案し呉れけるか、去りとも知らで其が心を疑ひたるこそ返す〳〵も鈍ましけれとて、其れよりはふつに心を改め、絕えて外へは罷らすなりけりとなん。

土佐の國土佐の郡に兼女と呼ふ女ありけり、母は早く身まかり、姉は他に歸きしかば、唯父と二人して暮らしぬ、家貧しければ疊表を織るを業としける、兼女老いたる父の家業の爲めに、少しも心を安んずるとなきを嘆き、常に勉めて其業を助け居たりけるが、父性質酒を嗜みければ、其織りたる疊表を市に鬻くごとに、必らず酒を買ひ、肴など調へ來りて進めける、斯くて寒暑の用意まて至らぬ限なく、日々の家業を給れば或は物語本を讀み、或は草花など瓶に挿して只管父の心を慰めける、或る年秋の夜に虫の聲を聞きて痛く心を動かし、

母もなき己れに聞けとや秋のむし
　て丶いとしとは同じおもひよ

とぞ口吟みぬ、てゝとは父のことにて、蟲の啼く聲のて丶いとしと云ふが如くに聞えけるまゝ斯くは詠み出てけるにて、兼女別に和歌の道を學びたるとにはあらねも、孝順の志極めて厚かりければ、口より出でし言葉も自から親を思ふの歌とはなりけるなり、斯かるめでたき女なりければ領主より銀を與へて其孝心を賞しけりとぞ。

文苑

やどり木

水橋康子

橋の際の青柳二本三本、砂立程の風もなく、どこやらの御本尊様、御開帳の立札新らし、甍前のはら〱雨に用心し過て、高下駄蛇の目、びんの毛一すじみだれても氣にする年頃の、裁縫のかへりか五六人、背の高きひくき皆あしだを氣にしてはづかしげなる内に、もつて生れし氣さく者の輕口、於早と云年がさの拾九位のが、ほんに柳谷の觀音様とやら、何年ぶりとかでの御出開帳が、大層にぎやかだと昨日の新聞に御坐んしたが、調度好時候故其内に皆さん御一所に參りませうか、其時此間お揃に買た根掛を掛ませうといへば、お早さんまげは島田なのいてうがへしの方が私しや善、着物は二枚か一枚かど、はしからも後からも好勝手な注文、どうやらこうやら極つきて、そんならきつときつとよと、横町に一人二人づゝ、わかるゝ度のにぎやかさ、どうぞわたいも柳谷の觀音さんなら久しぶりで、お參りがしたうおますよつて一所に連ていんでおくれやすと、別ざわに靜に賴むは十七八の色白、京都言葉の優敷取なし姿もきやしやな、お雛様との陰口同友僊のしとねならべても、お師匠様が借家の庭のぼけにまぢるかいとうなり、

なき父親がかたみの墨色、なつかしき門札も一也といふ姉婿の今は主にて姉の家ながらも、曉子はこと腹のいやしいうまれ、今は父様も御出なく、まして此家に生れぬ身の、姉様ありと云事も引取るゝ迄露志らず、母一人子一人父親には時々逢ふものと、子供心に思ていた程ゆへ、其母さへなき今は便りにするは姉夫婦のみと、したへど何故か姉の憎みのつよさよ、母こそ違へ父様には同じ子なるに、曉の母様が二度目におなをりなされてから、姉様のおやせが目に立て御可哀想だつたと、いつもあの否なお婆さんが、たしか姉様の乳母やだつ

たとかいふがきては、常々兄様にお咄をすれど、あのお優しかつた母様がなんて其様な事を遊ばす物か、あの婆やがきつと悪ちゑをつけるので、私迄も此様にお憎なさるのであらう、今も今裁縫のお友達と御開帳へ参り度といふたら、御返事もなさらずやがて皆さんとなんてうそばかり、兄さんと御出なら何もふいてうしなくても善じや無かと、まあどうだろうどうか遊ばしてのや知らんと、曉子は口の内、案事ながら今日縫上りし義兄の袷、引殘しは無かとたゝみなをし糸屑とりて、姉様の御氣に召すか召さぬかと、何心なくきて茶の間のふすまに手をかくれば、内には又



しても姉の夫いびり、兄様も御可哀想なと罪と知りつつ聞耳立れば、あらう事か在まい事か二人の仲がよ過とやら何とやら、あれわたいの名ばかりいやはる、なんのなんの露兄様を、おやさしいとこそ思へおしたい申した覺は無に、それとも若や其様なそぶりにても見へたのであつたかしら、兄様こそ御氣の毒な、おつしやり様も有ろふにまあしどひ事、ああの様な事あゝ辛度と溜息、其まゝそつと掾傳たひ、書齋に入て机の前にどつかとすわれば、今迄こゝに一也はいたらしく、手あぶりに巻煙草のすひさし中ば殘りぬ、嫌や〳〵京へ歸度かへつたとて善事も無けれど、姉様の御不興想なお顔を

見ぬ丈がまし、いやなことと聞かぬ丈罪がなけれど、何と無此家をはなるゝも否な樣な心もち、じやとて決して〳〵姉樣のおつしやる樣な、淺ましい心ではなけれど、どうやら心殘のする樣なは、あゝ其ような事思もす舞をゝこわやのと、身ぶるひして机によりかゝれば、昨日さしあげし一輪ざしの牡丹ゆら〳〵と、花びらも匂もしほれぬ、あゝ此樣な胸苦しい想を此花びらに書付て、水にても流したら少しは氣も樂にならうか、よしや人には知られて優しいなぐさめは聞ず共、いく分か胸のかるくなろうと、二ひら三ひら書付て見てはじれて手にもみくだき、熱したるほうに當ては、はら〳〵とこぼれる溜涙ふきもせず、露を其まゝ机の上にいたづら書、何心なくぬぐをうと思て取しほぐ一枚めぐれは、花ちる夕、思みだれて、宿世の心苦敷、など書ちらして、曉、あかつきなどゝ我名をか、否曉といふ字をか筆のまゝに、かきて書て書ちらしあるに、あやしうも涙の目はかゝやきて、やがて後見返りつゝそとはうゑみ、すひ差の卷煙草、美しきひたえにしわよせつゝもくゆらして

見ぬ、一度二度は馬鹿な事をと笑つて一也も過しゝ物の、三度四度たび重なれば口ぎたなくも成、輕き下ゝの口よりついには近所の噂にも登る樣子、さえ〳〵せし此頃の空にも一家の眉はひそみ勝、私一人いなければと口に出していふ女も、ださぬ男も心には皆同じ思、何につけ女は口がしこうとも思切の惡ひ者、一也遊歩にとて或夕べ出しよりもどらずなりぬ、仲人の取なしも親類の仲裁もまとまらず、男として養子などにはなるまじき者、跡はいかようにも宜敷ようにとの言葉殘して、英國とやら何國やらへ二三年漫遊にとて出立せしとか、其樣子も人傳の好はわからず、さすがに姉も大切に思からのつのりし嫉妬なれ、かくなりては一層くるひて昨日も今日も起出ず、白湯もほしからぬか夜着引かぶりて、唯さめ〳〵と泣のみ成に、此頃すこし痩れたる顔の一しほやつれてすごきばかりなるに、さすがは親身つらくてもむごくても姉は姉、たつた一人の姉のこうなつたも許はといへば此曉よりと、お曉つくづく己が

初戀のみちかくて苦く戀の深さをしりて、名殘の春雨しと〳〵と降て靜なる夜、姉の枕上によりてさんげの涙に病人のはえ際しとゞぬらしつゝ、姉はん姉はんどうぞ聞ておくれやす、貴女がいゝやすようなわたひ貴女にたてなどつくなどゝ、其樣なこと夢にも思てはいまへんのへ、けれどなあんまり〳〵貴女がお可笑〳〵つていやはつた者故、そんならそ無に兄樣はわたひの事思つておくれやすのかと、まあな思つたのや、始めから何も有も知りもせんのやけれど、あまりなあおいゝやすよつてわたひだかて想かとも思升わな、皆わるいのはわたい一人や、如何にお優敷かて兄樣〳〵と、姉樣を袖にしたのが許のおこりなあ、好聞ておくれやす之柄貴女を退て、兄樣に直に者もいゝませぬよつてとうぞ早うようなつておくれやす、姉樣貴女にもしもの事が有つて見なはれ、廣い世の中にわたひ一人坊ちや、どうぞ早う好うなつておくれやす、其替きつと〳〵兄樣に御わびして、わたひが許の通にして見世ますぞへ、何のうそがわたひの一身掛ても仕て見せ升程にな、姉樣ゆるしてな、な、おくれやすのかわたひかなしひやらはつか敷やらて、何もいえやへむどうぞ察しておくれやすと、しほら敷心差姉の房やかな髮はゆらひて、やせし手の間よりほろ〳〵とこぼるゝ涙と共に我慢の角も取れぬ、曉ちやん〳〵もう是をいつておくれで無、皆私の思過しだつたのをゝ恐ろ敷、唯のせひても無皆な自分の心柄鬼を生だのだわね、思出してもぞつとする、はづかしいわ、ゆるしておくれよ今度のさわぎはみんな私の我儘柄だわ、すまなかつたのね曉ちやん、どうぞ今迄の事はわすれておくれ嘸つらかつたらう、是からは大事な〳〵妹にして力になるからよ、そうすれば父樣も御よろこびなすつて下さるだろうと、妹の手をしかと取れば、しつかりにぎり合て、二人さめ〴〵と泣のみ、今いふたことな兄樣にはわたひがきつとあやまり升よつて、心配仕なんなえ姉さんまあやつれた事と差のぞけば、顔をそむけてお曉の手を我手と共に胸にのせ、あの曉ちやんどうも躰の具合が違ふのよ、とことといふ程でも無のだけれどもしかするとあの……えもしか

て、そうや無のきつとそうやちやつと乳見せなはれ、何のはづか敷事が有升やろか、わたひ本間に嬉敷は、珍ら敷面やせの顔に紅さして、共に涙の目を見合せて二人は嬉し氣に笑ぬ、雨の後の青葉あしたの色はいかばかり新らしからむ、美く敷〱光は二人のひたひの上にかゞやきぬ、何處の國にか今宵旅人の夢さわぎては、何と無心うれしき思の胸にみつるならむ、其軒端にはよ新星の光望の色にかゞやくならんか。

若葉集

宮澤すみれ

○初音

うづきの十日頃より、鶯の聲をきゝぬ、竹村には次桃の木に、さてもこの鳥、日蓮上人の御使か、何ぞ其しらべの法華經に似たる、初め拙なかりし節今は漸うなれて、たくみなる事、ねたましき迄なり、傳へきく、某文學博士の君、病よろしからずして、海のほとりに高懐いよいよ深しと、君、生と死をおもひ給ふ折、珊々として此の鳥、靜かに來世の春風を送らざりしか、願ふは才高き君が手にうつしき、生と死の解釋きかまほしきかぎりになん。(四月十五日)

○山ざくら

都は葉櫻にくれゆく春を惜しみて墨堤のほとり、詩をおもふ人もあるべし、我が里、今や櫻のさかりにして茅屋の軒に淸楚を粧ふ一重咲、八重がやうなる濃婉みるによしなければ、これまたなか〱深きおもむきありて、天上の雲、其いろに匂ふらん。まして心ある人に見せしめなば、自然に醉ふて、春に醉ふて、過去未來彼が腦中に消へゆかん、さむれば果敢なしとのおもひや、我、いつまでも〱〱春のくれざらんをいのるなり。(廿二日)

○桃

千嬌を放ちて、流脂點々、小さき池の水また紅ならんとす、妍を爭ふ桃李は其下おのづから蹊をなすとかや、これは世に時めく女子の、才も姿も富も位もすぐれて、そがもとにひざまづく數多の男をひやゝかに見なして、

ひとり世にたかぶりたらんが如し、小町が霊のやどるとも見へてあさましきは、春の野に咲くこれなんめり。(廿五日)

〇高嶺の花

我が家のうしろにいとたかき峯ありこゝより越の國へ通ふべくや、二里三里のかなたなれど、花さくわしたは眼もはるゞとかすみ渉りて、よべば答へん風情なり、少し下りて白糸の瀧といへるが玉を吐きて、岩間にむせぶさま、峯にいかばかりの名花、あだなる世人に折らせじと幾條の注繩引はへて守るが如し、これは現實界、理想界、の間に立てる白糸の瀧、夢かあらぬか伏姫の八房につれられて、かの高き〳〵峯の奥に経よみ給ふやうおもはれしが。(廿七日)



〇やれ障子

幼なき子等が、いくさの真似事して、ひるの程破りし障子、母はいたくもこらしめしが、夜に入りて折しもいざよひ乳ふくませつ手枕なすあたり月はもれきたりて幽雅いはんかたなし、狭き一室にさながら良夜を恣にする如く、今やいねんとする幼きをいたきおこして、お月様がくゝといへど、晝の疲に、答はなく、再び夢にぞ入りにける。

我が五十年の旅路つきなんとする折、この幼きが生ひ

たちて、老いゆく母をこたびはいだきながさむか、可愛のものやと頬にふるれば、好夢乍ち破れけん また もや母がふところをさぐりぬ。

○釋　尊

御身王者の子にましまして、金銀財寶意の如く、美人嬖妾みこゝろのまゝなるらんを、何くるしみて深山に苦行を積み給へる、釋尊は世を厭ひて遁れ給ひしにはあらず、快樂を愛し、妻子を愛し、世上を愛する事の深きあまり、これが最後の別れ、即ち死てふものゝ一大苦痛なるを觀て、悟道の必要をみとめ給ひしならん、厭世の人、何ぞ死を恐れん、濃情の母と子、夫と妻、一たびは相別れざるべからず、家庭の樂を奪ひ去るものは死なり、乳房冷くなりて、猶これにすがる幼子、悲しからずや、あゝ我等此の深き〳〵愛より脱しゆく時、未來の光明をみとめ得て、莞爾として死に赴く事を得るや否や。

釋尊は萬人を救はんが爲、死の大問題にすべての快樂をすて給ひしときく、今の佛法を奉ずるもの、世をいとひて極樂往生の一日も早く遂げなんを欲す、かゝる人よ、よろしく珠數をすてゝ經世の道をはかれ、そこかましけれど北信の風習をいたく歎くまゝ此くはしるす。

○水　車

めぐる水車の傍はらに立ちて、水の行衛を見守れば、この主人と其一子、蝶の羽のおしろい施したらんやう、手足も髮も短かき着物の裾迄白く、立ち働くけなげさよ、ヘンレー何世の御幸を、さる詩の中によみしが、それさへうかびいでゝ、をかしき春の夕なりけり。

玉を碎く車の輪の音、水泡となりてとびゆくさま、小さき川の岸に、うすむらさきの菫さへにほひいでゝ、我も詩歌の中に立つやうおもひぬ。

無邪氣に車は廻轉なしつ、水はとこしへかけて澄むが詩人よあざむかるゝ勿れ、主人は慾つよき人にして、水車の傍はら高利貸を營むものなればなり。

○木　蓮

紫もよし、白もなほよし、木蓮さく垣根のもとに佇めば、春猶寂しき心地こそすれ、この花、死に因緣ありやとつく〴〵おもへば、幼き時いつも母に伴はれてゆき

し、我が寺、蓮花寺といへる裏の墓場に、これおびたゞしく咲けるをおもひおこしぬ、先入主とはおそろしきものなり、影の形に添ふ如く、見るたびにまづ墓を連想し、なほ死に及ぶ。木蓮には何の意味なきものを。（五月二日）

○土くれ

見ればけがらはしきこれ一塊の土、いさゝかもの丶用に立つべしとはおもはねど、農夫が耕す鍬のもとに、未來の希望深く根ざして、五穀となり、果實となり以て人生に供給する所多し、世の娘等よ、土塊とていやしめ給ふべからず、この下よりぞ黄金色の菜種花も咲きいで、蓮花草の紅なるもにほひいづれなれ、世の殿方よ、くろき土の底また春秋のなさけはあり、徒らに情を走らせて、再び「勝」が最後の悲慘をきたらしめ給はざらんを祈る。

○若葉

けふのそゞろごと、日記のうちよりとりいだして、若葉集と題す、蓋し春芒漸くやみて、綠初めてひとしからんの日近ければなり。其折やほとゝぎす血に叫び、梅の實青く木にみのらん、さてもいぶせき五月雨の空、今よりおもひやらるゝよ。

○赤き花

つゝじ、水落ち來る巖間に咲くはよろしけれど、廣き園生に我はがほなるが惡くゝ、まして其色、血を吐きしやうなるはなくもがな、又淺間しきは榴の花なり、小にしてあくまでも燃へたつ怖ろしきさまに見らるゝを、これが實の味、誰がつたへけん、人間の肉くふに等しとは、いよゝもの凄きかぎりになん、さはあれど若く美くしき人の襦袢の袖、緋なるは惡くからず、まして白き足のあたり、緋裏の裾より、こぼれて見ゆるけだしも赤なるはよろし、少し年たけたるがこれ見へがくれなる、心迄あだ〳〵しきやうおもはれて淺間し。

○むらさき

祝儀の衣服にはこれ禁物とかや、「紫きや、こうとでおしだしや好いが、なぜか浮氣でさめやすい」。
これ紫に對して寃罪なり、滔々たる天下さめざる物い

くばくかある、紅とてしかり、白とて然り、ひとりむらさきに對してのみ世人が迷をいだくをかしからずや、春の日ながき藤浪の花、野邊のすみれ、ひとしうこのいろなるを、ましてそのかみの女文豪、紫のおもとが、靈妙なる筆もてゑがきいだしゝ佳人の名、こは源氏の君が一代を通しての愛變らざる女性なりき、紫、もし靈あらば寃罪のたゞならぬをやなげくらん。

○小說に於ける女の名

今は昔、我が親しかりつる友、某、茗溪のほとりなる學びやにありて、同室の人といへるが名は類子、この折、讀賣紙上に紅葉氏が多情多恨のつゞきものありて其ないさん日に物珍らしかりしほどなれば、其名をよぶ毎にいつも聯想なしてと、かの友我へものがたりぬ。露伴氏がお妙、こもまだ我が知れる友の、しかも美人、たれになつる操としもなけれど廿を二つ四つこして、猶ひとりずみなりき、今はいづこに住むらん、この人の得意は書なりけり。我が方にて去年かゝへし兒守が名はおりき、新開の菊の井を、おもひいだしてといふも大方それはいづこと問はせらるべし、覺惡き世の人や、にごり江の女とはや忘れ給ひしか、又この春新たに來りしはお町うつくしき名と我のいへば、いぶかしげにきゝしも道理なり、あれは萬づの派手好みの奧樣、こんなるいなかうどのくらべものにはならねど町や町やと使ふ毎に、あやしう我が胸はさはぶれぬ。其外知れる人〴〵の中、お菜あり、お宮あり、お藤など、數ふれば限りなし、あとは省きつ。

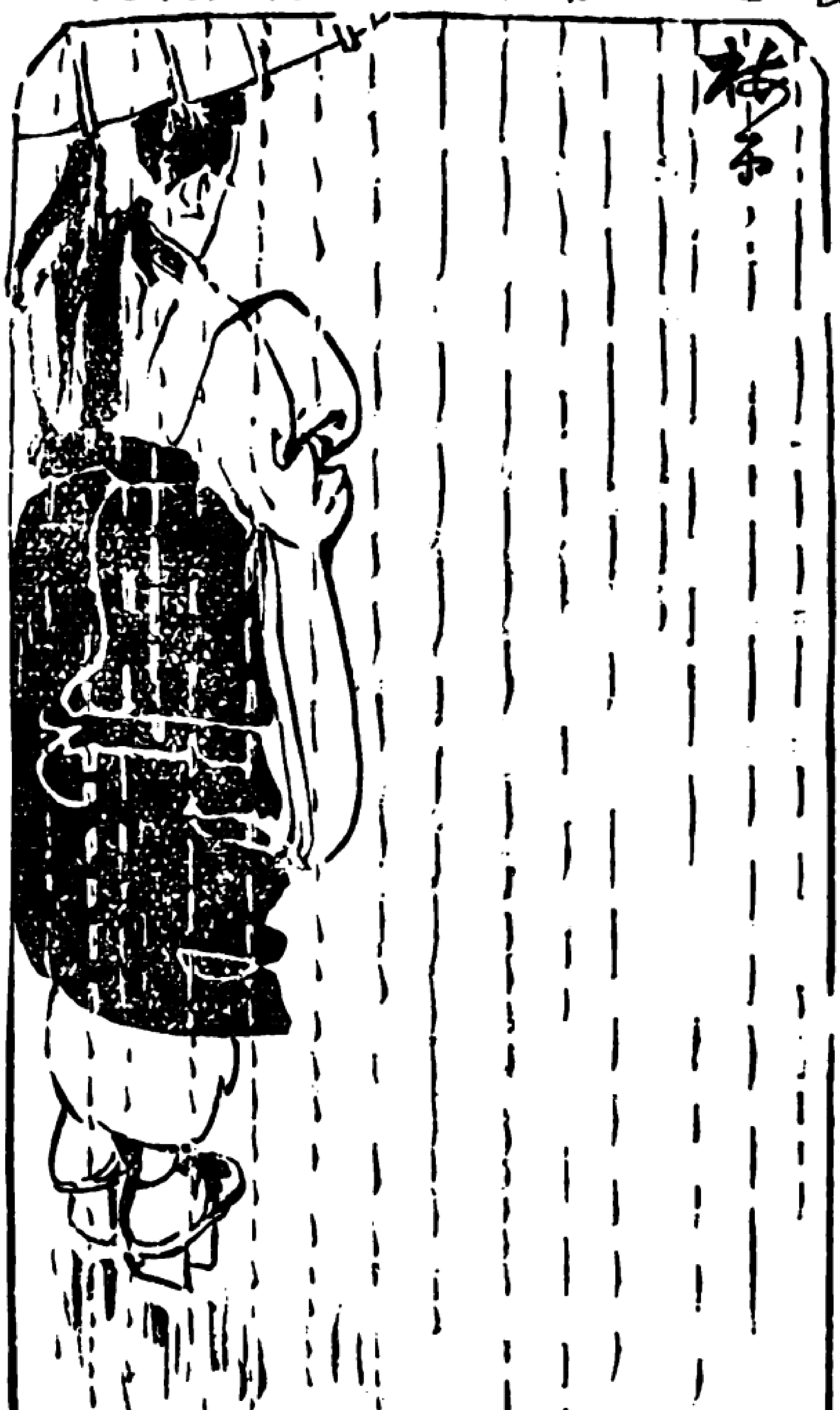
馬車のうち

印東昌綱

山の上なる觀音堂に詣て、山の下なる安房物產展覽會を見て、歸路につかむとせしに、折よくも館山に歸る乘合馬車の發車する折とて、友と我とは是に打乘りぬ。友といふは、山本村の人、我とは親しき中らひの、今日しも我旅宿をとひきて、相共に半日を逍遙しけるなり。

恰かも此處は那古町の中央にして、旅人宿、壽司屋、漬

物屋、醤麦屋、猶つゞきては醫者屋、呉服屋、紙屋、菓子屋など、賑はしき軒の並びゐつ。されば御者台にては、肩なる喇叭を吹きならすと共に、是等の家々より、もし乗る人の出るなきかと、しきりに見廻すものゝ如く、車掌は車掌にて、後ろになりし人々を乗り給へのり給へと手招きしながら、此町を出てゆきぬ。



我等の外の乗合は都合三人にて、隣れるは三十近き商人躰、前なるは中學校生徒、及びそが連れなる、紺絣に兵子帯扮装の男なり、前なる人を見れば、足の下に大きなる風呂敷包を置き、絶えずそれに手をあて、又其重みを計るなど、甚だ氣にするげなるに、我は厚かましくも其何なるかを問ひたりしに、氷なりと答へぬ。きけば館山の人にて、主人の妻の、丹毒より脳膜炎を引き起し、いよ／＼打續ける熱に、日々の氷を北條町より買ひゐしかど、八幡の祭禮もすみしと、且は昨日今日の涼しきとにて、最早跡仕入をせずとの事、いたく困じたりし折から那古觀音は開帳中にて、こゝにはと聞きしかば、急ぎ來れるなりとの委しき話なり。誠に此人の氣にせしもことわりにて、一分は一分より、徒らに消えゆくべき、はかなき運命をもてる氷なればなりき。我は此人の話をきゝて、少なからず同情を表したり。唯見る三貫目の氷包よ、内にこもれる其賣

又大ならずとせむや。かくも短かき時、はかなき運命に、此世を縛られたる氷そのものは、今や限なき運命を祈るべき、一家の人々にまたるゝなり。かくて其病者の枕べにはこばれ、熱にあつき額に、はた胸にのせられて、宿世のさだめを果さずなり。熱に乾ける人の口に葬むられて、あゝといふかすかなる息に、此世を立さるなり。永き命の人の上に祈りつゝなど、はかなき想像をたどりめぐらす隙に、いつしか靡きくるは、かの紺紹がふかす烟草なり。しかも丁年未滿の中學生にもその一本を分ちて、マッチをば手渡しするに、中學生は我方を見やりつゝ受取たりしも、遂に火はつけずして、其儘に弄ぐりはじめたり。何となう氣の咎むるなるべし。されどかく我等の前をつゝしむ丈、此馬車に乗らぬ前、又こゝをおりて後は、より多く且、より得意に吸ひ歩くならむか。

馬車は那古の町外れたる、藁葺の家の前にとまりぬ。こゝは名物の木の葉煎餅を賣る家にて、七十路近き老翁の、丹誠に燒きたるが、こゝらのみならず、都人の口にもよく叶ひて、夏はことに賑ひつゝ、常に賣切るゝ事の多ければ、我は今日の家づとを行きがけに頼み置つるるなり。二十才ほどの娘、窓のもとによりきて、やさしき世事と共に、袋を我手に渡すさま、野に生ふる姫百合のそれにも似かよひて、いとしとやかなり。我は此瞬間、あやしき感にうたるゝと同時に、馬車はゆるきそめつ。我は心に祈りたりき。かくてかの娘の今日迄も清く美はしき少女にして、今日より後もいよ〳〵清く生ひたゝむ事を、我は心に祈りたりき。さはいへ、此望は既に消されてありしかもしれず。問ひたきは、彼が今日迄のうへ、探りたきは老翁の心のそこ、彼も亦世の常のきたなき、心もてる親のたぐひにや、もしもかの少女にして、我思のごと、身も心も清くして、今日より後も更に美くしう、打つときゆかばいかに、さては我思かなたと通ひて、相共に百年を契るべき、夢の世のもしもありたらむにはいかに、さらば我はかの藁葺の家の、若き主人とはよばるゝなり。かの老翁ぞ、我爲の舅なる。その時は老翁が書くべき袋の木の葉の畫は、我まづかき

てやらまし。面白き歌をも添へて、かきてやらまし。又かの老翁が餘命を何として慰めむ。はたやさしき人の心を、いかにしてむかへむ。彼は雅びなる道を好めるや。彼が家の垣ねにはうばらの花などはなかりしや。もしもうばらの咲きみだるありて、今受取し紙づゝみの、その花にてありしならば、いなうばらならずとも、百合の花にてもよし。わがこのめる菫の花にてもあらむには、いよ〳〵をかしかるべきをと、はては我身の空想中の空想にかられゆくを知らず、心づけばかた〳〵と、馬車はかたつきゆくなる口附もて、わが顔を見かへしたりぬ。

折しも御者よりは、しきりに我等にむけて話しかけつ。そは曾て御者が逗子と葉山との間にて、此業をとりゐし頃の事。日蔭の茶や近くに、方々には娘の煙草店を出し、方かたには律義なる老翁の、草鞋を製りゐるさやかなる家ありき。娘といふは、その老翁の一人子にして、此娘二とせ餘りを都に屋敷奉公せしほどありて、萬にしとやかなる起居ふるまひなりき。ある夏のあした、長者園よりこの馬車を買切の紳士某其娘をふとながめ入りつゝ、過ぎゆきたりしが、引續き兩三度も逗子に足を運びつ、ある意味のもとに都につれ行くべく、樣々に說きいれしめしかど、かゝる片田舍に、かゝるなりはひこそ營なめ、いまだ娘を黃金にかへむなど、淺はかなる根性は御座らぬと、頑として動かざりし老翁が返答は、よそめにも實に氣持よく、かの娘もいたく打腹立ち、それより久しき間親類の伯母の許にいたりて、人の往來を避けゐたり。今も其娘のかしこの店にありやなしやなど、ゆかしがりて語り終へぬ。げにも御者の人摺れたる、語る詞の順序よくとゝのひたる逗子をふみ荒したる以前は、いづこの道をか毀しゐたりけむ。思ひもよらぬ物語は、かゝる人よりぞ、めくり〳〵て廣がりゆくめる。

かくも得意なる話に身の入りし御者は、時々思ひ出したるやうに、容赦なく馬を鞭うち、又前よりくる荷車引の小僧に小言を言ひつゝ、おくれはせに喇叭を吹きたつるなりき。

さて此御者が服裝、いかにと見れば、垢つきし縞の折襟シヤツに、黒き羅紗の洋袴をつけ、白足袋に雪踏はき、かしらには麥藁帽子の鉢卷に、既に裏かへしの功名をあらはしゝやうなるをかぶりつ。車掌もこれとほゞ同一なる姿にて、異なる所は古びたれども、これは正しく靴をはきゐたり。人込の中道の曲り角にては、絶えず飛おりて馬のさきを掃ひ、時としては、其口をとりゆく等、なか〳〵世話しき役廻の、年寄にては壹もなしがたかるべし。

かゝるほどに、湊川もいつしかすぎ、八幡の社前に至りぬ。こゝにてかの二人連れはおり出づ。松蔭にかけ入りし二人よ、烟草の火は早二人の間につけられて、かの中學生も、口うごめかせつゝ、いと大樣に歩みゆくなるべし。そが家の門にかゝる迄は。

馬車の内は三人となりぬ。氷にのみ屈托げなりし人も、御者が物語に打まぎれて、暫し忘れたるものゝ如く、されど時々馬車の窓より頸をちゞめては、家の内の時計をながめゆきつ。

あるは道ゆく車夫に聲をかけ、あるは立場の女、下宿やの主人にまでも、愛敬をふりまきゆく御者は、今や通りかゝりし下駄やの店に、鼻緒ゆひつけつゝありし内儀にも、同樣一言を殘しゆきぬ。ゆきすぎて我にいふやう、かの家は、旦那も御かみさむもかよはくて、東京より養生旁々に來りしなりと。そは今説明をうくる迄もなく、かしこは我がしたしき家なるを、さはれ我は思ひぬ。かゝる職業のかゝる里にありては、いつこ迄も、愛敬をこぼし、多く得意を作りおく事に、拔目なく勤めつゝある事を。

松原を越え、牛肉屋の前を過れば、「今日肉あり升」の札はかゝりゐつ。さきのほど、那古の山より見渡しゝ時、軍艦二艘の入りをりしが さては早くも例によりて、居りたるかと思ひつゝゆくほどに、四つ角を轉へ とおるゝ、荷馬車町へとわかる人力車の、これかれにぎはしき境を横ぎりて、そこより半町たらずの、わが旅宿の門に着きぬ。

初夏の景物

小舟生

新樹の林に、杜鵑の鳴く音をまち、谷間の溪流に、仙士の風ある、石鷄の聲をたづね、夜山寺を訪づる僧かと覺ゆる、水鷄の叩くにまくらを欹て、さゝらく野川の小草を分けて、小さき螢を探すなど、いづれか初夏のたのしみならざる、いでや乙女子たち、吾しばし其案内をせん。

◎杜鵑、花落ち、水流れ、鳥かえりて蝶去る、この際ひとり若葉の山薫風を送る、あゝ此處に遊びて、去年の杜鵑を待たんか、杜鵑はその姿、殊によく鷹に似たれども、實は啄木鳥と同類に屬す、秋よりの半歳は、遠く支那大陸に渡りて棲み、初夏より我が新樹の山に來て亂鳴す。一聲は、月がないたかほとゝぎす。ほとゝぎす鳴きつる方を眺むれば、たゞ有明の月ぞ殘れる。如何に人々に待たるゝ事よ、詩に曰ふ、孫枝滴血一聲々、花落ちて年々聞くに忍びず、月を帶んで鳴く勿れ江畔の樹、酒醒めて遊子離亭に在りと、噫之宛然畫中の景にあらずや、杜鵑は異名を子規と呼び、杜宇と呼び、蜀魂と云ひ、帝恨と云ひ、不如歸と稱し、思歸鳥と稱すれども、只郭公は杜鵑のことにあらず。

◎螢、夕涼風を追ふて、河畔を逍えば、螢火暗を縫ふて低く飛ぶ、彼胸背紅を呈して、形優に、擧止極めて都雅なれば紗綱に入れて之を見るべし、今の時代には、車胤の古態を學ぶべき必要なけれども、窓につるして、聖代の餘德を思ふべきなり、大形は、本邦產最大の種屬にして、姬螢は極めて小螢なる種類なり、共に其雄虫は、腹端の白色部全躰に光り、雌の赤條部は、光殊に微弱なり、その幼虫は河畔の水草の根部に棲息すべしと云ふ。

◎河鹿、霞消えて新樹萌え、蔭は白晝すら猶暗し、たゞ下逝く水の面白さ、色は青葉を染めて、目も覺めんばかり、聲は珊々として、耳も澄めり、急流の岩にせかれ、玉を八方に散らす、この岩の下、彼の枯葉の蔭、金丸盤上を走るが如き妙音を、傳ふるものを河鹿となす、彼はその躰、酷き迄痩せたる一種の蛙にして、その指頭には、丸き吸盤あり、探し求めて家に歸り、閑庭の泉水に放ち

なば、宵々毎に、その妙音に接するを得ん。

◎水鷄、誰か訪ふらん夜更けし頃、人なき山寺の戸を叩くこと頻りなり、あゝこれ、水鷄の叩くなるを知らずや、水鷄は雞に似て躰黒く、足殊に長し、常に好んで溪流の邊に棲み、魚虫を求めて食となす、その啼くや、恰も人の來りて、戸を叩くものゝ如し。

◎梅雨、節の正に暑に向はんとするや、天はまづ多量なる雨を下して、地熱の急昇を防ぐ、梅子漸く熟せんとし、茲に梅雨あり、漠々たる雲は地をこめ、濛々たる雨は空を閉ざす、燕子濡れて飛び、綠樹悄然として立つ、この際家居して書を讀み、漸く飽いて茶を入るゝも、又一の淸興ならずや。

◎卯の花、桃花の妖艶何處に求めん、しかも素々たるの風姿、遙に凡を拔くにあらずや、垣根のあたり山の麓、降る五月雨に色香失せず、凛として一人さかゆ、一枝を手折つて床間に挿まば、自ら仙士の風あつて存す、これ卯の花の長所なりとす。

机上の塵

山口すみ子

○戀しきもの

手を携へて故鄕を立出で、塵埃深き都の裡にさすらひの身となりしより、朝た夕に袂をつらね手を引き合ひて、同じ心に故山を忍び、同じ心に業をはげみて、水魚の交も啻ならざりし戀しの君、君病めは我憂ひ、我病めは君悲しみて、かたみに慰めあふ言の葉に、仇浪狂ふ世の中も、我等の身には幸深かりき。無言のまゝほゝゑみて情の露のしたゝるばかりのまなざしを眺めては、慈愛深き母のやさしき言葉なきも悔しとせず。吹く風つよく窓をうち、夕べ淋しき秋の長夜も、やさしき君の慰撫にあいては、うからまどゐしてお笑しき夜物語の樂しみも、我胸には浮ばざるなり。白雪深く庭を埋め隙漏る風肌をつんざく冬の夜も、君とし あれば薄夜着も寒しとせず、絹布の中に身を横たへて猶寒さをうつたふるやからを笑ひき。その君と我、今は情なくもところを異にして同じ月に恨みを吐く、ああ戀しとも戀

しき。

○見苦しきもの

したゝるばかり肉つきて、脊のびしても見上ぐべき女の、鼻の上のみ殊更に白うぬり立てゝ、そり身になりてあるきたる。海老茶の袴奥ゆかしうみめよき女學生の、傍若無人に英語もて聲高に云ひのゝしりたる。目もあやなるばかり美しき衣重ね、何處の令孃にやと人目を引く氣高き人の、はしたなふ物いひたる。紋付の衣に白の半襟正しう、奥樣らしき人のさしひかへ居べきに、大きう口あきて喋々と人の上あしざまにのゝしるさま。あるはつゝしむべき席にて酒臭き息吐きたるなど。かゝるは憎うさへ覺へらるゝに、記し行かば猶數限りなきこそうたてけれ。

○落花

並木松に日は落ちて田野は靜に夕べの色に化せられ、村の家々朧になり行くたそがれどき、殘んの白雪また消へやらぬ深山路いそぐ我袖に、雪かあらぬかはらはらと散り亂るは何、ふくやかなる香さへあるに薄紅の色を含めるゆかしさ、詩人ならぬ身も空しう過つるに忍びざりき。

決別の悲しき前夜朧の月の影ふみて、つれなき運命、はかなき夢のあとひとつ、名殘惜しさに、なつかしき花の木かげに佇めば、さらぬも露けき四ツの袖に、雪かとばかり散りくる櫻花、いさぎよき己が心に引くらべ、未練なる我等をはげましけるかと、あはれに見上ぐる顏にはらはらと、又一しきり音たてゝ、散りくる梢の花吹雪。

花一輪

有賀晴子

家をめぐれる土塀長く、門より見ゆる白壁の土藏七つ八つ、背戸に廻れば猶これ程はありとかや、それに積みたる寶幾萬今の村長樣が親の代よりいくその小作が生血しぼりてと、人の窓を敷ふる果報拙き者が、とかくは人をおとしめたく怪物邸とて足踏み入れねば時の流すがまゝに荒されて、小草ぞ門邊に茂くなりぬる。

事の由は裏の井戸にあり、掛けたるつるべ繩朽ちて大蛇のやうなるも心地惡けれど、糠雨降りしきる夜など、其邊に物凄き女の笑聲聞ゆるや、忽ちつかみ懸る樣なる屋鳴震動、さればぞ作男も居付かぬぞかし、お寺の山の鐘に響く頃とよ、納戸の板戸するくと明きて、人鬼が居間の障子にさらくッと亂れ髮の音、あとは恐ろし。

誠因果は爭はれぬもの、先代の某が大判小判數多埋め置きしと云ふかしこの井戸、其黄金の氣に引き入られて、奥樣深き恨をかの底に留め玉ひしが、そもく目に見えたる神の御罰と、井戸端の柳いと恐しうぞ傳へられける。

世によしと云はるゝ後添は稀なりとや、まして卑しき勤したる弱みには、夫が吝なるも小作等につれなきも、萬わが心よりと傳へられて、鬼と呼はるゝも心細きお小夜が身。

草深き山里の人氣無き怪物邸に何の未練は殘らねど、我が惡魔か人鬼か世にも人にも思ひ知らせむのみの願ひ、踊る古巣に事は缺かずと、思ひ定めは定めても、繁き言草苅りもあへぬに、又萌え出づるそしり草、身一つに生ふるもわびしう、日々に衰へ行くやさ姿、生きては居れど幽靈とはおれかやと、垣間見たる若者恐ろしかりぬ。

房々としたる黑髮わびしげの櫛卷、鬢のおくれ毛前齒にかみて、夕暮ほの暗き椽の柱に身を寄せて待つにもあらぬ夫が歸り。

土塀のきわよりたそかれの色刷かれて、植込が中の大槐は魔王の立姿をなして大空に黑く、見上げ居る葉蔭よりひうくと舞ひ降りたる一つの蝶、黑を彩る黄色のあや、お小夜が撫肩に止れば、驚き拂ふ袂をくゞりて空に二度三度圓を描き、すと翅かはして又胸に。

拂へば上り打てば舞ひ戻る自在の翅、我手もどかしう草履引き懸けて追ひ行けは、高く低く垣根を越えて庭を出で、七戸前の土藏前に後にめぐりく、めぐりはてたる其所、朽ちたるながしの苔むしたる上にとまるかと見れば、なまぬるき風一しきり、吹き寄せらるゝ樣に

蝶は消えぬ、井戸の中の闇。

危きふちに手を懸けて覗き入るれば何所の光を受けてか、きら／＼と光る物、水か玉か星か人魂か、見るまにお小夜眉つり上げ、しうねき女、見よ／＼今そこにと身を踊らして、哀や水の面を亂して白百合の花一輪。

傍の柳に風颯々と音して、哀に物凄き夕べ／＼長き恨は此所に凝りてか、何かは知らず五色の尾引きたる燐の光二つ、追ひつ追はれつ狂ひもつれて、村長が菩提寺の方に飛ぶを折々見たりと、人より人に傳へられぬ。

新樹　（竹柏會當坐題詠）

庭みれは古葉こほれて若みとり
　はしる涼しきなつの夕かせ
　　　増山三雪子

ふきすさふ風に若葉の音もなく
　ゑつけき里の草のいほかな
　　　土田道一

水枝さす櫻かへてのわかみとり
　垂たるはかり涼しかりけり
　　　安藤菊子

軍歌子らうたひゆく川つゝみ
　つゝみの榎いかはしけれり
　　　早川喜隆

まろうとの深くめてたる石井戸も
　青葉の蔭にうつもれにけり
　　　小林廣子

のこりなく花ちりはてゝ峯も尾も
　青葉ゑけるみよしのゝやま
　　　又原保行

夏くれは若葉の櫻わかかへて
　色をましへて競ひ合にけり
　　　相澤求

花めてし春は蝴蝶のゆめと過て
　實をむすひたる庭の梅かえ
　　　板倉止子

蟬のなく聲も聞えす日もさゝす
　葉廣かしはのしける木蔭は
　　　遠藤千濱

盆栽の小さき植木わか葉しつ
　庭の大木といろをかはして
　　　小笠原政治

古すたれ影青々と見ゆるかな
　のきはの棕わかはしけりて
　　　井上公二

並松のたえまに見えし山さくら
　ひとつみとりになりし頃かな
　　　三宅貞子

木かくれの聖の庵にともす火の
　かけか青なり若葉すらしも
　　　石樽千亦

馬子唄のきゝゆく方もたそかれて
　青葉かくれに鈴の音きこゆ　小林恒雄

やたい店二つならへてうふすなの
　若葉のかけに媼かたりあふ　新井千潁

いつしかも、花は青葉になりにけり
　軈て紅葉にならんとすらん　松本文子

賤か屋のわらんしつるす窓先の
　をくらきまでに若葉茂れる　細川空亜

夏山の若葉を見れは年をへし
　老木ありとも思はさりけり　大野杰

茂りあふ木々の若葉にかくろひて
　庭のともし火あるかひもなし　石原米子

繁りあふ若葉かくれに聞ゆなり
　垣根かりこむ木はさみの音　菊忠雄

さきつ年雷おちて幹のなかは
　くたけし椎も若葉さしけり　澤弌

緑なす若葉のかけにやすらひて
　春のさかりを思ひやるかな　高見靈洽

とこしへに眠れる君はさめなくに
　墓原すへてあを葉してけり　笠原繁多雄

山のはの青葉の色やうつるらん
　みとりも深し谷かはのみつ　鳥山新一

うせし子の眠はさめす奥つきの
　かなめの垣根若葉志けりぬ　松井友子

庭の面の若葉のさくら若かへて
　色むつましく茂り合にけり　松守之雄

冬の中を旅に過して歸り見れは
　おとろくはかり若葉志けりぬ　北條數馬

青々と志ける若葉の下かけに
　むしろならへて遊ふをさな子　細越しな子

窓のへは若葉しけりて少女子の
　文よむ聲の凉しくもあるかな　齊藤逸三

花なりし野中の小森けふ見れは
　若葉かくれに鯉ののほり見ゆ　松山碩

學藝

日蝕と月蝕

女子高等師範教諭　岡田美津子

今度は、日蝕の話をする御約束をして置きました。之はなか〳〵興味のある話です。日蝕とは字にかいてある通り、日が隠れるので、今まで常とかはりなく照り輝やいてゐた日が、急に姿を隠して仕舞うて、世界が一時暗黒になるのです。隨分奇妙な事だと思へば思はれるのです。けれども、之には理屈があるので今ではモウ何年も以前から、何日の何時に日蝕が有るといふ事が分つてゐます。ところが昔は、御承知の通り學問が開けてゐませんから、天文の事なにかトント分らないで、御天道様は有り難いものだ、夜になると御月様が上る位の事を思うてゐるのに、不意に、その大切な御天道様が見えなくなるのですから、それはどれほど驚いたか知れません。何か凶事の知らせだとか、國の滅亡の前兆だとかいうて、心配したのです。殊に、インド人は、日がにはかに見えなくなるのは、大きな蛇が來て、太陽を呑まうとするのだと思うてゐるものですから、今でも日蝕の時にはその蛇を脅すのだというて、鐘を鳴らしたり、太鼓をたゝいたり、大聲を擧げたり、それは〳〵一方ならない騒ぎをするのです。それで日蝕が終つて、日が再び元のやうになると、かれらは天地もくだけさうな歡呼の聲を發して、互に太陽の無事を祝ふさうです。

之は未開野蠻の人達の事ですが、我々とても、只日蝕があつても驚かないといふだけではアンマリよくもない、その起こる理由を知らなければなりません。由て、これから以下に、分りやすく述べて見ませう。

まづ御承知の事かも知れませんが、太陽と地球と月との三つの關係を述べておく必要があります。

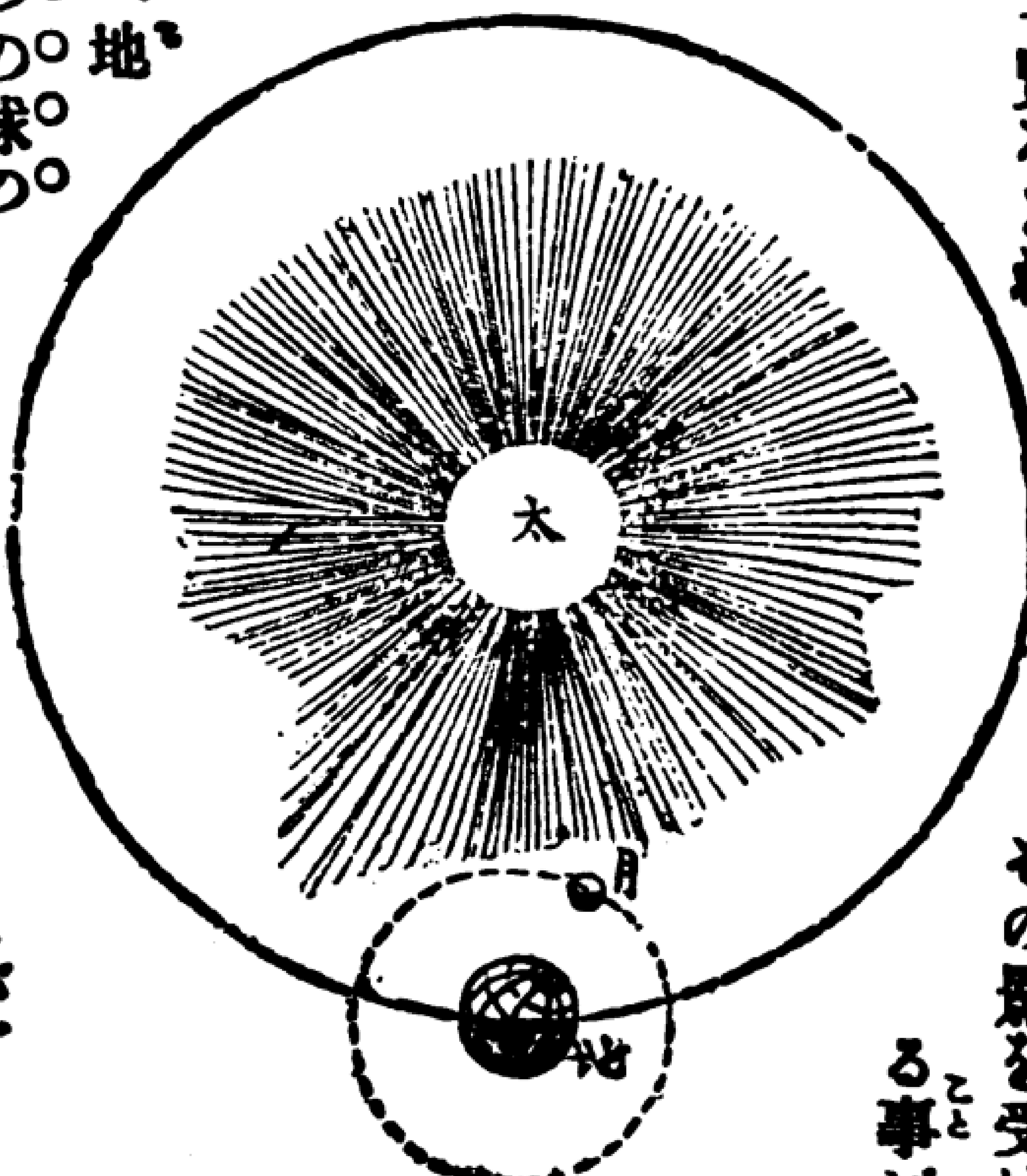
第一、太陽は、大きさからいへば、無論地球や月と比べものにならないほど大きな躰で、(地球の百二十萬倍

もある)月は、また小さい事は、地球の四十九分の一にしか當りません。

第二、太陽は、太陽系といふ一家の主人であつて、中央に控へてゐると、地球は、その周圍を回轉し、月は、また地球の周圍を回轉してゐます。圖を一覽なされば知れます

第三、地球も、月も、各暗黑な躰であつて、太陽の光を受けて始めて光を放つものであり。

そこで、月が地球の周圍をめぐつて行くうちには、月が地球と太陽との間に來ることがあります。(それは直きに想像がつきませう)もしその時に、地球と月と太陽との三躰の工合が、三つの球の中心を一の棒でさし貫いたやうな有様になると、その時にはどういふ事ができますか。太陽は、勿論、自分に面してゐる方の月の半面を照らしませう。而して、月の後ろには月自身の影が出來ませう。圓い球を燈火の下に置けば、その後に、圓錐狀の陰影の出來るのと同理です。すると丁度月の眞後にゐる地球はどうなるかといふと、地球と月との距離の工合で、月の影が、地球の表面の一部に觸れるやうになるので、(次の圖參照)



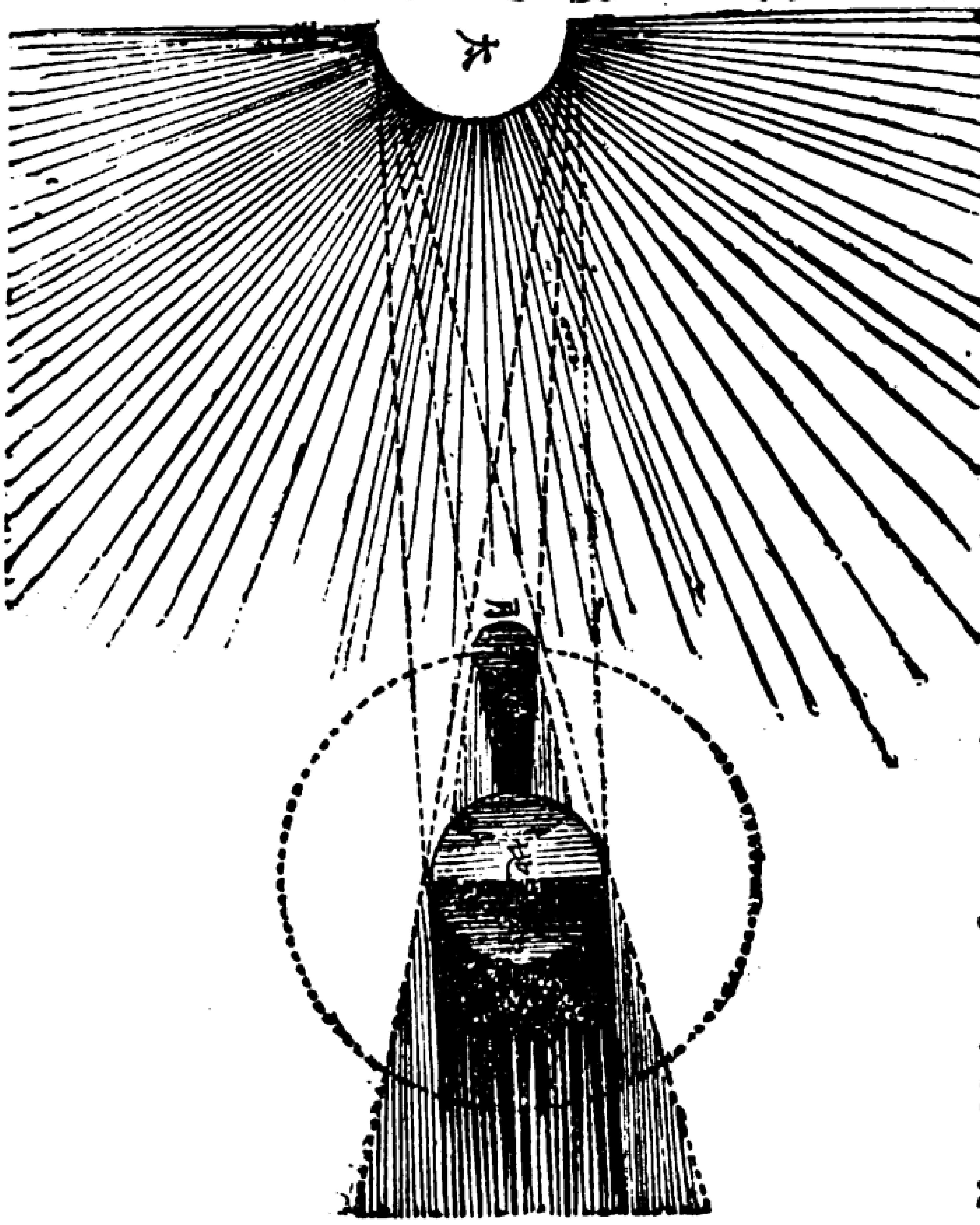
その影を受けた地球の部分は、太陽の光を受ける事が出來ないから、其處に居る人は、一時日光を全く見ることが出來なくなるので、即之が日蝕です。

しかし、月の大きさが小さいから、その陰影も、從つてさう大きくなりません。で、地球の大部分をその陰影で被ふことが出來ないから、ごく一部分の人―が日蝕を見ることができません。

日蝕は、一口に日蝕といふのみでなく、種類があります今前項に申した、月の陰影が地球に落ちて、その爲に、その影の中に入つた人は、全く太陽を見ることが出來ないやうなのを日蝕皆既と申します。此の時分に、地球に

落つる月の影の直徑は平均百五十哩位て、皆既の間は長くて七分ばかりてす。

日蝕皆既も、面白う御座いますが、金環蝕といふのも面白い。之もやはり月は、地球と太陽との間に來るのてすが、月の位置の故て、地球から見ると、月の大きさが、太陽の大きさよりも、丁度一寸ばかり小さく見えるので即ち前の日蝕皆既とはちがつて、太陽が環形に見えるのてす。どうして時によつて金環蝕になるかといふことは、少し複雜な理屈になりますから、こゝては述べますまい。



それから、今度は、月が正しく地球と太陽との間に來ない時、即ちすこし月の位置が中心を外れてゐる時には太陽は、一部分月に蔽はれるので、地球からは太陽の蔽はれない部分だけが見えます。之を小蝕と申します。

日蝕のうちては、皆既のが一番物凄い、壯嚴な感覺を人に起こさせるものです。つひ明治廿九年にも東京近傍が皆既に近かつた事がありました。その時の樣を、目擊なすつた方もありませうし、又御存じない方もありませう。

いつの時でも日蝕が始まつて月が太陽に重なつて來ると今まで青天白日ともいふべくあつた空は妙な青黒いやうな、赤黄いやうな色にかはつて來て、その內にだん／＼暗くなつて仕舞ひます。此の時のあたりの景色といふものは何ともいへない有樣て夜の暗いのともちがうて、一種悲哀な情を起

させます。人の顔は、青黑く見えるし、鳥は塒にかへり空には星があらはれます。

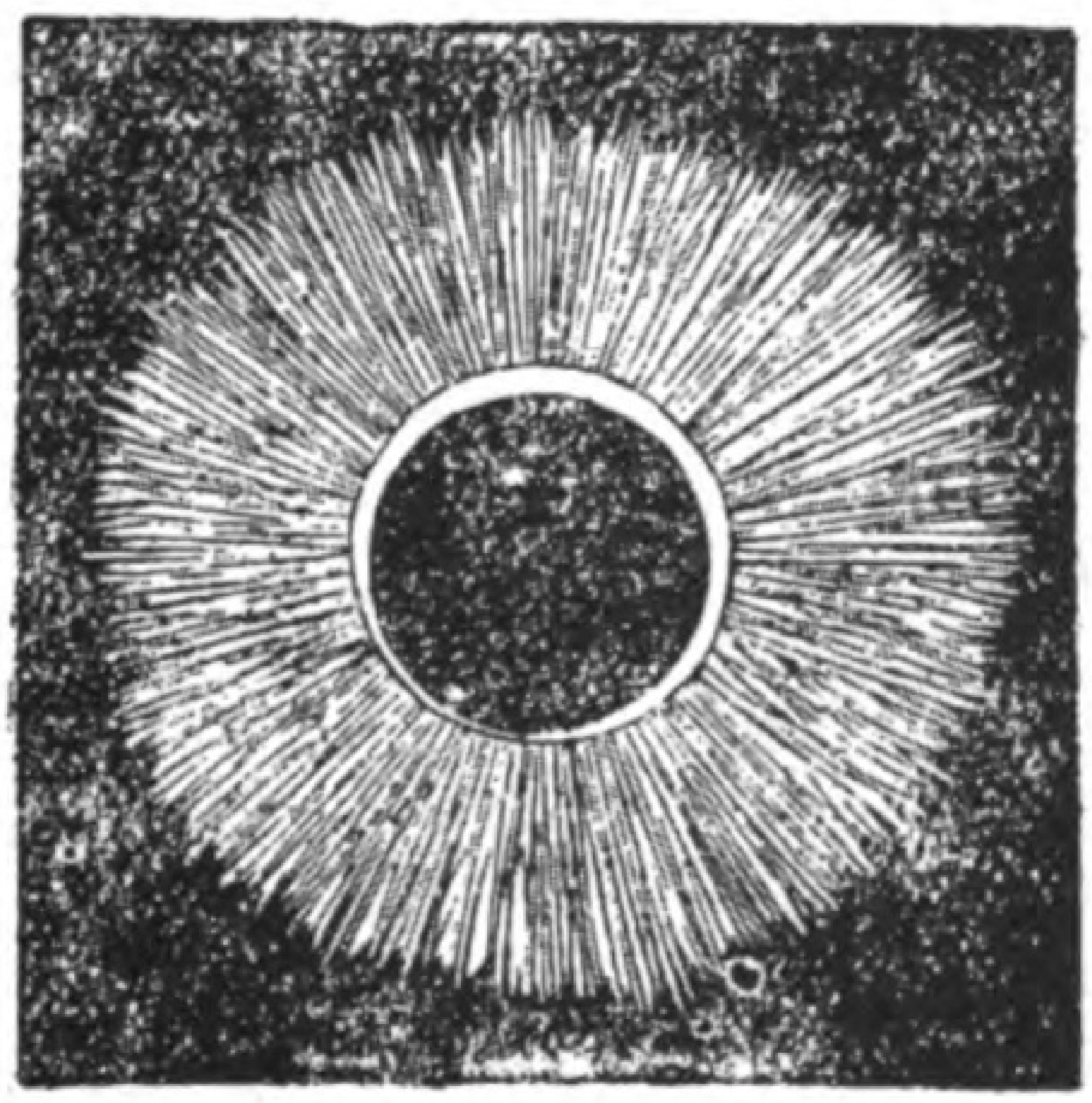
皆既に近づくころ太陽の方を見ると、暗黑な月の周圍に、銀白色に輝いた後光が見えます。之を「コロナ」といひます。圖に見えるやうに、月の直徑と同じほどの距離にまで擴がつてゐます。この「コロナ」は、即ち太陽をとり卷いてゐる太陽の大氣なので、日常は日光の強



いので見えないのが、この時に現はれるのであります。

それから、時によつて、太陽の姿がいよ〳〵細くなつて三ケ月なりになつた時や、或は金環蝕の時に太陽がほそい環になつた時には、その環形部が「緒に通した玉」のやうに見える事があります。之も圖にあります。

いよ〳〵日蝕が進んで皆既になると、「コロナ」の他に、見えるものがモ一つあります。それは、月の縁にごく近くあらはれるので、奇妙な形の、眞赤な色の焔の如きものです。この焔のやうなものも、やはり太陽に屬するもので、その證據には月が西から日に重なりあふと、はじめにはこの紅焔は太陽の東側に見えるのでだん〳〵月が東に進むに從つて東の方のはかくれて、西側のが見えるやうになります。



「コロナ」

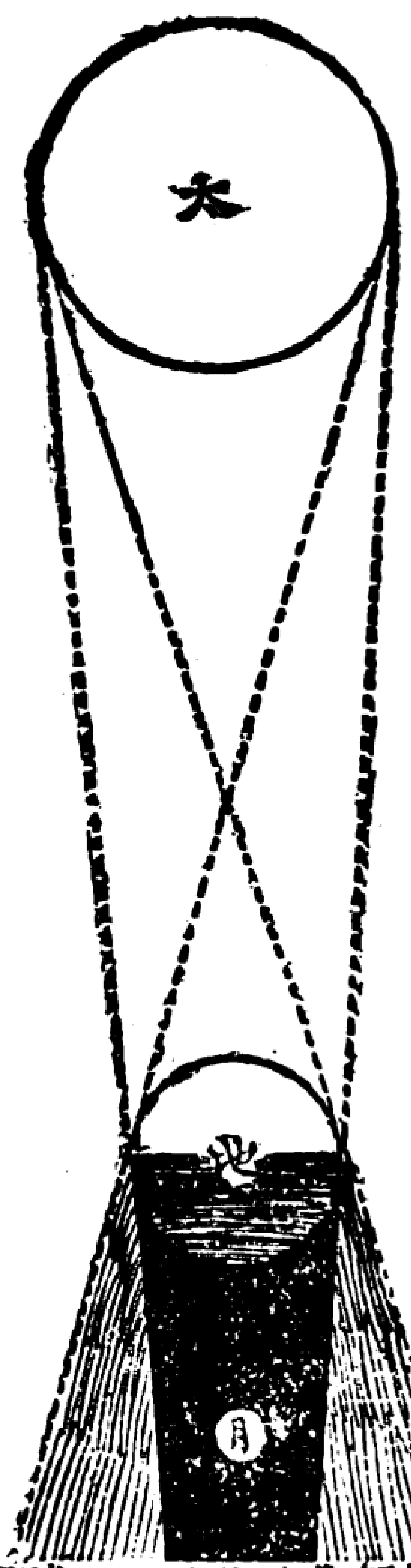
日蝕は、一寸考へると何時でも月が地球と太陽との間にさへ來れば起りさうに思はれますが、もしさうならば、毎月一度づゝあるわけです。しかし實際さうでないのは、月は太陽と地球との間には來るには來ますが、三躰の中心が一直線內或はそれに近くに來る事が稀なのに由ります。月の軌道面は、地球の軌道面と同じてないからです。日蝕はどんな年にても、多くて五度、少なくて二度よりは

起らぬものて、十八年の間には、四十一度位ある割合になるものてす。

むかしギリシヤといふ國に、セールスといふ人がありました。此の人は當時の七賢人の一人といはれたほどの人物て、日蝕について研究しましたが、紀元前五百八十五年にあつた日蝕を豫言しました。丁度この時に、ミヂヤ人とリヂヤ人と戰爭中でありましたがこの人の豫言通り急に日が暗くなつたので双方大に驚いて戰をやめたといふ話があります。

附　月蝕

今年の十月廿七日午後十一時何分から、翌廿八日零時何分までに月蝕がありました。月蝕の出來る理屈は、日蝕の事が分ればすぐと分ります。月蝕の時は、地球が月と太陽との間に來て月が地球の陰影に入りますから、その時は、地球からは月を見ることが出來ません。それて、いはゆる月蝕となるのてす。



月蝕は、地球の大きな陰影の中に月が入るのだから、地球の大部分から見られますし、又その蝕の時間も二時間位續きます。それで、月の全部が地球のかげで被れる時は、月蝕皆既て、一部分が被はれる時は小蝕です。

有名な月蝕の話を一つしませう。皆様御存知の、アメリカ發見者コロンブスが、千五百四年の始頃に航海して居つた事がありました。處が不幸にしてジャマイカ島の附近て破船しましたから、全島の土人に救助を頼みましたけれども、彼らは應しなかつたので、乗組一同飢渇に迫ろうとしました。時にコロンブス氏は、其の年の三月一日に、月蝕のあるべき事を知つてゐましたから、一計を案じて、その日の

朝土人を呼んで「汝等は我等を好遇しないから、神様は怒りを發したまひ、今宵の中にその姿をかくしたまうだらう」と云ひました。案の如く其の夜、月が暗くなりはじめたので、土人はコロンブス氏の言の信だつたのにいたく恐れ、いそいで食糧を數多整へて、コ氏の許へ來て、どうか神樣の怒りを解いて呉れと賴んだといふことです。

（完）

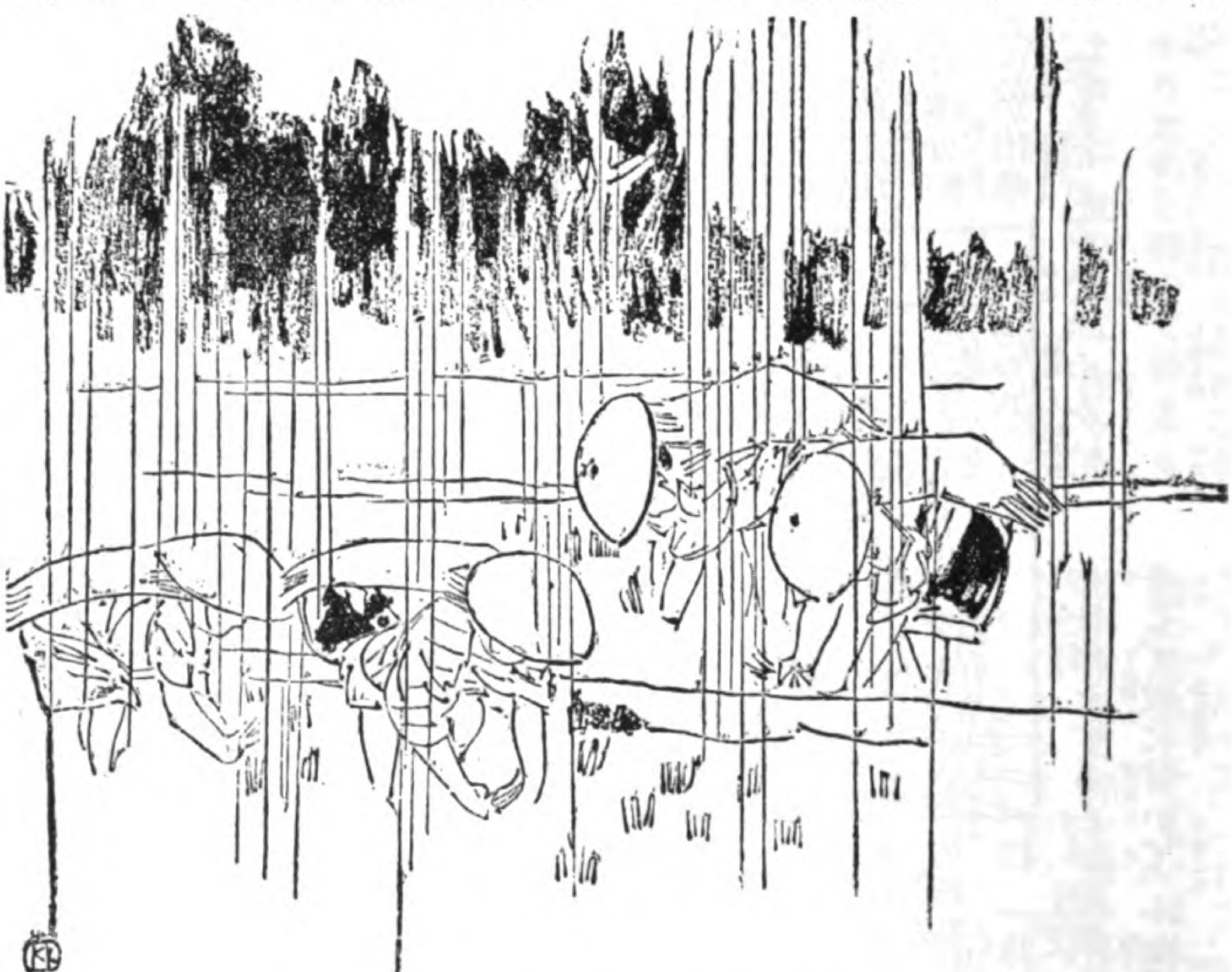
入梅の節（夏の自然（上））

女子高等師範學校教諭　藤堂忠次郎

梅雨の理

此の六月の時節は、夏の初といふだけに極暑くはないが、しかし、溽熱といふことが有り勝ちである。それは梅雨といふ季節を扣へて居るからであります。全軆此の月に雨が多いといふは、どうしてゝあらうか。それには一應理窟があります。總體、風が海の上を吹き渡つて來ると、澤山の水分を含みます、それが、陸地に達して、多少冷かな空氣に出逢へば、含んで居る所の水分が瓦斯の姿で居ることが出來なくて、即ち空氣から離れて、自分で凝つて極めて小い水玉となつて、フタ〳〵と漂ひます、それが即ち雲のことで、地の上に近くあるものは霧や霞であります。此の雲霧の細い水玉が段々と集まつて大きくなれば、其の重さに堪へられないで雫となつて地に降つて來る、それが即ち雨のことゝとであります。冬の間は、我國では北風の極めて寒いのが常に吹き荒みて居るが、夏は此の反對で、南風の暖いのが常に吹き續きます。そこで五六月頃は此の南北の寒暖兩風が互に衝逢つて、南風の元來太平洋を渡つて多くの水分を含んで來たものが、それがために多くの雲霧を吐き出し、それが又雨となるのであります。何せよ、物の移り行く境界には、新舊の衝突があるは、一般の規則であります。右の通りの原因であるから、我國の梅雨は先づ九州四國の西南から始まつて、段々中國畿內東海道へ及ぼします。しかし梅雨といふは、必ずしも大雨盆を覆すとか、又篠を突くとかいふようなものは

降らなくて、却つて、連日陰々朦々と欝陶しく、只何となく空氣中に濕りが多く含まれて居るのが通例であるそれがため、家の壁が濕り、柱や板が濕り、疊敷物が濕り机、道具、衣服あらゆる物が濕りを帶びて、心地悪しくなります。さうすると、黴が今こそと、勢を得て、盛んに蔓ります。一躰、何もない所にどうして、黴が生ずるのでしようか。世の中に種もない所に、自然に物の出來ることはない、即ち無より有を生ずるといふことは決してない。疊の間に自ら蚤が涌き、水鉢の中

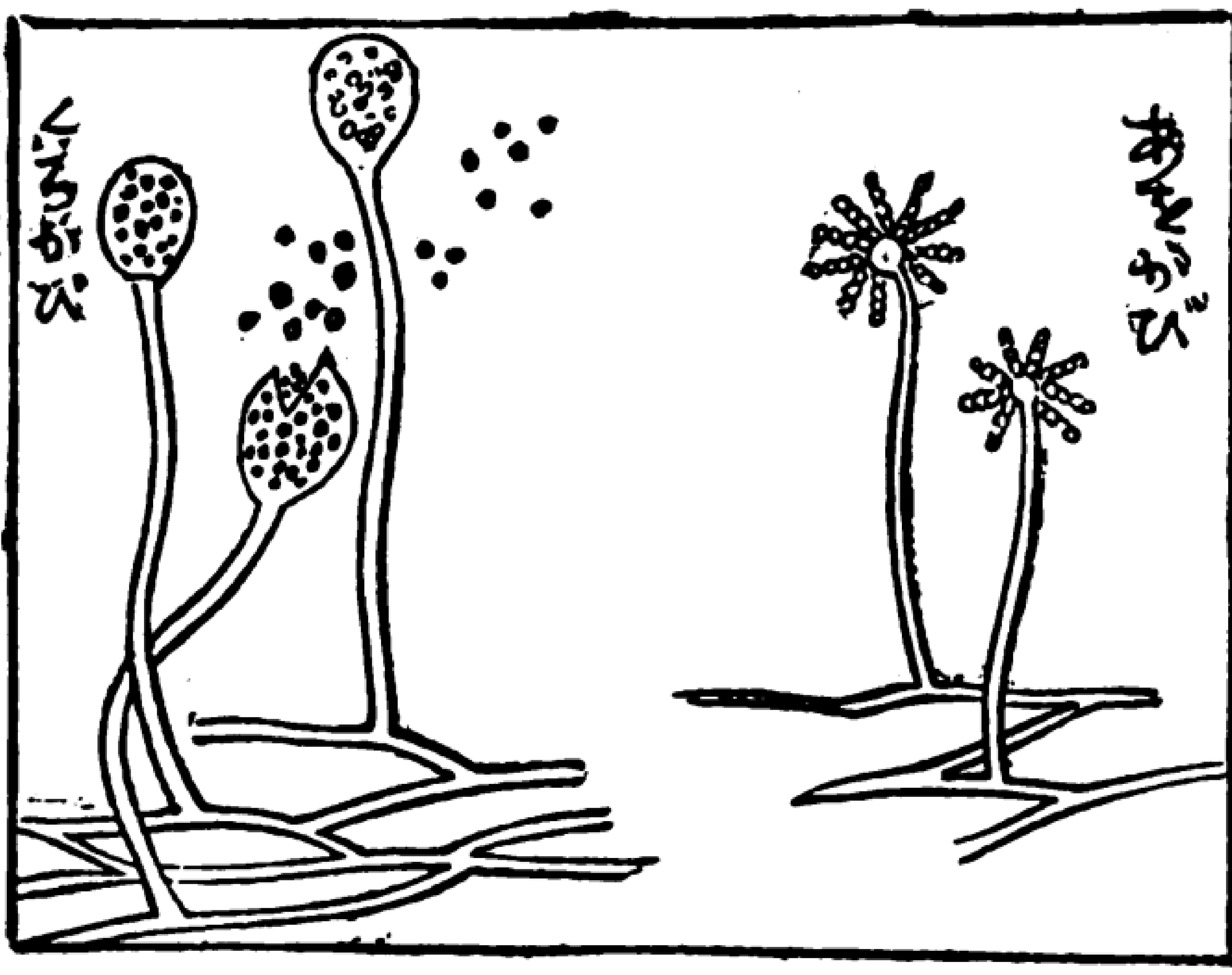


に自ら孑子が涌き、肉の腐りたるものに自ら蛆が涌くなどといふ話は皆俗說で全くあられもないことです。これは皆人の見ぬ知らぬ間に種が蒔かれるので、疊の間に塵のある所は、蚤が喜んで卵を其れへ產み、水鉢には蚊が卵が產んで孑子を孵らせ、肉の腐りかゝる所には蠅が卵を產んで蛆を孵らせるのです。黴の卵は極めて小くて、其の一二は決して、我々の肉眼には見へません。それが限りなく空氣の中に散り擴つて、どこか濕りのある塲所に附着けば、其處に喜んで生活

し成長するのであります。そうして其の成長したものは、白い黴絲のようなもので、壁が道具の質の中に侵入して、次にそれから枝を立て丶其の頂の嚢の中、又は直接に其の先に、多くの小い種子を結ぶのであります。

其の種子は實に無數に生じ、成熟するに從つて空中に散亂します。衣服や靴や諸道具が、一旦黴に生へられると多少其の品が惡くなるといふのは、上にあつた黴絲のような物が侵入して、幾等か其の質の間を打ち壞すからであります。だから、何でも、黴を生やさないように、注意しなければならぬ。それには濕り氣を一切喰ひ止めるが最良法である、何となれば、黴の種子は水分がなければ、少しも成長することが出來ませんから、梅雨の季節には、家を治める人は、中々忙しくあります。

實に梅雨は我々の氣分を不快にし、又大切の品物を痛めるものでありますが、しかし亦我國では、必ず無ければならぬものとなつて居ります。それは我々の常食としつつある米の稻が、其の間、專ら栽え付けられますので。



即ちそれによりて水田が造られ、田植が始まるのであります。農家は旱魃を嫌ひます、即ち雨の降るべき時節には相當な要事があるので、何にせよ乾梅雨といふものは、日本國民一般が迷惑するのであります。

蚊のはなし

梅雨が濟むと、軈て蟬の聲が、其處此處の樹陰に聞えて來ます、それに夕方には、一時に蚊の群が殖えて、我々は夜間に仕事をするとが困難になります。

そこで蚊に付いて、一應御話する價値があらうと思ひます。我々は、一口に、蚊を以て皆、人を刺すものであ

るといふが、決して、さうではありません。現に、躰が緑色を帯びて、頭に鳥の羽のやうな角を持つて居るものは、少しも我等に害を與へません。世の人は、往々これを蚊の別種と考ふるようだが、實はこれは蚊の雄であつて、雌のみが我等を刺して、血を吸ふのであります。丁度蜂と同じように、雌が人を刺すのである。此



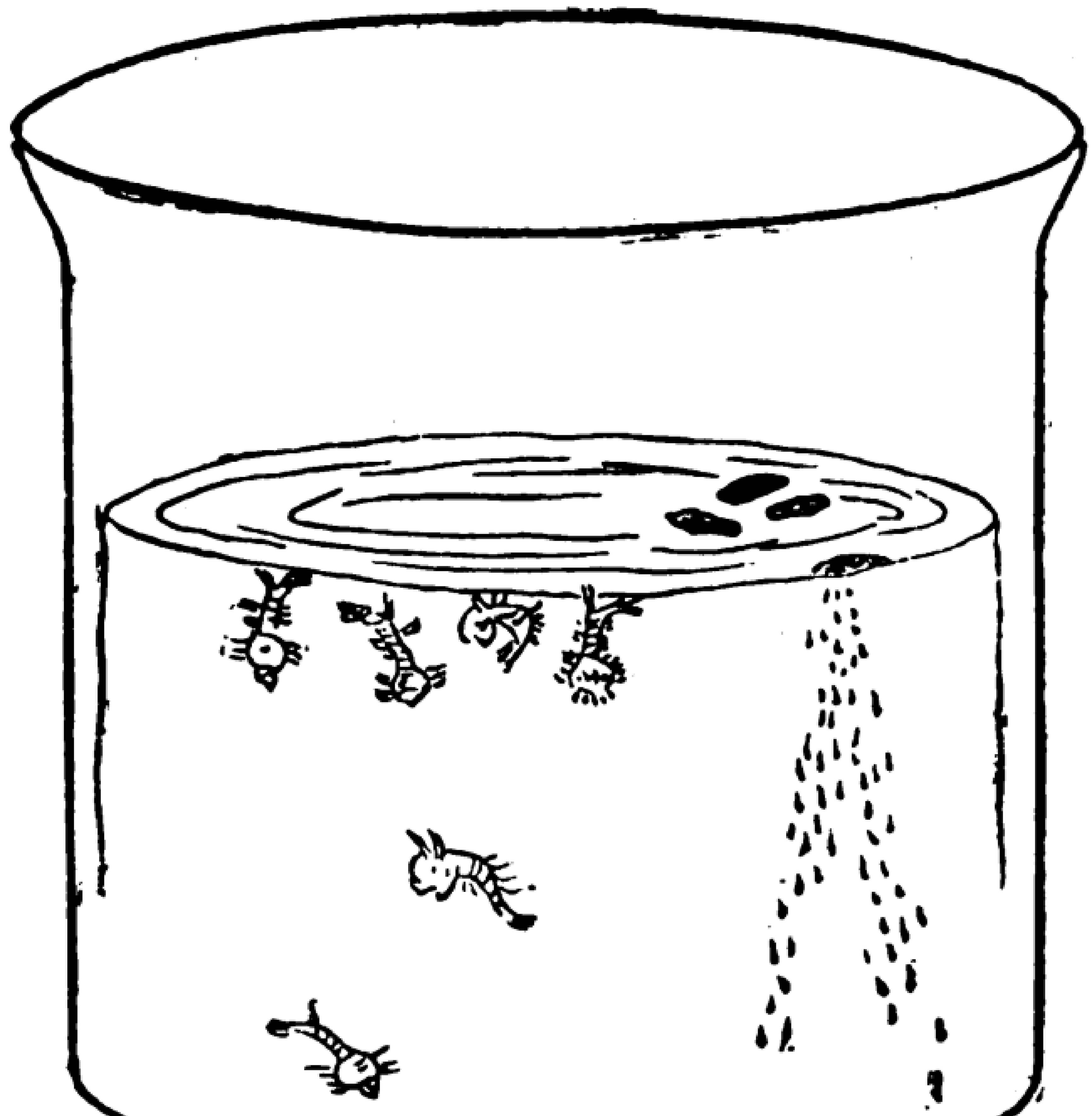
處に書いてある雌と雄との形を能く御覧なさい。直ぐと其の區別が付きましよう。その人を刺す劍は、蜂とは違つて、口であります、其の口の顋が皆長く延びて、針のようになり、其の眞中に長細い舌があつて、専らそれに依つて、血を吸ひ取ります。然らば雄、はどうして生活するかといふに、常に植物に止まりて、其の汁を吸ひ取るのであります。そこて、雌は人の害虫で、雄は植物の害虫とてもいはれるのてす。

蚊が水面に卵を産み落すときには、若干を集めて、丁度小舟のような形の塊にして、水に浮べて置きます。總て其の小い卵は、一つ宛孵りまして、段々と成長すると我等の見るような孑孑となるのてあります。試しにコ

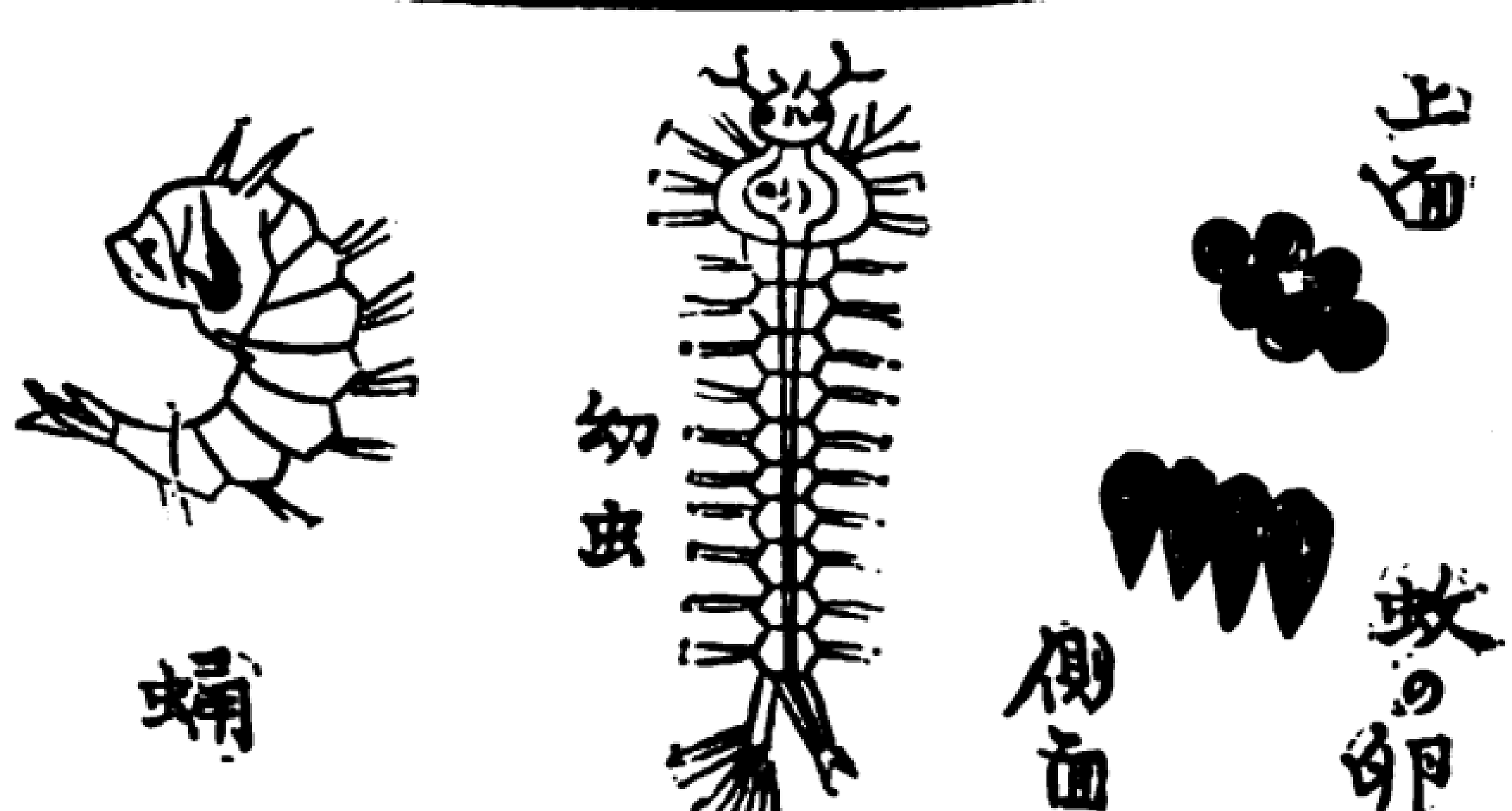


ップなどの器に水を盛つて、それに孑孑を入れて置けば、實に蚊の生立の様々なことが認められます。卵から孵つた孑孑は、之れを幼虫といふて、數日間或は十日間以上も水中にピン／＼跳ねて居ます。徐かにして居る間は、水面にまて上つて來て倒さになつて居る。これは尻尾から空氣を呼吸して居り、又下向になつて居るだけ、

水中に漂ひ來る食物を見付け出すに都合がよろしい。何かに驚いて、水の底に沈むには、容易ではあるが、底から浮き上るには、躰を色々に悶掻いて、多少困難の樣があります。それは孑孑の躰が幾分か水よりも重くあるからであります。それから、躰の尻尾が二股のようになつて居るが、實は最後の節の次の節に一つの長い瘤を持て、それへ、躰の中の氣管が傳はつて來て居るのです、倒さに呼吸するも亦無理ならぬことであります。ところが今まで活潑に游泳して居つた孑孑は、何時の間にか、段々不活潑になつて來ます。よく視ると多少の



姿を變へて居るので、即ち頭と胸とが、非常に膨れて、丸で、幌でも被つたようで、背面に二本の管が立つて居ります。此の姿になつたを蚊の蛹といひまして、それから、尋常の成虫になるのです。其の胸の側面には、既に小さな翅の芽が出て居ます。數日を經ると、其の背の皮が裂けて、それから本當の成虫が現はれて、暫らく其の脱皮の水面に浮び居る處に止まつて、自分の翅の乾くを待ち、然る後、飛び出します。

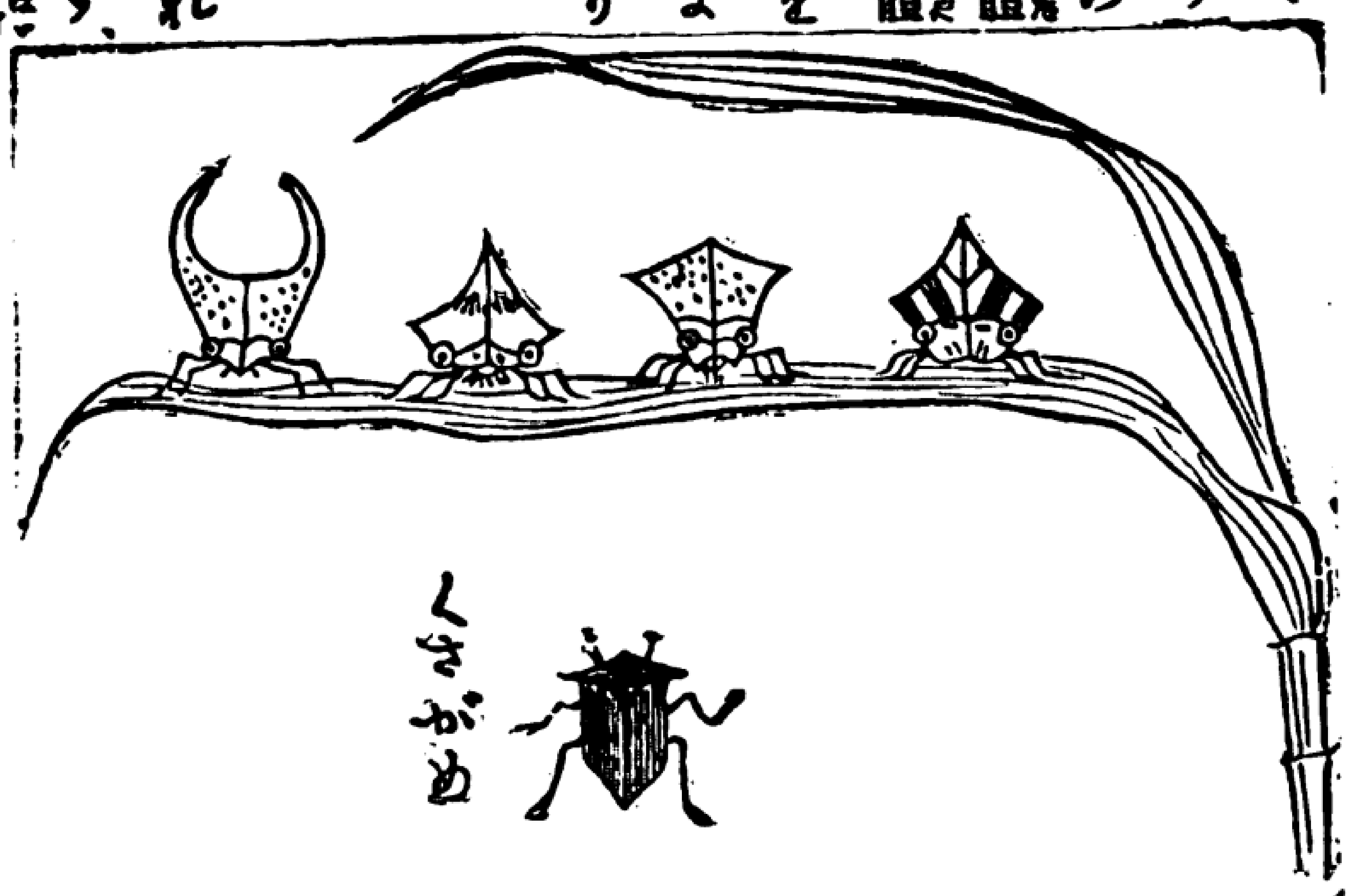


蚊が血を吸ふからて、我々の害虫であることは、誰しもよく知る所ではあるが、猶蚊に付いて、恐るべきこと

があります。即ち我々の間に傳染病の媒をすることである。現にマラリヤといふ熱病のごときは、蚊の媒によりて、廣く行はれて居るといふそうです。其の病毒は一種のバクテリヤて、蚊が其の病に罹つて居る人の血を吸へば、其のバクテリヤが蚊の體に移つて來、次に其の蚊が他の人の體に吸ひ付いた時に、其のバクテリヤを其の人へ移すようになるのであります。中々油斷も何もならぬことであります。

蟬のはなし

梅雨の上りは蟬の鳴くを以ても亦これを判斷することが出來るといひます、成る程、奇妙にも蟬の表はれる頃が、略定まつて居ります。蟬が樹に止まつて騒しく鳴いて居所は、何人もよく知つて居るが、それが地中に居るときの姿を知つて居りますか。世の人が彼の地虫といつて、白い蛆の太つたようなものを見るのが、即ち蟬の幼虫であります。此の幼虫は、元と、成虫が樹の皮の面に産み付けた卵から孵つたもので、其の孵つたものは、間もなく故らに地に落ちて、土の中へ竄り込みそれが樹の根の汁を吸ふて長く生活いたします。或る蟬の如きは、土の中で十七八年間も存へて居るそうであります。軈て翅が出來かゝれば、又樹の枝まで昇つて來て、暫くして背の皮を破つて出て行きます。我々が所々て蟬の脱殻を認めることのあるは、即ちそれて、それは蟬の蛹の姿の其のまゝであります。



蟬、はたしかに植物の害虫であります。地虫の間には根を害し、成虫になれば莖や枝から汁を吸ひ取ります。此れがために、彼は長い鋭い口を持つ

て居ります。農家で最も怖れて居るうんかといふ小虫は即ち蟬類であつて、幾千幾萬が群つて、稻に縋り付いて汁を吸ひ枯らします。これに襲はれると、農家は夜も睡ずに或は篝を焚いて、燒き殺したり或は水田に石油を振り撒いて追ひ拂ったりします。くさがめ又はかみしもむし又はほうといふ虫も亦蟬の類で、實に臭い香を躰から發して、敵の難を逃れて居ります。此の虫にも樣々種類あつて、色々面白い姿をなして居るので、前の圖を見れば分ります。

以上のように、段々と、六月中の自然の話、即ち夏の上の話として下らぬことを述べました。兎も角此の日は昆虫の發生が段々と盛んになつて、それに梅雨といふ著しい時節柄であります。猶他に色々必要なことがあれど、紙數に限りあります、から、こゝて筆を止めて、來月に「夏の自然の中」其の次の月に「夏の自然の下」を話すといたしましよう。

麥の秋（動植物談）

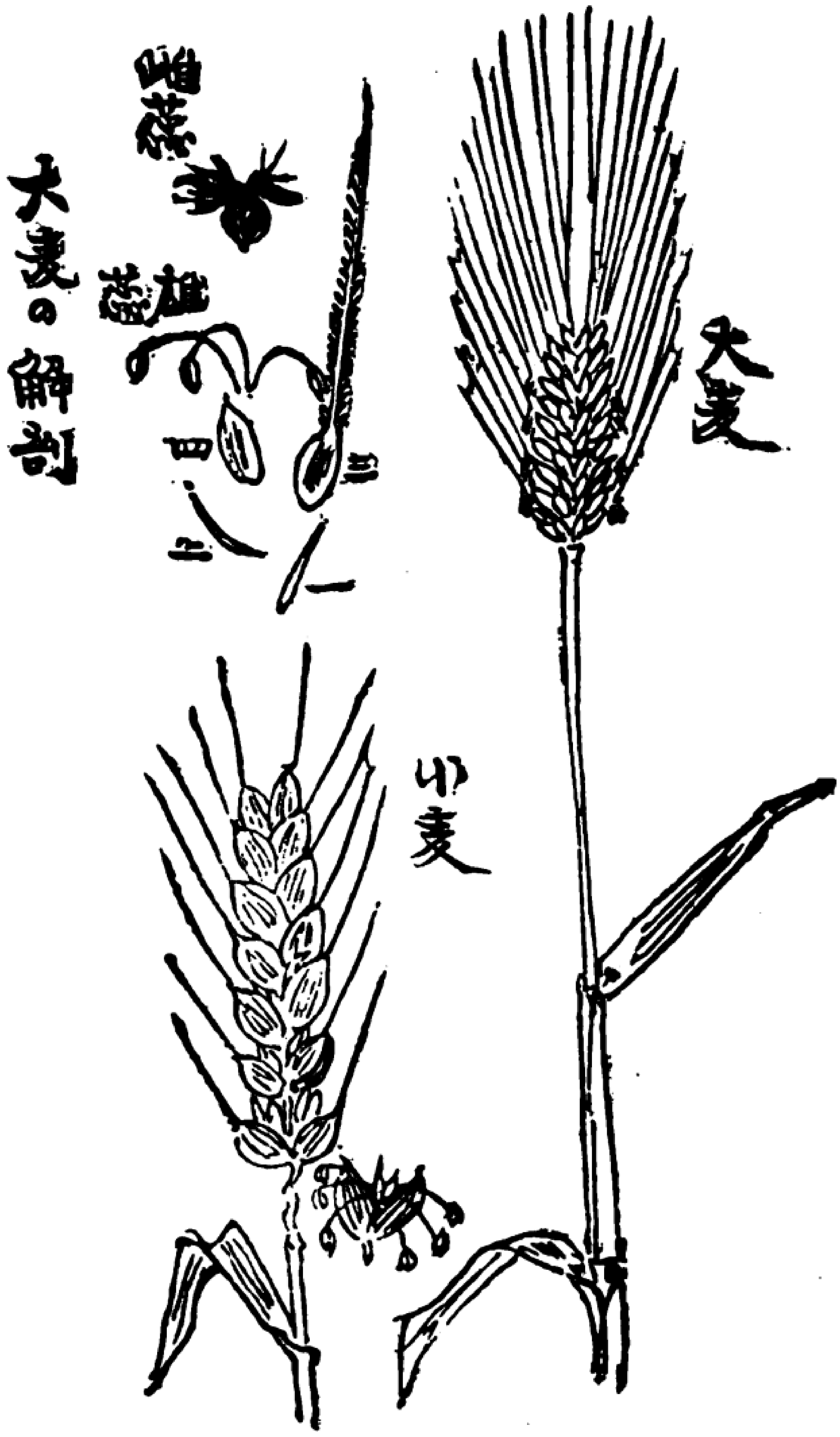
藤堂梅軒

麥のはなし

此の頃の野邊には、麥の花盛りて、月末になれば、軈て苅納れも行はれるようになります。全躰、麥の花はどんな組立になつて居るだらうか。御覧の通り、多くの小い花が集まつて穗となつて居つて、其の一つの小花は、瓣も萼もなく、只ゝ四枚の緑い殼があるだけて、其の第三の殼に、長い芒を持つて居る、雄蕊は三本あつて何れも糸のような細い柄をもつて居る、雌蕊は頭に、フサ〱とした白い毛を、男の頭の散髮のような風に生して居る。これは大麥の花である。小麥は大躰これに似ては居るが、一小花のように見えて居るものが、實に三四花から成つて居る、だから、其の一粒を大麥のに比べると、却つて大いように見える。

さて麥の花は、何故にそのような形をして居るのであ

るか。それには深い理由があります。此の花は全く昆虫の助を借らずして、風の力を頼りて、花粉を他の花の雌蕊に送るのです。それだから、別段に美しい色もなければ、芳しい香もない。それよりも、風のために出來るだけ揺られて花粉の飛び散り易いように考へて居る。それて其の雄蕊の柄が長くて、花の外に垂れ、それに一般に穗の柄も極めて細くある。猶雌蕊の頭が毛て以て、散つて來た花粉を受け留め易いようになつて居るのです。それから芒の用は、實が熟すれば、鳥などが啄まないように禦をなし、又其の實が地に墜つれば、これによりて、確と土に着いて離れないのである。大体に麥は、見た姿が細くて、如何にも纖弱くあるようだが、實は中には丈夫て、チヨツトは風雨て折られてしまふもの ではない。それには、硅質といふて、砂のような質が、其の成分となつて居ることが多く、且つ莖が中空で節までがあるので、愈々丈夫な譯である。自然が爲す仕事には實に、或ることには好くて、他の事には惡いといふような、不完全なものは、造らない。これ等を考へれば、我々人間がこれを學んて發明する所が甚だ多くなるでしよう。よく／＼注意するが良しい。



松の花

風の力に依りて、花粉を他へ送る花といへば、何も麥はかりてはない、此の頃に盛りてある松の花も亦左樣なのてあります。といへば松の花とはどんなてあらうかと、中には、此のよう、に事々しくいふは何たることてあらうかと、不審議を起す人もあるかも知れない。成る程松の花は、それほどに、一向著しくないのてある。しかし、花粉を送ると、これを受けることが實に巧に出來て居ます。先づ花が、雄と雌とに全く別れて、雄花の數が木末の枝一つに幾十穗ともいはれぬ程あり、その一つの穗に、亦幾十百の小花が群つて、これて以て、充分に澤山の花粉を製造



して、どれかが偶然に、他の遠方の雌花へ到着せんことを考へて居る。その雄花一つは、一つの鱗の下面に、二つの葯がある。それから雌花一つは、亦一つの鱗の上面に、二つの胚珠を有つて居ります。上の圖を見れば雄花の穗、雌花の穗の位置や、一つ宛の花の解剖が了解るであらうと思ひます。

松に男松、女松と云のがある、是は男松には雄花のみ女松には雌花のみが咲くといふのではない。男松は凡べて葉が硬く、雄花の穗が長形で、樹の肌が黒みがゝつて居る。然るに女松はこれに反して、肌の花は赤くある。それだから、又別にくろまつ、あかまつの名もある。雄花は花粉を散して了へば、それて全く義務を果したのだから、其〻地に落て了ふ。ところて雌花は、

永く留つて、段々成長もする。前圖には、雌花の前後三階級が見はしてあつて、即ち目下、枝の頂上にある小い雌花の穗は、其の一花づゝの鱗が、弛んで居つて、容易に花粉を受け入れられるようになつて居る。此うして既に花粉を受ければ、其の鱗は自ら閉づるのみではなくて、段々肉太くなつて、次の年の春のが、此の圖に見えて居る。それから其の年の秋になつて、その鱗に再び開いて、中の種子が飛び散じる、前圖にあるのは、其の種子が、既に飛び散つた藻殼の殘つて居るのであります。

燕のはなし

さて、時が時で、既に多くの動物が、出盛りてあるから、何でも話の材料にはなるが、先づこゝて、燕の事を少しばかり言ひましよう。燕は前月に述べた鴨や雁とは反對に、春になれば南から移つて來て、秋になれば復、南へ反り去るといふことは、最早知れ切つて居る所であるが、何分にも既に四月には、此の邊へ移つて來て居る。我國では、種類には五六あつて、通常燕、琉球燕、腰赤燕、しようどう燕、岩燕などである。其の中で岩燕としようどうとは、羽に少しも赤茶色がないから、直と他の燕から區別せられる、そうして、其の腰の所の白いのが岩燕である。それから、腰の赤いのが腰赤燕で、腹の白いのが、通常燕で、腹の灰色のが琉球燕である。何れも皆空中に飛んで居る蚊や蠅などを食つて呉れますから、人間のためには、最も有益である。殊にそれが衞生上に大な利益があるといふは、蚊はペストを傳染させるといひ、又蠅はコレラなどの疫病を流行させるといふからであります。通常燕は我々に最よく知られて居るが、琉球燕は、琉球よりも北へ來ることがないから、我々には多く知られない。腰赤燕は多く居らぬもので、屋壁の高い所に、德利形の土の巣を造るから一名德利燕ともいはれる。しようどう燕は海濱又は河岸に群りて、砂を掘つて巣を造るから、又砂むぐり燕といふ名がある。岩燕は深山に群集して、岩の陰に土の巣を造るもので、日光の華嚴瀧の邊などには實に澤山居

ります。
兎に角、燕は此の頃から、六七月頃に最も勢がよくて、九、十月頃に影もなく南へ去つて了ひます。猶燕について詳しいことは、昨年の『女學世界』にも載せたから、それと照り合はされたい。

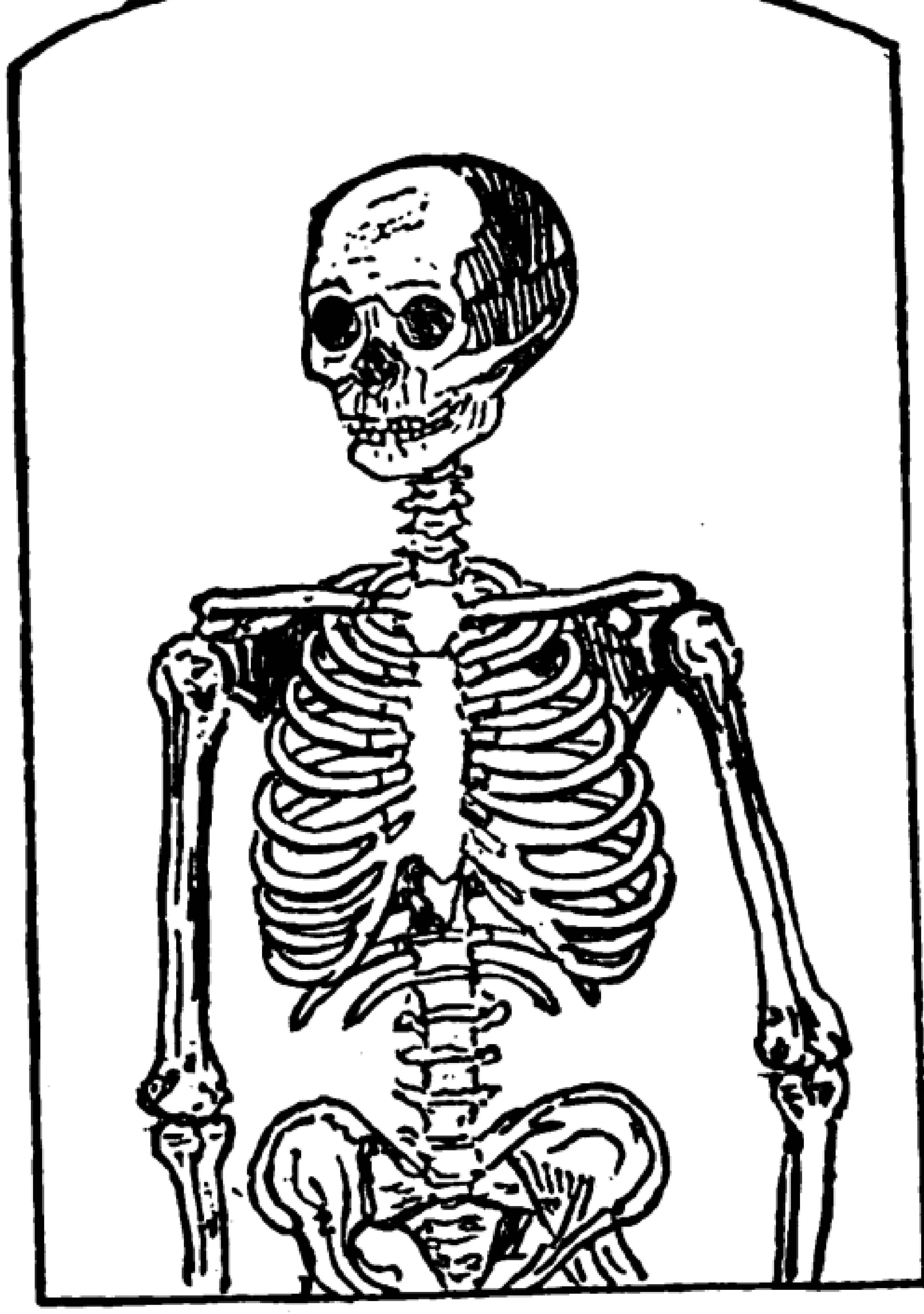
(完)

人間身體の妙能（上）

林壽祐

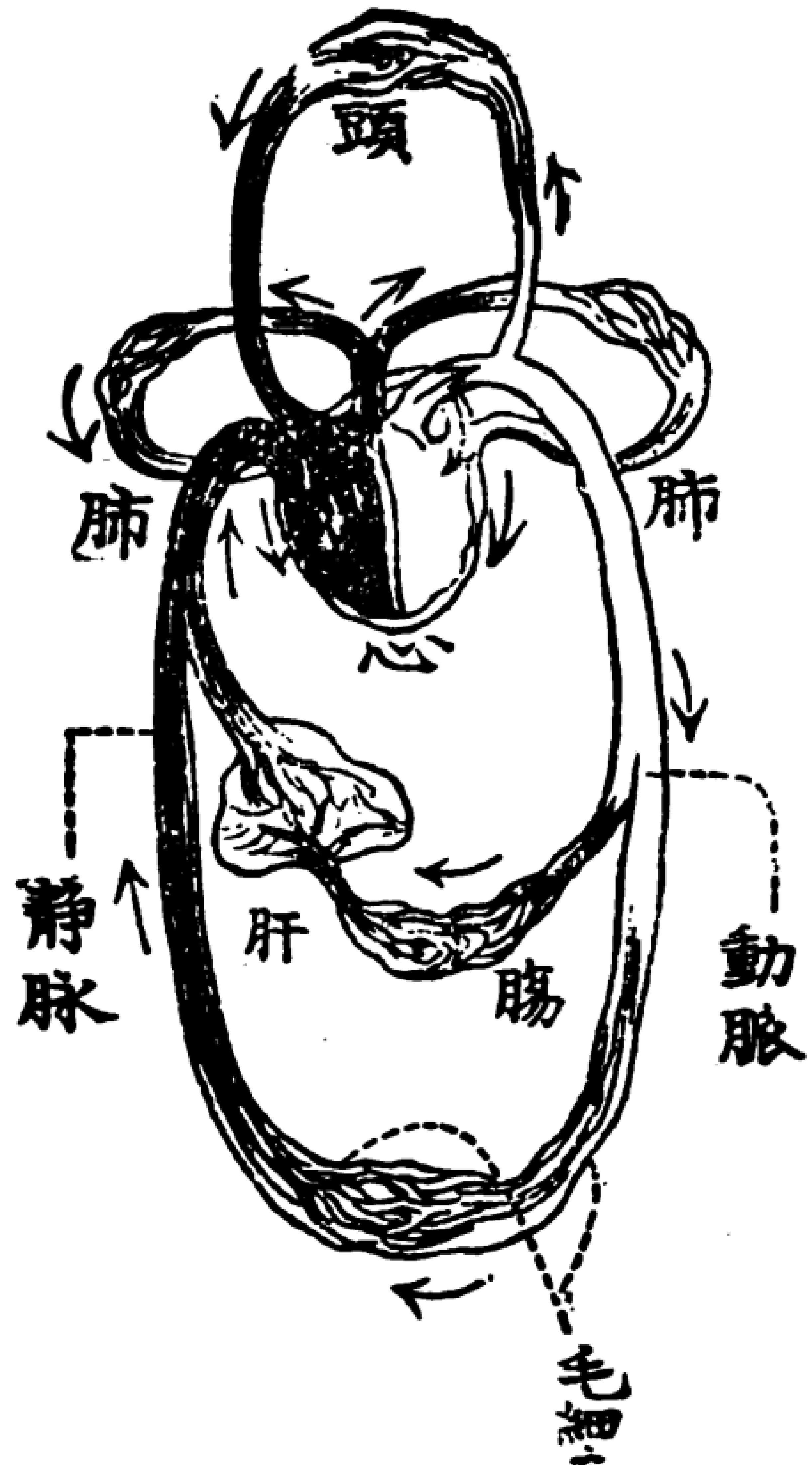
吾々が、秘密の關係により、母の胎内に宿るや、唯一個の細胞に過ぎないのである。それが母の胎内から滋養分を吸收すると、初め僅に一個であつた細胞が、二個となり、やがて四個となり、八個となり、次いて十六個三十二個、更に六十四個百二十八個といふ様に、倍づゝ殖え、遂には數萬億個の細胞となり。其内四肢五躰を完成すると、母の躰内から産み出だされ、產聲を擧ぐると共に始て此世界の空氣を呼吸する、これを出生或は人世の現出といふのである。出生の當時は、まだ微弱であるから、暫くは母の胸部から汾泌する、乳汁によつて生育し、それでやゝ運動し得る様になると、他の飲食物をとり、躰は、日に月に增大する。それから身の丈五尺餘、重さ十二貫以上になると、もはや生長は止まり、暫くの間は、延びもせず、重くもならないて、年を經るに隨ひ、細胞は漸々減少し、躰の表面は皺だらけとなり遂に呼吸は絕へ、躰温は消へ、全く活動を止めてしまう、之を死亡或は人世の終局といふ。初め母の胎内を出てから、此終局を告ぐるまでは、大略七十年内外である、何んと長い様な短いものではありませんか。今人世を七十年と假定し、草木に譬ふれば、吾々が母の躰内にある間は、即ち草木の種子が、地中にあるが如くてある、それが春になつて、適當な温度と水分に遇ふと、芽を發してズン／＼生長する。吾々が此世に生れ、先づ二十五年間は春期て、生活力の最も盛んな時である。て能く食ひ能く飲み、そうして能く動き能く睡るから、躰の細胞は、減るより增える方が多い、故にズン／＼大きくなつて、全く生長を遂げるので、二十五年から五十

年までは、夏期で、草ならば花開き、實を結ぶと同じく、吾々は妻を娶り、子女を擧ぐる期節てある。此時代は、躰の細胞が、減ると殖えるのが、殆ど同じ分量であるから、瘦せもせず肥りもしない。五十年から七十年までは、秋の期節てあつて、野原の草は實は熟しながらも、葉の色變はり果て、遂に霜降り初むる頃にいたれば、莖折れ葉萎み、全く枯れてしまう。吾々も此期節になると、子や孫はピン／＼して居るが、減る細胞は、新に出來る細胞より多くなるからダン／＼筋肉衰へ、皮たるみ髮は雪と變じ、腰は曲がり、遂には秋風にさそはれて、永遠の異郷に逝き去つてしまう。そこで此七十年の間、生命を續ける、人間といふ動物の躰は、何んな構造てあるかといへば、敢て牛、馬、犬、猫と異りはないがナカ／＼巧妙に出來て居るのです。



さて人身躰を以て、汽車に譬ふれば、筋肉骨骼は機關、石炭は飲食物、運轉手は精神作用てある。故に運轉手たる精神が、如何に活潑なるも、機關にして破損する所あれば、到底進行することは出來ない。で機關が完全なる上に、上手な運轉手が居つても、石炭といふ飲食物がない時には、同じく運轉することが出來ない、されば機關、運轉手、石炭の三ッが揃つて、始てレールといふ人界の世路を進行することが出來るのてす今吾々の躰を見るに、第一先に目の觸れるのは、肌である、肌は皮膚といひ、上下二枚からなつてる。上の皮は表皮ともいひ、極く薄くて、神經もなければ血管も無い、故に表皮を切つても、痛くもなければ血も出ない。此皮は躰の最も外面にあるもので、絶へずとれ剝がれる、頭にある。フケは即ち表皮の剝がれたものである。表皮は、

足の底の樣な所には、厚くなつてる、故に粗い地面を歩み、或は芥や礫を踏んで、少し位傷がついても痛くないのである。て顔とか指とかになると、薄くなつてる。若し指先なとへ、表皮が厚くなつてると、物にふれても熱い冷たい、堅い軟かいなどが知れなくて、甚だ不便である。然るに足の底が薄ければ、跣足になると、直ぐ痛み出して、とんと困つてしまう。故に表皮は、指などに薄くなつて丶、足底へ厚くなつてるのは、至極結構といはなければならんのです。爪も髪も皆表皮の變じたものであるから、切つても刈つても痛くない。表皮の直ぐ下にある皮は、眞皮といい、表皮よりも厚く、神經もかよて居れば、血も通つてる、故に傷くると血に流れ出て、またチョット觸つても、ちき感じるけれども眞皮は甚だ丈夫で、メッタに破れない、で表皮及び眞皮は、相重り合ひ、躰の全面を包み内部を保護し、見場をよくすることなどは、恰も家屋の壁が、内部の諸道具を隱くしてあるが如くである。



皮膚の下は筋肉といつて、厚くてや丶軟かいものである、吾々が頰或は腕をつかむと、ブリ〱と感ずる、これが即ち筋肉で、大小合して五百以上もある、躰の中最も多い所は、臀、股、足、腕である、筋肉は必ず骨に附着して丶、頗る伸縮力に富み、其作用によりて、躰の運動を起させる、指を曲げ足を擧るも、眼を廻はし口を動かすも、一々筋肉の伸縮によるのである、例へば手を曲げんとすれば、必ず腕の上の肉が、縮み固まるので知れる、で筋肉が發達すれば、する程、能く運動に堪へられるのである、躰の中心には、

骨といふ白色の堅き棒が通つてる、之を脊骨といひ、脊骨から四本の枝を出し、手と足の心となつてる、骨は實に躰の形を保つもので、家屋なら柱ともいふべきである、若し人間の躰に骨がなかつたならば、蚯蚓か烏蠋の様に、グニヤ〳〵して　到底活潑な運動は出來ない。骨は躰の中に凡そ二百餘りもあつて、扁たいのもあり圓いのもあり、長いのもあれば、短いのもある、て力の入る所には、長くて太い骨となり、手とか足とかの關節には、小さい骨がゴチヤ〳〵と寄つて　、自由自在に曲げたり伸ばしたりしられる、前にもいつた如く、骨は筋肉を附着せしめ色々な運動をするのである。以上皮膚、筋肉、骨骼で、躰の形態だけは出來て居るのです。それから躰の内には三ツの室がある、第一の室は頭で、周りは扁たい骨に包まれ、中に脳味噌が一ぱい充てある、脳は躰の器械中、最も肝要なものであるから、高くて、そうして箱の如きものゝ中に保護されてる。第二の室は胸で、肋骨とて左右十二本づゝの長い骨に圍まれ、恰度籠の様である、此中には一個の心臓と、二個の肺臓を入れてある、心臓及肺臓は脳と共に生命の三脚といはれ、頗る大切なものであるから、骨で造られた籠の中にあるのである。第三の室は腹で、横隔膜といふ膜一枚を隔てゝ、胸に隣りあつてる廣い間である、

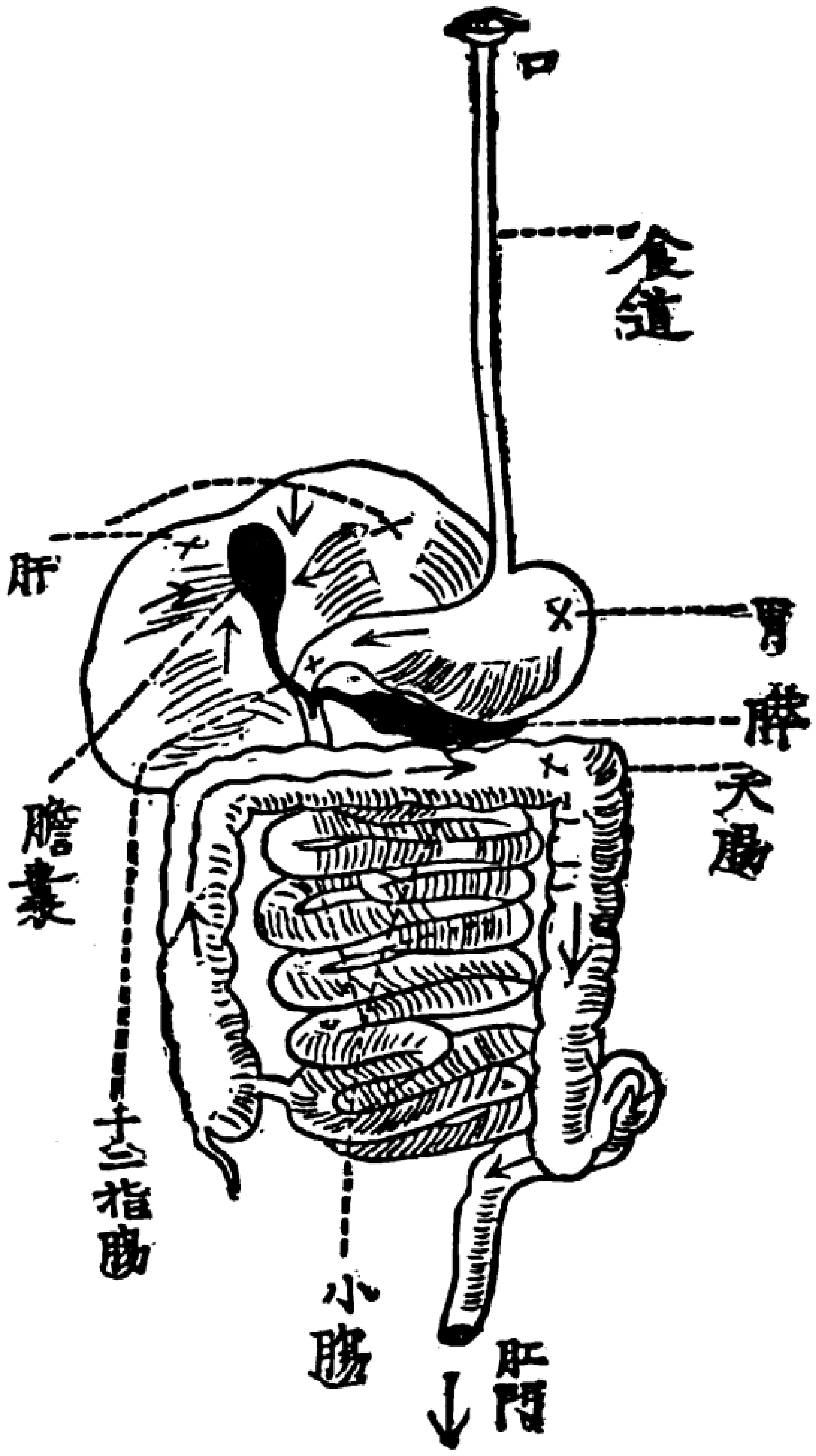


こゝには少ッとも骨の保護はないが、胃や腸であるから、壓されても、害を受ける憂は少ないのです。さて家屋となつてる木や土或は石は、無生物で動かないから縮んだり減つたりすることは容易にないが、人間は生

物の一ッで、能く運動するから、絶えず躰の物質が減少する、て物質が餘り減つて來ると、躰がつかへなくなるから、始終減るだけの分を補つてる、此物質を補ふものは、即ち滋養分は、食物から取るのてある、食物には禽獸、魚介の肉の如き、乳汁、卵の如き動物性のものと、穀類野菜の如き植物性のものあるが、何れも躰の中に入ると消化されて、滋養分となるのてある、この食物をこなす機械を、消化器と名け、口から肛門に運つてる、大械機てある。これより少しく、消化器のことを述べてみましやう。

先づ食物が口に入いると、第一着に門歯に粗噛みされ、舌と頬との作用によりて、臼歯に廻はされる、歯の表面は琺瑯質とて、骨より堅い物質であるから、大抵のものは噛み砕かれる、で食物が臼歯に來ると、恰も石臼にかけた如く細かにひきつぶされる、同時に唾液といふ一種の液が、左右の耳の下、及び舌の下より湧き出て、食物に雜り、食物中の澱粉質だけ溶かしてしまひ、直に咽頭より食道へ送る、食道は蚯蚓の蠢めく樣に動くから、食物は敢て其細道に滯ることなく、胃とて入九合のものを入れられる嚢の中へ、ドシ〱落ち込んで來る、胃も常に動いてるから、食物はよくかき廻はされて胃嚢の内面には無數の小孔あり、胃液といふ消化液を分泌して、食物中の蛋白質を消化する、胃液は酸性てあつて、食物は灰色の粥の樣にグチャ〱になる、これを糜粥といひ、それから幽門とて胃の裏門ともいふべき門が開いてグチャ〱になつた糜粥を通ほし、十二指腸へ送る、此幽門は正直者で、食物の消化しない内は、ナカ〱開かないのてある、て十二指腸の中程に一ツ、管が通つてる、此管は消化液の流れ來る道で、更に二岐に分れてる。一は膽嚢といふ小嚢に運つてる、此嚢の中には、膽汁といふ綠色な液がある、膽汁はもと肝臓といふものより、しぼれ溜つたもので、甚だ苦味がある、熊の膽や猪の膽も矢張り此膽汁てあるが、其苦味によりて藥にせられ、昔から有名てある、糜粥になつて食物が、幽門からドシ〱十二指腸に來ると、膽汁は細い管により、上から食物に注ぎかけ、其中の脂肪質を消化

せしめ、兼て食物の腐敗するのを防いてるのてある。膽汁の他の一管は、膵臟に連つてる、膵臟も消化液を造る所である、此液はアルカリ性てあつて、膽汁と同じ孔により、十二指腸に流れ出て、糜粥に混じ、唾液、胃液、膽汁等の消化しきれざる殘物、即ち澱粉、蛋白質、脂肪を、再び消化せしむるの作用を爲すものてある。初め口の中て唾液に交はりたる食物は胃液、膽汁の二液に混じそれから更に膵液に會ふと、全くトロ〱にせられる、こゝでは乳糜といひ、次いて小腸へ移る。小腸の內面からも腸液といふ消化液が分泌するのです、て小腸には絨毛が滿面に密生してる、絨毛の中には淋巴管及び靜脈管が來て居つて、乳糜中躰の滋養分になるものを、ズン〱吸收し、胸管となりて心臟に運ぶ。更に心臟の官能により、躰中に配布され、筋肉骨骼などを養ふてあるて、滋養分だけ吸ひ取られたる糟は、大腸へ送られる其大腸を通るとき、水分は大概吸收され、糟は大に乾いて塊りとなり、暫く直腸といふ所に止まつてる、これ即ち糞にして、遂に肛門から下界え、へり出されてしまうのてある。腸は俗にヒヤクヒロ或ハラワタといひ、長さ二丈五尺餘りもあり、小腸と大腸に區別され、小腸は長さ二丈、大腸は五尺許りてある、小腸は更に三部に區分され、初めの一尺を十二指腸といひ、次ぎの七尺餘りを空腸といひ、次ぎの一丈一尺餘りを回腸といひ、皆其內面に頗、多く粘膜の襞がある、さうしてたま天鵞絨の如



く細い突起が密生し特に空腸の上部に多くある、此襞及び突起は、甚だ有益のものである、何んとなれば、小腸の内面が、竹筒の如くツルリとして、少ッともひかゝりといふものがなければ、腸の蠕動につれ、食物はたゞスッスッと通り過ぎ、滋養分の吸收せられる時間が乏しい、故に折角消化された食物を、無駄に捨てゝしまうことが多い譯です、然るに襞となり且つ突起物あれば、食物の通過緩くして、充分吸收するの猶豫を與へ、又其吸收面積を甚だ廣くするの効能あるものといはねばならぬのです。大腸は盲腸、結腸、直腸、の三部に分たれ太き所は直徑二寸もある、襞及び突起はない、小腸と界する所に、一の瓣膜あり、排泄物の小腸の方へ逆戻りするのを防ぐ備へになつてゐる　（次號完結）

螢のはなし

茗溪女史

わたくしは生物學に就いて特別な智識を有つたものてはありませんが先頃農科大學の渡瀬博士が明治女學校でこの螢に就て講演されました時、拜聽に參つて、其折此の博士の新らしく發見された學説に感服しまして御話の要點を筆記して置きましたが、今回女學世界の乞に應じて彼是參酌して書いて見ました

○螢の種類

凡そ日本の國で南は九州の涯から北は奥州の涯まで螢の出ない土地はありません、其の螢には大抵二種類がありまして即ち躰の大きいのを俗に源氏螢と云ひ地方によりては一寸螢、熊螢、山吹螢、宇治螢、などの異名もあります、又小形なのは通常平家螢と云ひ、幽靈螢、姫螢、糠螢、などの別名があります、そして源氏螢は多く清水に沿て發生し、平家螢は汚水の附近に棲息します、猶この外にもいろ／＼種類がありますが、これは動物學者でないと一寸分りません、そしてこの螢は日本ばかりでなく外國にも澤山種類がありまして南米や亞弗利加の或地方へまいると躰の大さが五寸以上もあるやうな螢が居ると云ふ事てあります、しかし又琉球邊

に產する螢は頗る少さなものでやう〳〵日本の平家螢の半分もない位だそうですが其の割合に光は甚だ强くて發光器も精巧であると申します、今此の源氏螢に就て申しますと雌は大きいが雄に比ぶれば運動力が少く雄は少さいけれども活潑であつて自然其發光力も大きいそうです、そこで通常螢の發生期といふのは五月下旬から七月上旬の間で一時は頗る全盛を極めて、螢の生活中最も發達した時期で產卵も丁度其の期にせらるゝのであります。



○螢の生活

螢は如何にして生ずるものであるか、動物學の上より申せば螢も猶他の蟲類と同じく一々卵から生るゝものであつて決して腐草から變ずるものではありません、古しの曆書などに「腐草螢となる」などゝ書いてありますけれども、これは學術の發達しない時代の人民が不充分な觀察から來た迷說であります、數十年來歐米學者の精密な觀察と其實驗とによりますれば生物は生物から生れ來るものであつて決して偶然に泥土や腐草から化して來る

ものではありません、俗に魚蟲類が汚水沼澤に湧くと申しますのも矢張迷信て唯だ汚水や沼澤などには魚蟲が棲息するに都合よく出來て居るからてあります、恰も地面に雜草の生へるのと同じ事てあります、扨て然らば螢は如何にして生ずるか、それは無論卵てあるそして其の卵は粟粒くらいな極めて小なものて、その卵を草の根に近い枯葉に產み付けるのてあります、其の卵も親に似て光を發するから夜間螢の居る草の根元を透して見ると無數の小さな光が見へて頗る美しい、卵は始め黃色をして居ますが段々と黑色に變じ、發光の度も強くなり生れてから三週間乃至一ヶ月て孵化し恰も孵りたての蠶のやうに一分位な髮の毛ほどて黑い小蛆になります、それが即ち螢の幼蟲で尾端に發光器を有し夜になると、これがまた美しい靑い光を放つのであります、其の幼蟲は晝間は草の根に近い暗い處に潛伏して夜になるとノソ〳〵這ひ出して近傍を彷徨ひ蝸牛や蛞蝓などを捉へて食ひます一躰螢は草木の露をすつて生命を繼ぐもの ですが、其前生を考へますと肉食動物なのです、そして霜が降る頃になると土中に深く蟄居閉門して春が來れば又活動を始め後ちには長さ一寸ほどにも成長し、發光の度も從つて強よく、暗夜に十數間をはなれてゐても明かにこれを認めることが出來るのです、其軀は黑か茶褐色で、若し外物に觸れると忽ち刺狀の防禦器を左右に突出し松脂と薄荷をまぜ合したやうな極めて強い臭氣を放ちますが平常にはその防禦器が躰內に收縮してゐるので一寸見へません、さてその幼蟲が四月下旬から五月上旬になると上簇蠶のやうにまる〳〵と肥へましてモウ澤山の滋養物を食ひ足つて仕まふと又地中に潛り込んでそして楕圓形の小さな穴を作り蛹と變化し餘り動かないで休んでゐます、そしてその蛹の時代にも又美しい光りを放つので、全身が薄黃色であるから、尻の光を透して全躰の構造がアリ〳〵と見えますそして其の光は螢のやうに明滅せず常住不滅のものですから一層美しく滿身爲めに玲瓏として恰もランプのやうてあります、こうして二週間も經ると蛹蟲の躰中の機關や、外部の構造が悉く完全

して遂に小窟を出て地上に這ひ上り漸次に草莖を攀ぢ登るやうになつて通常の螢に變化するのであります、それ故螢の一代は四つの段落に分れてゐます、即ち第一が卵、第二が幼蟲、第三が蛹、第四が成蟲即ち螢になるので、さて我々の眼では螢は唯夏の夜だけ出るものゝやうに見へますけれども、決してそうでなく一年中螢の光は地球上絶ゆる事はないのであります、そのわけは以上四段の經過をめぐりめぐツて間斷なく、第一初夏は無數の螢暗を照らし、死しての後は卵光其跡を續き、仲夏より秋にかけ、冬より初春に至る長い間は幼蟲が輝いて、それから晩春になると例の蛹の光が繼續してまいる、つゞいて初夏となれば螢は再び出現して夏の夜の美觀を呈するのであります。扨て螢は一年切りのものであつて蛹が地を出で二三週間もすれば産卵をする、産卵がすめば螢となつて漸次死滅して新陳代謝を爲すのでありますが、玆に造化の精妙とでも申すべきは螢の卵の光を發する事で、親の遺傳とは言ひながらまだ母螢の躰内に存して居て充分の成熟を遂げない幼稚の卵でもそれを取つて暗の夜にすかして見れば矢張り薄青い光を具へてゐるといふ事であります。

○螢合戰

草木中で螢の最も好くのは柳だそうで多分此の木には水氣が多いからでありませう、河岸などで柳と他の草木とが混つて生へてゐるに螢は柳にばかり止まります河邊に坐つて景色を眺めて居ると夜るの二時頃、もう螢がとぶのをやめると柳の木の枝には無數の螢が止つてまるでダイヤモンドの花を咲かしたやうであります。昔しから我が國で畵師が螢を畵くに柳を見せるのは自然に叶つてゐるやうであります、又螢は他の光を嫌ふ動物で月夜などには光りません、しかし小さな火などを見ると却つて近寄つて來るもので煙草の火などを同類に見誤る事があるそうです、一躰螢が夏の始めに發生して火を放つのは何の爲でありませうか、これは即ち同類生殖の爲めなのでその光は雌雄を呼び雄が雌を呼んで交尾する媒となるのだそうです、それで昔しから螢合戰などゝ唱へ今でも多く人の知る處であり

ますが、これは敢て螢が合戰などする譯のものでなく交尾中の螢が何かの關係からこう集合するので、それはその團集を捕へて雌雄兩性の數を見ればすぐと分ります、兩性の數か平均して居れば即ち交尾に相違ないのであります、

○螢の發光する理由

扨て此の螢の光と云ふものは何であるか昔し、歐洲の學者中には螢の光を一種の分泌物と考へ、螢が食物を消化する際胃のはたらきに依て光る要素を食物から分離し、發光器に傳へて外界に射出するものと考へたり、或はダイヤモンドのやうに螢は晝間太陽の光を躰内に吸入し夜間再び之を外界に放散するものだと云ひ、或は又た電氣燈のやうに螢の尾端の關節が相互の摩擦で光を發するものだとも云ひ、兎角其解釋を理化學に求めたのです、一向に成就しなかつたやうですそれから段々世が進んで生物學が漸く發達すると螢の發光器も稍や精密な研究を受け、有益な著述も出ましたが、まだ發光生理の眞相には通じなかつたやうです、螢の光は何であるか、火とすれば毫も熱がありません、併し螢を捕へて之を潰してもなほ淸い光がブツ〳〵と出る、暗夜其尻尾を以て壁に畵や字を書くとアリ〳〵と光る、光が薄くなつたら水をかける、すると又たもとの通りに光る、螢を捕へて水素瓦斯、炭酸瓦斯やうな不燃燒氣中に投ずると光からないが、大氣中に取り出すと又た光ります、そこで螢の光は他の燃性物質と同く妙な作用に依りて酸化燃燒して生ずるものであるまいかとは渡瀨博士の發明であります、それから博士は種々な研究をされて發光器部（螢の腹部は七個の關節よりなり其下部の第六第七の部に發光器を有するものなり）の細胞を顯微鏡で檢じられてそれに就て極めて有益な生理學上の講說をなされました、けれども悉しい事は記されませぬ。が其の要領をかい摘んで申しますと、その細胞は一種の脂肪質であつて、それに數多の氣孔が通じてゐる、それで螢が呼吸する時その空氣が氣孔を通じて發光器內の細胞に浸入すると細胞中の酸素が脂肪質に觸れて燃燒するのであるそうです、螢が發光す

る時のありさまを顯微鏡に照して見ると泡のやうにフツ／＼と細い輪になつて光りその輪が次第に膨れて發光器全躰が一面の光りになるのです、即ち酸素が氣孔から入り始めると氣孔に近い部分からして次第に燃へ廣がるから此の現象を呈するのだそうです、それ故螢の光は平均一分時間に二十六回の明滅をすると云ふ事まで研究されたのであります、

〇螢の翫賞

これも博士の御話でありましたが世界中で凡そ日本くらい螢を賞翫する國は無い、それ故螢で生計を立つる人間もあつて、彼の江州石山邊へ參ると螢の名產地でありますから螢の卸し問屋が何軒もあつて、年々何百萬疋の螢を捕へて京大阪へ輸出する、大きい問屋になると七八十人も捕螢を使用してゐる、上手に捕ふるものは一夜に三千疋以上も捕ふるそうです、そしてそれを捕へるには螢が木に止つて光を放ち始める捕螢者は木を搖つて螢を落し、拾つて自分の口中へ投り込むのです、何故口へ投り込むかと云ふに元來が弱い蟲であるから取り扱が荒いと直に死ぬるけれども口の中は軟いから怪我をさす事が少ない、それで螢が口中に一杯になると手に持つた袋に吐き出して納める、これは重に夕方の取方でそれから夜半過ぎて螢が飛ぶのを止めて草の上に止つて光を減ずると捕螢者は竹箒で葉の上を掃いて再び光を放たせて捕へる、扨て捕螢者が之を問屋に持込むと問屋では健康不健康を撰り分けてそれぞれ注文通り華客に配達せしめる、その華主と云ふのは重に京阪地にて京阪の人は此の地から仕入れて翫賞するので大阪の道頓堀では大きな蚊帳の中へ無數の螢を放して見せ物として、客に螢狩をさせるのがあるそうです、それから又螢の死骸は藥種屋が買つてトゲ拔の藥にするとの事です。

（完）

挿花のしほり

捻華庵主人

▲性は不易、姿は流行

菖蒲のすら〳〵として嫌味の無いのも、山百合のゆら〳〵として萱や薄の中に風に吹れて居る優しい姿も、凡てめい〳〵そのもの〳〵の稟性で、風情も趣味もその特有の性情の中に見なければならぬ。甲は勇士が手綱を控へて鞍壺に手を掛たる有樣、乙は浴後の美人を見るにも比喩たい。

それで今花を挿むにもこの性格、趣情を失はぬ樣に、百合花は百合花らしく、菖蒲は菖蒲らしく挿まなくてはならぬ。このらしく〳〵と云ふことは挿花の上に於ける唯一の金戒であらう。若し、菖蒲を挿して百合花に類し、百合花を挿して菖蒲に似たるが如きは終に男装せる婦人、女装せる男子を見る樣で、骨稽とか異樣とか評を免れぬ。世の挿花を弄ぶものや教ふるものは、その性情を云はずして先づ姿を云爲するが多い、花の姿は半月形に造らねばならぬ、眞は添より長くせねばならぬ、内添の挿し場が違ふの眞の曲りが足らぬのなど申して何の花も何の草も凡て一定の鑄形に入れやうとする。その結果は骨を折て彼の女装の男子や男装の女子を作るのである。然ればとて一概に花の姿を構はぬと申すのでは無い、前後輕重の境を誤つて居ると云ふのである。性情先づ整ふて而して姿に及ぶのが順序であろふ。



一寸考ふる時は眞は瓶花中で一番丈が長く、添、留と段々に低く成るかの樣に思ふ人もあろふが、それはそふでは無い。眞は長く……脊の高いのみが主では無い。全變の主體と爲るが目的で……今少し細かに申さば瓶花中の主人公と成るのが目的である。決して丈の高低や枝葉の疎密に拘るべきではあるまい。或時は長く或時は短く、又或時は直ぐに或時は曲りたるも、それは枝ぶりの工合や挿し交ふる他の枝の配合等に由るので、決してこれを一樣に申すことは出來ぬ。況して草木は陽に向つて發育するは自然の趣勢てあれば、樹下の下草や垣根に添ふて植えたる花卉は、

種々の變化を來して眞が短くして添の却て延びたものもあろふ、眞のくねり歪みて添の直ぐなものもあろふ。然りとて草木の特有する性情は失はぬ。即ち性は不易で姿は流行たる所以であつて風情趣致はその枝や葉の中に存することを忘れてはならぬ。

然るを、いつも〳〵眞は長く添は短く、花の姿は千編一律の半月形で添の挿し場所も眞の挿し場も一定の所に定めようとするのは、自然を傷ふと申すもので、これ位、無趣味なるものはあるまい前栽のくさ木迄こゝろのまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。とは、花道の上にて適用さるべき格言であろふと思はるゝ。

▲花の三義

花の三義を姿の上に就てのみ云ふは大變な間違ひてあろふ。世の挿花者の說く所の三義は眞、添、止、若くは



根〆て、枝の眞は瓶中の最長の枝、止は最短の枝、添は眞と止との中位で挿し所は眞が添と留との間に位し、留は瓶花の最前に挿すと云ふ、これが挿花の三義であると敎ふる。然しそれは言葉と文字の名稱に惑ふので、何も三義は枝の長短や挿場の位置に就ての法式ではなかろふ。

即ち前にも申す如く、眞は一瓶中の主位で大立物、止は根〆とも云ふので樹木で云へば下草である、眞とは形狀趣味、特種の風情を持つて瓶花の美を添ふるもの、添は眞に附隨してその美を補ふものであつて、それを單に枝の長短大小を規定するの名稱と思は誤りてある。必竟これは名稱が惡いから、然樣の誤解を來す。私はそれでこの名稱を改めて、主從客の三義に致したいと思ふのである。

今水盤に杜若と蘆と外に河骨か何かの水草を交へ挿すに杜若は丈短くとも一瓶の主人公でこれは主位である

蘆は丈長くとも杜若に從ふてその美を補ひ助くる丈の目的であればこれは從である、それから河骨が客で、即ち瓶中に特別の異彩を添へて居る――が或は頑なる挿花者は杜若と河骨の生け合せは法に無いとか何とか云ふかも知れぬ、然しそれは餘り規則に拘泥し過ぎたる考であろふ。濃紫の杜若、嫩綠の若蘆黃金て鑄た樣に麗はしい河骨、色の釣合、葉の權衡。申し分はあるまい。若しこれを廣間の大床の傍か、歐風の客間の卓上にても飾るとするに、その風趣は彼の、人遠く水草清きあたりに徘徊する樣であろふ。又河骨に代ふるに何か浮草樣のものを少し計浮かするも面白い。それは斯樣と極めるよりも臨機の處置が肝要である。即ち一瓶の花は主と從で組み立てゝ客で以て美を飾る、即ち客は所謂畫龍の點睛と云ふても好かろふ。枝の長短、挿し場の前後などは寧ろ之を法則の外に排斥し去らざれば恐くは眞に花木の美を瓶頭に寫すことは出來ぬであろふか。



當季の花

忍冬

垂れものなれば掛花器か釣舟、殘月形の花器に草躰の姿に挿す、枝數多きは騷がしくて惡しゝ、多くも五本、少けれは二三本にてよろしからん。花も滿開二三分、莟七八分が見晴えあり、斯樣な閑寂な花は煤竹の籠など殊に配合よきものなり茶席などには竹の置生に二條三條さしたるもおかし。水揚は根元を火にて燒き水につけ置けばよし。

百合

山百合、姫百合種々あれども山百合は投げ挿が一輪挿に風情あり、花器は古銅か、籠ならでは配合わろし。姫百合を竹器にさして、かぐや姫に擬したる俳人也有、これは座興なりと誰やらが申しゝが實に姫百合はさゝやかなる掛尺八などに挿したるが極めて相應しきなり。添外し鬼百合花は添外づしか眞の花形が

よろしく花の數も三五本までなり、主位に半開一本、從位に莟一本客位に滿開、一本これ位にて充分なり、多きは花串しげに見ゆ。花器は寸筒か古銅器の皷胴式など凡て取合よし。

百合類の水揚は切り口を火にて燒き置けば能く八九日を保つべし。

夏菊

秋の菊よりは風情も品致も少し、秋のは掛、置兩樣ともに面白味あれども、夏菊は掛花には相應しからず、秋の花よりは丈も高く挿すが夏菊の情なるべし姿は巽の花形、花器は籠か竹器、銅器等主位には莟勝の枝、從位は半開き、客位に滿開のもの長短取り交え三四本挿すべし。枝は少きより多きが却て風情あり。水揚は矢張切り口を火にて燒く、然し存外に水揚の難きものにして、萎れ易し。



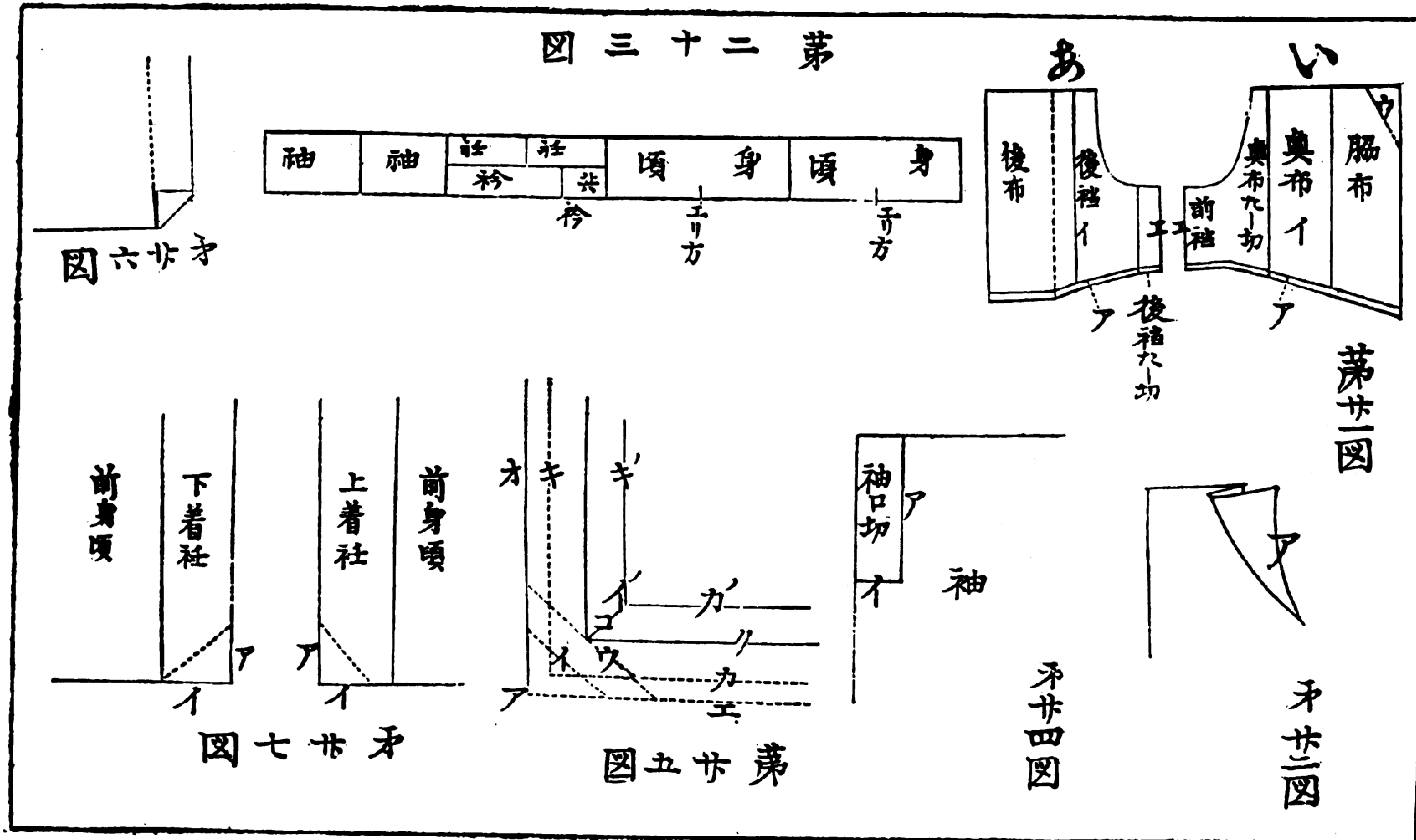
裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子述

袴の仕立方（つゞき）

前號に於て裏表を合せたまゝで申上たがそれより縫込を裏の方に折て引かへしまして表を二分五厘ばかり裏より長くして裾の折をつけます、即ち第二十一圖は袴の裏地の方を見るもので、同圖の(ア)表の切の裏にかへりてをる所(イ)は裏の切です、か樣にしてこの裾の所に躾をかけます、つまり此圖の(あ)及(い)の樣なものが左右てきるのです、次には(あ)の方の(ウ)の所 即ちナヂを縫ひます、この時は表の切は標より一分先を、裏は標の所とを合せて、裏の切の方には薄き布即ち金巾樣のものか又は紙を三分位の巾に切りまして裏にあて待針にて止て縫合せます、この縫合せ

のときなるべくは裏の方を少しつる加減にした方がよろしい、縫ひ終りたらば、縫込みを裏に返て折をつけ引返ますと表の切が裏よりも五厘ほどフク樣になります丁度裾の所で表の切が裏にフクのと同樣になります、こゝに躾をかけます、左右とも出來上りたらば、脇布にて後布をくゝみ、裾の表裏の合せめをよく合せて待針をうち下より相引の標までを縫合せて、よくその針止をいたし、其糸を切ずに直に笹ヒダの縫込みの所即ち第二十二圖の(ア)第二十一圖の(ウ)の所を縫ひます、こゝもオチと同樣に裏を多く縫ひ込み裏の切の方を少しくつる加減にして縫ひ合せ引かへします、左右ともか樣にして縫ひ終りましたらば次に右の方になるべき第二十一圖の(あ)と(い)の切の(コ)と(エ)を合せて前襠の切にて後襠をくるみてよく裾の合せ目を合せ、裾より四ツ縫ひにして上の所まで縫ひまして引かへします、左も亦右の通りに致して裾の方より縫ひ合せ五寸ばかりは四ツ縫にいたしあとは、裏表別々に縫引かへします、次に右の方をとりまして、マタの所を裏表合せて躾をかけてとめ、左の方の切にてくるみよく縫目を合せて、こゝを四ツ縫に致します、(よくこの縫合せの時に注意しませぬと折々ネヂレるとがあるから習ひはじめの人はよくにきをつけて縫ていたゞきたくあります、)次にヒダをとります、ヒダは度々前に申上る通りですからこゝに省きます、が、これは單へ袴と違ひまして、ヒダをとるときに裏表別になりましてしにくいですから、ヒダの各部の標がつきましたらば折をつけませぬ前に、其ヒダに折るべき所に躾にて表裏の切をつれぬ樣にとぢつけ置きまして後にヒダをとります、其他紐のくけ方、附けかた、腰板の拵へかたつけ方等少しも單袴と異るところはございません、ただ裏腰の切が單へ袴にては表の切を用ゐますがこの袷袴にては裏地を用ゐますたけがちごふ所です、以上申上た袷袴仕立かたは表と裏との用布の巾がちかひました方ですが、もし表裏とも用布の巾の同樣のものなれは縫ひ目は皆四ツ縫ひに致します、先つこれて袷袴は仕立上りました、其仕上げ等もまた單へ袴と同樣です、この次には時候にも向ひます


第二十三図
袖
袖
衽
衽
衿
共
衿
頸
身
エリ方
頸
身
テリ方
あ
い
後布
後襠
イ
エ
前襠
奥布たち切
奥布
イ
脇布
ウ
ア
後襠たち切
ア
第廿一図
第廿六図
前身頃
下着衽
ア
イ
上着衽
前身頃
ア
イ
第廿七図
オ
キ
キ′
イ′
カ′
コ
ク
イ
ウ
カ
ア
エ
第廿五図
袖口切
ア
イ
袖
第廿四図
ア
第廿二図

から

單衣重ね

に就て御話しいたしませう、裁ち方は第二十三圖の通り、積り方は袖丈の四倍と身の丈の六倍とを加へて其内より一尺（衽下りの總尺）を減して用布丈といたします、この重ねをつける位のものは品物もよきものになりますから、身の丈其他を充分に見積ねばなりません、袖丈は其着る人によりて差がありますが、身の丈は大抵四尺以上に致します、次に重ねの方即ち下着の方の裁かた、積方も上着の方と同樣に致します、袖口切と裏衿とは同樣のものを用ゐますのが昔よりのきまりでありまして、上着の袖口より下着の袖口は色が濃なるを例といたします、裏衿もその通りで下着の裏衿より色の濃きを用ゐました、じかし今日の樣上着の袖口切い、トモ切に致しますときは、之は別に切を積りますか、または共衿よりとるか、いつれかに致さるればなりません、標のつけ方は、なみの單衣と同樣であります、單衣標のつけかたは前巻に委しく述べてあります、扨て縫ひますには、初めに袖をとりまして、袖口切も山と袖との標を合せて待ち針をうち袖の切と手前に袖口切を向ふに持ちまして、袖口アキだけを縫ひ合せます、このときは、袖の切の方を極々少々タルマセル樣に致します、次に袖口下を袷せの袖の樣に（袷せの袖の縫ひかたは前巻に委しく述べてあります）二寸ばかり縫ひます上着の袖も下着のも左右とも只今の樣に縫ひまして、上着の袖口切は第二十四圖の（ア）の所だけ縫ひ込を折らずに丁度單衣の八つ口の樣に、なるべく細き糸にて四分位に表に針目の目立ぬ樣に絎けます、下着は第二十四圖の（ア）及（イ）の袖口切の縫ひ込みを折りこんで周圍殘らず小針にて絎けつけます、この糸もやはり極々細き糸を用ゐます、左右この通りに出來上りましたらは、上着と下着との袖を山標の所にてよくそろへ、袖口下の縫のこりより此度は四枚共に縫ひ、袖巾の標をつけて、やつくちを縫ひ引かへして、袖下を四ツ縫ひにいたします、（よくか樣のときには同じ袖か出來易うございますから注意せねばなりません、）次に衿をとりまして立

褄をくけ、裾かけを致しますが、通常のと少々ちがひますから一寸申上ませう、先づ褄先きの所は額ぶちの様になりますので、即ち第二十五圖の如く始めに(ア)の先より(イウ)の點線の通りに折り、(イ)の點線の所が(イ)の角にゆき、裾の(エ)の所を(カ)の點線の所にて折り込み猶(ク)の所を折りて、(カ)の點線の所は(カ)にゆき、立褄は(オ)を(キ)の點線の所にて折りこみ猶(ク)の所にて折りまして(キ)は(オ)にゆきます、そして(コ)の斜の所は額ぶちの角を様に兩方より切がツキ合せになりますので ございます、これより立褄は四寸ほど、裾の方はのこらず絎けます、上着下着の衽は左右ども か様に致して置きます、次に上着の身頃をとり背脇を縫ひ (紋の所はとりわけ注意して縫ふ様にせねばなりません、)裾がけを いたします、裾がけのときにはもし脇縫の縫ひ込みが多くありましたら裾まてわりまして裾がけを いたします、次は下着の身頃をとりまして一布毎に皆裾がけを致しまして、背脇をぬひます、背脇の縫ひ込みは、綿入の裏の様に致します、(裾がけは此のきものを着て自分の身につく方に折りかへすので並の單衣の様にいたします、)次に上着と下着との背脇の縫ひ込みと丈とをそろへて縫ひ込みを綴ち合せます、丁度衿の表裏を合せました通りに致します、去かし袷とちがう所は下着の背と脇の縫ひ込みの裾口の方は第二十六圖の(ア)の様に三角に折りをつけこゝを絎けつけて後に背脇を綴ち合せるのでございます、次に身のヤツを縫ひ、袖をつけます、これが亦袷と同様でございます、次に前身頃の縫ひ込みを上着と下着と二枚とも躾にてをさへ前巾の標をつけ、上着と下着の衽にて前身頃をはさみて、四ツ縫ひにて衽をつけます、次に立褄の絎けのこりの上の方を相褄より二寸程上まで折をつけ、上着は立褄の絎け殘を二つ折り(三段に折らずに並の單衣のヤツクチの様に折ります、)下着は並に三つ折りにして上着の立褄とよく揃へて、待針をうち、上着下着を合せて單衣の立褄を絎る様に絎けつけます、次に上着の衿先きを縫ひて引かへし、この裏衿の方に下着の表衿を綴ちつけ、衿山に待針をうちて背の表の山に其針にてとめ、身頃の向に下着の

裏衿を一枚つけてともに待針にてとめ衿をつけ下着の衿先きを縫て縫ひこみを裏に綴付け引かへして並の單衣の衿の樣に上着も下着も別々に絎けます、次には第二十七圖の通りに衽先きに白糸（この白糸は二本用ゐるのが例でございますか畧して一本を用ゐてをります、）を以て立褄は褄先より四寸即ち圖中の（ア）の所四寸衽巾（イ）三寸五分として斜に、上着は小針にて二針づゝ五針、下着は小針に一針づゝ五針出して、衽をとぢ合せます、兩面に出ぬ大針は上着下着の間に出るのでございます、これにて縫ひ上りましたからヒノシをかけよく疊みつけて、壓をきます。

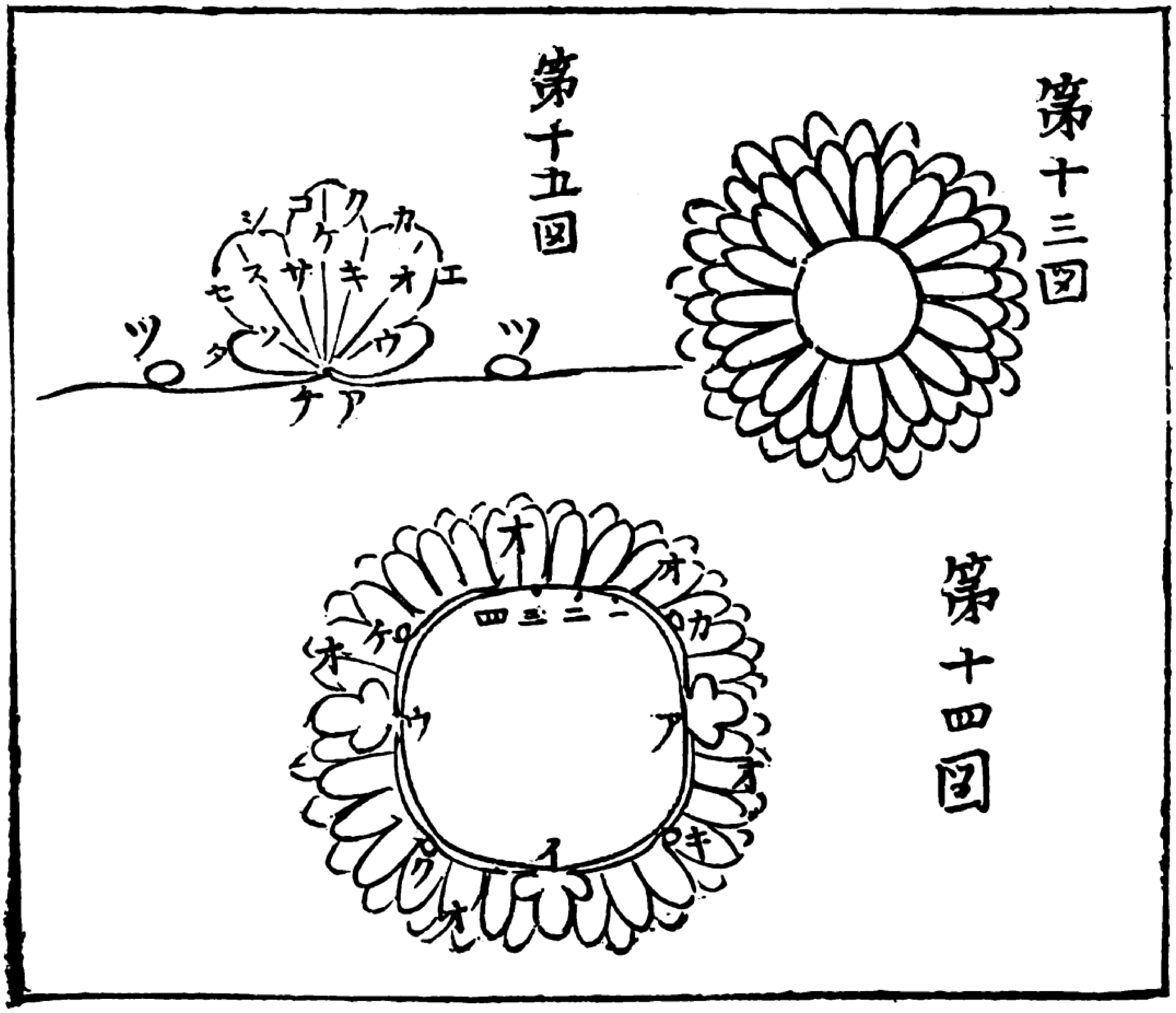
編物實習

女子職業學校教員　豊原繁尾子述

▲菊花形巾着

の編方に就て御話しを致しませう、これは初めに五つの鎖を編みましてそれより初めの目にヘーケルを入れ直に糸を引出し丸くいたします、（前に度々花瓶敷や帽子や其他の初めの編方で致しました通りでございます、）次に其上に糸を一本すくひましては帽子編みをして平に丸くなる樣又伸縮のない樣に目をふやして編でまゐります、か樣にして編み上げた所の丸みの大さが五分位になりましたらば次の側は帽子編みの上の目の手前を一本すくひまして糸を一寸引出し直に其ヘーケルにていとをそのところより七分位の長さに引出します、次も亦この同じ目に前の通りに編みまして糸を七分位引出します、（つまり前に編である帽子編みの上に糸を引出してまゐる編方が二つはいるのでございます、）又次には只今の次の目即ち前の側に出來てをる帽子編は目の手前を一本すくひ糸を引出し又直にそこより糸を七分位長く拔出します、次に又同じ帽子編みの所にこの編み方（糸を引出す編方）を入れます、か樣にしてこの側一回致します、さてこの七分位に糸を引出しますその長さが自然長短の差が出來易うございますから其引出した糸はヘーケルにかけ置きましては次を

編み又それをヘークルにかけ置きましては次を編みて其長さを揃へる様に致します、而し此一回ずる間残らずヘークルにかけて置きますわけにはまゐりませんから四つか五つもヘークルかけて長さを揃へてまゐりそうしてヘークルにかゝる糸が五分位になりましたらば一先づヘークルを抜きとりまして次の引出しの糸の長を揃へるために前にヘークルにかゝりてをりました糸を再び二本ばかりヘークルにかけて次を編でまゐります、左様いた



第十三図　第十四図　第十五図

しませぬと長短不揃となりまして最も見にくきものができますから御注意のため一寸申上て置きますから其つもりで御編みになる様に願ひますさて次の側になりますと只今の側が帽子編の上の目の手前の目をすくひましたのでございますからこの度は向ふの目をすくひまして帽子編を致しますが、よく注意して伸縮のなき様目をふやしてまゐります、又次の側は只今あみました帽子編の上の目の手前をすくひまして前の通り糸を長く引出す

編かたで一回致します、次はまた前の側の帽子編の向ふの目をすくひまして帽子編を伸縮のない樣に目をふやして一回致します、か樣にして編みますことおよそ十回も編ますと直徑二寸位の大さの丸き菊花の形ができます、即ち第十三圖の通りのものでございます、此形の一番外圍の帽子編みで終るのでござります、次には此花の蕊になるものをづくります、これは極細の毛糸の黃色のものがよろしうございます、さてそれを指一本に三十回位巻つけまして、其中央を木綿糸にて結び其巻つけた糸のはしを切りますと菊花の蕊の樣なるものができますからこれをこの菊花形に編上けました其中心の所（帽子編みて五度ばかり編みましたところ）の表側に離れぬ樣に木綿糸にてよく結びつけます、次には此菊形の裏側につくものを編みますがこれもやはり菊形のごく初めを編みました樣に最初に五つ鎖編みをいたし之を丸くして帽子編をいたします、が、此ときは伸縮のなき樣注意して漸々に目をふやして編てまゐりまして、其大さが菊花形の大さよりは少しく小さめの形になりましたらそれにてとめます、次にこの圓形の裏側と菊花形の表とを合せまして（互に裏を中の方に致して）菊形の方を手前にして持ち其圓周の十分の七丈を帽子編みにて表裏を合せて、三部分丈を離して置きます、こゝが巾着の口になります、これで大概巾着の形ができました、この糸の色は菊の花に相應するものを用ゐたいのであります、即ちもゝ色、白、赤等でございます、次には飾でこれは菊の葉の意にて編ます、それ故、毛糸の色は萠黃を用ゐます、この葉は只今菊の花の部と裏とを合せました帽子編の所に編みつけます、菊花の形の方を手前に持ちまして初めに帽子編みにて一つ編みつけまして、七ッ鎖編みをいたしまして、そこを左の手の指にておさへ更に八つの鎖編みをいたし指にておさへて居りました目にヘークルを入れて直に引出しまして丸き形をつくり又六つ鎖を編まして第十四圖の（ア）（イ）（ウと三つの位置をはかり（凡そ此帽子編にて裏表のつぎ合せた部分を三つにわりました所）（ア）に帽子編みを一つ編み三つの鎖編をいたします、次に長編

み一つを同し目に入れ二つ鎖編を致します、此度は糸をヘーケルに二度かけまして前と同し目に入れてゆるく糸を引出します、（長編みは糸を一度かけて編みますがこれは二度かけますからいはゞ長編みの重りました様なものでございます、それゆへ糸を一度引出しても猶ヘーケルに糸がかゝりて居りますから又今一度引拔きます様になります、）又鎖編二つを編まして、長編み一つを同し目に入れ三つ鎖を編まして此度はヘーケルに糸を三度かけましてまた前と同し目に入れゆるく引出します、（つまりこれは長編が三つ重りました様なもので糸を初めに引出しましても猶二つの糸がヘーケルにかゝりて居りますから又糸を引出し猶殘のヘーケルにかゝりて居る所と引出します、）又三つ鎖編みをして長編し一つを同し目に入れ鎖二つを編みましてヘーケルに二度糸をかけ同し目にヘーケルを入れて糸を引出し二つ鎖を編まして、長編一つ、三つ鎖編をして帽子編一つ皆同し目に入れて編みます、即ち略圖を以て示せば第十五圖の様なもので（ア）帽子編み、（イ）三つの鎖編み、

（ウ）長編、（エ）二つの鎖編み、（オ）糸をヘーケルに二重にからみて編みましたもの長編みの二重の様に編ましたもの（カ）二つの鎖編み（ホ）長編み、（ク）三つの鎖編、（チ）三重に糸をヘーケルにかけて編みましたもの、（コ）は（ク）と同し編みかた、（サ）は（キ）と同様、（シ）は（カ）と同様、（ス）は（オ）と同様、（セ）は（エ）と同様、（ソ）は（ウ）と同様、（タ）は（イ）と同様、（チ）は（ア）と同様に編でまゐります、（ツ）は八つの鎖編みを丸くいたしたもので先つか様なわけになります、次に又七つ鎖を編てそこを指先きにてをさへ八つの鎖編みをいたしてそれを指にてをさへたる目にヘーケルを入れて丸くいたし又六つの鎖編みをいたして巾着の口と相對するところ即ち第十四圖の（イ）の所に第十五圖の（ア）（イ）（ウ）（エ）（オ）（カ）（キ）（ク）（ケ）等の如き順序に從ひまして同圖の（ケ）まで同じ目に編みまして、葉の形をつくり又次に鎖あみ七ツをいたして指にてをさへ其さまに八ツの鎖編みをして指にてをさへたる目にヘーケルを入れて絲を引出して、丸き形をつくり又鎖つを編みまして、終は巾着の口に帽子編にてとめます、只今まて申し上ました飾りを編み

上げました所は丁度第十四圖の通りで、(ア)(イ)(ウ)の所に葉の形の飾、(エ)巾着の口、(カ)(キ)(ク)(ケ)は第十五圖の(ツ)と同じものでございます、周圍の(オ)と記しましたは表の菊花の瓣の裏より見ゆるのでございます、(此第十四圖は裏より見たる所でございます、)次には同じ萠黄色の毛糸にて八十ばかり鎖編をいたし其上に猫帽子編にて一通り編みまして之をひもに致します、それより巾着の口を第十四圖の如く(一)(二)(三)(四)と等分に割り(二)と(三)との所に紐を通し輪の方を裏に出し紐の先を表に出しをきます、次にこの萠黄の糸をとりまして一本の指に四十回位巻きつけその眞中を木綿糸にてかたく結び其毛糸の端をきりますと、小さき丸形のものが出來ます、これを紐の各の先によく結びつけます、この結びつける糸は目だゝぬ樣に注意せねば手ぎわがよくまゐりません、この丸形の毛糸の球が蕾の樣に見なしますのでございます、而して後紐の先きを互に結び合せて置きます、先づこれて巾着は出來上りました。

正誤　本誌第三號一二三頁に挿入せる「たれ帽子」の圖は編物科に入るべきを活版所にて誤りて裁縫科に入れたるものなれば爲めに讀者は購讀上迷惑を感じたるならんと存じ此に正誤いたし候

花むすび

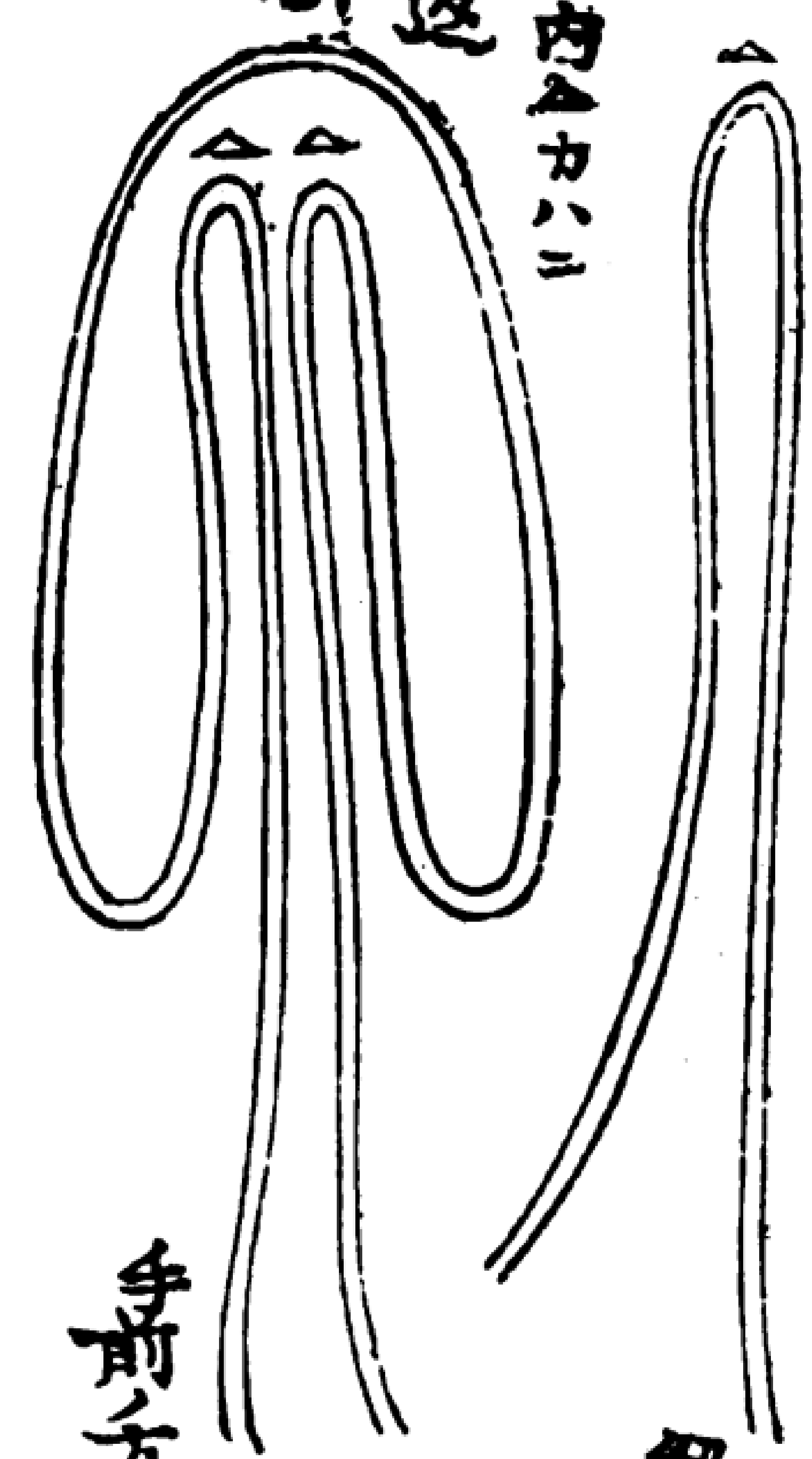
石井泰次郎

花むすびとは糸を結びたる樣の花やかなるに由ての名稱にして、女子の一技藝として、古より書かく事と並びて、貴人の姫君たちの習ひたまひし學科なり、

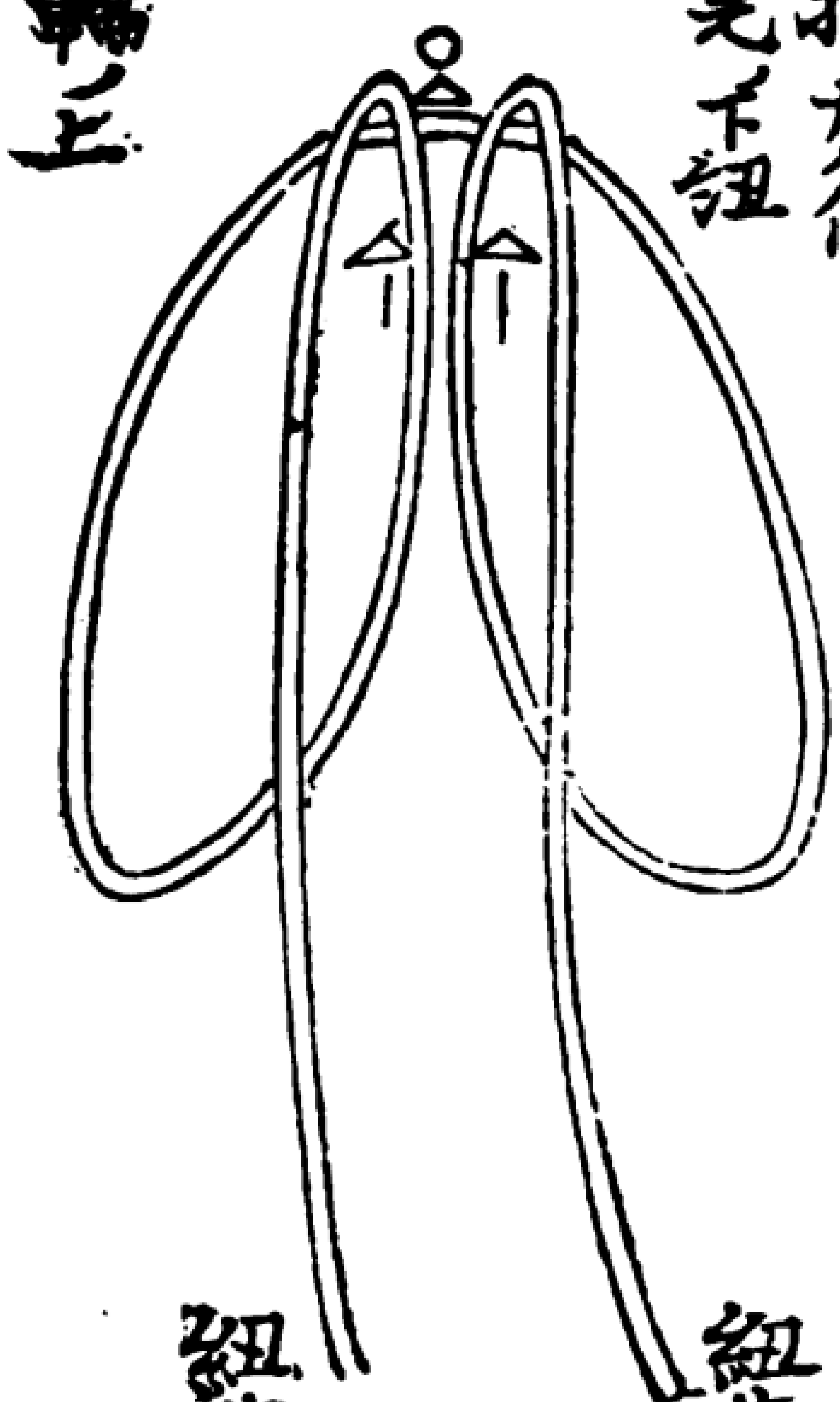
さて此花結の、實を結ぶまことの物まれになりゆきて、現今はそらごとの造花のみ世に、習ふ者の多きが如くなれることそうたてしはな結は、禮節の學科にして伊勢流、小笠原流の傳へあり、

單に糸のあやのみだれずして、其故實をたがへず、今つくり出せしは古よりまされるを要とし、其をしへ方は、初の糸のかけ方より、古の書の寫しのみにとゞめずして、百千度も結びこゝろみての後に、其のつぎつぎを示して、結びあがりの花やかなるをわが教授法の目的とす、

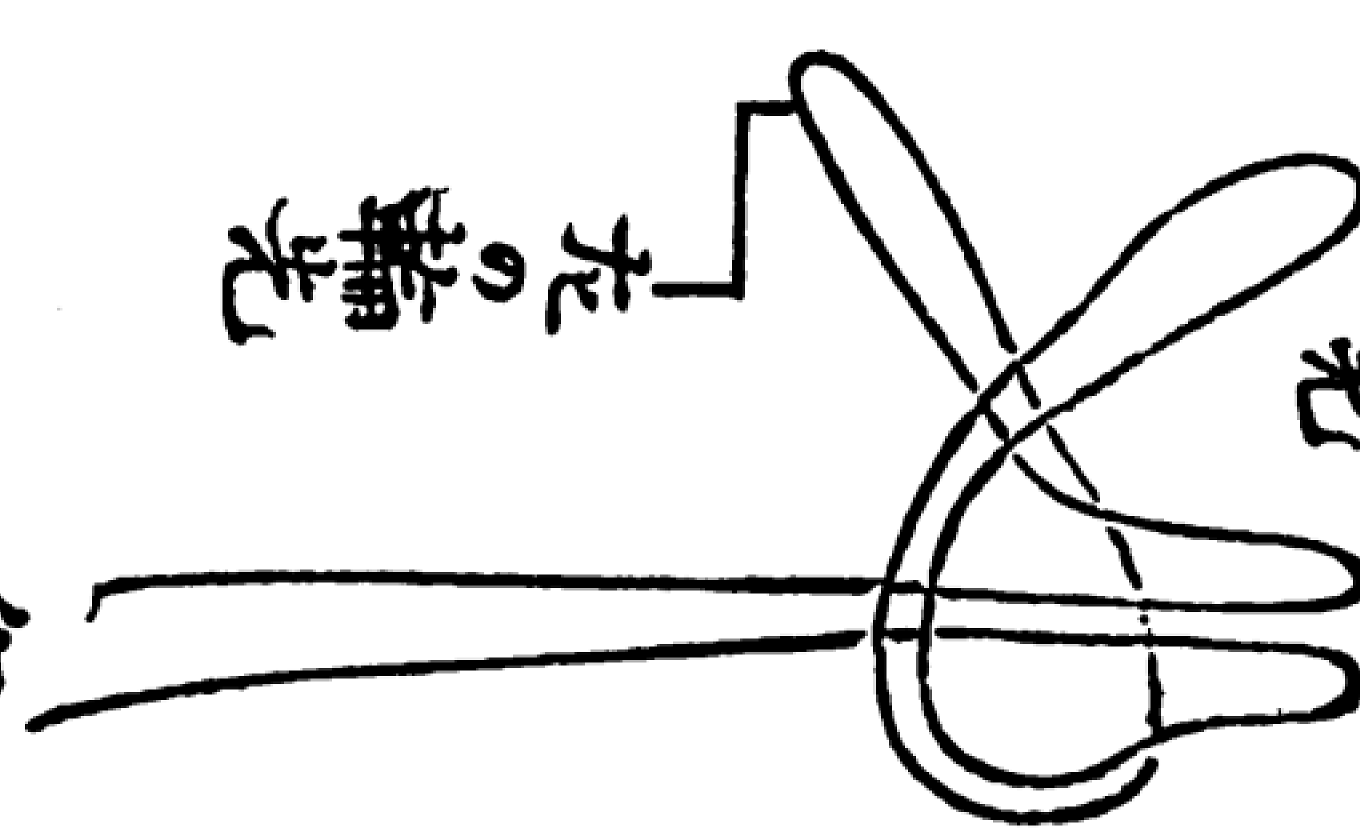
（第一二圖）



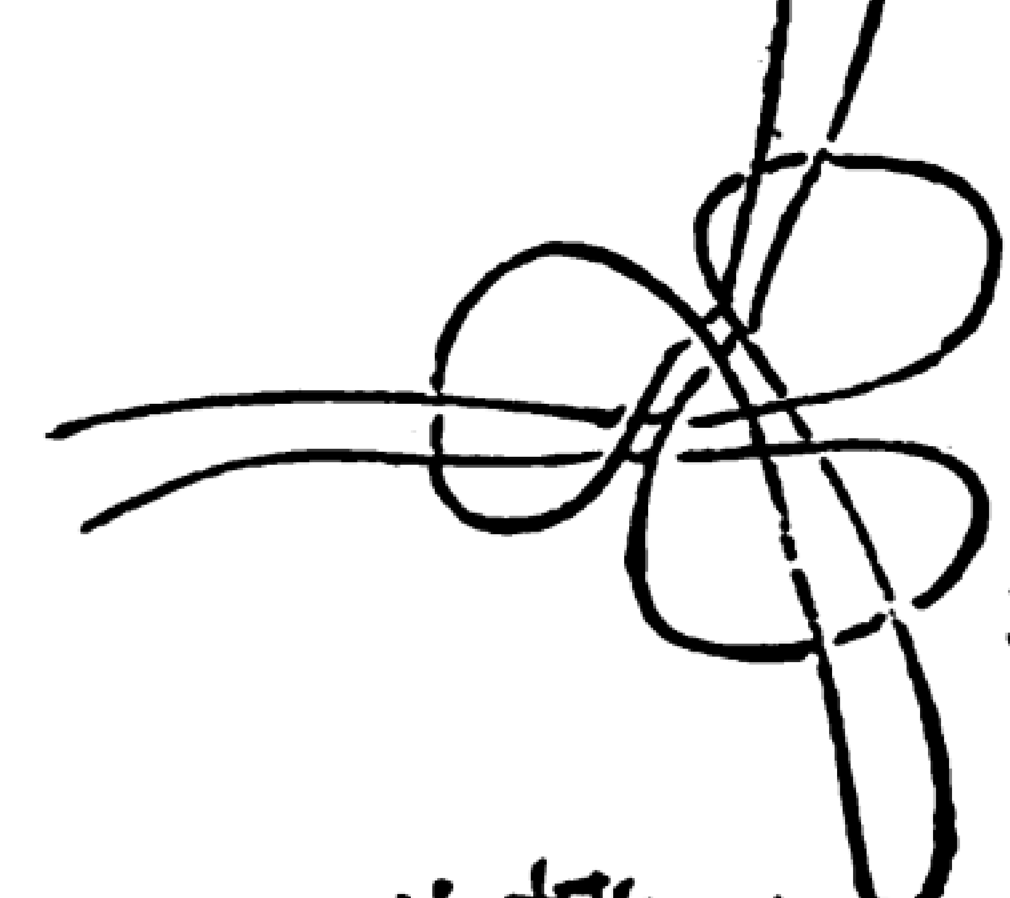
（第三圖）



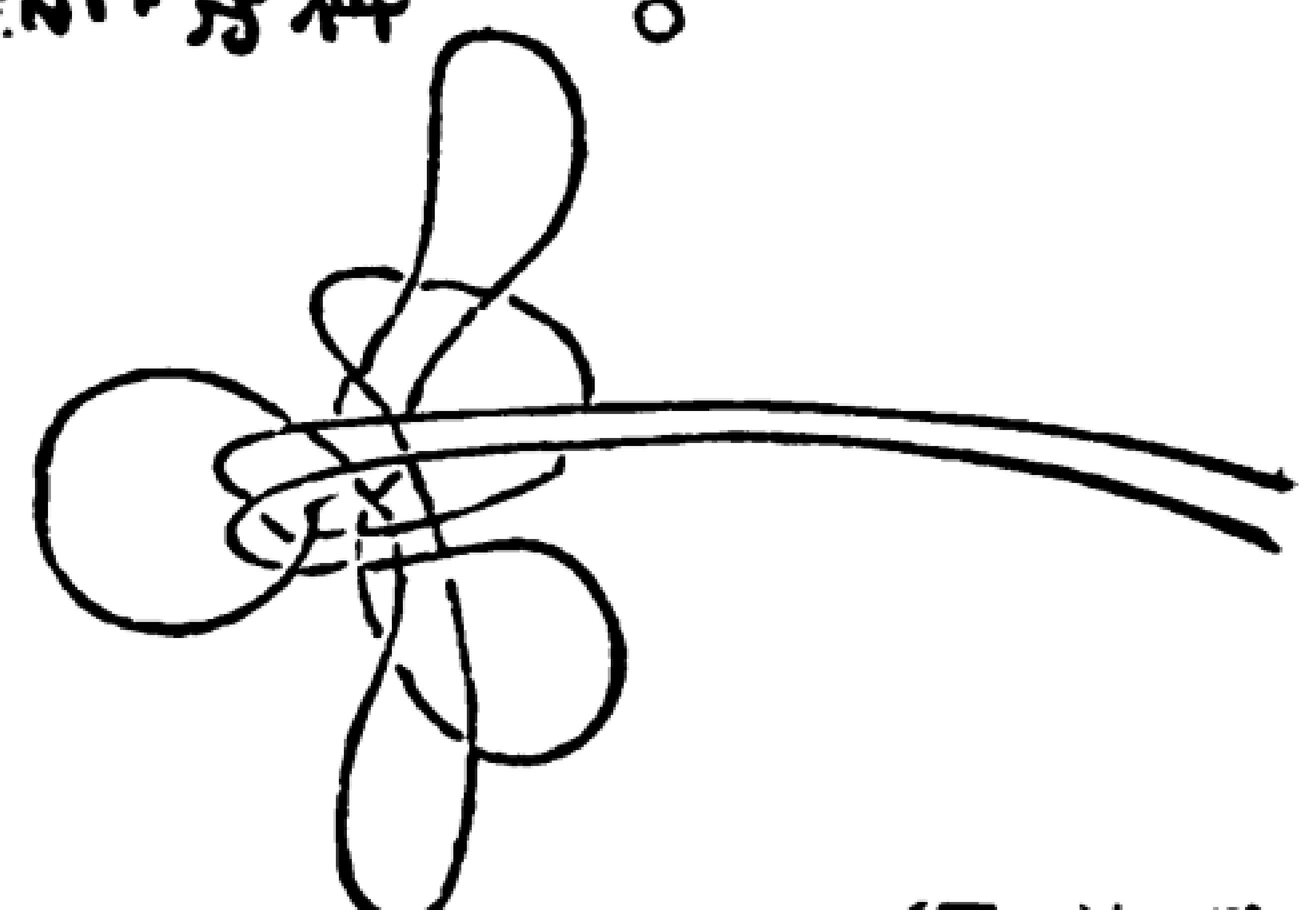
（第四圖）



（第五圖）



（第六圖）



いにしへの匂ひを袖に包みたる
　媚に花のもとにあはなん
もとにあはゞ恥ずにを問へめづらしき
　千本の花のはしきいろ香を
の二首以て、花結の習學の主意の存する所とす

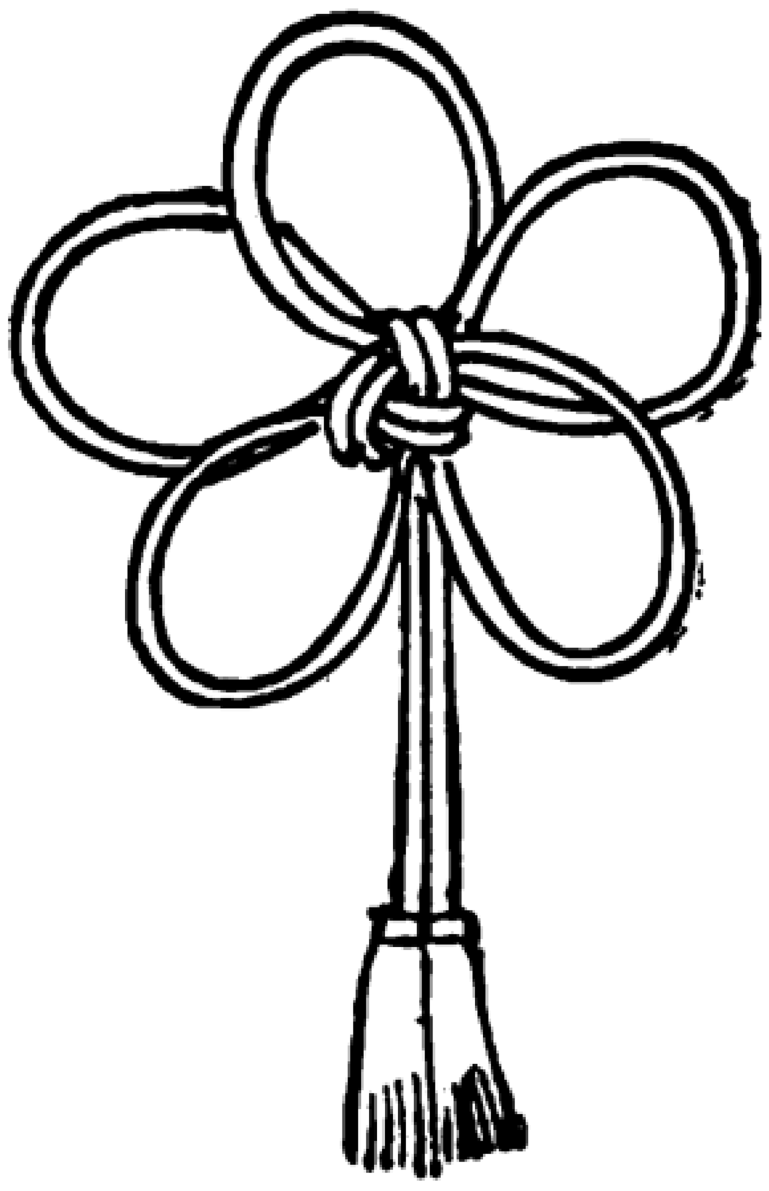
春之部

梅結の結びやう

梅結にも、さま〴〵の結び方がある、袋の口の梅結に、裝飾の梅結の二つに別れて、結びやうは、いくつにもなつて居る、其一は

紐の中ほどを、左の手にて向ふの方へのばし、紐先を前の方へのばしおきて、次に紐先を前より右の手にて内がはに（のばしたる輪の内かはなり）又輪形に折返して、紐先を手前の方へのばし、上の輪の紐の上に、折返した輪二つをのせ、紐先を上にして、大指を紐先の下紐と、下の輪の上とに押へかけ置き

（第七圖）



（第一圖）紐の中を向の方へ輪になして、紐先を手前にのばしたる所
（第二圖）紐先を内側に輪に折まげたる所
（第三圖）大指にて下の△ゑるしの上を押へ紐先を手前の方へなしたる所、大指の圖は下の紐のかくるゝをいとひてかゝず能く考ふべし

右の方の輪先を、左の方の輪の上までまげて掛て（第四圖）の如くし次に左の輪先を、今の右の輪先の上と、紐先の下をくゞらせて、右の上の方へと引出し、（第五圖）の如くし次に後ろの輪を大指よりはなして、下の方に折返し、紐先を上の方へ折返して（第六圖）の如くして〇印の右の輪先を、×印の左の輪先の下の方へ右へと折まげ、次に×印の左の輪先を、〇印の右の輪の上より、紐先の根元に通して、左に出し、花形になれるを、上の方へと打かへして、表の方は紐先の根元を見えぬ方をなすべし出來上り即ちこれは梅結の一

つにして、装飾に用ふる方の結方なりよく〳〵此順序にまたがひて結びこゝろむべし

十歳前後の女子衣服に就て

東京女學館　園田峯子

この頃女子の服裝に付き種々の改良問題起り或は遠に從來の日本服を廢して洋服を用ゆへしと云ひ、或は改良服の考案を出して其の便利を説くあり、思ふに現在の日本女服は多少の改良する所なかるべからず、之は蓋し重に衞生上より來れるものにて身躰の運動を自由に爲し下肢の發達をたすけ以て健康を十分に保たんが爲なり、今茲に和服洋服及改良服の各長所及短所をあげ後に拾歳內外の女子に適當なりと思ふ材料をあげて諸賢の參考に供せん

▲和服の短所　元來和服は靜座服に適し、長き袖あり、又衣服の裾の兩足に固く纏り居る時足の運び自由ならず、且つ甚だ厄介なりと見とめらるゝは巾廣き帶なり、之を締るには爲に紐を幾本か用ゆる故に、身躰の屈伸を不自由ならしめ從て進退動作に不適當なり事態かくの如くなれば二度なすべき戶外の散歩は一度となり若しくは蟄居の傾向を來すものなり、然れども本邦古來の服裝の製法なれば止むを得ざる也。

▲洋服の利　右に比すれば輕捷敏活にして衞生上に好適なるは洋服なり、彼の西洋女子の歩行頗る敏活にして如何なる高山丘壑も難澁なく跋涉さるるは我國女子の遠く及ばざる所なり、之れ一は身躰の如何によるべけれど主として衣服の製法に起因すること言を待たず

▲洋服の弊　然れども洋服にも亦缺點あるを免かれずまづその一は彼のコーセットなりこは自然の發育を妨げ、人をして一種の畸形たらしむるに拘はらず、却りて細要を誇り以て美人の標本となすの弊風あるは文明國の一大瑕瑾と云て可ならん、又冬服として彼等の常に用ゆるは毛布なり毛布は衞生上の價値あるも價格の廉ならざると蟲の害をうけ易くして保存上に困難なると又洗濯にも難澁なるが故に經濟上には不適當と言はざるべからず

▲和服の長所　右に反し和服の長所は美術の點にして洋服に比すれば遙かに優れり、又その仕立方の一樣にして洋服の如く年月と共に形、製法等に變化を及ぼ

さゝるは和服の一癖とすべし、

▲改良服の無効　改良服には既に幾種の考案出でたり、之等を見るに筒袖にして單調なるは經濟に適するも遠く美趣をはなれり、在來の短所を改めんとして固有の長所を沒却し去るは眞の改良にあらざるのみならず又習慣に慣らずして着る者少き時折角の名案も無効に歸すべし。

▲衣服の撰擇　故に理想的に完全無缺の考案を求むるよりもたとひ一歩たりとも今日迄の服裝より進歩し實際に用ゐられ易きものを撰ぶべし。

▲着袴の利　此の點に於ては着袴は最も適當なり、第一は衛生上より衣服を短く着ることを得るが爲に足の運び自由になり歩行の際も膕の現はれざる故遠慮なく歩まれ、自然十歳内外の女子に必要なる運動を十分に活潑になし得べし、第二は經濟上なり、即ち袴を用ゆれば從來の帶を要せざる事、又胴より下のかくれたる爲衣服の汚るゝ事おそく且つ美術上高尚優美なる點に於ては間然する所なし、色は海老茶及紫なれど前者は後者に比すれば其に含有する色素に由りて日光に合ふも色の變ずる事少し。

▲袴の地質　材料はカシミヤをよしとす、之は通氣性に富み彈力あるに由り最もよし袴の大小に由るべけれど二ヤード二分五りを要すとすれば五圓程にてよしカシミヤも年月を經過するの久しきに從ひ次第にその彈力を失ひ漸く脆く、殊に洗濯する毎にその價値を失ふに至る、然れども中以上の人は少し位不經濟と知りても一年或は二年に一度袴の一着にて健康の買はれなば廉なる買物と知るべし。

▲衣服の形　次には衣服なり、その形を從來のまゝに爲し、只袖を筒袖に成さば習字、圖畫、裁縫、躰操は素より運動上非常に便利ならん、されど是を用ゆるは七八歳までをとまりと爲しそれより以上に到れば身躰益々發達するものなれば、從つて筒袖にては次第に小さく且つ見すぼらしく見ゆる者なれば、普通の袖を一尺六寸乃至六寸五分をとまりと成すべし 又女服の袖は日本女子の躰格に相應し、且美趣ある點に於ては用意

至れる者と云ふべし。

▲長袖の弊　然れど長袖の學校其他に於ける仕事上に弊害ある一事は、元と長袖が種々の物品を貯藏する所と成り居るが故なり長きに失する時は振る毎に彼の貯藏品は廊下、運動場等に落下するなり之を以て長袖は邪魔物たるを免かれず。

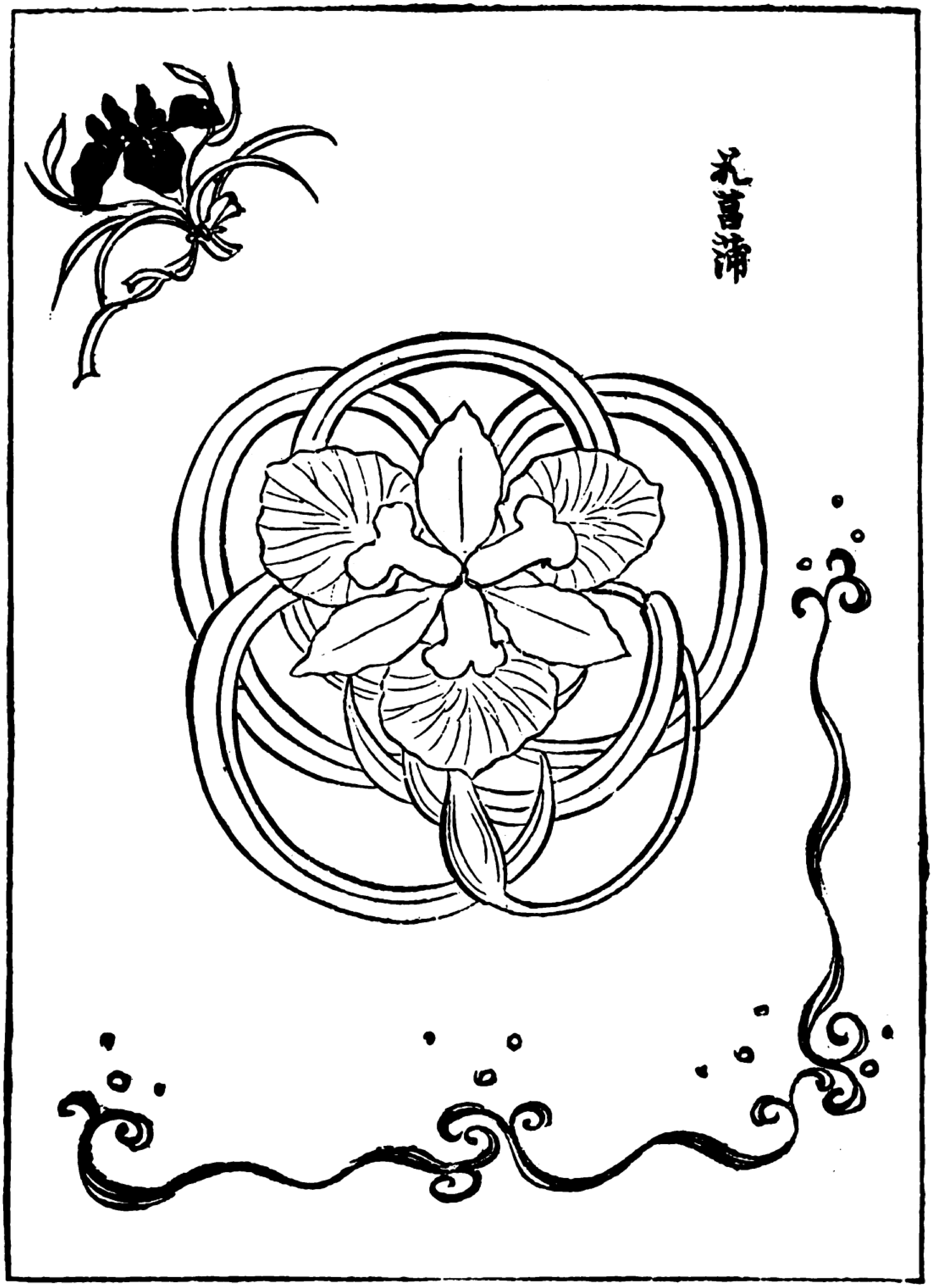
▲常服に就きて　次には衣服の地質なり、地は常服なれば勿論木綿を適當とす、何となれば我が國に於て材料、製産共に十分にして且つ毛布に次ぎて體溫を保つ功あり、而のみならず又洗濯にも堪ふるを以て、屢々洗淨して用ゐるは衛生に叶ひ、且つ價格も亦低廉なれば經濟上にも叶ふべし。

▲常服に次ぐ衣服の地質　常服ならず、又晴着ならずして其の間に用ゆる衣服の地質と云へば中等社會にては絹布類を用ゆ家庭に由りては木綿のみを用ゆる處なきに有らざれども、元來衣服は品格を保つ者なれば強ちに木綿のみを着し、常服との區別なき時は人に對するの禮をも欠くと知るべし

▲經濟上の便利　絹布は內國に多く產し光澤ありて美しけれど輕く柔かなりと云ふ外衛生上取るべき價値なし、常用の衣として用ゐるに丈夫なるは、秩父銘仙なり、(三圓五十錢より六圓迄)の價にて種々あり、之は紬の如くに織りなし纎維滑かならず、洗張りを度々するも地質を損ふ事少く、又裏返しを成し得る故に織物固有の美質を容易に失はず、四五年の久しきに保存してなほ常服の衣として用ゆるを得べし、秩父は織方も左程緻密ならされば空氣の移動自由なり、又(價一圓五十錢より三圓迄)新銘仙と稱する地質あり、之は絹綿交り織りにて惡しからねど前者に比すれば廉なる丈に度々洗ひ張りすれば光澤を失ひ常用とするの外には適せず、

▲色合　衛生經濟に注意せば他は外見上にも宜しく色合模樣等の調和を考ふべし、冬服には藍、紺、黑の如き褪色し易からざる染色の物を撰ぶべし、且つ冬濃き色の物を用ゆれば日光を吸收して暖かなり、

▲裏の地質　衣服に用ゆる裏地はもみ及び金巾とす紅絹にも滑かなる者(俗にいとよしと云ふ)あり又滑か


花菖蒲

蝶鳥



らざる(秩父もみ)者あり後者は丈夫にして(價二圓廿錢より三圓五十錢まで有り)三宅博士の説に因れば金巾は水に濕さば氣孔全く閉塞し、通氣性頗る惡しく之に反して絹布は吸水性多く皮膚より發する汗及蒸發氣を吸收し、之を放散する事速かならずとあり、是を見るに裏に用ゆるには紅絹が衛生上に適する事金巾より遙かに優れり、然れども金巾は(價五十錢より七十錢迄)紅絹の價と甚だしき相違あれば經濟上一考すべき事なり。

▲裾　裾には無地唐縮緬をよしとす、絹よりも丈夫にして暖かなり。

▲羽織の地質‥‥羽織は着物との調和を美術的に考ふるは又必要なり故に銘仙を用ゆるも可なれど、一層丈夫にして羽織に適當なるは米澤紬也、(價四圓より七圓)扨て又此裏には多く甲斐絹を用ゆれど、甲斐絹は丈夫ならず寧ろもみを用ゆるを可とす。

▲胴着　胴着の地質は表裏共に唐縮緬をよしとす濕氣を吸收せず、体温を保護し、輕くして柔かに且つ暖かなればなり(大巾一尺廿錢の品なれば充分なり)

▲襦袢　襦袢は木綿をよしとす、毛布に次ぎて体温を保つの功あり、質は硬くして稍々重く、且少しく濕氣を吸收すれ共、洗濯に堪ふるの功ある者なり半衿は赤をよしとす。

▲肌着　肌着には毛メリヤスの如き觸接間隙多きものを用ゆべし若し、同じメリヤスの袖ならざる時はフランネル或は唐縮緬にて緩かなる筒袖を附くるをよしとす、肌着を屢々洗濯することは最も必要なり。

▲股引　學校に在りては椅子に腰掛る事多く、從て冷却すること甚だしければ股引は衣服の中にても最肝要なる者ならん。

(完)



國文學講義

文學士 尾上柴舟

うつくしきもの（枕草紙）

ふりにかきたる乳兒の顏。雀の子のねずなきするに、をどりくる。また、べになどつけてすゑたれば、親雀の虫などもてきて、くくむるもいとらうたし。

○うつくしきものとは、心に愛しとおもふものなり。愛しは、やがて、うつくしなり。移りては、たゞ、美麗の意となりたれど、此處にては、猶、愛らしの心なるべし。○ふりは、瓜なり。ふりにかきたるは、瓜形に畫きたるの意。乳兒の顏を瓜形に畫きたるをいふなり。顏の下に「いとうつくし」などの語を添へて心得べし。かく書きさして餘情を殘したるところ清少納言獨得の筆法なり。○ねずなきは、人の口先にて、鼠の如き聲を出すといふ。ねずなきするに躍り來る、は、人の鼠の鳴く如き聲をすれば、それにつれて、小雀の飛び來るをいふなり。よく、人に馴れたる故なるべし。躍り來るの次ぎ、また例の「いとうつくし」の語を入れて考ふべし。例の書きさしなればなり。○べになどつけてすゑたれば、戯に小雀に紅などつけやりて据ゑおきたれば、なり。据ゑの語は大きなる物體には適當して、雀などの小さなるものには不相應のやう考へらるれど、そは現今の考へにて、此當時には、かゝることはあらざりしなり。物語文など見たまはゞ直ちに知らるべし。○くゝむるは、含むるなり。餌をもてきて子に含むるをいふ。○らうたしは愛らしの意、もとは、勞痛しより來れりといふも、いかゞあらむ。○瓜實に畫きたる乳兒の顏は、いとうつくしきものなり。また、子雀の、人の鼠鳴するにつれて、飛び來るもうつくし。これに、又、紅などつけて置きたれば、親雀の虫などもてきて、含まするも、いと可愛らしきものなり。

○小兒の丸く肥えたるが、いとよしと今は思ふを、記者は、瓜作の方愛らしといへるは、其性僻によればならむか。雀の子の人の呼ぶに應じて、飛び來るは何人か愛らしと思はざらむ。これに紅つくるなどは、確かに、女の所作たるをあらはせり。（ちご瓜にかきたるは、直ちに瓜の面にかきたるが如く解す）

三つばかりなる乳兒の急きてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、めざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。

○めざとは目敏なり。いと目ばやくなり。めざとに見つけては、早くも見つけたるをいふ。○いとをかしげなるおよび云々は、乳兒の急ぎて、這ひ來りながら、目ばやく塵などの落ちたるを見つけて、可愛らしき、趣味ある手に捕らへて、さしあげて大人などに、これ見たまへといふやうに、見せたるをいふ。

○僅か三才ばかりになりたる乳兒の、母などの方に、急ぎながら這ひつゝ來る道に、いと微細なる塵芥などの、落ち散りてあるを、目ざとくも見つけ出して、いと面白き、可愛らしき指にて、それを捕へて、かゝるものを得たり、とほこり顔に、大人などに見せたるさまは、尤も愛らしきものなり。

此數句、稚兒の態を叙して、描寫神に入るものといふべし。近時の小說家、美文家、かく簡潔に、明晰に小兒を寫して、狀景躍然たらしむるものありや。淸女の觀察微を穿ち、細に入りたるところ、尤も見るべし。

あまにそぎたる乳兒の目に、髮のおほひたるを、かきはやらで、うち傾きて、ものなど見る、いとうつくし。襷がけにゆひたる腰のかみの、しろう、をかしげなるも、見るにうつくし。

○あまにそぎたる、は、尼の形に髮をそぎおとしたるなり。尼とは、たれ尼、頸のあたりまで髮を下げ、そこにて整へて切りたるをいふ。乳兒の髮の頸の處までに切りて、上をふさ〳〵と下げたるは、今も見ることなり。○掻きはやらで、髮の目の處までおほひ下るを、掻きやりもせずしての意。髮の下るを意に留めぬさまなり。○うち傾くは、首をかしげたるなり。○襷がけに結ひたる腰のかみ云々、襷がけは、袴の腰を

肩にかけてゆひたるより云ふ語なり。腰のかみは、腰の上の部分をいふ。

○たれ尼のやうに、髮の頭のところまでにて切り落したる稚兒の、切りたる髮の一部分が、目の前に垂れおほひかかりたるを、搔きはらひもせずして、首を傾けながら、物を見入りたるさまは、いと可愛らし。また、袴の腰を、肩にとりて、襷をかけたるやうに結びたる兒の、腰の上のあたりは、白く趣ありげなるは見るにいと愛らし。

○尼にそぎたる髮を、はらひもやらで、物見入りたる稚兒の態、何人も、また愛らしと云はざるべき。搔きはやらで、うち傾きて、の語下し得て殊に妙。此二語あり。兒女の風貌、顏前に躍出す。

おほきにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられて、ありくもうつくし。をかしげなる乳兒の、あからさまに抱きて、うつくしむほどに、かいつきて、寢入りたるもらうたし。

○殿上童は、殿上を許されたる童なり。元服以前、すでに昇殿したる童なり。いづれも、身分ある人の子供にて、かく早くより宮中に奉仕するを、童殿上といふ。○さうぞきたてられて、さうぞきは、裝束きなり。裝束といふ漢語を、加行四段に活らかしたるより來る。さうぞき立てられ、は、立派に裝ほひ、飾り、作られたるの意。○あからさま、は、かりそめなり。一寸なり。○うつくしむは、いつくしむに同し。愛するなり。○かいつきて寢入りたる、抱きたる人に、搔き抱きつきてそのまゝ夢に入りたるをいふ。

○殿上を許されたる小さき童の、美しく裝ほひ飾られて、宮殿の上を歩むも、愛らしきものなり。また可愛らしき乳兒の、あまりにめでたければ、かりそめに抱きて、寵愛する中に、いつしか、抱きつきて、そのまま寢入りたるさまも、愛らしきものなり。

○此節、またおもしろし。幼童の、抱きたる人に搔きつきて、靜かなる夢に入りたるなど、寫し出して、眞に迫る。纖細巧緻、尤も學ぶべきの筆致なり。子雀の後に、たゞ、幼童の事のみ書き列ねたるは、流石に、女の文なり。男子にては、蓋しかく專一なるとあたはじ。

ひゝなの調度、はちすの浮葉のいとちひさきを池より取りあげて見る。葵のちひさき

もいとうつくし。何も〳〵ちひさきものは、いとうつくし。

○雛の調度は、雛あそびに用ゐる道具なり。小さくて美はしく整ひたれば、これも、うつくしといふなり。○はちすの浮葉、夏の初めなど水の上に浮きたる蓮の葉。小さく、青くて、緑なる水に點綴したるさま、うるはしきものにて、詩などには、青錢にたとへてうたへり。○葵のちひさきは、二葉の葵の、まだ、芽生なるをいふなるべし。

○雛祭りに用ゐる道具どもは、小さきながら、趣ありて、うつくしきものなり。また、池に浮きたる蓮の葉のいと小さきを、水より取りあげて見るに。愛らしき葉に、細き柄つきたるなど、これもうつくし。小さき二葉の葵もまたうつくし。すべて、いかなる物にても小さきはいと〳〵うつくし。

○雛の調度も、うるはしけれど、蓮葉の小さきを、池より取りて見るは、いかばかりかうつくしからむ。兒女の手ずさびのほども知られて、いとおもしろし。稚兒の顔、雀の子、兒童の擧動、蓮の浮葉、二葉の葵など、小さきものを列叙して、さて、何も〳〵小さき物は、いとうつくしといふ。結尾尤も力あり。げに、小さきものは、大かた美ならざるものなし。大なるものにも、もとより美あり。されど、醜なるものは、これに多くして、彼れに尠なし。淸女の、此一句、道破して妙甚し。

いみじう肥えたる兒の、二つばかりなるが、白う、うつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくて、襷あげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。

○二藍のうすもの、二藍染の薄き衣なり。二藍とは、藍の赤花と、青花とにて、染めたるものをいふ。また、別に、襲の色目にも用ゐることあり。その時は、表は濃き縹の、あかみたるに、裏は、たゞ、縹なるをいふ。此處にては、前の染色のかたに解すべきこと論なし。

○衣ながくて、襷あげたる、衣は、二藍染の衣なり。それを、長く垂れたるなり。襷あげたる、袖を襷にあげたるにて、手の自由を妨げざらしめむとてなり。

○まろくつぶ〳〵と肥えふとりたる稚兒の、年は二才ほどにて、色白く、美くしきが、二藍染の薄衣を着そを長く着垂れて、袖をば襷にあげたるが、這ひ出で

来るも、いと〳〵愛らしといふなり。
○此節、よく事實を寫せり。されど、二つばかりなるが、白うつくしきが、襷わけたるがなど、同句法を反覆したる、記者の筆癖ながら、なつかしからず。

八つ九つ十ばかりなる男子の、聲をさなげにて、書よみたる、いとうつくし。鷄の雛の、あしだかに白うをかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましくなきて、人のしりに立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子、さりのつぼ、撫子の花。

○鷄の雛の、あしだかに、雛の足の長く高きなり。○白うをかしげに、は毛の色の白く、形をかしげなるなり。足の色の有様なりといふ人もあれど猶毛、形の方なるべし。○きぬみじかなるさまして、雛の足長ければ其様、人の衣を短かく着たるが如くなれば、かくいふならむ。これを、さは、にの誤なりとて、衣短かなるに、まして云々、と下につゞけて讀む人あれど、從ふに足らず。

○八、九才、または十才ばかりの男兒の、細く清く、稚げなる聲して、書を讀むも、また愛らしきものなり。鷄の雛の、足長く、毛色白く、姿おもしろく、短き衣を着たるが如き様して、ひよ〳〵と喧しく啼きて、人の後につきて歩みをるさまも、また、親鳥のそばにつきて、連れ立ちて步りくさまも、いづれを見るも、皆愛らし。家鴨の雛、佛舍利を入れたる壺、撫子の花。いづれも〳〵愛らしきものなり。

○此最後の節、ことに趣味あり。鷄の雛の様など、描き出して眞に迫れり。筆に神あるものといふべし。さりの壺撫子の花など、書きさしたるも力ありて、また妙なり。すべて、少さきものを、よく〳〵觀察して、精緻の筆に上せるは、此記者の技倆なり、翫讀再四するを要す。

漢文評釋

文學士 久保天隨

天女使（一）（菊池三溪）

（作者小傳）菊地純、字を子顯といつて、三溪は其號で

あります。もと武藏江戶の人であつて、昌平黌に學び、詩文を善くするを以て世に知られ、晩年には京都に卜居し、帷を下して子弟に敎へて居たが、明治二十二年に歿して、年は七十二であつたとのこと。その著述として、世に傳はつて居るのは、國史略、本朝虞初新誌、晴雪樓詩鈔などであります。こゝに抄出した一篇は、元と本朝虞初新誌に出て居るのでありますが、事柄が如何にも面白く、その上、文章が艶麗秀雅であるから、特に評釋を試むることにしたのであります。

江都東叡山下、有池沼焉、曰不忍池、延袤里許、深不可測、芰荷生焉、蘆葦滿焉、鳧雁鷗鷺集焉、池中有嶼、安天女祠、杳渺如畫、沿岸茶肆酒壚、鱗次櫛比、與天光水色相映帶、不減一幅西湖著色圖也、先輩名以小西湖、洵知命名不虛也

●●（訓讀）江都東叡山の下に、池沼あり、不忍池と曰ふ、延袤里許、深さ測るべからず、芰荷生じ、蘆葦滿ち、鳧雁鷗鷺集まる。池中嶼あり、天女の祠を安んず、杳渺畫の如く、岸に沿ふて、茶肆酒壚、鱗次櫛比し、天光水色と相映帶し、一幅西湖著色の圖に減ぜざるなり。先輩名づくるに小西湖を以てす、洵に命名の虛しからざるを知るなり。

●●（字解）江都、江戶の都、今の東京の古名○東叡山、上野のこと。むかしは、之を叡山に擬へて、寺を建て、寛永寺と名づけ、東叡山と號しました。だから、文士などは、東臺、東叡山、小天台などを以て、上野の雅稱することに決つて居ます○池沼、圓を池、曲を沼といふのが、本當でありますが、こゝでは二字合して、單にいけといふことに用ひたものと見えます○不忍池皆さん御存知であるから、説明も及びますまひが、ずつと昔は篠輪津池と書いたといふことが、風土記の殘片中に見えて居ます○延袤里許、ひろがり一里ばかり。今は馬場などこしらへて、大分埋め立てましたが、むかしは今の谷中淸水町の方へずつと廣がつて居て、實際周回一里ぐらゐはあつたものと考へられます○芰は菱、荷は蓮○蘆葦あしよし○鳧雁鷗鷺かも、がん、かもめ、さぎ○集は、群れるといふばかりでなく、止まるといふ意義をも含んだ字であ

ります○嶼、小さな島○天女祠、辨才天女の社、序に申しますが、辨才天は印度に於ける水の神であるそうです○杳渺、遠景の霞みこめて美しいこと○茶肆酒壚、茶を賣る店と料理屋。壚といふ字は、史記の司馬相如列傳に初めて見えた字で、其注に「壚は酒肆なり、土を以て墮となし、邊高くして鑪に似たり」とあります。始の意義は、酒を燗する處であつたが、一轉して、酒肆その者を指すことになつたのでありましよう○鱗次櫛比、鱗の如くならび、櫛の齒の如くつらなる。つまり、數多く、ずらりと並んで居るのを形容した文字であります○相映帶、相向つて映る○不減、劣らない○一幅、一ひらといふこと○西湖著色圖、西湖は支那の杭州にある小さな湖水の名て、白樂天、蘇東坡などが、其州を治めたとき、堤を築いたり、泥を浚つたり、柳を植ゑたりしたものですから、一層に景色をまし、今でも遊樂の仙境としてあります。東坡の詩に、若把西湖比西子。澹粧濃抹兩相宜といふのがあります。著色圖とは、水墨圖に對して言つたので、繪の具を使つて色どりをした書てあります○先輩、自分より前の學者文人○洵、まことにと訓すべし

○命名不虛、つけた名が善く似合つて居て、詐でない。

(文義)鳥が鳴く吾妻、花の都の大江戸の西北の方、上野の山の下に、一つの池があつて、不忍池といひますひろさは一里ばかりで、深さはいくらあるか分らない。池の中には、菱や蓮などが浮び漂ひ、岸べには蘆やよしなどが生え、かも、雁、かもめ、鷺などが、處得がほに遊んで居ます。その池の眞中には、小さな島があつて、辨天の祠がありますが、遠くから眺めると、如何にも美しく、さながら畫の樣てあります。又池の岸に沿うては、茶を賣る店や、料理屋などが、鱗の如くならび、櫛の齒の如くつらなり、それが麗らかな空の光、淸き水の色と相向て、うつッて居るさまは、彩色した支那西湖一ひらの畫にも劣らないくらゐ、むかしの文人たちが、小西湖といふ雅名を下したのも、尤な事で、決して詐ではないと思はれます。

(評論)この一節、不忍池の景色を事こまかに述べて、絕麗幽峭とも評したい程であります。その中、深不可測などは、少しく誇大に失したものでありますが、さばかり咎めるにも及びません。この池といふことゝ、**天女祠といふこととが、この文章の張本であります**

から、これも多少の必要があります。さて是から、如何なる物語が出ましようか、どうぞ次を讀んで頂きましよう。

昔者寛永中、官命浚レ池、期已逼、先レ是本郷第四坊、有二富商一、家道日盛、翁平素歸二向辨財天一、築二小祠於園池上一、昕夕禱賽、以索二多福一、一夕有レ客叩レ戸、家人迎而接レ之、其人秀曼都雅、年約笄字、非二世家室女一、則侯國之宮嬪、倩粧炫服、衣香如レ蘭、侍婢十餘輩、梳粧宮樣、皆有二殊色一、侍二其左右一、趨從填二戸外一、燭光如レ晝、家人驚惶、以爲二天人神女來降一、趨告二之主翁一、

●(訓讀)むかし寛永中、官命じて池を浚はしむ。期すでに逼る。是より先、本郷第四坊に富商あり、家道日に盛なり。翁、平素辨財天に歸向し、小祠を園池の上に築き、昕夕禱賽、以て多福を索む。一夕客あり、戸を叩く。家人迎へて之に接す。其人秀曼都雅、年は約するに笄字、世家の室女に非ざれば、則ち侯國の宮嬪、倩粧炫服、衣香蘭の如し。侍婢十餘輩、梳粧宮樣、皆殊色あり、その左右に侍す。趨從戸外に填つ。燭光晝の如し。家人驚惶、以て天人神女來降すと爲し、趨つて之を主翁に告ぐ。

●(字解)昔者の者は、語助で、あつても無くても善い○官、お上、こゝでは德川幕府○浚、さらふ、池の底の泥を堀り出して棄てること○期已逼、何月何日より始めるといふ定で、其日が最早や近づいたこと○本郷第四坊、本郷四丁目○家道日盛、商買日に增して繁昌○平素ふだん○歸向、歸は歸依の歸で、信心すること○園池上、この上は邊と同じ○昕夕は朝夕○接之、應接すること○秀曼都雅、すらりとして、派手であること○約は大方○笄字、二十、女の嫁入する年配○世家室女、歷々の家の奥方○侯國之宮嬪、大名の奥女中○○倩粧炫服、うるはしく化粧をし、きらびやかに着かざる○侍婢、腰元○梳粧宮樣、髮の結ひ方、化粧のさまが、御殿風である○有殊色、姿致が善い○趨從、伴をする男ども○塡はうづむといふ字だが、こゝでは滿と讀むと、早く分かる○驚惶、あつけに取られる○趨、走ること。

●(文義)今はむかし、寛永の頃、幕府で命を下し、この池を浚ふことにして、その日も近づいて來ました。こ

れより先、本郷四丁目に、金持の商人があつて、家業が日に繁昌しましたが、その家の主人は、平素辨天さまを信心し、よせば善かつたのに、小さな祠をさへ、その庭の池の邊へ立て、朝な夕な、その前へ行つて祈り、家内恙なく、愈よ商買がもうかります様にと、願つて居ました。ところが、或る晩のこと、客があつて戸を叩きますから、家の者が、取り敢へず、取次して、應接して見ますと、さても不思儀、その人は女であつて、姿形すらりとして、且つ派手やかで、年の頃は大方嫁入時、一寸見たところで、歴歴の家の奥方でなければ、お大名の奥女中としか考へられない。うつくしう化粧し、きらびやかに着かざり、たき込めたる衣の香は、蘭の花の如くであります。その上、腰元とも思はれるものが十人あまり、いづれも、御殿風の髪を結つて、化粧を凝らし、揃ひも揃つて姿致か善い、それが左右に立ちならび、下部お伴の者は、戸外に一ぱいて、さしかざしたる提燈の光は、晝のやうであります。そこで、取次に出たものは、あつけに取られ、何んでも是は、天人か、神女が天くだりまし〱たのに違い無いと思ひ、あはたゞしく走つて、主人に告げ知らせました。

（評論）拘己遁といふのが、この文章では一番大事な字で、もし一刻でも過ぎたら、折角の話もなくて仕舞つたのでありましよう。その上、女を寫した處は、如何にも精細であるが、これから次節主人の言葉が、期せずして出る譯であつて、何れも作者が、殊更に筆を弄したといふのでもありません。しかし、割合に手短であつて、その風貌の美を描き盡して居ます。若し之を、一一、個條書の様に述べたなら、却て生動の趣を欠くことになりましよう。（以下次號）

歴代和歌評釋（六）（後撰集の部）

文學士　鹽井雨江

かへる雁雲路にまどふ聲すなり
霞ふきとけ木のめはる風

○此の歌は、後撰集二の卷にあり。歸雁を聞きて詠めるなり。人は知れず。○かへる雁。故郷へかへり行く雁なり。○雲路。空の事なり。空は雲のある所ゆゑ、

それを路になぞらへて雲路といへるなり。なほ海を浪路といふ如し。〇まどふ。迷ふに同じ。〇聲すなり。此のなりは、例の感動のなりにして、俗にいふタイの如し。聲がするタイとなり。〇霞ふきとけ。空をつゝむ霞を吹きとけと、風に命じたるなり。〇木のめはる風。木の芽のいづるをはるといふ故に、春風のはるにかけて、木の芽はる風といひつゞけたるなり。

〇一首の意は、故郷へ歸へりゆく雁が、空に迷うて鳴く聲がするタイ。春風よ、霞を吹きといてやれ、雁の道の迷はぬやうにといふ意なり。霞の深くつゝめる空に、なきゆく歸雁の聲を、あはれに身にしめて、道のわかるやうに霞を吹きといてやれと、覺えず霞に命令したる意匠なり。語調もおもしろく、意匠もやさしき情こもりて、誠に上品の作なり。

あたら夜の月と花とを同じくば
　心しられむ人に見せばや

〇これも、仝集三の巻にあり。作者は源實明なり。月の面白かりける夜、櫻をみてよめる歌なり。〇あたら。今も俗にいふあつたらといふ詞にて、惜しき意なり。一人にて眺めむは惜しいといふ意なり。〇夜。今夜の意なり。〇同じくば。今も俗にいふ「同じ事ならば」といふに同じ。〇心しれらむ人。心を知りてあらむ人といふ事にて、情を解せる人といふ意なり。人情ありてもののあはれを知りたる人なり。〇見せばや。見せたしと希望せるなり。

〇一首の意は、今夜の此の面白き月と花とのけしきを、一人にて見むは、誠にあつたらものなり。同じ事ならば、人情ありて、もののあはれを知つて居る人に見せて、共に見たいといふ意なり。材料は異れども、彼の後拾遺集に能因法師が「心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を」といへるも、仝様の意匠なりき風景の面白きをめづるあまりに、此の義を頒たむ同志の人を希望す、人情をうつして、おもしろし。

君來ずて年は暮れにき立ちかへり
　春さへ今日に成りにけるかな

〇これも、仝集仝巻にあり。作者は藤原雅正なり。紀貫之と常に往來して親しくしてありけるに、障る事ありて、久しくあはざる中に、その年は暮れつ、春にな

りてもなほあはず、彌生の末の日に、此の歌を詠みてやれるなり。○君。貫之をさせるなり。君來ずては君の訪ひ來たらずしてといふ事なり。○年はくれにき。去年の過ぎ去りたりとなり。○立ちかへり。また新しき春になりたるをいふ。○春さへ。春までがといふ意なり。あはずして、去年も過ぎ、此の春もまたあはずして過ぐとなり。○今日に。彌生の末の日、春の終りといふ今日になりたりといふなり。○なりにけるかな。けるかなはワイナアーと嘆息せるなり。

○一首の意は、君の訪ひ來たらずして、去年も終り、此の春もまた既に彌生の終りといふ今日になつたワイナアー。さても久しくあはぬるよ、なつかしやといふ事なり。

○君來ずてと發して、年は暮れにきと二の句にて斷り、さて下の句に春さへ今日になりにけるかなと感動せる、一首の調、うるはしくやさしく、殊に春さへ今日にの詞強く活き得て、感情限りなく響きたり。眞實の情より出てたればなり。誠に愛讀すべき吟といふべし。

惜しめども春の限りの今日のまた
夕ぐれにさへなりにけるかな

○これも仝所にあり。題も讀人も知らずとあり。伊勢物語には、三の句を「今日の日の」とせり。○惜しめども。月日の過ぐるを惜しめどもの意なり。○春の限りの今日。春の最終の日即ち三月の末の日なり。○夕暮れにさへ。夕暮れにまでなりたりとなり。

○一首の意は、月日の過ぐるを惜しめども、月日はとどまらずして、春も疾く過ぎ行きて、今日春の終りの日も、また留まらず、既に夕暮れにまでなつたワイナアーと感動せるにて、思ふ事のかなはずして、徒らに月日のみ空しく過ぎゆくを歎きたる意なり。

○「夕ぐれにさへ」といひたる詞、誠に強く響かせ得たり。一首の調もいひまはしも、誠にめでたく、無量の感慨、深く餘韻にこもりて、愛すべし。何にといふ事はなけれども、思ふ事ある身に、徒らに過ぎ行く月日、春も今日を限りの日の夕暮れに、つく〲と思ひながめたる述懐、げにさこそと涙もこぼれてきこゆ。眞實の感にいでたる歌なればなるべし。

○此の歌は、唯だ春の過ぎ去るを惜しみたる意に見るべしとの古説あれど、然らず。思ふ事のかなはずして、徒らに月日の過ぐるを歎くといふ詞は、一首の上に

有らざれども、自から其の情致の中にこめたるなり。それを表に詞に言はざる所が、大に面白きなり。これを單に春の終りを惜む意とのみ見むは、淺しといふべし。

花も散り時鳥さへいぬるまで
君にも行かず成りにけるかな

○これは、全集四の卷に出でたり。作者は紀の貫之にて、久しく病床に呻吟して訪ふを得ざるよしを人の許に告げやる手紙の奥に添へたる歌なり。○時鳥さへ。時鳥までがといふ意なり。○いぬる。居なくなる意なり。○君にも。君の所にまで訪ひ行き難ねたる意なり。此のもは、常には絶えず訪ねて親しくしたる意をこめて用ひたる詞なり。かのやうに常に訪ねたる君の所にまで、病の爲めに御不音するに至りしとなり。

○一首の意は、私は久しく病の爲めに閉ぢこめられて、さはかり親しくして常に訪ひたづねたる君の所へも、かく春の花も散りはて、夏の時鳥までが居なくなるまでも、御不沙汰をする事になりたり。誠に殘念であると言ひやれるなり。第一第二の句は、春夏の景物によりて、春に疾くに過ぎ夏も今や終りとなれるを言へるなり。さしたる枝にはあらざれど、景物を用ひて春秋をあらはしたる所、面白し。君にもの詞も活き得て上手なりといふべし。何にといふ事はなけれども、實情きこえてよし。

秋の夜に雁かも鳴きて渡るなり
わが思ふ人の言傳てやせし

○これは全集七の卷にいでたり。作者は同じく貫之なり。越の方に思ふ人侍りける時によめるよしあり。越とは今の北陸道地方をいふ。○雁かも。かもは感動の詞なり。雁がヤアーといふ意に見るべし。○渡る空を飛びゆく事を言へるなり。渡るなりのなりは感動の詞なり。○わが思ふ人。我が戀ひしく慕ふ越の人なり。○言傳てやせし。言傳を爲したるかといふ事なり。

○一首の意は、此の秋夜に、大空を雁がヤアーと鳴きて飛び行くワイ。此の飛び來たる雁に、我がなつかしく思ふ越の人の言傳はせざりしか、といふ事にて、なつかしく思ひながむる折りから、雁の鳴きゆくを聞きて、あはれ、かの人の言傳てはなきかと、なつかしさの餘りに、

妨げにふと思ひたづねたる情景なり。彼の雁信の古事と、且つ、雁は北より來るものなるとの事によりて、かくいへるなり。「我が思ふ人の言傳てやせし」とのみいひて、なつかしさに堪へざる情をこめてきかせたる所、面白し。且つ、其の妨げに出てたる意匠、大に面白し。一首の調もあはれに、感情ふかくきこえたり。

獨りのみ思ふは苦しいかにして
　同じ心に人を敎へむ

○これは、全集十の卷にあり。作者は壬生の忠岑なり。

○獨りのみ。唯だ此方獨りてといふ事なり。○苦し。つらしといふに同じ。○いかにして。俗にどうしてといふ事なり。○同じ心。我が心と同じ心なり。我が思のやうに彼方も思ふやうにといふ事なり。

○一首の意は、唯だ此方獨りで斯く思ふ事は、誠につらし。どうして我が思ふやうに、彼方の人も思ふやうに、其人を訓へ誘はむ、どうかして同じ心に訓へ導きたいものであるといふ意なり。我が思ふ心は、なほ恥かしくて言ひ出だされず、斯く獨りで思ひ居るは苦しき故に、我れと同じ心になるやうに、人を訓へたいとの意なり。

○下の句の意は、畢竟は、我が心を彼方の人の知るを求むるにあり。されば、いかにして我が心を人に知らせむというてもよき所なり。それを、しか言はずして「同じ心に人を敎へむ」といひたる、詩趣を得て面白し。これは、其の意をそれと表より言はずして、まはりて言ふなり。これ面白き詩のよみ方の一つなり。

我が門の一むら薄かりかはむ
　君が手馴れの駒も來ぬかな

○これも全所にあり。作者は小野小町の姉なり。待つ人の來ざりければ、よみてやれる歌なりとあり。

○一むら薄。一叢あつまり生ひたる薄なり。○かりかはむ。かりかはむ駒とつゞけて見るべし。かりかはむ「は刈りて飼はむ」にて、薄を刈りて、駒に食はせむといふ意なり。○手馴れの駒。常に用ひ乘らるる駒の意なり。○駒も來ぬかな。駒も來ぬワイと嘆息せるなり。駒も來たらずといひて、其の人の全く來たらざる恨みを強くきかせたるなり。

○一首の意は、我が門に生ひたる一叢の薄それを自から苅りて、君が手馴れの駒の至らば、ま草として食はせむと思ふに、其の駒も來たらざる事よといふ事にて、人の來たらざるを恨みやりたる歌なり。

○人の來たらざる恨みを、それと直接に言はずして、手馴れの駒を採り出てて、駒も來ぬるよと言ひたる、大に面白し。なかなかに、其の人の來らざるをなげく情、一層强きを得たり。また、上の句の薄を刈りて飼はむとて待つと言ひたる意匠も、妙趣あり。自から下りてまめやかにやさしく仕へんとする柔和なる婦人の德見えて。誠にゆかしともゆかしと言ふべし。

詠歌の志をり（二）

文學士　武島羽衣

（四）

（原）　凍死軍を悼むの歌

國にさゝげし大丈夫が
吹雪に迷ふみちの奥
八甲山の山かげに
埋れて花のあはれかも

（改）　凍死軍を悼みてよめる歌

國のまもりのもの丶ふが
ふゞきに迷ひみちのくの
八甲山の山かげに
あはれ雪とぞきえにける

この歌は今春世間のひゞきとなれる第八師團の悲慘事件をよめる歌の第一節也。まづ始めにいふべきは悼むの歌なり。元來ならば悼む歌にて十分なるを、ことさらにの文字を挿みてかく悼むのとやうにいふこと、今の世の常なり。これ言語使用法上の變遷にしてあながちにとかむべからず。これらを一概に誤りとのみ定むるはこれ言語の變遷を知らざるもの也。されどたゞ注意すべきはの文字を挿むにあたりては必ずや挿むだけの理由なかるべからず。必要あらざるべからず。則ちのなきよりも、ある方語句の勢をますとか、意をつよむるとか、あるは流暢をたすくるとか何かの故よしありての上のことならざるべからず。近來の文字の普通に用ゐらるゝに至りしも畢竟これらの理由あれば也。見よ、

かく〳〵する故を以て

といふよりも

かく〳〵するの故を以て

といふかた、おのづから句の勢あるを覺ゆるならずや。かゝる場合にはの文字何等の差支なし。これたしかにのだけの役目をなしをれば也。添はりたるだけのかひあれば也。しかれども、そへてもそへざるも何等のかはりなく、意味全く同一なるに於ては無論添へざるを正しとす。これ贅字なればなり。駄字なれば也。餘計ものなれば也。この悼むのといふ場合はこの終りの場合に屬すべし。これ悼むのといふものをそへたるかひなく、全く悼むといふと差異なければ也。故に省きて單に悼む歌となすか、もしくはあらためて悼みてよめる歌とすべし。さてこそ穩かなる端詞となるべけれ。

國に捧げし。さゝげしは差しあげの約也。さしあげは奉るなり。奉るといふ以上はその奉る物なかるべからず。身とか、金とか、ほまれとか、捧ぐる物躰なかるべからず。しかるにこの歌にはたゞ國にさゝけしとのみありて身をさゝくるとか、ほまれをさゝくるとかいふことと見えず。これ詞足らざる也。さればこれを打直して國のまもりのとなすべし。

次は大丈夫といふ文字なり。これはますらをといふ意味にして又ますらをと讀まする字なれば始めよりますらをと書くをよしとす。大丈夫とかきてますらをとふりがなまですることの如きは二重の手數なり。この他、かゝるたぐひにて、不必要なる漢語をはざ〳〵用ゐたるもの今日の歌文にいと多し。それらは皆ことごとく假字にてかくを宜しとす。

次はふゞきに迷ふといふ句なり。かくふゞきにまよふといひては下のみちのおくの八甲山といふことの形容句となりて意味切れざるなり。さてはその八甲山の山かけに、何が埋れたるにか、主格なければ判然せず。いとつたなき言ひかたならずや。されど、もしふゞきに迷ひといひて切りたらむにはますらをが主格となりてそれが八甲山の奥にて埋れたるといふ意となりて心判然すべし。よく〳〵思ふべし。

みちの奧これは奥州といふこととなるは明かなれど、今はたゞみちのくと約めていひてみちの奥と長くはいはず。みちの奥といふは古へのいひかたなり。みちのくは今のいひかたなり。こゝは今のいひかたをすてゝ古

のいひかたを用ゐる必要のあるならねば、みちのくと打直すかたよかるべし。

終りには埋れて花のあはれかもといふ句なり。この句意味明かならず。推察しがたしといふにもあらねど甚だ漠然たり。突然花といひたるも、前にいへりし譬喩の用ゐかたにたがひたり。兵士をたとへたるとは見えて普通の花の意味ときこゆれば也。またあはれかものかもといふてにをはも古への語にてふさはしからず。かゝるところにはかなといふべし。とにかくに是一句つなければ、改めてあはれ雪とぞきえにけるなどあらばおだやかなるべきか。

(原)　雪をしのぎて咲く梅の
　　散れどものこるかむばしさ
　御代をてらして久方の
　　雲井ににほふあはれかも

(改)　雪をしのぎて咲く梅の
　　散れとものこるかむばしさ
　四方ににほひてひさかたの
　　雲ゐにまでもかよふかな

これ第二節なり。まづいふべきは御代をてらしてといふ句なり。これ造語のあしといふにはあらねど、前に梅のかむばしさといひながら、そのかむばしさが御代をてらすとは不合理なり。色が御代を照すならば意通ずれど、香がてらすとはをかしからずや。故に四方ににほひてと打直すべし。

雲井は雲の居るところといふ意にて空といふ意、もしくはかしこきあたり則ち禁中の心となれるなれば雲井にあらずして雲居なり。井とかくは同音によりてのあて字なり。歌といはず、文章といはず、當て字はなるべく避くるを可とす。否斷じて用ゐざるやう心得べし。これ何等の利益なきのみならず、かへりて意味を曖昧ならしむればなり。

あはれかもこれも第一節のと同じく意味明かならず、何の心ともききとりがたし。さればかよふかなと改むべし。



小説

天幕の内

江見水陰

「上」

相州の海岸は何處でも海水浴が出來る。從つて有名な海水浴場が多いので、元祖の大磯は勿論の事、國府津、小田原、酒匂、茅ヶ崎、平塚、鵠沼、片瀬、鎌倉、逗子、葉山夏になると白い砂が人間で眞黑に見える程だ。

餘り人の行かぬ所で、海水浴が仕たいと小松原男爵の一家族は、新工風の天幕小屋を砥上ヶ原の眞中に建て、此所で寢食を爲る事にして、砥上ヶ浦の浪靜かなる所、廣い海を一家族で、占領して、樂しみ限りなき海水浴、他の別莊や旅館で大きな顔をするのから競べて見ると此位淸らかな避暑法は無いのである。

砥上ヶ原の位置。

それは、鵠沼と片瀬との中間にあるので、前は江の島の海、後は高盛の砂山、石神の松林。片瀬川は北隅から東隅を灣流して、南の方江の島の海に入つて居る。此間の砂原で、沙漠の雛形と云つても好い。東西二十餘町。南北十四五町。全くの無人境だ。

其所の海に近い、一砂丘、晝顔の蔓が三坪ばかり延び擴がつて居る其下の窪地に、小松原男爵の天幕小屋は建てられたのである。

中央が圓形の大天幕で、此所は食堂と客間と讀書室とを兼ねて居る。其背後に三個の方形小天幕がある。第一のが小松原男爵巖氏と夫人鶴子とが起臥し、第二のが令孃初子光子の二人。稚き令息の銀三と保母の阿國とが居住と定め、第三のが令息金一、鐵二、及び書生の荒巻銅太の據る處としてあつて、此他に蓄藏所として一棟、炊事所として一棟。料理人と下僕との居所が一棟。女中二人の寢所が一棟。總計大小八棟の天幕小屋、住人は十三口。洋犬三頭。猫二頭。

繞らせるのに裸綱を以てし、垣の代用に宛て。海水衣の

干場の立木の先に國旗を高く結びつけた。

正に是、亞弗利加内地に在る遠征軍の陣營。駱駝や獅子の襲來が有りさうだ。

料理人の永助といふのは、帝國ホテルに三年も居たといふ腕自慢のコックで、却々の才物だ。下僕の鎌作といふのは、永年小松原家に奉公して居るので、性質は愚頓。

書生の荒巻銅太といふのは、極めて頭腦の單純な青年で、粗暴な擧動もあるけれど、涙脆い優しい血も備へて居て、見る通りの壯士肌では無い。

下女の阿久阿房、いづれも田舎出ではあるが、二十前後の働き盛り。口は達者、手も達者、忠實な事は鏡山のお初――御面相は忠臣藏のおりん、よろしく。

姝母の阿國といふのは、年も二人よりは上て、分別もあり、教育もあり、善良な、誠に感ずべき婦人である。

三歳の銀三をのぞいて、他の令息令嬢は皆それ〴〵學校に通うて居て、成績いづれも優等、試驗の手心も惡く思はれず、されば思切つて、此夏を遊んでも好いのだ。

この十三人より成立つて居る避暑旅團、それの總指揮官は無論、男爵であるが、男爵は萬事を其參謀長たる夫人鶴子に任してあるので、夫人の責任は實に大なるものだ。

如何に愉快に此夏を送るか。それは參謀長の畫策一ツにあるので、それには平和なる心配をする事が一方ならぬ。

が、先づ其前に大事業がある。天幕を張つて一城廓は出來た。萬事準備は整うては居るが、此所に以外の危害が四面を取卷いて居るので、未だ安全なる避暑海浴を此所に取る事が出來ぬのである。

それは何か。

砥上ケ原に狂犬七八頭出沒して、時には裸網の垣の周圍に迫つて、吠え立てる聲の恐ろしさ。これを如何しても退治して了はねばならぬのだ。

狂犬退治!!! 獅子狩よりも危險である。しかし、それを、實行しなければ安全なる天幕生活が出來ぬから、是非狂犬を塵殺する必用があるのである。

狂犬追討の軍隊指揮官は、長男の金一である。鐵二、荒巻、永助、鎌作、これが部下だ。

本營の守備隊長として男爵は踏留まり、孃子軍として阿國阿久阿房の三女、赤十字の看護婦として、鶴子夫人を始め、初子光子の三令孃。銀三も行きたい、兄さん達と一所に行くのだと云つて如何しても聽かなかつたがそれなら守備隊の軍樂手として、喇叭を吹く役を命じられた。

大本營の四面は嚴重に五個の裸網で引めぐらされた。足らざる所は莚や板を以て圍まれた。入口の一方だけ開放して、其代り深さ一間、幅五尺、長さ一間半ばかりの陷穽を造つて、上を細い竹に新聞紙を載せて覆うて薄く砂を掛けて隱してある。

男爵は十二連發の短銃を手にし、孃子軍の面々は、武器としては竹棒木椊、小石や貝殼を山の樣に前へ積んで、近寄つたら投げるといふ。砲兵として阿國が案じたのは、輕便打揚花火の張拔筒を橫に寐かして、敵の來た方に向つて花火を打付けるといふ、中々の好工風だ。

扨、狂犬追討の御大將の扮裝はといふと、白地黑緣の運動服、白覆の校帽を頂き、手には空氣銃、腰には短劍、副官の鐵二も同じ扮裝で、これは長い棒の先に國旗を結付け、肩からは水夫小刀を提げて居る。永助はコック衣にズックの袋を前へ掛けて、それは澤山小石を入れ、腰には洋劍を釣つて居る。鎌作は襯衣半股引、向鉢卷で太い鐵の棒。荒巻銅太は洋服の下着ばかり。レースハットを頂き、手には六連發のピストル。別に日本刀を帶して居る。宛然是ボーア兵!!!

萬歲の聲に送られて、遠征隊は出發した。ジョー、チー、イシュの三洋犬も、鬼ヶ島へのお供といふ、意氣組で、附隨した。

烈日、砂を燥かし、四面、渺漫、日陰一ツ無い相州の大沙漠?それを遠征隊は進んで行つた。途中から二手に別れた。

金一と、鐵二と、永助と、洋犬のジョーと、これが一隊。荒巻と謙作と洋犬のチーとイシュとが一隊。

金一隊は右方片瀨川端から石神の松林に入るべく、荒

巻隊は左方鵠沼の松林から高盛の砂山に登るべく、然うして、狂犬の根據地と認めて居る砂の窪を衝いて、此所で仕留めれば好し、然もなくば海岸へ追出して、守備隊の手を借りて滅亡させるといふ特別方畧。

途中、敵の抵抗なく、右軍は石神の松林に。左軍は高盛の砂山に達した。

斥候なる洋犬は砂の窪に狂犬の一軍を見出して、チーイシユ、此方ではツヨー、一時に吠出した。

金一は、眞先に空氣銃を放つた。兩方から吶喊して砂の窪に迫つた。

狂犬――これは東京や横濱で、病を發して氣の狂つた危險な犬がある時は、其持主が此所へ捨てに來るので、其捨てられた犬が食物の欠乏から益々人間に向つて危害を加へるので、豺狼の如く荒れ狂ひ、最も恐るべきものなので。

それが六頭、いづれも犢の如き大きなのが、今人間から攻め寄せられたので、憤怒の極、牙を鳴らして立向つた。

其所が畜生であるから、兩方へ立分れるといふ事はせぬ。六頭一時に、比較的近かつた高盛の砂山の左軍に向つた。

さア大變である。左軍は人二個。犬二頭。六頭の狂犬と闘うのは大困難だ。

右軍の方から救援として、空氣銃を發放つと、餘りに敵が接近して居るので、味方を傷ける虞がある。だから走つて行つて後から襲うより他に法は無い。

此時荒巻銅太の態度は、如何にも立派なもので、狙を定めてピストルを三發撃つた。一撃は脱れた。一發は黒犬に當つて斃し、一發は赤犬を傷けた。イシユは斑犬と噛合ひ　チーは白犬と相對した。他の二頭は鎌作を圍んだ。

大力無双の鎌作は、いざや來れ、御座んなれと、鐵の棒を水車の如く振回はして、瞬く内に二頭共撲殺した。

永助は遠くから。

『いよ――犬殺しの親方!!!』

と冷評した。

狂犬軍はこれは溜らぬと思つたが、海岸の方に向つて逃出した。

金一の空氣銃は、斑犬の腰に當つた。鐵二は國旗の棒で無二無三に揆つて斃した。永助は傷いた赤犬を打殺した。

唯一頭と爲つた。白犬が一生懸命に逃出したのを、三頭の犬が眞先に追ひかけ、五人が續いて走り、巧い具合に本營の方へ追詰めた。

聽えるのは喇叭の音、それは稚き銀三の吹奏するのである。

死物狂ひの白犬は墓地に本營を衝いたが、果して陷穽に掛つて落下すると途炭に、一發は男爵の發銃、續いて花火の大砲、小石の小銃、未だか〳〵と投付けて、全く此所に恐ろしき狂犬軍を退治して了つた。

夫人はたとへ狂犬が危害を人に加へたとはいへ、不憫だからといふので、片瀨川の畔に六頭の屍骸を埋葬すべく永助と鎌作とに命じた。二人は命令通りにした。

此夜は狂犬退治の祝宴が開かれて、ヰオリンを夫人が彈いて、初子光子が、かはり〳〵の唱歌、男爵の謠曲、金一鐵二の軍歌、荒巻の詩吟、並びに劍舞、阿園の口三味線で永助の義太夫。鎌作の權兵衛の種蒔、阿久阿房の盆踊、中央の食堂は頗る賑やかで、割れる樣な大騷ぎに、近所で迷惑する者は無いのであつた。

『中』

朝一回海水に浴し、正午までは讀書又は編物、日中一回海水浴、夕刻までは隨意、海水温浴後食事を濟まして、一同中央の食堂に會し、さま〳〵の談話を爲るといふ制度を夫人が發布した。

其間には花火、音樂、散步等の遊戲を適宜に行ふ事で、又時としては、婦人連は片瀨川へ洗濯に出掛け、男子達は砥上ヶ浦に裸網を引くのである。

夕方砂原で一同が運動する時に、銀三も同じ樣に駆廻はる。其小さな足跡が砂の上に印せられるのを見ては一同少からぬ興味を感じて、名手が意匠を凝らした繪畫よりも、多く人を動かすと誰もが言つた。

日は富士山の後に落ちて、空も海も紅であつたのが、い

つしかに消えて、伊豆半島の紫も薄らいて、江の島の黒い影に、星か、不知火か。點々、いづれ酒樓の燈花てかなあらう。頗る綺麗だ。

例の如く天幕の外、入口の所にはアセチリン瓦斯が燃やされ、天幕内には新式室内輕便電燈が點じられ、テーブルを圍んでは一同が、椅子に倚り、食事後の談話最中てある。

男爵は亞弗利加のコンゴー國へ旅行した談話を語次いて。

「未だ私が旅行した時分は、全くの野蠻國て、白人の入込んで居るのは、數へる程しか居なかつた。斯ういふやうに天幕を張つて、夜營して居ると、無遠慮に土人の黒ン坊が這入つて來て、掠畧か、鏖殺か、どちらか仕やうと睨め廻はすといふ、危險な譯で、少しも油斷は出來ない。食人種も居るのぢやからのう」

突然外で三頭の犬が吠出した。二頭の猫は逃込んて來た。

續いて何者か知らず飛込んで來た一同愕然。

「食人種!!!」

と荒卷は叫んだ。

只看る一怪物。髮は海松の如し。眼は怪光を放ち、口は耳まて裂け、全身黒光りに光つて苔を生じ、瘠せ〳〵腹は背に接し、丈低くして四尺に足らず。長き手の爪、足の爪、抑も是は何者ぞ。

「河童……河童!!!」

と鎌作は叫んだ。

落着いて能く見ると、これは裸體の一少年で有つた。

「何しにお前は此所へ來た」

と永助が襟首を取つて押へながら問うた。

「何しにお前達は此所へ來たんだ」

と裸躰少年は問ひ返へした。

「何しにツて、それァ如何でも好い、お前は何故此所へ斷はり無しで這入つて來た」

「這入ツたら惡いか……」

中々强情だ。

「惡いとも〳〵、そんな法は無い、人の住つてる家の

中へ……』

『ヤァ可笑いな、家か、これが。這んな家があるべえか、はゝゝ、帆を干したやうな、這んなのが家であんべえ。如何してこれが……』

『や、貴樣は何も知らぬな。これは天幕と云つて、何處へでも持つて行かれる家なのだ』

『然うか、面白いもんだなァ』

と漸く合點が出來た。

『まァ、何しろ、貴樣達の來る處ぢやァ無いのだから、早く出て行けッ』

永助と鎌作とが追立てやうとするのを、夫人は留めて。

『何も知らない子供だから、まァそんなに叱らないでお置きよ……お前はまァ如何して裸体なんだえ』

と優しく問うた。

『如何してッて、いつでも裸躰だ。夏はお前衣服を着る者は有りは仕ねえだよ』

『まァ……』

と婦人連は驚いた。

『食人種だ』

『亞弗利加の土人だ』

『日本にも這んな人種が居るのか』

と男子達が呆れた。

『私、夜網を引くべえと思つて、濱へ出たら、今夜は何處にも地引がねえだから、歸る處へ、此方に綺麗な火が見えたから、ゆひ遣ッて來たゞよ』

『お前は夜網を引いて稼ぐのかえ』

『然うよ、俺、稼がねえぢやァ成ンねえだからな……』

『ぢやァ、阿父さんや、阿母さんを養つて居るのかい』

『なァ――に……』

『兩親は無いのかえ』

『有るだァよ』

『兄弟は……』

『あるだァよ』

『幾人あるの』

『妹が一匹と弟が二匹……』

『おほゝゝゝ、一匹だ二匹だッて』

と女子供は笑つた。

「畜生、何を笑うだアな。一匹二匹が悪いか、其面を引搔いてやるぞ」

少年は憤怒した。

「まア、そんなに怒るものではないよ。それで兩親は無事なのかえ」

「阿母は腹が大ッかい、阿父は酒が好きで毎日醉ッてらア……」

「だからお前が、夜網へでも行いて稼ぐのかい」

「なアーーに……」

と首を打振る。

「分らない子だねえ、ちやア、如何して然うお前は稼がなければならないのだえ」

と、少しヅレ氣味て夫人は問うた。

「菓子が食へないもの」

「それならお前が儲けた錢で、菓子を買つて弟や妹に分けてやるのかえ」

「なアーーに……」

「如何するの」

「一人て食ッちまわア」

「まア驚いた……て、阿父さんは酒に醉つて居る。阿母さんはお腹が大きい。ちやア誰が稼いで此日を送るのだえ」

「誰も稼がねえよ、畑からツヤガ芋を堀つたり、唐黍や西瓜取ッて食つてらア。阿爺がチョボ一に勝つた時には、麥を買つて置くだアが……」

「亂暴な家族も有るものだ」

と男爵も肝を潰して。

「未だ日本も開け切らんのう」

と嘆息した。

「如何でせう、何んぼ海岸だからッて、あんまり野蠻では有りませんか。東京に居ては想ひも寄らん事で御座いますねえ」

と夫人はなげきの聲を漏らした。

「斯ういふのを見る事が出來たのは天幕生活の賜ちや」

と男爵は高笑を爲れた。
『本統に然うて御座いますよ。狂犬よりは餘程好う御座いますよ』
と夫人も口邊を覆はれた。
『何か菓子を遣ッて見ませうか』
『綺麗な菓子が好う御座いますね』
と令孃達は云つた。
『モルトンが好い……』
『ビスケットより其方が好いてせう』
と令息達は云つた。
『然う仕ませう、モルトンを遣りませう』
夫人は女中に命じて、モルトン一壜取出させて、それを少年に與へた。
『これは藥か』
と少年は問うた。
『なアにお菓子だよ』
と夫人は敎へた。
『然うかなア』
と感じ入つた。
『又何か變つた菓子を上げるから、翌日は弟や妹を連れて遊びにおいで』
『うむ、來るよ』
ついと出て去つた。禮も言はずに。

「下」

翌日、男爵と令息と荒巻とは、江の島へ遊歩に出掛け、令孃二人と銀三と阿國とは、鵠沼へ遊びに行き、鎌作は藤澤へ、食料の仕入に使ひし、永助は二人の女中を相手に、夕方の食事の用意に忙がしい。
夫人は天幕内の釣床の上で小說本を讀んて居ると。
『姨さん、來たぜ』
裸躰少年は同し裸躰の弟二人と、腰巻だけして居る、妹とを連れて來た。
いづれも、髮は赤く、躰は黒く、瘠せて垢だらけて、饑饉に苦しむ印度の土人よろしくである。
『おう、お揃ひて來たねえ。それがお前の兄弟なのかい』

「うむ、然うだ」
「昨夜の菓子は皆に分けてお遣りかえ」
「一人て食ひ切れねえから、遣ッたよ」
然う云つて居る内に、弟や妹やは、何か食物は無いかときよろ／＼眼て四邊を探して居る。袂があつたら何んでも澳でも入れて逃出すかも知れないのだ。
この、あさましい姿を見て、小松原男爵夫人鶴子は、思はず知らず涙の一雫。
「嗚呼、これも人の子である‥‥」
つひ、言葉に出た。
「妾も幸福だ、妾達の子達も、幸福だ。如何か此子の親も、此子等も‥‥」
幸福なれかし、と心に叫んだ。
呼鈴を押して侍女を呼んだ。命ずるに四人前の食物を以てした。
侍女は訝しみながら心得て去つた。
「全体お前達の名は‥‥」
「俺は松七てんだ」
兄が云つた。
「俺、竹三郎‥‥」
「妾、お絹さん」
「俺はな、梅太郎、梅坊とも云うンだ」
次ぎから次ぎと答へた。
「可笑いね、兄が松七て、其次が竹三郎、末の弟が梅太郎なんて‥‥」
「何んだか、知らねえだよ」
と松七は云つた。
以て親の智識の程度が分るのてある。夫人はつく／＼と考へた。嗚呼この子等!!!若し自分の力て教育して、傑出した人とならぬまても、普通の人に爲す事が出來たなら、どんなに愉快な事てあらうかと。
無駄に時間は過されぬ。此所に避暑して居る間に如何かして少しても物の道理だけても知らしめたいものだ。自分の遊ぶその暇に他人を學ばしめる事が出來たなら、此位心凉しい事はあるまいと考へた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

方形天幕の一棟は、教場に宛てられた。美食を與へられ、美衣を給せられ、面白い話を聽かされるのに釣込れて、四人の漁童は毎日來た。そして夫人監督の下に教育を受ける身と爲つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

暑中が過ぎていよ〳〵天幕生活を止め、引拂つて東京へ小松原男爵一家が歸られるといふ頃には『いろ〳〵お世話樣で難有う御座いました』と四人が禮を述べる事を知つた位に成つた。

今度來た時には、忠君愛國といふ事を吹込みたいと夫人は云はれた。

講談氣のある永助曰く『これが後年に至つて亞弗利加大沙漠に獅子狩といふ大修羅場、若樣二人がアワヤ六頭の狂犬ではない、獅子の爲に追詰められて、一命如何といふ處へ、兄弟三人眞裸で飛出して、お救ひ申すといふ、これが抑もの發端で御座います』【をわり】



奥村五百子

おうなむ

熱誠に富むの女丈夫として、巾幗社會に珍らしき事業家として、其名の一世に知れわたれる奥村五百子女史は、如何なる人物であるか、乞ふ彼れについて少しく語らしめよ。

彼れの性格と事業とについては、世間に多少の疑ひをさし挾むものがないでもないが、しかし、それは多くは疑深き人心と、卑もしき嫉妬心などから出だものであらう、兎角非凡の才力あるものは、世間から多少の障害を與へられるを免がれないのである、吾人の見る所では、彼れは熱情あり、誠意あり、また忍耐力に富む所の人物である、だから彼れは物事に感んじて、サテそれ

を行ふ段になるに、燃ゆるが如き熱心と、切々たる正意とを以てし、而して一旦思ひ立つた事は必ず仕遂げなければ止まない、其勇氣や愛すべくして、其忍耐力や喜ぶべきものがある、これは決して推想的批評ではない、彼れが今日までの事歴を見ればよく分かるのである。見よ、彼れは女性の身にてありながら、常に男子にも劣るまじき活動をなしつゝあるではないか、昔ては郷地の公共事業に盡瘁したること少なからず、また數年此の方は、齢耳順に達せるにも拘らず、愛國憂世の志甚だ壯んにして、或は隣國なる朝鮮の衰運を悲しみては、親しく韓民敎育の事業に手を着け、或は自から北淸の戰地を蹈んでは、屍の原野に曝らせる同胞の慘狀見るに忍びずとして、そが戰死者遺族の救恤を目的とせる愛國婦人會といふ團躰を造り、其會員を募るや自から勸誘の途に上ぼりて、到る處に演說して曰く、



「皆さんが半襟一掛を買ふの資を節して、之れを積みて會費に充てられよ」と、其言や眞率にして適切のものである、彼れの演說振りは左程巧みといふほどでもないが、言葉の中に熱と誠とが籠つて居るために、聽者を感動せしむることが多い、同情を寄せしむることが多い、彼れの辯舌は素朴ながらも、涙を垂れて聽かしむるの價値は持つてゐる、そうして彼れは其熱心なる斡旋と辯舌とを以て、一たび思ひ立つた事業をば必ず仕遂げようとするのである、いかなる辛苦艱難に遭うても、之れを中途にして止むやうのことはしない彼れは、婦人には珍らしきほど勇氣と實行力に富んでゐる、兎も角も、世に罕れに見るべき女偉人であることは、多數の人が認めて居るらしい。

＊　＊　＊　＊　＊

「山水秀靈なる處、偉なる人物を產む」といふ套語も、決

してアテにならぬとのみ言へない、まゝ事實となつて現はれて來ることがある、西海の松浦半島といへば、風光の頗る明媚なる地であるが、其東南にあたりて、浩洋たる玄海の波濤、深く地を穿ちて松浦潟となり、一面には崔嵬たる青巒連りて、一面には縹緲たる彩波岸を洗ふ邊りに、所謂唐津の城址がある、そうして其城下近き處に高徳寺といふ巨刹あり此處ぞ五十餘年の昔、一世の女丈夫奥村五百子が、呱々の產聲を擧げたる地である、此の高徳寺といへる寺は、今を去ること二百餘年前、織田信長の家臣奥村掃部之助の開山せる所で、其後ち子孫相承けしが、第十二代目に了寛師といふ人あり、此人は豪傑肌の人で、一男一女があつたが、男は圓心といひ、女は即ち五百子である、五百子は、夙に高徳寺より分れて別に一家を搆へ、水戸の藩士坂田彦五郎を迎へて夫とした、やがて二女一男を產み、長女を登志子といひ、次女を美津子といひ、登志子は福田某に、美津子は山田某に嫁いで居るが、美津子の弟は勢一といひて、今年二十五才なるが、外國語學校に入りて英語を研究して居る。

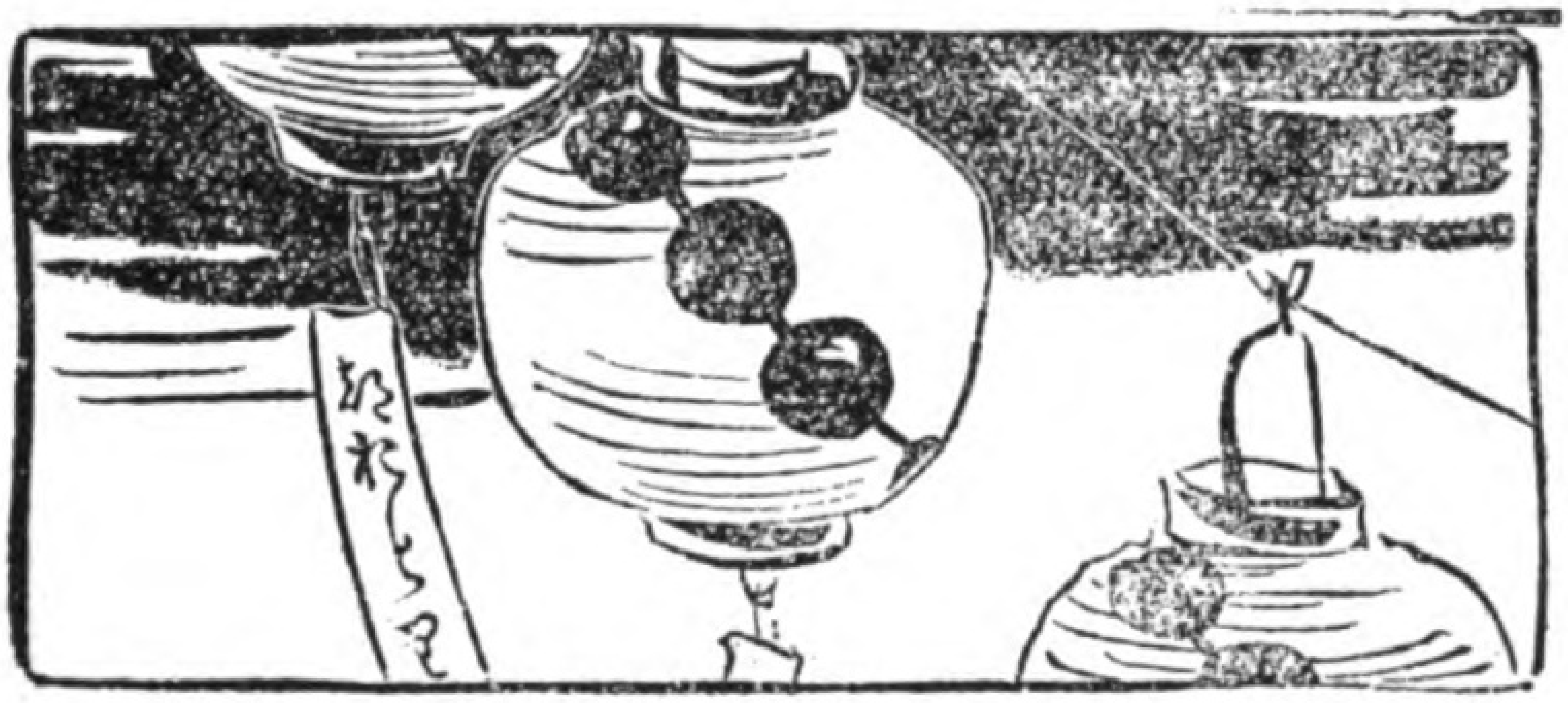


松浦海邊に遊ぶ人は、唐津本町に、さゝやかなる一茶店あり、「山城宇治名產販賣所奥村五百」と書したる看板をかけあるを見るであらう、そうして之れは奥村女史の居宅であるを聞いては皆驚くであらう、しかし、其茗を賣るは利を計ると いはんよりは、寧ろ徒食の譏を免かれんとするものであらう、そうして其店頭に坐りて、客にむかひて愛敬をたゞふるものは、彼の美津子と登志子である、二階では奥村脊陶翁即ち坂田彦五郎氏は、頻りに採筆を揮ひて人像を書いて居る、此の家は、何にも俗流一般の茶店などゝは違うから、住居の風といへ、家人の氣風といへ、何んとなく風佳にして

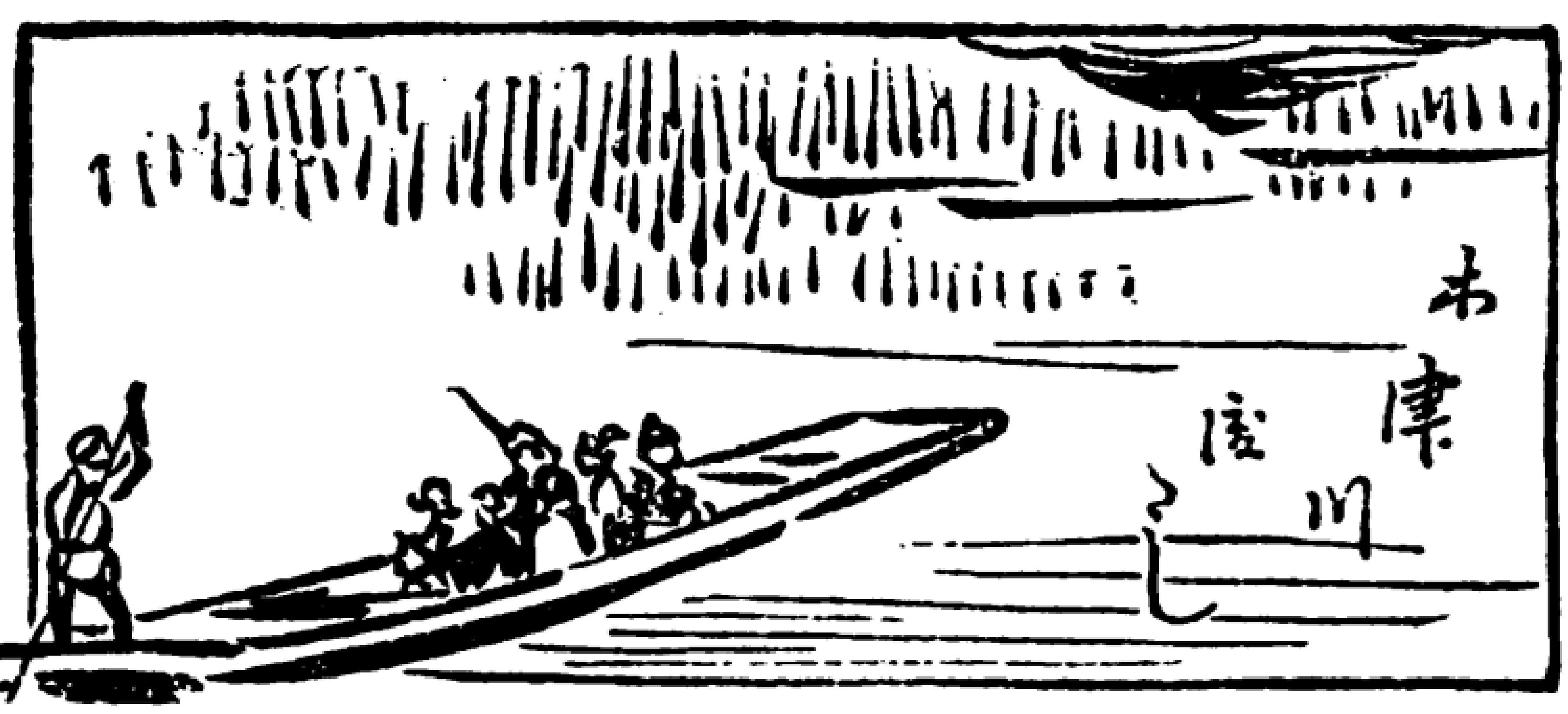
高尚なる趣が見える。

女史は性來蒲柳の躰質ではあるけれども、先考の遺風と令兄の感化に浴したためてもあらうか、氣力常に雄健、丹心公に奉ぜんとするの志あり、齡耳順に垂々とすれども、滿腔の熱涙抑へ難く、常に人に先ちて起き、人に後れて寢ね、いかなる辛酸をも苦とせずに、孜々汲々として國家公益の爲めに盡くして居る、そうして彼れが公共事業に働くには、ひたすら正心誠意を以てし、些の私利私慾の念をさし挾さまずといふ、之れよりは、女史が事業の重もなるものを紹介しよう。

女史が郷里に居りし頃から、公共の爲め盡くすことを以て自ら任んじて居つたが、あまり男のやうナ働き振りを爲すを以て、郷人は彼れを以て、おてん婆だとか、狂女だとか惡口を言ふものもあつたが、彼れ自身は自から信んずる所もあつたから、少しも世間の噂を氣にしなかつた、去廿三年の冬、始めて帝國議會の開かれんとするや之れに先だち縣下にては、撰擧運動甚だ激烈を極め、親戚兄弟も相鬪き、壯士や暴徒が到る處に亂暴をなして、殺氣充滿、人心洶々たる有樣なりければ、爲めに撰擧の公平正當を失はんことを恐れて衆望の最も厚き天野爲之氏を推さんとて、女史は其應援に非常なる盡力を爲したれば遂に天野氏の登選を見るに至りしといふ、また舞鶴城趾の南、松江の水の唐津灣に注がんとする汀に、面積凡そ數百步の地所あり、これはもと海軍省の御用地なりしを、女史等百方盡力の結果、之れを拂ひ下げて唐津町の公有財產の一に加へた、また唐津灣口を少しく溯りて、一帶の架橋長虹の如く横はるを見る、此橋を松浦橋といふが、もと此橋のなき時は潮滿つれば舟を渡し得るも、潮落つれば、河床あらはれて舟便をうしなひ、通行の人々は裳をかゝげて徒步して渡らざるを得なかつた

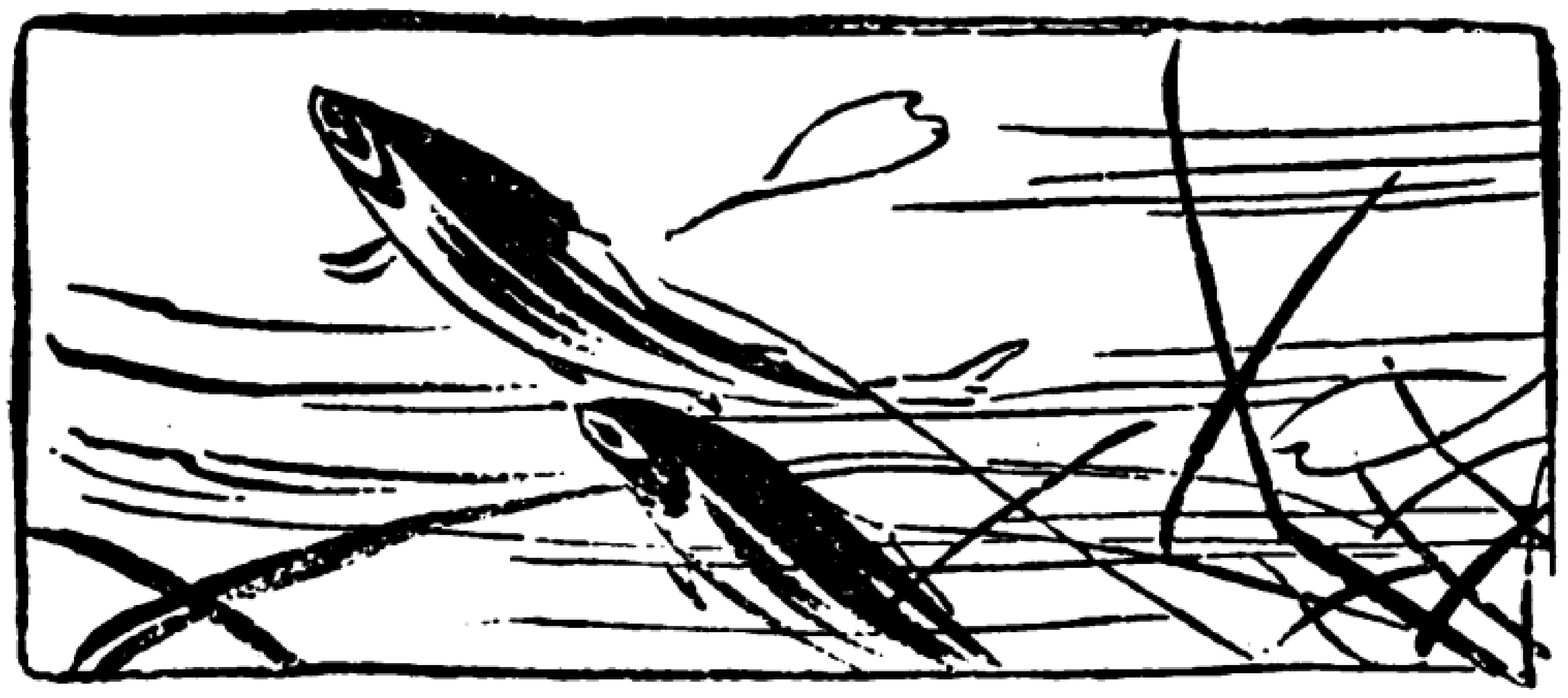


が、交通上の不便甚だしとて、これも女史等が盡力に依つて、遂に官有山林より木材を安價に買ひ受け、今の長さ三百有餘間、幅凡そ三間半の長大なる橋を架設するに至つたのである、また嘗ては長谷川某など丶共に、唐津城外に地をトして、製絲會社を設立した事もある、殊にも彼の唐津興業鐵道及び唐津開港の爲めに、女史が盡くした功勞は夥だしい、同地方にては、夙に鐵道を布設して交通の連絡をはかり、開港を實行して商業貿易を盛んにせんとの輿論ありしも、時機の至らぬのか、種々の障害ありしが爲めに、容易に其輿望を遂することが出來なかつたが、女史は他の有志家とともに、地方及び東京の有力なる人士の賛助を得て、議會に提出したる鐵道布設請願と、開港の議案は遂に帝國議會を通過して、多年の宿論は二十九年に至りて始めて實行せらる丶に至つた、以上は女史が鄕地方における功績である、



しかし、女史は、なほ進んで海外にも其力を及ぼした、彼れ以爲らく、朝鮮は我邦と一葦の海水を隔つるのみの隣國なれば、一朝朝鮮の滅亡を見るに至るあらば、其危害我國にも及ぶや必せり、然るに今や朝鮮は非常なる衰運に向ひつ丶あれば、之れ一日も見逃かし得べきものにあらずとして、彼れは自から韓民敎育の道を講じ、以て之れが文明の啓發を助けんと企てた、此の如き目的を以て遂に韓國へ渡つた、後ち實兄奥村圓心師も、東本願寺の命を受けて、布敎の爲めに渡韓したれば、相共に携へて韓民の敎導に力を致した、が寢ぬるに暖衾なく、食ふに滋味なく、頗る苦辛を嘗めた、女史は韓廷の名相某と舊識ありたれば、養蠶學校を創立せんと約せしも、時恰かも不幸にして、韓國に東學黨の蜂起するありし爲め、其約を果たしてと能はなかつた、已にして苦心の効漸く現はれて、光州なる本願寺支院の境内に、大小二棟の和

館を建てゝ、その門前に大日本大谷派本願寺實業學校といふ大札を揭ぐるに至つた、此の實業學校にては、農耕、栽培、養蠶及び生糸の製法等を敎授するので、女史自ら校長となり、其次女なる美津子も之れが敎授に從事して居つたが、其敎育法は韓民に最も切要のものであつた爲めに、また熱心に薫陶した爲めに、之れに入學する韓民頗る多く、皆女史の德に服し、信用するやうになつた、然るに、たま〳〵西學黨なるもの起りたれば、美津子と共に歸朝することゝなつたのは、三十二年の八月であつた、女史の歸朝せられた後をは、非職武官赤塚某が、其校名を改めて「奧村實業學校」となし、いま尙は之れを繼續維持して居る、女史はいまは自ら其校務に關係せぬも、其韓民敎育に盡された功勞は永遠に遺つた居るであらう、また女史は東本願寺の命を受けて、南淸に航し、女子敎育の有様を視察したことがある、同寺にては、か



ねて支那の婦人社會に、文明の風潮を輸入して、友邦開化の進運に補はしめ、共に東洋の太平を謳歌せんと思ひ、特に女史を選びて、實地に就きて視察せしめたのである、

女史の將に發せむとするとき、下田歌子刀自は美しき火天鵞絨の信玄袋を贈られたが其裏に刀自が自作の和歌一首を記してあつた、其歌に曰く、「日のもとのまことのたねをもろこしの、はらにもうゑよやまとなでし子」と、其他にも名士等が、其行を壯んにせんとて贈つた詩文が澤山あつた、けれどいま一々之れを記す必要もないが、此時なぞは世人が餘程女史に囑望して居つたらしい然るに女史はいよ〳〵南淸に航して、自から支那婦人社界に入り、十分に視察せんとしたるも、何分支那の婦人の氣風は、他家に嫁げば終生男子の顏を見ざるのみか、奧深く隱れ居るが如き有様にて、豫想の如き結果は得る能はざりしも、

其實地を踏んで調査の上、齎らし歸りたる報告は、彼れの國情に通ぜんとするもの、ためには、頗る裨益を與へたとのことである、已にして北清事變の起るに際し、彼れは再び支那に赴かんとせしも、北清地方は騒擾を極め居るを以て、暫らく其危難を朝鮮に避け、後ち聯合軍已に天津を拔き、戰亂も稍鎭まれりとの報を得て、好機失すべからずとなし、直ちに船を走せて太沽に至つた、そうして、太沽砲臺の高きを仰いで、幾多の英雄が笑つて、彈雨の下に忠死を遂げたるを想ひ、無雙の勇士が躍つて、臺壁の上に旭旗を飜へしたるを思ひ、そゞろに征士の忠勇義烈を感ぜしが、また白河にては堤防破壞、送糧斷絶などの危險を冒して、常に勇ましく進軍せしことを聞くに及び、感激の余に堪へずして、不覺双眼に涙を迸らした、そこで女史は以爲らく、あゝ赳々たる武士が、萬里遠征の途にあり、よく困苦艱難に耐へ、身命を殞すをも厭はざる所以のものは何ぞやといふに、是上は　聖明に答へ、下は國家に報ゆる所以の道なりとは言ひながら、陣中の夜半に、兵馬の夢や綻びけん時しも郷家を顧慮するが如きことあらんか、或は爲めに勇氣沮みて勳功を奏すること難かるべし、故に己れの歸朝の後には、必ず之れを同胞姉妹に訴へて、其遺族救護の方法を講じ、以て軍人軍族に後顧の憂なからしめざるべからずと、嗚呼此の一片の感慨こそ、實に他日愛國婦人會の設立せらるゝ原礎となつたのであらう、已にして女史は、本願寺の一行と共に、戰死者の追弔及び戰地の視察を終へて歸朝した。

愛國婦人會の創設

彼れは、歸朝して直ぐ東京に赴き、小松宮殿下の拜謁を請ひ、その感懷のほどを聞え上げしに、殿下にはよくこそ着眼したりとて、いたく讃賞せられて、愛國婦人會を組織せよの命さへ賜はられてから、女史は幾たびか感泣して御前を退き、上は各宮妃殿下に拜謁して、名譽會員に仰ぎ奉り、下は舊藩主及び華族夫人方、若くは知名の閨秀を歴訪して、幹事又は評議員に推し、特に女史の舊藩主、小笠原子爵の夫人は、陸軍參謀の堀内少佐と共

に會計の任に當られ、全國各階級にわたりて賛助するもの多かつたから、いよく昨年の一月、本部を東京に定め、同二月愛國婦人會の趣意書を、普く天下に頒ちて同胞姉妹の賛助加入を求むることゝなつた、そこで、女史は始めて其宿志を得たるを欣び、老體の苦勞をも意とせずして、自ら全國各地に勸誘して怠らなかつたために、其篤志は漸く世人に知られて加入するもの多く、各地方には續々として支部を設置するやうになり、會の勢運は日に月に益々隆盛に赴いて來た、そうして、此會の目的は、世人の既に知れるが如く、一言にていはゞ戰爭にて戰死したる者、及び戰死と同樣の者の遺族を救濟するといふのである、されば、此種の會團の必要なるは言ふまでもなく、彼の赤十字社の事業と相俟つて、日本國の文明を表彰すべき二大慈善事業といふべきものである、吾人は國家の爲め、軍人軍族の爲め、大いに欣賀せざるを得ない、そうして、此の光榮ある大事業の創設は、一婦人奥村女史の手に成つたものであるとすれば、女史が國家の爲めに貢獻した功勞や實に偉大なるものである、ゆえに愛國婦人會の事業は、女史が一生の大事業なるばかりでなく、國家のために有益なる大事業である、延いては、日本國民の博愛心を世界に示すべきものである、して見ると、女史が双肩に荷ふ所の責任も中々重大であるが、女史の健康と氣力と、そうして天下の有力なる人々の賛助を以てせば、決して其成功を怪むに足らざるべしと思ふ、吾人は、女史が前途益々斯る業に盡瘁し、且つ熱心にして忠實ならむことを望んで止ヽず。

▲愛國婦人會大會

五月十一日九段偕行社に於て擧行來會者は岩倉、一條、德川、近衛、島津、毛利の各公爵夫人大山侯谷子各夫人を始め朝野の貴婦人無慮六百餘名總て一同會場に參集するや會長岩倉公爵夫人一場の挨拶をなし次に君が代の吹奏あり次に佐藤少將(正)の會務報告奥村五百子女史の熱心なる演說あり事務員本多文學士は各地よりの祝電を朗讀し次に島田三郎氏の演說ありて式を終り樓上大廣間にて種々の餘興ありて三時過散會せり

名家談叢

感化院の話

感化院長　高瀬眞卿

繼母に就て（二）

○繼母の心

前號にて教師岡西君のお話もありましたが、成程繼母と言ふものは必らず惡い人許りではないと言ふ事は能く分つて居ます、院長が面會した繼母も隨分澤山あるが存外に好人物が多いと云ふお話もあつた樣に覺えて居ます、併し○○の母などは決してよい人とは思はれない、○○が小使を請求すれば決してやらない、彼が親父より貰つて遣ふのですらグズ〳〵小言を言つたり、また時〳〵は○○の机の引出しを「やさがし」したり、手箱を檢査したりする、ソレも○○が家に居る時にするならよいが、いつも學校へいつた留守の中にすると言ふ話である、さうして親父の居らぬ時は臺所の板の間で○○に飯を喰せる、彼は性質の上に於ては、天性不良のものではない、繼母が意地を惡く冷淡に取扱つた處から「ヒガミ」根性を出して遂に不良の心も出たのである、其故に親父に對しては彼は甚だ愛慕の念を以て居る、親父も來院の時に實は母が余り彼を可愛がりませんから憫然に存じますと言つて居る、斯云繼母もあります、また駒込時代に居た○○の母の如きは實に言語同斷ではありませんが、情夫と逢ふ處を○○に見られたが爲に彼を非道に殘酷にしたと言ふ事であります、これがために彼が家を出て浪人となつた爲に惡友に交つたのであります、斯云繼母も私が知つて居る者に三四人居ますから、繼母は比較的に好人物が多いと言ふ事は出來ても、其中には十人に對して三人位は、惡い性質の者もあろふと考います、この十人に三人と言ふも統計表で立派に割出したのではありませんから、責任を負ふて言ふ譯には參りません、諸君の御參考に供し

て御研究を願いたいのてあります

序に申しますが二百五十九人の母の中に繼母が百五十九人、あると言ふ事は先達ての調査でありますが、百分比例にして殆ど六分强になつて居ます、一般に世間の母と言ふものに就て繼母はどれ位の割合てあらふか、即ち前妻の子を後妻の手を托してある者が世間にどれ程あるかと言ふ事を調査して見やうと院長のお話があつて一寸調べて見ましたが、これは役塲の戸籍帳に據らなければ精確なものは分らないけれど斯云事にして調べて見ました、私の友人三人に頼むて友人の知つて居る知人の内に繼母に前妻の子を托したのが何人あるかと云ふ事を調査したのであります、其懇意の人の數も同數てなければ分らないけれど廣く知るがよいと言ふ事て斯云事にいたしました

一院長の知人　百四十五人の中前妻の子を後妻に托したもの東京に五人、茨城に三人、西京に一人、名古屋に二人、甲斐に一人、大阪に一人、奥州に四人以上十八人てあると申事て

一甲の友人の取調た處にては東京に三人、千葉に一人、靜岡に一人、三河に一人、合計七人、其知人の總數が六十三人てあると言ひます

一乙の友人は知人四十二人の中に僅に五人なりとの報告をなしました

一丙の友人は知人三十九人の中に五人ありとの報告を示しました

一私の友人三十人に就て調べて見ましたが二人しかありません

斯ういたして見れば世間には前妻の子を後妻に托したものは僅々の數て百四十五人の内十九人、六十三人の中て七人、四十二人て五人、三十九人て五人、三十人で二人と云ふ事て平均しても二割はない一割二三分より一割五分には過ぎまいかと思ひます、こう云事に調べて見てさうして院の入院生の取調べた二百五十九人の内に繼母が百五十九人と言ふは非常なる數ではありますまいか、實に繼母と言ふものは其多數子供を不良にするものであると言つても差支ないと存じます

（族長某氏述）

〇後妻を娶るに就きての質問

美濃の國大垣に近き某村の人、遙々書を院長に寄せて、後妻を娶るにつきて前妻の子の處置を問へり、この人吾子の前途を案じて心を盡すこと紙上に見えたり、世上に此の人と境遇を同ふするもの將た少なからざるべし故に其問答をこゝに出すものなり

一筆啓上仕候盛暑の候愈々御清祥御消光被成奉大賀候、野生は御院慈善會の會員には無御座候へども、友人某なる者數年前御院の慈善會員に加盟致し御院發行の雜誌毎號御送被成候分小生借覽致居候處、感化院に入院致候不良少年の多數は繼母の手に育成せられ候者の由統計表を以て承知仕り如何なる原因とも存不申候へとも兼て寒心仕居候儀に御座候然に不幸にして愚妻當春産後の惱みにて死去致し跡に六才に相成候男兒當歳の女子相殘り申候、野生も永く獨身にては家政上不都合に御座候間後妻を娶り申度友人よりも勸告有之候のみならす老母の希望も御座候に付勞々目下縁談協議中に御座候、右に付二人の子は繼母の手に相掛不申ては叶はさる場合と相成り此事甚た苦心仕居候尤後妻の候補者と申は氣質も尋常に者にて小學高等科を卒業致し其後西京の親戚方に二年見習奉公致し同地へ一度縁付候處夫なる者支那へ渡り病死致候に付歸國寡居罷在候ものに御座候年齡廿七才性質行狀共に普通のものと承知仕候、此者後妻と仕り候て二人の子か繼子となし候はゝ將來如何成行き可申哉繼子は必らす不良に相成り候共一定不仕儀と存候得共萬一にも御院報告の如く相成候ては一大事と懸念仕候、箇樣の場合に臨み候ては御實驗上定て御考案可有之他に御教諭相受候よりは先生に御尊申上御垂教を蒙り候方萬全と存し友人とも相談の上拙書拜呈仕候儀に御座候要するに後妻を娶り候に付き前妻の子を如何處置仕り候はゝ將來安心出來可申哉の問題に御座候拙文微意を盡さず幸に御拾讀奉願候拜首

七月十日　　某　印

拜見仕候、如貴諭盛暑の時節に御座候處御清榮奉賀候。今度後の合添御迎へ被成候に付御令息並に御幼女の御處置方御質問に預り懇ごに申越の事情逐一了承愚案左に申進候

繼母の子は比較的不良の者多しと申事は本院發兌の月報にて御承知の通りに候、多年繼母の事に付ては多少研究仕り候、多くの繼母にも面談の上其性質心情等をも可及たけ取調候に總じて繼母と申て格別意地のわろき者にては無之、また惡き性行の者も無之候へども自分の子出生候のみは前妻の子と其取扱方必らず隔てを生じ候ものに御座候これ一般婦女の常態にて決して怪むべき事には無之候斯く隔ての生じ候處より子供心にヒガミ心を起し遂に母子の感情惡く相成り識らず知らず子供に「ヤク」を起させ申候殊に後妻と申ものは夫よりは十年も十二三年も年若なる可候年若き者は本文の愛を受くる事も濃やかなりと申諺も候故か多く後妻の意を迎ひ候樣の傾き生じ後妻の産たる子を愛して前妻の子を疎んじ候樣にも相成る者隨分有之候、是は必ずケ樣に相成るも

のとは一定致さず候へども小生取調べ候事實の中にも此類極て多き事を發見致居候間申進候事に御座候

さて御問合の要領に付ては六才に相成り候男の子は學校の教師或は學識ある有德家へ御托し被成候方可然候御親戚にても宜敷候へども子弟教育の何ものたるを辨へざる人に托し候は無益に御座候或は家塾やうの處へお入れ被成候も可然か一ヶ月四五回休暇には必らず歸宅の上父母の安否を問せ候やうに可被成候當歲の幼女は、後妻の手にお托し被成、後妻の子生れ候はゞこれも御親戚へ御托し被成候方可然候或はこの際里子と申事に御取斗被成人柄の宜敷者を撰み養育方御任せの方も可然か、これも一ヶ月二三回御歸宅させ不申ては不相成儀に候

ケ樣に前妻の子を他へ托し候はゞ何の冷遇する樣に俗人は認め可申候へどもこれ冷遇には無之候、子供の前途のために安全の計ひに候間俗論には御頓着無之方可然候

右御問合の要領に對し大略申進候委細の儀は御面談の上ならでは事情難分候拜復

七月十五日　　　　奥　　卿

繼母の子必らず不良とは言ふ可らず、然ども前に掲げたる倫理會の繼母の子の如き心を抱かしむるは必定なるべし、これ甚だ厭ふべきにあらずや、此の如き冷たき心を以て繼母に對しなば家庭の快樂地をはろふに至らん豈に恐るべきにあらずや

朝鮮觀光談

奥村五百子

私が朝鮮の全羅道光州に入つたのは廿九年の八月でした、今日では木浦も開港されましたから少しはましな樣ですが、御承知の通り韓國の貿易は只米ばかりで、その米を何うして取入れるかと云へば、竹の先を割て穗を一本々々こいて居るので、丁度二三里程の間の田をこぎ了ふまでには、前年の十月から翌年の六月までか

かると云ふ有樣で曰と云つてもほんの眞似見た樣な物で、一日かゝつて漸と五升位の皮を剝に止るのです、さう云ふ有樣を見たので私は此處へ實業學校を起して見たのですが、さて漸と學校が出來たので生徒の募集にかゝりました、そして只で敎へて遣るから時間を定めて來いと云つたのです、處が未開國の人民と いふ のは仕樣がないもので、斯う云ふ事を云ふのです、學校へは行つて上げたいが、とても時間を定めて行く樣な事は出來ぬ、貴方の國は稼げばそれが皆自分の物に なる さうですか、私等の國はさうは行きません、働けば生命を取られる基になるのだから、是非來いと云ふ なら 毎日御飯を喰べさせて、給料を呉れ左すれば行て上げませうと云ふのです、何と呆れた話ではありませんか、けれども斯う云ふのも無理は無いのです、一生懸命に働いて金持になると、無暗に上へ取り上げたり、又取らうが爲に罪ないものを罪に陷して、縛り付けて お尻を敲くといふ樣な風で、遂には生命までも取られて了ふ者がある、漸う其日を過して居る位のものは取らうにも無いから、從て生命は安全であるのです、私は此咨を聞いて餘りの事と、直ぐに京城へ行つて加藤公使に、斯樣々々ですが、何うしませうと相談をしたのです、處が公使のいふには先年私が此京城で日語學校を立てた時にも毎日生徒に飯を喰して遣た、さう せねば 來なかつたのである、まして邊鄙な處ではどうしても 致方がないヽアヽ何とか工夫をして見よと云はれたので、私は いろ〳〵考へた末一村毎に人民を寄せて敎授をして歩きました、荷物が可笑しいのです、米とぎ、唐箕、唐臼、水車などを持て歩いて一々使用して見せて遣りました、私は殆んど一年間草鞋を脫がずに辛抱したのです、後には先方からも尋ねて來る樣になり好結果を奏しましたが、實に未開とも野蠻とも云ひ樣がありません彼國では井戸と云ふものが些とも無い、水を汲むに瓢簞の樣なもの、中をスッカリ刳り拔いたのか、又は松の丸太の中を拔いて四方に穴を開け、紐を通して五合位づゝ水を汲み上げて居るのです、夫れて私が初めて井戸を掘て釣瓶を掛けると夫れは〳〵珍らしがつて人が

鮮かるので、水を汲む事も何も當分は出來無かつたのです、それから又洋燈を點けまして、彼國は皿に豚の油の塊りを少しづゝ入れて、綿か觀世捻を燈しんにして夜を過して居る位であるから、驚いたの驚かんのぢや無い、さて〳〵日本人は智慧のあるものだと云ふてひどく感心して其の話がそれから夫れへと傳はつて七八里もある處から老人などは駕に乗つて見に來ましたよ

彼國の官吏程我まゝ勝手なものはありません、一度私が用が有つて警察署へ行た時に、今罪人を調べて居るから少し待て呉れと云ふので、傍で見て居ると土間に板を置て其上へ罪人を俯伏せ、頸と胴と足とを荒繩で縛ばり附けて罪人のお尻をまくつて、櫂の樣な棒で叩くのです、十ばかり敲いたかと思ふと紫色に成つて肉は破れ罪人がヒイヒイ呻吟きながら、後に廻した手を上に向け、兩方の指を一本づゝ折つて勘定する樣な風をしますが、是れが賄賂の高を示すのだそうで、十本折つて了ふと叩くのを止めました、叩いた板にはお尻の皮が附着いて了つて血潮がタラ〳〵流れて居ますよ

で其調べる官吏が何かと云へば、地方官即ち監察使で日本の知事の樣なのですから驚ろくではありませんかそれにモ一ッ呆れて仕舞つたのは、全躰朝鮮には官妓の次に「キイサン」と云つて日本の藝者の樣なのがありますが、朝鮮八道の官吏は執務中でも皆此「キイサン」を連れて居るので、此時の監察使も「キイサン」の膝に凭れて居て前には大きな鏡を置き「キイサン」が彼の朝鮮の長い烟管で煙草を吸付て肩越しに出すと、夫れを喫ひながら前に巡査を五六人並て罪人を訊問して居ました

（完）

吳服談（羽織の來歷）（承前）

（三井吳服店意匠部籾山東洲氏）

前にお約束をして置きました無双羽織のことを御話申上ましよう無双羽織は德川の末の頃大家の隱居とか金銀座の役人或は札差の老人などの着用せられたるものであつたそうです其拵へは上の地質を其儘裏にも仕立

るもの〱、胴の處に多くは摸樣を染出したものでありま
す、今日では織物の無双羽織も出來て居ります、それは
表を黒とか鐵色とかに織り胴の處を緞子にして摸樣を
織出したのであります、今日では男子ばかりでなく、婦
人の羽織として大に流行を極めて居ります、男子向に
は羽二重で婦人向には縮緬或は袷衣時分には絽縮緬が
宜しう御座ります、元來此無双羽織と云ふものは表は
黒染で裏に友禪の摸樣を染出すものですが摸樣はさて
置き其摸樣を染出すきはなる瀬切の處を眞直ぐに染切
つたり又は暈したりしては一向面白からず其處を一工
夫をして趣工を立てをければ妙味がない樣です其趣工
と云ふは其地染の黒を應用して摸樣の一端としなけれ
ばならぬ例へば黒染にて瀬切の處で梅の古木に染上げ
其上に友禪にて梅の梢に花を添へ鶯一羽を染め出すか
又は黒染にて瀬切を霞に其間に松を染め其れより上に
友禪にて富士川を染出すか其他趣工は種々ありましう
又絽縮緬などには表裏とも黒染にして摸樣を白上げに
出しても一寸意氣なものとなります、男子向と婦人向
と違ふ處は婦人向には振り即八ツ口に摸樣ヲ附ける
のと男子向には摸樣を附けぬのとの差のあるのであり
ます、
婦人向の胴裏には男子向と同一の地質で宜しいけれど
も少し眼新しい品と云へば友禪縮緬友禪紋羽二重の中
て綴り摸樣を撰べば面白ものもなきにしもあらずてす

(完)

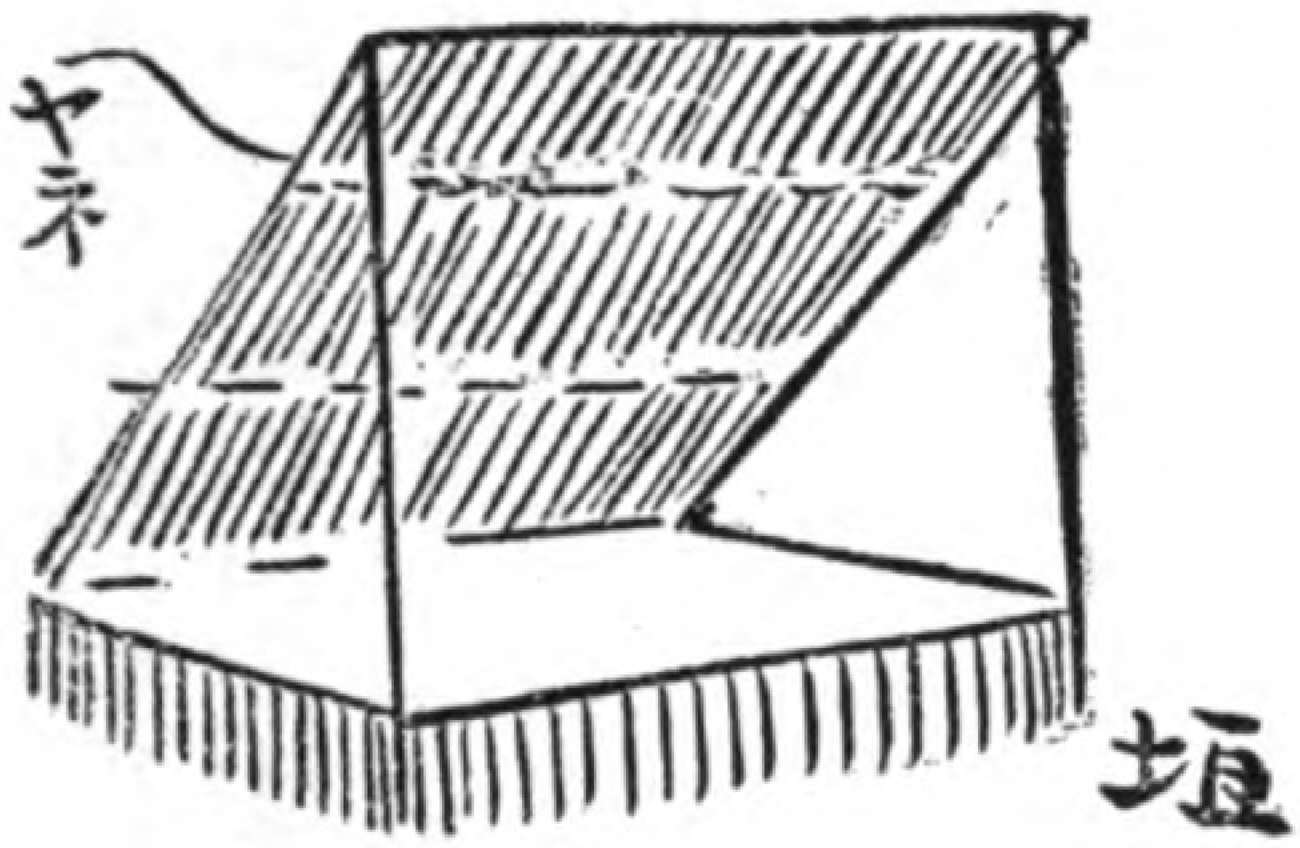
▲髪代六萬圓　佛蘭西の田舍にて最も珍らしく
珍へらるゝは婦人の髪毛を賣買する店なりとの
ことなるが此頃リムサズンの古き村に開業した
る店にては男をして店頭に立ち土地の方言にて
髪の賣手を呼び迎へしめ、店頭には婦人の目を
惹き得べき種々珍しき物品を陳列し、之に惑は
されて入り來りし婦人は知らず〱品物の珍ら
しさに眼眩み、兎に角何か氣に入りし品物を選
み取りたる上、帽子を脱ぎて跪き店の男をして
フサ〱したる金髪を惜氣もなく根元よりブツ
リと切らしむると云ふ、此くして買入れなる髪
毛は之を倫敦に輸出し此處に販賣する由なるが
其賣上髪高は年々六萬圓に達すとのことなり

雜俎

瓜類の栽培

農科大學　永島小蝶

○種蒔　之れは通常先づ地面を柔かになし草木の根及土を取り去り之れを平らにして鍬を以て雁岐を切り液肥を撒きて其の上に種子を下し上より土をかぶせ置く

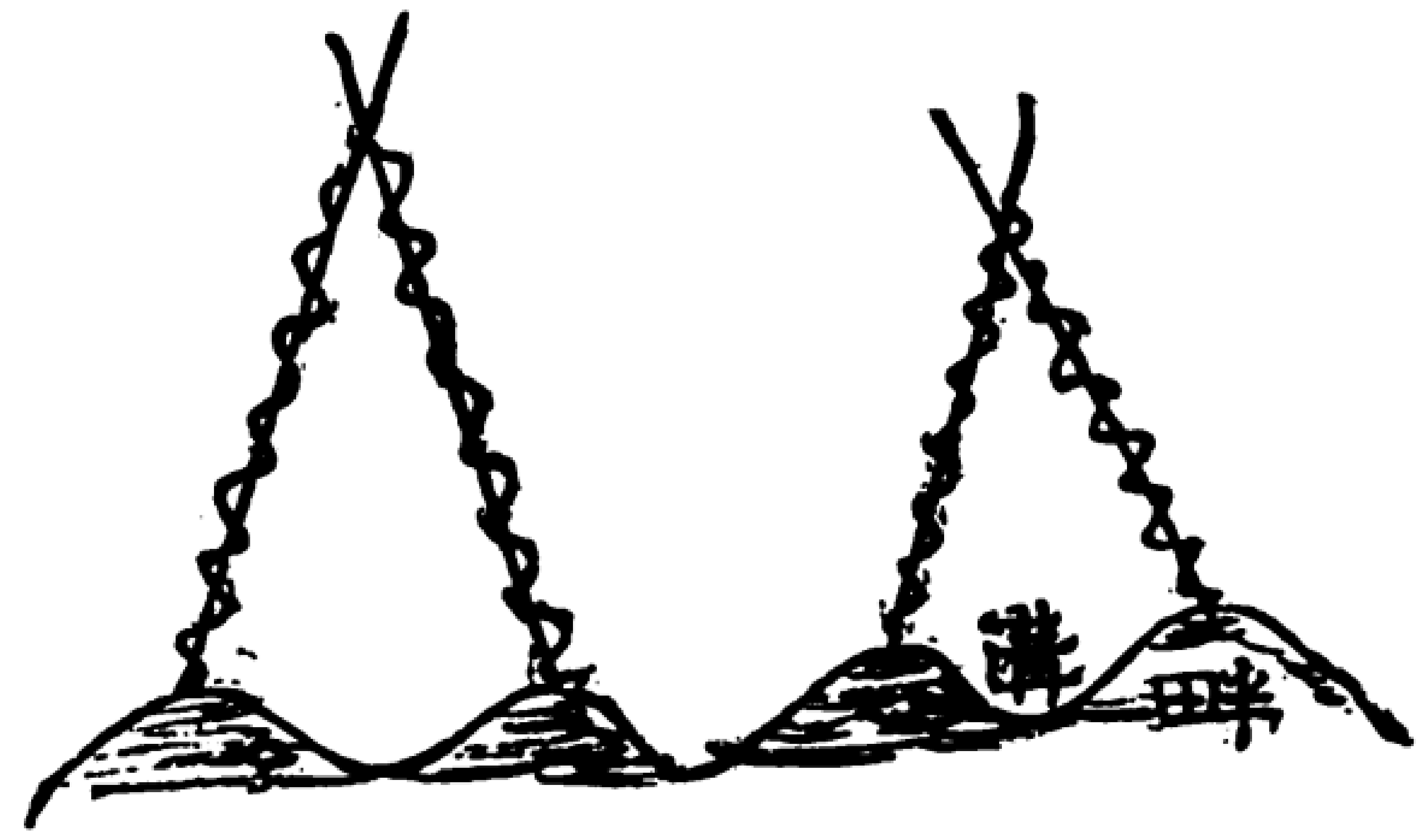


○苗床の造り方　圖の如く南向となし溫暖なる地に造る屋根は藁にて造り垣は一尺の高さとす其の中には下に枯れし草類或は木葉を入れ土を上に（肥料をまぜて）置き之の中に種を蒔くなり但しなるべく北風をさけて陽熱を集積するやうす可し。

（一）眞桑瓜　地方にかもうり、又はあまうりといふ、夏期の野菜として尤も良し其種類も色々あり銀甜瓜及青皮甜瓜共に我國の種類中品質善良にして栽培容易なり右の外外國種類中眞好なるもの多けれども此に省く扨て其の栽培法は先つ四月下旬五尺余の畦巾を隔て溝を作り三尺送に施肥し三粒位下種し土を被ふ日輝り續くときは夕刻灌し又三回位施肥中耕をなし幼芽は雨を嫌ふ故に下に藁を敷き生長するに從て廣く敷く次て三四寸位に生長したるとき三四寸を離れて施肥し拾余日を隔て又少して離れて施肥す而して注意すべきは四五枚の葉を出したるとき心を摘み枝を出さしめ其枝又四五枚を出したるとき心を摘むと三四位にして生長せしめ一本の蔓に二瓜以上を結ばしむるときは良き瓜は得ざるなり肥料は人糞、堆肥、骨粉、過燐酸肥を用ひ追肥は水肥を用ゆ總躰この瓜類は舊地を嫌ふものなれば注意すべし。

（二）胡瓜（キユウリ）　此瓜の栽培は極て容易なり種類

は節生胡瓜人枕胡瓜等いろ〳〵あり節生は節毎に結實するものにして良種なりされど早生にして形小なり後者は晩種なれども形大なり栽培法は先つ苗床にて苗を仕立て六寸位に伸びたるとき畑に三尺畦を設け一尺の株間に植付ける但し其前に牛肥を敷き乾きたる後土を被ひ其上に植へるなり牛肥の外油粕過燐酸の如きものを與ふれば尚よし而して生長すれば圖の如く竹を立て別は又一本づゝ直立に立て之れに巻き付かしめるなり移植後根付けば十餘日にして施肥又中耕をなす苗床には三月上旬頃苗仕立をなす而し此者は蔓枯死するに至るまで收穫するものなり。



(三)南瓜(トウナス、ボウブラ、カボチャ) 栽培容易にして且貯藏に堪る、種類は多けれとも東京の南瓜は皆良種なり栽培法は三月上旬苗床に蒔き四五寸に伸たるとき本圃に移植す東京にては麥の間に植へ麥を高く刈之れに蔓を匍しむ棚に匍はしむれば其下に作物を作る故經濟上利益あり但し棚に匍はしむるに株間三尺とし三四間を隔てゝ人糞堆肥を施し其上に植え後二三日にして水肥を輪形に施し二十餘日を經て馬糞油粕等を施し生長すれは棚に匍はしむ尚又四五葉出したるとき心を摘み一本は莖より四條位出さしめ一條には三個位結實せしむれば上等のものを生す施肥は大抵二十日毎に與へ顆を結び始むれば止む。

(四)冬瓜(トウクワ) 之れは日本固有のものにて暖地に至るに從て長くなる之れの種は長形と平形との二通りありて栽培法及其注意は南瓜と同じ。

(五)西瓜(スイクワ) 日本種は外國種に比し品質味ひ共に劣る種類甚だ多しと雖も重なるもの二三の示せばアイスクリームと稱する肉淡紅色、種子白色なるもの尤もよしマウンテンスウヰートは長楕圓形の大形にして肉紅色、皮は暗緑色を呈し肉理緻密にして甘美な

り。又黃肉西瓜あり肉黃色皮淡綠色にして味良けれども收穫後直ちに食するときは屢々下痢を生することあり之れ淸國種の特徵とや云ん栽培法土質は砂壤土尤もよし四月下旬より五月上旬に直播す株間六七八尺の間にして堆肥油粕骨粉人屎等を用ゐ株に三粒位を播き生長の盛なるものを一二本殘し一本に三顆位結ばしむ、濕氣あるときは三番成位結實するものあり。

（六）茘枝（レイシ、ニガゴイ、ニガウリ）　此者は東京種は食することなきも鹿兒島邊にあるものは夏中殊に賞美せらる故に每戸之れを栽培せり、栽培は直播より苗床仕立極て安全なり株間一尺乃至一尺五寸位に植へ小棚に匍はしむ二三本あるときは食ひ盡されざる位出來るものあり四五月頃播種す肥料は別に用ゐざるも沃土なれば成熟す泥土等は大に肥料となる。

（七）茄子（ナス）　種類甚だ多し江戸茄子、佐土原茄子、長茄子、白茄子、玉子茄子等其外にもあれとも江戸茄子は此内にて尤も早くより且つ尤も遲くまで結實する良種なり、栽培法は早やきは五月頃なり之れより先き早茄子は二月中旬晩きは三月下旬溫床に蒔き十餘日に發生す後三十日餘を經て他の溫床に四五回移して五月頃本圃に植へ出す斯如屢々移植すれば本畑にて枯凋せずと云ふ本畑は三尺畦を立て植付十日前二尺隔てに堆肥をして土を被ひ置きて植付着生後糠油粕等を施し耕耘す六月下旬より追々收穫することを得而し立根を切り棄てれば生長盛なり、又肥料は根を四五寸を離れて施し又幼苗は根際に土を寄せることを嫌ふものなり。

牛肉のはなし

市塵子

今日市中人士の嗜好に適する滋養食料の供給と需用の途を少しく調べた所が第一に多くの販路を有し消費されて居るものは牛肉である牛肉は統計に由るも年々著るしく增加を見る如く今日でも府下に二ヶ所（白金猿町、淺草田甫）の屠殺所で每日平均五十餘頭屠られる此牛は房總、信越、上野の近縣から遠くは江州、紀州、奧州筋より通稱馬喰と云ふ仲買人によつて市中へ輸入され

る此仲買人は生た儘問屋と賣買をし問屋は之れを撲殺して市中の小賣店へ卸賣をするのであるが此問屋を商人間に滅屋と稱へて市中に四五軒ある此滅屋が生牛を屠殺所へ出すと屠殺所には警視廳より派出して居る獸醫が此生牛を撿査して健康のものであると云ふ試驗濟の上で撲殺するのである撲殺した牛は皮、頭、爪、內臟を除いて肉と骨付の儘四斷して四肢を左右肩左右友と名づけて小賣店へ卸賣をする夫であるから一頭の肉は丸を四ッにしたるもの今市中の小賣店で此一頭の肉を賣る見世は指を屈する位しかない大抵は肩一枚とか友一本位に止ると云ふ話してある此卸相場が牝牛で十貫目十五圓より十八圓迄牡牛で十三圓より十五圓位に一定して居る而して肉は瘦たのは劣等で肥滿のが優等である之れは肪脂の澤山あるのが上等であると云ふので此脂肪は甚麼しても牝牛でなければ澤山はない從て肉の秤で味の好きもの牝牛に限るのである此肉が吾々の食卓に上て口に適するには冬は屠殺後五日位夏は二日位に經過した頃が恰度よい餘り新鮮なのは却て硬强て消化も遲いと云ふこの新古を鑑識するには極新鮮なのは血液を含む量が多いから暗赤色を呈し二三日にして血が絞れて赤色となり夫れから腐敗に近づくと鈍黑色と變じ綠色となつては臭氣を放つに至る牝牛は市中の「いろは」とか「常磐」とか云ふ飲食屋で客に供し概ね切賣屋は牡牛を使ふので並肉とか中肉とか云ふ肉は先づ牡牛を賣るのである尤も牝牛も切賣屋で賣るので盛んに商ひをする所は市中の本鄕牛込邊で本鄕の三枝牛込の吉田屋と云ふ切賣屋などは一日七八十圓の營業をすると云ふ事である之れに次で四ッ谷麴町麻布邊が多く切賣が隆盛に行はれる此邊は官吏や學生が多いからてあらう又此切賣は隨分料理に手數を要する事にて牛切と云ふ職人のある如く素人には調理は出來ないので肉、筋、骨を切放し愈々賣る迄には骨、油、筋俗に切出しと云ふ所を除くと正味は半分になると云ふ事である其肉からロース、ヒレ、上肉と區別し夫々客の需めに應するので利益は餘り澤山はないと云ふ話してある殊に肉は夏は氷を利用して腐敗を防ぐので近頃の氣候では貫

れない小賣店などでは腐敗を防ぐ事が出來ないで致方がなく佃煮にする樣な損もあるさうだ尤も牛は骨も油も屑の切出しと云ふ所も夫々需用のあつて捨てる所はないので骨は一圓に七貫目位油は二貫目位で賣買され屑の切出しは能く路上などにある煮込屋と云ふ「めしや」で一杯幾干と云ふて車夫や人足の口に這入ので之には隨分腐敗したのがあるから夏季などは健康を害する虞れがある兎に角毎日五十頭の需用者が市中にあるとすれば一頭五十貫目としても五百貫目の肉が市中に消費されると云ふは肉食では第一位である　（完）

山國の風俗

飛驒　山櫻

飛驒國は名だゝる山を以て名高き山々を圍みたる國なりされば他國の消息の聞え來る事も遲し。高山町は戸數五千餘にして何くれ相當に繁昌して他との商業も年々榮え行けども未だ僅二十二里の越中富山へも三十三里程の岐阜へも馬車も汽車もなし。元より井中の蛙何を取りて風俗と云ふべきかも知らざれど一つ二つを

○人氣は質朴にして風俗も亦。然しながら至て負嫌ひなる所あり。古くより佛法盛なるを以て如何なる者も慈心深く又老人を殊の外敬ふ風あり。

雪は籬に菊の盛りなる頃より降り十二月半頃のは翌年三月まで殘る者とす。多くて五尺許積るなり。日々在鄕より樏に石や薪(當地にてハルキといふ)をつみてする／＼と連りて出づ。故に途はきら／＼と滑かくなり歩みつけぬ人は外出なり難しと云ふ。

○ハルキの長さは三尺にして是をつみ上て横へも縦へも一間にして直段三圓内外炭も是に準ず。

○味噌醬油漬物皆何處にても一年分を一時にするなり乞食にても爾すと云ふ。漬物赤蕪の葉と蕪にして蕪は三寸圓さもあらんか。大抵の家にて是を五十貫目より多きは二三百貫も漬け古きを貯ふるを以て誇るあり秋より雪の下にならぬ前にとて川に莚敷きて洗ひ上げ藏の中などにて大根と共に切り交ぜなどす。其樣は青葉の山をきづくと云ふもかまへて詐りならずかし。寒

中には凍り固まり居れば漬物をコツをこして網にかけて蒲焼にして食ふ。

○正月には何れの嫁御も節にゆくと稱して全じ町の内にても又在にても短くて三日長きは一月乳のみ子など引連れて親里へ遊びに行き大に歓待され命の洗濯をなす。子供も伯父伯母などの家へ行けども追羽子紙鳶を道の悪きため一向なさゝるなり。

○廣告は町中を一人の老爺ありて、ふれ歩く。前に太鼓をぶら下げ背に一ぱいの紙をいろけ赤字ならば屠牛の印芝居ならば狂言と役者の名を記し、いとも眞面目にふれ行く。此近き頃も「東西此度高山町風呂屋一同協議の上ドン湯銭御一人前一銭二厘に直上げ仕り（中略）云々致しましたから誘ひかはされ日々の御入湯を願ひまする」ドドドン〳〵ドンドン〳〵〳〵と云ふて廻りたり一町の内に三度ばかりや繰返すらん。忙しき折は一日に三度位時には四度も別の事をふれ廻る事あり給料の何程なるを知らず。

○常には商品を現金にせず二月八月の兩季に集め二月節季の終り翌三月一日には新しき帳面に何品か添へてくばり八月の終りし時は豊年ならば盆踊あり。かゝるはなほつきねども左のみは如何。

大阪船場の家庭

觀風生

鴻池、平五、天五などの全盛を極めた時代から見れば種々の變遷の爲めに、いろ〳〵の種類の人が入込て來たから、其家庭の風なども千差萬別と云ふ有様であるが、此船場土着の家庭では今も猶全然舊習を脱せずして、甚しく時世に後れて居るのが澤山有る、少し堅い昔風の家になると萬事が凡て形式的で中々面倒なものである、假へば一寸した事であるが、彼岸のお茶の子とか、又は今日志と稱へてをり〳〵些細な物を取遣りする事があるが其時の使に立つ下女なり丁稚なりの挨拶は、先づ當日の天氣から、夏ならば「日増にお暑うなりました、誰人様にもお揃ひ遊して、御機嫌よろしうお入り遊しまするか、主人も一度お訪ね申上ませねば相濟

みませぬので御座りますが、つい彼是れと用事に紛れまして、お近くに居ながら御無沙汰ばかり致て居りまする…」など云ふ風に長たらしう六ケしう、四角四面に切口上で挨拶をすると、受けた方でも「また仰せの通り今日は結構なお天氣で……」を冒頭に同じやうな事を悠々と繰返して答へるのである、夫れが少し道でも隔て居るとか、久々でもあれば別に怪しむともないが、與向ひや隣同士て、日に幾度も出入のたび顔を合せたりして、つい今の先き互に詞を交したのに、使ひに來ると矢張此形式的の口上を述べるのであるから、隨分餘所目には異様な、滑稽な感じがする、其他何でも彼でも無暗に形式に流れて厭やに鹿爪らしうする事に就ては寧ろ馬鹿氣た樣な事も往々ある、が併し夫れはそれとして置て、令嬢即ち所謂とうさんなる者に就ていふが、此とうさんに就て先づ其呼様から云ふならば、茲に一軒の家に三人の娘があれば、總領を嬢さん或は姉嬢さん、次を中はん或は中嬢さん、末を小娘さん又は小嬢さん、それより猶下にあれば本名に嬢の字を附着て、花子ならば花いとさん、秋子ならば秋嬢さんと云ふ風に呼ぶのである、で夫れが召使とか出入の者とか、目下ばかりの令嬢に對する尊稱に限られたのではなく、或家では現在の親達までが我子に向て不見識にも名を呼ばずして、とうちやんだの嬢なんぞと呼んてゐる、中にも稍親たるの威嚴を保つ父母でも猶且つ我娘に樣をつけて呼捨てにするなどは殆んど稀であるのみならず他人に向て娘の噂をするにも、彼人が斯うしられまして、此人が何う云はれましてと云ふ風て、一寸聞くと如何にも美しい樣なもので、何となく耳障りて聞き苦しい心地がする、名を呼ぶのですら既に此通りであるから、其娘に對する凡ての事が至極寛大で、緩るやかで、其家庭に於る教育等に就ては實に心ある者の懸念するのも道理て、雨が降るからと云つて學校は休ませる事が有ても、遊藝の稽古は決して怠らせぬ、試験の成績が惡くても苦にせぬ親達が、琴とか舞のお浚らひでどもあると云へば、宛然狂氣の樣に成て、夜の目も寢ずに大騒ぎをやる、さうして何程多額の費用を消やさうとも頓着

に介せぬと云ふ有様で、とうさん自身もまた其方が面白いから、自然學問よりも此方に重きを措く様になる、夫等が即ち年頃に成て芝居好きになり、縫物屋での俳優の月旦めをする素養になるのである、斯くして育て上げられたとうさんが又其を理想として、御寮人になり娘を教育するのである、で此とうさんの嫁入る時には例の媒介口で好い事づくめの條件の中に、必とお芝居は代り目毎にお出になられますと云ふ詞が聞かされる、さうしてとうさんは是れに耳を傾けて、少し位心に染まぬ處が有ても我慢が出來るのださうである、兎に角餘所目からは比較的他の町々よりも、いづれの家庭でも上品に見ゆるのと昔の名殘りとて今も地方から奉公に出る下女が、船場の何處そこに勤めて居ると云へば他の船場以外に居るよりは同じ下女と云ふ中にも自然其處に區別が立てられて田舍なぞでは中々鼻が高いとか云ふ事であるが、是れも矢張昔有つた大家の餘光であらう。

（完）

▲米國人の奢侈

米國の某新聞記して曰く、現代婦人の日常其身を飾れる衣服、外包、手袋、ハンカチーフ總て女王用として毫も恥づる所なし、而して總ての娘子供は、其衣服及び快樂の點に於て奢侈なること王家の姫君に比して何の遜色あるなし、娛樂を欲せんか、芝居あり、遊船あり、打毬戲あり、フートボールあり、招待あり、晩餐あり、茶會あり、夜會あり、之が爲め、年々費す所は實に數百千万圓、併かも亦之に滿足せず、內に入れば、ピアノあり、寫眞あり、自働車あり、自轉車あり、馬車あり、馬車には大人用のものと小兒用のもの、果ては人形用のものまであり、否々吾人の贅澤は之にても盡きず、身を飾るには、海豹の皮を始めとし其他各種の貴重なる毛皮あり、絹あり、繻子あり、リボンあり、羽毛あり、圓頸帶あり、天鵞絨あれば組糸あり、綺羅あれば薔薇あり、蒔繪の器具もあれば其他の裝飾もあり、金剛石もあれば紅寶石もあり、眞珠もあり、懷中時計もあれば柱時計もあり、香水あれば香物あり、一々枚擧に遑なきが、此外吾人が茶と咖啡の外に、飲物に向つて費す所は年々數十億圓なるを知らず、煙草に向つても亦同樣、菓子菓物花卉類に向つてすらも尙ほ數億圓を投じて毫も惜む所なし、實に吾人が奢侈なる生活の爲に費す所の金錢は年々百億圓を超ふることとなるが、翻つて五十年前に遡れば、吾人の祖先は、此等の巨額を耳にするのみにて呆然自失、爲す所を知らざりしなり云々と、米國人が如何に贅澤なる生活を爲しつゝあるや想ふに堪へたり

女學世界懸賞和歌兼題（七月分）

（〆切六月十五日）
（披露七月五日）

海水浴

輕氣球

夕立

女學世界懸賞文（七月分）

▲賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲消息文（二十四字詰二十行限）

▲韻文（二十句限）

▲抒情文（二十四字詰四十行限）

▲敍事文（仝上）

▲〆切　六月二十日

▲披露　七月五日

▲賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

才媛詞藻

懸賞披露

文學士　尾上柴舟先生選評

（天）湖邊眺望　横濱市西戸部町百五十二番　長谷川さく子

鶴二つ湖を横ぎる影みえて
浦の寺でらいまひるの鐘

評、風調清逈、絶えて塵俗の氣なし

（地）夢　美作眞庭郡一宮村　池田芳子

夏ぐさのふかきが中にこもりたる
夢もあらんを靜かなれ風

評、兵どもの夢の跡より脫化せるものが、高格老調

（人）麥秋　薫子

ひるげはこぶ妻にこひしのゆたけさを
ゑみてかたらふ麥畑の中

評、輕妙自然、而して喜色滿幅、

記者曰、（薫子の住所詳細に至急通報あれ）

秀逸

●湖邊眺望●夢●麥秋（課題）

三井寺の鐘のひゞきの長くひきて夕霧ふかし琵琶の湖　京橋 山崎さよ子

湖はかすみこめたる朧夜を眞砂にうごく葦の葉の影　岐阜 田村さふ子

何となく物思はるゝ朧夜をたちてふかしぬ湖のほとり　本郷 中村やす子

ほのかにも投網うつ音聞ゆなり蘆の葉ゆらぐ湖の夕　伊勢 細野鈴子

富士のみねの雲紅にたそがれて蘆の湖風しづかなり　三重 細野幸子

湖に星の影さす夕ぐれをひとり笛ふくむら蘆のかげ　仙臺 松坂哲子

夏山の影もゆるがぬ湖の水底深く雲の湧くみゆ　麹町 安藤よしえ

雨はれて夕日照そふ湖の上を飛ふや鴎の影さやかなり　愛知 鈴木まま子

行く舟の帆影涼しく雨はれて夕日さやけし竹生島山　仙臺 佐藤ふみ子

夕ぞらそびえて高き富士のねのさかかげうつる蘆の湖　遠州 服部さく子

何となく背戸の麥畑逍遙ぬよべ亡き母にあふと夢見て　下谷 白井すみ子

去ながら夢と覺えず姉君のやさしみ姿いまそかりし儘　下谷 佐野さち子

病臥る友の訪ひ來し夢さめて何とはしらず胸騒きぬ　神戸 杉田鮎子

春をのせて流るゝ花にぬる蝶の夢よ長へたゞ醒ずあれ　崎玉 林溪花子

まだ遇はぬ人に遇ひつと夢見しは寫繪見たる夕なり鳬　信州 小林春子

天つ處女降りて我に囁きし夢のなごりか花のちりくる　信州 山本はる子

妹にゆられそ覺めぬ母君と一聲よびてしたひよりし夢　青森 三上そと子

幼兒はいかなる夢や見たり劍母に縋りて笑みて亦泣く　岡山 若夫婦

故里の樂しき團欒夢に見てひとやのうさをしばし忘し　和歌山 前山澄子

うたゝ寐の枕に見たる我夢は繪にも歌にも寫さで止む

乳根のましろき胸に頬ふれて夢安らけき稚子のかほ
岩代　北條よし枝

とゝせぶりふるき師の君訪ひて昔語ると夢にみしかな
山城　村岡綾子

松風の窓うつ音に醒されて見たてぬ夢の名殘をぞ思ふ
栃木　春園女史

夏蠶をば母にまかせて弟と爰の麥畑麥かりくらす
仙臺　佐藤ふみ子

菅笠にあかき襷もまじりつゝ一里麥はたたいうたの聲
横濱　長谷川さく子

くろみたる鎌にさげゆく子も見えて麥かる畑歐仄なり
信濃　竹鼻はる子

花散ぬ胡蝶は老い主かはあれば嬉しからずや麥の秋風
山城　紫花女

紺紅き菅の小笠のゆらく見えて麥畑一里風ゆるく吹く
遠江　鶴田まん子

幼な子の守は嫗に任せおきて男をみなのせとに麥刈る
下谷　白井すみ子

桐の花賤が軒端に散りそめて夕ぐれすゞし麥の秋風
備前　重松竹子

今村たけ子
神戸

佳調

青葉若葉しげれるひまにほの見ゆる麥刈れる少女の手拭白き
○○○麥秋　信濃　有賀きよ子

そのかみのをさなあそびをものがたり見たるゆめこそ樂しかりけれ
○○夢　越後　合田かう

搖籃にうまいせる子のほゝゑみぬなきその母や夢に入りけむ
○○仝　小石川　村岡つる子

はひよりて膝に笑む子をゆめにみてかたみの寫眞ひしといだきぬ
○○仝　岐阜　高森とし子

夕ぐれを子守がてらにをとめ子がふく麥笛の聲ぞ靜けき
○○麥秋　山口　梶岡ひさ子

かぎりなき廣き原野は麥かれるをとこをみなの唄にみちたり
○○仝　大阪　田中しゆん子

門にたちて物こふ人のふところにねむれるちこのゆめいかならむ
○○夢　麻布　伊藤ふく子

かの君は海の上とほくましませば夢路もいとゞ辿りかれつゝ
○○仝　信州　小林すみれ

みづうみに三つ四つ見ゆるあま小舟かすみにきえて春雨のふる
○○湖邊眺望　大阪　田中しゆん子

舟きえてこえの音きえて夕月のかげおぼろなりひはのみづうみ
○○仝　河内　大矢たれ子

あせ果てし董の花を頬にあてゝをとめたゝずむ湖のゆふべ
、○仝　南總　繁子

比良の峰は遠くかすみて眞帆片帆矢橋に通ふ影のとかなり
、○仝　越後　坪井わか子

ゆく舟のかげおぼろなるみづうみにかすかにひゞく三井寺の鐘
、○仝　越後　合田かう

諏訪のうみ朝ぎりはれて釣舟の波のまに〳〵こぎゆける見ゆ
、○仝　信濃　高木しげ

、、○仝　ひな子

叙事文

●首夏漫筆

《甲賞》

伯耆西伯郡崎津村
大字大崎西松本寅　蓬莱女史

美しと見し花の運命はまこと夢の如く、多くの詩人歌客の吟魂を銷せし長閑けき風も、軒端の風鈴に音なきを訛るなかしさ、佐保姫のみ車は紫にたなびく霞の裡に消えて、はや夏のはじめとぞなりぬる。数日つゞきし雨のすがくしう晴れ渡り、池の畔に濃く淡く紫に咲きいでたる、杜若菖蒲あるは紫陽花などの容姿、などて蓮の花に劣るべき、築山のかげなる小池の汀の藻を動して、遊ぶ緋鯉真鯉あるは金魚の、筧の水に脊をうたせ、深山路の春の名残りの落花、筧づたひに二ひら三ひら水面に浮ぶを、得んと戯るゝ小鯉の無邪氣なるいとをかし。前栽の若葉雨を帯びて檜の翠滴らむばかり、幾多の瑠璃の玉をつられ、そを利鎌を研きたらむ如き月影、斜に庭を射て萬顆の白玉、颯々と吹きくる清風にゆるぎて墜つる一滴二滴、飛石にくだけて異様の光をはなつぞ涼しき。野づらは大方麥刈もすみ、早晩生ひ伸びし早苗を小田に植うる早乙女の、青き水面に紅の襷の影うつして働らくいとうれし。去歳興りの老翁よりもらひし種子をまきし姫百合、濕ひを得ていと得意顔に穂垣のほとりに斜に咲きたる、恰も二八の少女子の浴後の姿に似たらむかし。隣りの牽牛花の姫百合をいとひとか、垣を越へて蔓を出し、葉がくれに一つ紅の花さきいてたることよなうゆかしき極みにこそ。泥の中よりぬけ出てし蓮の花、ほのぐと明けゆく空朝霧ふかく、山川藻家などをとぢこめ、世はいまだ寢靜まりつる時、紅蓮白蓮とりぐに咲きそろひ、薫香脉々と朝風に送られて芳しく、人をしてそゞろに、蓮の臺にのりて極楽浄土に遊ばしむる心地ぞする。

藁森の夢さめだる時、金魚賣りの呼ごゑ、あるは夕ぐれにいなせ男の、むかふ鉢卷に勇まし氣たる初松魚うりの呼聲なむど、聞くから目の覺むる心地こそすれ。小供等はいたく肥え太りて、雪なす肌に胸掛をかけ、植木棚の端の手桶にかけたる胸の頭より、噴き出す水を浴びて微笑し、滑しき眼に愛嬌の露をこぼしたるいと愛らしとも愛らし。

夜に入りて遣水のあとひやゝかに、床几軒端に持ち出して休らひける折螢の三四つかたへの草むらより出てゝ木の間にかくれたれば、捕へむものと手をさし伸せば、戸の隙もる燈火垣間にうつりたるを夫と思ひたる我ながらおかし。

初蚊帳に入りれられぬまゝ、短夜をふかす程に、血に鳴くてふ杜鵑の、涼しき月の面をかすめて、一聲高く啼き過ぐるなど、いと快よき限りになむ。晝のまの暑さを行水に流し、東京浴衣の花やかなるを素肌に若、手に京團扇もてる少女の、岐阜提灯の火影を半頬にうけ、軒端にうつせる鈴の音をきける姿を、珠簾越しに見るもいと涼しうとぞ。

げに夏の樂しみは、なべて清爽なるを以てまされり。妾はこの清爽なるけしきを愛し且冷ぶ。あはれこれより如何に樂しきことならむ。

評　初夏の實景を描き出して叙事甾のごとし

●夏の記

《乙賞》

信州上伊那郡
赤穂村　中林ちとせ

樂しき春の野遊に山遊にあくかれし花染衣を惜しみつゝ單衣と脱き更ふる袖もかろげなる、夏もまた涼しく、おもふどち若葉の影にわけ入りて

時鳥を聞きゆくりなくも遲咲きの山櫻花を見出しては、なほ春の名殘りのおもほえて、心ゆくこともさはなれど五月雨の降りつゝく頃は、大かたならず心さへかきくもりて、いぶせき哉、やうやう晴れて嬉しと思へば、照りはたゝきて、身もやけんばかりの暑いと苦しく、なかなかに堪へがたうなん、然はあれと日のやうやう西山に沈む頃より夕風そよそよと蓮の池をわたり、螢は露をたつれて草葉の間をみだれ飛ぶを見ればおのづから心も涼しく、晝の暑さも忘られて、實に樂しさよ、又梢にさしのぼりたる月影を眺めては、嗚呼かゝる夜の長かりせばと短夜をかこち結びもあへぬ曉の夢に驚ろかされては、火鷄を恨らみ、あるは親しき友どちと近き川邊におりたちて、水を結びて遊ぶなど、面白き事數へあくればなかなかに、その樂しみ春に劣るべくもあらじと思われぬ。

評　淡々たる着筆却て趣あり

●日記の一節

（丙賞）

大阪市東區清水谷東之町番外二番邸　仙田蒔

五月一日　晴れ、月初めに斯れば、今日は雨天少なからんなどいひ合て樂しむ。

午後英國婦人ヘヲードの君來まして、我が爲に聖書の講義されける、げに心行くばかり尊くめでたかりし。夕方曇りて今をもきつかへしが、夜に入りて寒さ增し雨は降らず終せぬ。

五月二日　曇り、正午頃に日かげ見へにけれど、しばしのまにて、やがて小雨の降り出でしが、夕刻より次第にはげしく降りまさり、遠雷さへおどろしく鳴りそへければ一時は物すごきやうおぼゆ。きるにても昨日おろせし朝顔の種洗ひ出されはせず　心づかわるゝ事よ。

五月三日　晴れ、今日は八十八やとて、百姓共やく日とやとのふらん日なるに、さて[illegible]なるよ、今年の豊年告ぐらんか。いづくの里も今日は數多の物の種の蒔かるゝならんに、さてもいづちにこよなき花の咲くらんや、天より見給ふ神はげにおかしき日ならんかし。氣づかひし朝顔さ程にもあらざりし。

五月四日　晴天、日中はあつきばかりなりしが、暮がたより雨となる。

五月五日　前夜より續きて降りに降る、雨の中に餌をひろひつゝ巣にはこぶ雀のぬれ姿哀れなり、かゝるひくき動物すら子を愛る情のこまやかさ、眞親は尊きものぞかし。

終日止みまとてなかりしが雨たれものこり少なになりにけん、よひより小やみとなりぬ。

五月六日　天よく晴れ渡り露もつ木の葉に旭かゝやき蝶のかげさへいとうらゝ見ゆ。

五月七日　晴れ　東なる弟の許より手紙來る變りなし。日頃の雨多かりし故か、早、朝顔の二葉を合せて出てけるもあり、赤くほかせし白き芽の中園を地上にあがきたる、頭背くしてすぐなる、何れ短き一世の榮華夢見つつあるらんかし、あられ優しの花よ汝が世にも風あり雨あり、色香を愛る蝶々の眼を引く、ゆかりの色こき盛りは、しばしのまぞ、やがて秋風たちそめて、朝な朝なの露霜にありしすかたは見んよしもなく、北吹く風に枯葉ならしつゝ、去りもえやらぬなきからの、ありし昔を籬垣にしのぶらん虫の音の哀にかなしき時も來つらむ。

評　筆は幼稚なれど文に眞氣こもる

抒情文

●春のゆめ

（甲賞）

神奈川縣青木町六十七　保田ゆづる

散り殘りたる梅が香は猶ほ園の外邊ふ東風にこもりておそしとや啼く鶯の聲に目さむれば哀れ今思ひ設けぬ邂逅とは心ひそかに嘗しみつゝも餘りの嬉しさに心ともなく手をとり交はし浮かれ出にし妹が影朧やこゝ三年戀ひし心や通ひけん實になつかしの故里の野に語り合つゝ千草にあきて狂ひ交しつ胡蝶に戯れしあとけなの妹が姿何處ともなく消え失せぬさても口惜しと我にかへりて覗ればむべ仇し寐屈の夢なりけるよ實に嬉しの夢戀しの樣や今一度その空想の影たに辿りてましと酷然目をとつるも身は徒に現世の奴となりて過にし悲しみにもたゆるのみさても果敢なきは夢なるかな

あゝ夢よ汝は如何にして此我が忘るゝ由なき悲哀の胸に暫時喜悅の光明宿らせしぞ汝はわれに何の恨みありてかやがては消ゆる嬉しの影に導きて我を欺き弄ひしぞさはれ如何に宿世の緣因淺くして同じ血分し此姉此一人の妹は今や汝の力借りすしては長世に束の間も逢ふよすがなきぞ實に悲しさの極みなれ

思ひ起す三とせの昔世は花鳥の彌生の空詠めあえぬ花またつきぬ情には情なき風たにしばし心してそ吹かまし物をまた十歳にみたぬ幼き遊けき希望は充ち滿ちて歡樂の花また咲かぬ妹が身に心急ぎの常なき風は如何に身にしみ吹きにけんかりそめと思ひしいたつきは日ふるゝまゝ靈癒らん嫌もなく春深くなるや哀れ愛らしのゑまひは散り行く花に誘はれてはらの如き紅の頰に喜ひの血しほ湧く由もなく靜の如き涼しの眼は長世に閉に眠りて又と再ひさむる由なき果敢なさよ思ひ出るも胸痛るをあはれ其日其時やいかに

さても己れこゝに幾年故鄕しのふ旅枕春風そよく花の晨霧立ちこむる秋の夕九十の春光夜半の嵐に消ゆるとも三五の月明心なの雲かくすともいつかは故里しのふの心や枯れ果つへきこは戀々たる故山の風景惜しみてにも非す目なれし都の春にあきてこもあらす月すむ夜半の夢にたに忘れはせじと契り交はせし友も物かはこの唯一人の幼き妹につきぬ涙のこもればなりきあゝ春去り秋來り世は又もや花にあくかるゝ昨日けふ花は昔しなからに咲き揃ひぬ鳥は嬉しけにこそのしりへなくりかへしつさるな我身やいかに實に涙の種ならずやはあゝ今は言はし語らし我は泣きになき咽ひに咽ひぬいつしか聞ゆる軒の玉水の音點々心ともなく窓の外眺むればいつの程にか傷しにけん細々たる雨絲は亂れに亂れて今朝咲き初めにけん紅の桃の花一ひら淋しけに散りゆくも實に心なきものとも覺えす心細さそきつり行く

評　此種の悲愁をのぶる文多けれど、大概は文も想も共に古めかしくそ見るべきものゝ少なき中に、此一文は、たすかに思想もすぐれ、文章も老錬の域に入れるを見る、本誌の才媛文壇において、近來有數の作也（日東）

●琴の音

（乙賞）

四谷左門町八十八番地　渡邊しき

世を厭ふ心ならでも、秋の夕、雨ふる夜などは、つれ〴〵にいと物うきに、松にかよふ琴の音には、なべての人の心慰むものなれや。ましで月

おぼろに花匂ふ様、あるは鶯来鳴く南の窓に、妙なる音の聞ゆるなむいとゞ優しうおかしきに、しかも花いよ／＼艶に月歩みを止め、鳥の聲ますく＼妙なるを覚ゆるかし。緩く弱きは春の湖に小波立ち、野邊の小川の流るゝが如く、强く急なるは深山の瀧唯より落ち、谷の流岩ばしるが如し。あるは花の散るが如く村雨の降るに似たり。あるは霰の滴るが如く、雪の舞ふに似たり、四季山川のながめを音色に聞く、いとも奇しく妙なるは琴の音なりけり。

神代の古、八重垣つくらせ給ひし小琴のためしは申すも畏こく、嵯峨野の奥の琴の音は、雲井の空に聞え渡り、九重の雲深き御簾の隙もる妙の音は左中将の君の心を惱ます種と成りぬ。善悪邪正を明かにし、天が下を治むと云ふ裁決の庭に此音響きては、心なき士卒をも感ぜしむ、況してや智仁勇兼れ備はれる將侍をして、如何に心を傾けしめけむ、花の遊月の宴、玉の臺、賤が折戸の分ちなく、へだてぬものは琴の音なり、是に依りて人我の心の憂を慰むるのみならず、喜怒哀楽の想をのべて、情ある人の心を動かし、我心音のかよひ路とぞなれ。尊くも嬉しき琴の音優しくも哀れなる琴の音や、曲つる糸の音繁くとも、心のふしの一筋に千々の想やこもるらんかし。

評　やさしく、ゆかしき琴の音を抒情的にしるせるは、此の文也、着想と文章と共に優佳なるは喜ぶべし（日東）

●籠の雀

（丙賞）

信濃國松本町
一六五六番内　小松のぶ子

弟の九つになれるが。學びの道にはおそきものから。竹馬の歩み足とく親のいさめもきかで心のまゝにふるまひけり。ある日屋根の瓦に雀の雛を捕りて飼ひけり。摺餌などさるべくものして、竹籠に入れて朝夕の慰めものにしてけり。親雀はこよなくうれひげに、日ごとにほど近き柿の木の枝に止りて、うらめしげに籠を見おろして啼く。何ごとをいふにかあらん、いとあはれなり。二三日經ぬれば、雛なきかなしび、父やよぶらん、母や呼ぶらん、空のかたをのみ眺めてなく。一日おもしろき遊びごとにまぎれて、弟は餌をわすれたれば、いとゞかなしく啼きしきるに、やをら歩みよれば、うれしがりて飛びまどひつゝ、嘴を籠のひまより出して、餌を求むるさまいと悲し。細き木屑に餌をましてとらするにいかばかり嬉しきにかちよちよと聲を限りになく。親のもとにあらましかば心のまゝに養はれんものを、せまき籠にこめられ、かゝる餌をだにえがてになくよ。人ならばと親雀の心ぞげに悲しかりける。あくる朝弟の泣きのゝしるにゆきて見れば、猫もやくひけん、籠は破れて雀の足のみ傍に散りぼいたり。こは必ず隣の三毛のしわざならん、見つけたらんをり、たゞ一うちに殺してんと、弟のむつかるもことわりなり。かゝらんを知りけるにや、昨日は殊に悲しう啼きけるよと涙おちぬ。あはれ、親雀は今いづくにか啼き悲しむらん、あはれ籠の雀。

評　頑是なき弟が、子雀の親をはなれて泣き悲む心も知らで、無情にも之れを狹苦しき籠の中におしこめ、いと愛して飼ひ置きけるがある日、その愛せる子雀が、猫にや喰ひ殺されけむ、慘酷なる死を遂げたれば、怫然として怒りの色をあらはし、その最愛の飼鳥のために、仇を報ぜむといきまけるさまを描きたるは、其趣向大いによろし、文章もいつもながら、頗る巧み也、ことに、結末の數言は情趣深し（日東）

消息文

●歸國せし友よりおこせしかへし

（甲賞）

本所區仲之鄕竹町十一番地　宮内千代子

汽車のゆるぎいでし後もなほ御姿のみゆる限は打ちまもり居り候ひしをかへりみもせで急ぎたまひしはいと心つよき君かなとおうらみもいたし候さて宿に歸りてはいま頃はいづこの里をすぎたまふらむ今日はなにがしの川こしたまふらむなど御みちすがらの驛々地圖くりひろげてせめての心やりにみつゝ思ひわぶるまゝに早十日をすぎしけふのひる頃嬉しうもおこせたまひつる御文なつかしう存じ上げ候つらきはいと言すくなにのたまひぬるなれどなにやかやせはしう渉らせらるゝ折柄なめればとまたあはれにも存じ上げ候旅も今の大み代となりてはよろづいや進みに進みて足らぬものもはべられば道のほどつゝがなうおはしつるめりとは思ひ上げ居り候ひしも御消息にて全く心落つき申候此の頃は氣候いとかはり易く候まゝ風になあてられたまひそたゞこれをのみあんじ上げ候かしこ

評　詞が練れて、よくも其意をのべられたり（日東）

●和歌の添削を乞ふ文

（乙賞）

長野縣松本町中ノ丁　丹羽はる子

此春は、いつもより、殘る寒さの肌寒く覺え侍るを、いかに、隙らせ給ふことも御座しまさずや。世はなれたる處に、家居を移し侍りしよりは面の當り、みけしき伺ひ奉る事も叶はず。隨ひて。萬のうたがひも解きがたく、逝く春の哀れにもまさるは、古里の戀しさになん。時に此ふもとの池に碎くる月はあれど、峯の老松には鶴もかざらず。なれぬ山屋の淋しさに、かれて承りし歌日記のこと思ひ出し、少しは心のなぐさみにもと、日々、一筆二筆と、ものに記し侍りしが、半年余りを經るまゝに、いつしか、この一綴とはなり侍りぬ。固より習はぬ業の、いと拙くて、御耳にふるゝだに、はづかしさの堪へがたく侍れど、かくて止みなば、いつかは上達すべきとて、つゝましさをも顧みず、御添削を乞ひまゐらせるになん、あはれ、切なる、おのが心を御くみたまはり、拙きを捨てさせて、御墨の匂ひだに加へ給らば、こよなき幸にこそ。御老躰の御上御大切にと、かげ乍ら、祈りあげ參らするになん。かしこ

評　文詞佳也、されど、書翰文はいま少し實用的なるこそよけれ（日東）

●藤の花に添へて友の許に

（丙賞）

四谷左内八十八　渡邊しらゆき

待ちわびし花鳥の音色もいつしか影をとゞめず、つゝじ山吹とをしげもなく過ぎゆく春のつれなき風を恨みつゝ籠りがちにのみ明し暮し侍る間にいつの程にか庭の藤が枝咲きそめ紫の雲棚引きたるに、池の白波立ちかへり心あらば呼びもとめよと往きなやむ人の袖いと床しきに、山時鳥のそれならで君はいつし來ましらんと思ひわびつるあまりに、此方の空忍び給へとて色こきを手折りて參らする、只机の上にのみながめな捨て給ひそ

花の下蔭はいと長くは侍れど散りての後青葉に忍ぶは紫の色のみならむやは　あな　かしこ

賞外雜文

●雨

河内　大矢たね子

雨は夕立こそげに〱心地よきものなれ、あらかれのつちさへ、さけんばかりのあつさたえかたきに、あはれ、一しきりふりそゝぐ雨もかななど、かこつまもなく、大空はさながら、墨を流せるばかりにかきくもり、かみおとろ〱となりはためき、あやしうすゞしき風、さと吹きくれば、彼方の山ははやうすゞみの刷毛もて、押しなでたらんやうに見えしが、やがて霰の如き雨は、こなたにも降り出でつ、庭の面は忽ち池水のあふれしごとくなりしも、しばしにて雨やみ空はれ、枯れ〱なりし草さへ水さへ、とみによみがへりたる心地して、緑いやます木々の葉末にしたたる、餘波の露の玉とある折から、雨にみがゝれたる月影の青葉のすきよりほのめきそめし風情、げにたとへなく覺ゆ、さはれ、ものへ行きたる途にて、俄に降り出でたる、なか〱につれなくおぼゆるもをかし、明日は親しき友と久々にものへゆく約束して寢たるを夜あけて雨戸おしやれば、あなうたて、しと〱とふりゐたるいかにつれなきよ、近きわたりの、淸き小川に翁の一人が釣りしける折からふり出でたる雨の、鏡の如き水の面におちてさながらさかづきの形したるが、いとをかしきに共に行きたる童の兵士の調練見る如しと、爪音によそふらんとて、ふり出でたる小雨に、小田の蛙の一聲二聲ふみよむ窓に趣をそへたるうれし、寢覺をかこつ秋の雨、さては桐の葉もろくさそはれて、さらぬだに寂しき夜半におとなふ時雨、いづれわびしからぬはなきに、病の床にきゝあかす、一しほ心ぼそきゝはみにこそ

●藤を觀る記

久留米　飯田その子

かげろひもゆる春の彌生も今一息のよとなりて足引の山の尾の上の雲雀は處定めず失せにけり。はる〱と雲雀は高く御空に鳴き青柳のいと長きも日にそひて猶にえならぬ桃櫻の香も盛り惜まず散りはてゝ春も名殘なく暮れ渡り霞染の夕ぐれ近くなりにし頃より山寺の鐘の響の三つ四つと咲きそめて今なむ眞盛りなるよととり〱の噂なり。されば此盛りを過ちてはとかぞいろも奬められければとあるめでたき日うらゝかに風靜かなる日を撰びてかぞいろともに三井郡北野天滿宮の社内なる藤をと志ざしつゝうち出でぬ。道の程は小半里もあらなむ。行く〱みやびつくせる數多の人のかげろふは同じ心に出て立ちたる諸人なるべし。着きて先づ社前にぬかづき右手の斜を顧れば紫の雲の下りゐるかと疑はれ漸く近づけば幾千條ともしらぬ濃紫の花の糸ゆるく吹く風に打ゆらぎたるえもいはれず。境内はいと廣々として藤はたゞ一本の根より出てし古びたる五璽の過ぎされども丹精の養ひを得たるなるかはた靜のしはざなるか木を柱に竹組みたる大笊目の棚にかせがれつゝ四方にはひ廣ごりて物の三反許りは限なく覆ひあまりてこなたは池の上りにさしうつろひ水も紫に色變り其の花の穗先折り〱水の面をかきまわすはえならざる風情あり、-かなたは嚴めしき垣にやさしうかゝりてなほいかめし。こゝには酒茶菓なんど賣るとて假屋を數多花下蔭にしつらへり。花見むとて來る人も多くして少女の何か口たゝきつゝ心そらにありくもあり。ばうぞくなるあるやごとなき人にや。あるはつゝましげなる又ははや瓢かたぶけ矢立出して物するあり。今日は晴れにはれて一天雲なく手にとる許りに鷗

に花をすかして山の招けども又打見る人もなし。おのれらよき程の處に設けたるスヰーツによりて打見つゝ竹葉など取出して藤のしなひの長き日一日紫の染む許り花下蔭に遊び暮しつ。人も漸く三々五々と立ちそむればおのれは猶も飽かぬ心地のしつれどもかぞいろのいざとのたまふににほふ紫の花の色香まさむ程あたらしみ心殘してかへさにつきぬ。げに飽かぬ　花の盛りにて散らぬ日數の長かれと祈るも甲斐なく留らぬ色をいかにせむ。あはれ

●櫻

神奈川　ゆづる

世の中に此花なかりせばと歌ひけん古へ人をまれふこはあられとも思ひ及はぬ神世はしらずおうよそ此花世に咲きいてしより春としいへば花はなどいはゝ櫻花と稱へらる清く閑けき梅か香は草木も人も目かれし枯野に冬を名殘の雪間をわけて身にしむ風にも薫り惜しまず夜毎の霜にたゆみもせでけなげにも春の門出に先がけしより櫻まつ間の心やいかにさても花の春れや幸や咲ましさの限りなる九重の御花奥深く立こむる八重の霞の絶間より燦然たる朝日に對ひて匂ひいでたる愛てたさはいはずもがなありともしれぬ賤が伏屋のやれ垣にやとる月さへおほろ夜に我獨り春しりかほなるも哀ならずや實にや都の錦おりなせし花の林はろに雲にたとへむも今は仲々に古めかしうて鬱々たる老松古杉枝を交へし幽邃とやいはん山影に昔しかわらぬ古木の櫻見ては淺ろまだふまなくに吉野の宮の古き御なげき昔しなからの奈良の都もしのばるゝなれさはれ濃き淡き互みに競ふ艶然たる色一重八重時こそかわれ優しの姿さてもあてなる盛り散さるをすみわたる大空に一點たゝならぬ雲のたゝすまひ心なく翼をのへておそふ風一陣またゝく間もなく爛漫たる花は一片の名殘たに止めんともつとめす紛々時ならぬふゝきと亂れ灼々たる花の光はあはれ一滴の涙の露たにのこすよしもなくて果敢なく消え行くにまかす哀さよ誠や我大和男子の一旦事急なるに逢ひては義勇公に奉じて君の御爲め春ある身の幸福もさてはかゆるに物なき命をも惜しまてすすむ健氣さにまさるとも劣らましやはとそおほゆるなれあゝ徒らに其美に醉ひ其色にあくかるゝ世の人は此雄壯しのふるまにけなけの決心身にしみなはれと思はずやたゝ詠めあへぬ間の雨を惜しみ散らぬほとの嵐を歎くは此花のまことの心なりやわれはひそかにうたかふなり

●桃の花を見る

信濃　丹羽開代

やまひの名殘つくろはんとて、かりそめにこの山里なる叔母の家にうつり住みてよりは、門を出ずして垣根つゞきに花をも眺め、垣内ながらになく鳥の聲をも聞きて、おのづからこそ心もまぎれたりしか。やう〳〵花もうつろひ行きて、空にしられぬ雪さへ庭の面に積りにたるが、あかず口惜しさに眺めをれば、今日はひゝな祭る日なりとて、里のうなゐどもが、桃山吹の花など、こちたきまで手折りもてゆくを見るにも、家なるはらからのけふの、あるじまうけおもひいでられてなつかしうなん。曾波の眼新たに媚びたりとかや、ほのかに歌ふなる聲の聞ゆるは、かゝる山里にいかなる人のすまへるならん。貴賤と親疎とを論ぜずとか。花ある人家をもとひて見ばや。よしや、うちつけなるわざも、心あらん人はとがめじなどおもひつゝ、はしたに山みちのあないさせてそゞろにいてたつ。こゝの垣根かしこのくまに咲きたるが、みな一つ色に美しきを、これはけもゝの花にて侍り。あれはすもゝにみえ候へなど、およびさしつゝいふもおかし。御のにくうなりにたるが、生ひつゞきたるほそ

き道を、あへぎつゝゆくなど、ただくれなゐの雲のおりゐたらんやうに見ゆるあたりは、これなん桃の林に侍るといふ。仙源いづれの處にかとうちすしつゝゆきて見れば、松の柱かやが軒かごかにすみなしてゆゑづきたる柴の庵あり。かしらの髮雪のやうなる翁の、眞柴かりてかへらんとおぼしき山がつと、どうちゐたり。うちつけにおどろかさんも、不言の花おもはん事のやさしうて、垣のとにたゝずみをれば、いつしかと日ごろのやまひもわすれはてゝ、こゝちにはかにすがすがしう。天さへわれさへ花に酔ひたるやうなるは、かのをのゝえくたいけんあたりにやと思ふがうちにも、千とせやすぎぬらんかし。

●螢狩の一夜

長野　小林義美子

皐月の末つ方あまりつれつれなるまゝに、獨り机に倚りて僕錦の言の葉を探り、文の林に見ぬ世の友を訪へなどして餘念もなき折柄、へだてぬ友の訪ひ來て、よべの螢狩はいとも興ありき

と語るに、女子の身にふさはしからぬ遊び事と思ひつれど、えたえて共に打連れだち、家を出てゝ二三町隔たりたる里外れの清き流のほとりに到りぬ。

こなたの橋の袂の柳の下に佇めば、まだ日はたそがれやらで、小田の蛙の啼く聲に聲さへもさわぎわたり、咽ぶ流れの音に和して自然の琴を奏



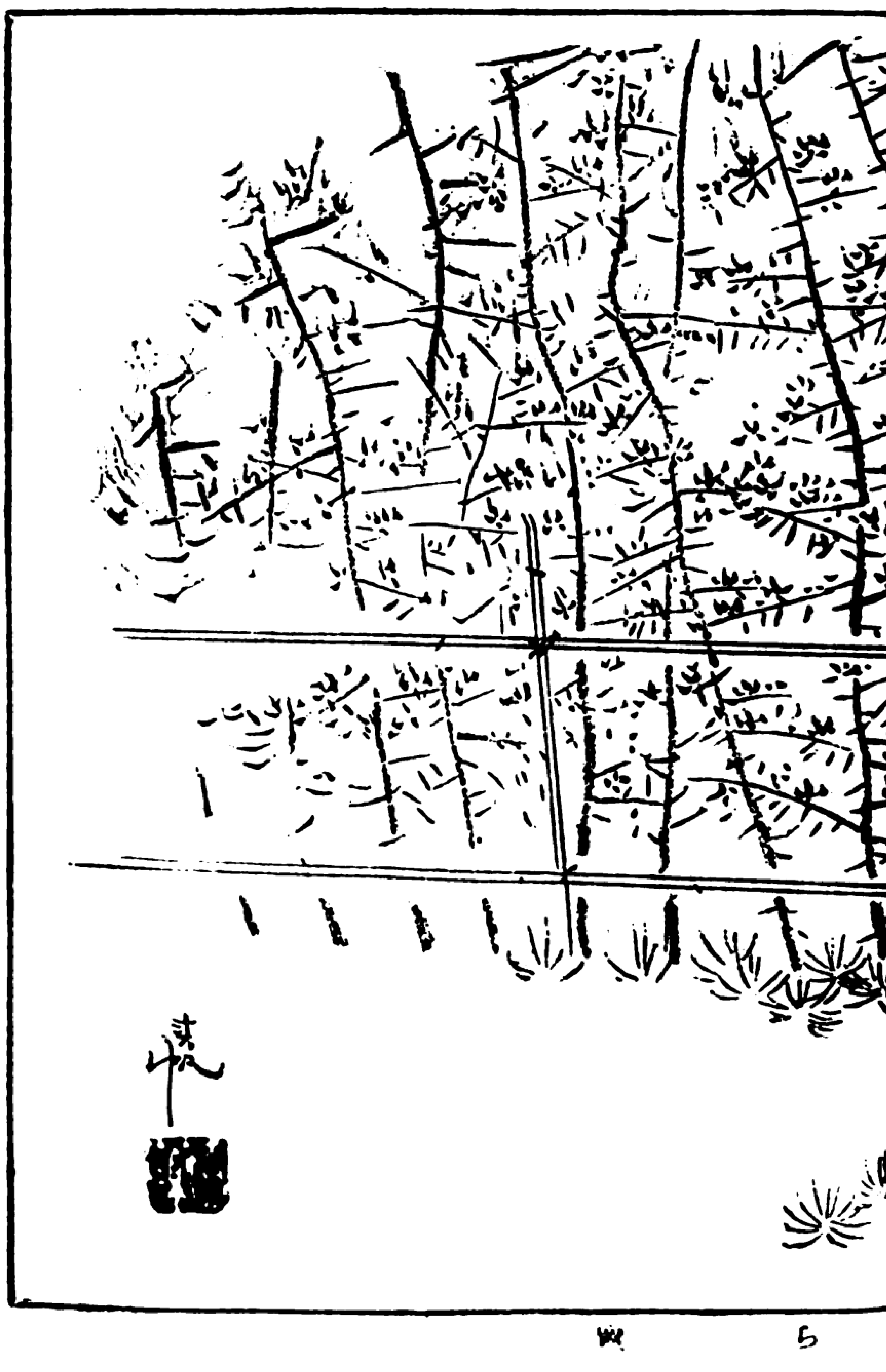
新　わ

するゝに、乓壇はやすがすがしふなりぬ。

とかくするうち、螢は飛び去り、飛び來りて、あるは柳の糸に上り、あるは稻葉の露に止まり、あるは低く飛びて水の上に流れ、あるは高く空に上りて星かと疑はれ、そのさまいみじふなんと云ふばかりなし。

彼方此方に男おみなの蜜蜂の打驚しりつゝ追ふを見れば、あはや蜘蛛の下に墜ちんとして巧みに虎口を遁れ去るあり、あるは四方よりしたゝかに攻められてあはてゝ水に落ちたるあり、落つると見せて飄然虚空に舞ひ揚るある、千叉萬、闘ふが如くあらそふが如く、飄へるが如く、舞ふが如く、躍るが如く、狂ふが如く、其美くしく妙なる事、げにやたとふるに物なく身はとみに塵の外の心地して、日頃のうさも何處へか消え失せけり。

まだしも興の盡きたるにはあらねども、東の山の端にいつしか月の花やかにさし上れるに、螢もいつしか籠にみち／＼たれば、友もさらばとて相伴ひて家に歸り、そな机の上に打ちのぼして又もや文の林に迫りける程に、青紫を渡る夕風の俄かに訪づれて燈火もろくも消えぬ。今はこそと、ひとしほ美はしき螢の光に對ひて自ら草胤子の書を繙びけるもまたいみじふてなん。



そよかぜのふきけす　窓のともしびに
かはるほたるの　かげぞすゞしき

●夏の月

伯耆　池田みつ子

柳の葉蔭にてらすひかりの、何となく青う見えて涼し、まして、木の下のいさゝ小川にうつりたる、ことにおぼゆ、木々の若葉にてりたる、草の上の露にきらめきたる、また、いと涼しく見えて、晝の暑さも忘るばかりなり、水鷄のはげしくたゝきたる、ほのめく螢の姿なども見えて、思ほはずにてをかし、かゝる折には、影くだきつゝ、川瀬に舟をうかぶるみやび男もあらむ月をむかへて、琴かきならすたをやめもあらむ、からうたなど高聲に吟じて、水の心を驚かす舟の中には、月の光も勇しくさすなるべし、うす物の袖、なほ重げにとりなしたる高殿には、さす光もおのづからやさしかるべし。所々にしたがひ、心々につけて、ことやうに見え、ことやうにおぼゆるもをかし。げに月は夏こそ見るべかりけれ、春ならねば、人の心は花にも奪れず、秋ならねば、人の心は淋しからず、冬ならねば、人の心はすさまじからず、月は夏こそ、夏は月こそ。

●梅雨中友を招く

久留米　よもぎ

時節柄とて此程は月日の影も見え申さず、ふりつゞく五月雨に柳の糸水絶間なく、外には柴の戸おとなふ人もゐまさず、朝夕ながめくらし候て、心さへ曇りがちにていといぶせく、池の蛙の鳴く聲も何となう憐を催し心みだれ候折しも、西の空やゝ雲破れ夕の光り洩れ出てゝ、花橘の打かほるもいとなつかしく存じ候間もあらせず、又々、むら／＼と黒雲立おほひておどろおどろしう降り出て、誠に退屈におはしまし候折柄、如何御暮しなされ候哉、あまりのつれ／＼に書よまむも面白からず候へば、年頃心打あけし學びの友どち打つどひて、さもゆかしき琴の志らべなりともいたさばやと、ふと思ひつき候まゝ、近きあたりの二人三人打まねき候ところ、是非／＼御元さまをも招きてよと皆々の御望みに候まゝ、道の遠きに如何と存じ候へども、成るべく御くりあはせられ、雨の小やみを幸ひ御車を運ばせられ候ひては如何に候哉、五月雨淋しき空にしめやかなる夢を晴さむは、これに上こす樂みはなかるべく候。もし御入來出來させられ候はゞ、皆々御待ち申上居候事故、少しも早き方よろしく候。かしく

◎旅にて病める姉の許に

尾道　香都子

五月雨ふりつゞく今日此頃の、もの佗しさに、一入姉上様の御なつかしく、如何御暮し遊ばし候はんと、日々御案じ申上候折柄の、御便りにとびたつばかり嬉しく拜見いたし候へば、思ひ掛なや姉上様には、五六日前より御心地常ならず御なやませられ候との御事に、胸先とゞろき、御玉章持つ手もふるはれて、其後は讀も得やらず先立もの　涙に御座候。何か旅の空にて御病の床にふし給ひ、殊に兄上様は日ごとの御出勤故、何かと御不自由の御事のみにてさぞ御心細くおはすらんと、推はかり參らするも、堪難き思ひに御座候、妾なりとも御側に居侍らば少しは御心を慰さむるよすがとも相なり候はんものを、如何にせん、海山遠く隔てゝは思ふにまかせず、空しく東の空ながめては涙にくれ申候。明暮姉様の御上のみ、御心配にすごさせ給ふ母上様へ、此由申上候時の苦しさ、母上様は其れより直に姉様日頃御信心の淨土寺觀音様へ御願掛に詣でられ候

御なつかしき姉上樣、今頃如何に御なやませ居給はん、此手紙御手にとどきし頃には、何時もの如く、拗きくれり者に、御笑ひ遊ばし候程、御心地よく、ならせられなばよきになぞ、種々の思ひに胸もみだれ申候、何卒御心大きくもたせられ一日も早く御全快のほど祈り上參らせ候　かしこ

●嫁きて後妹に寄する文

河内　大矢たね子

あらがねの土もさくてふ此頃のあつけさにも皆々樣には御さわりもなうていよ〱御すこやかにおはしまし候やさて此方へ參り候てよりは日もまだ淺きゆゑにや夕方すゞみにおもてへ出てゝは年頃住みなれし故鄕の空うちながめられたらちねの御膝もとはらからのまとゐの事など兎角おもひいでられこひしうのみ存じくらし候これにつけても多年養育の御恩身にしみておぼえ候されど一旦他家へ嫁ぎ候上は何事も其家を家として心ひとつにかひ〲しく家政にしたがひ候事女子の道なる事はかねて學校にて師の君のおほせられ候事にて今日にいたりはじめて深く思ひしられ候にてゆく〱は御もとにも此心懸け肝要とぞんじ候又嫁ぎて後はいかほど家を思ひ候てもせんかたなきものに候私も家に在りし間は我儘のみ申上げ又御許にも折々腹立たせ申候事今となりては悔しく候へども後の悔臍を噬むとも及はざる事に候まゝ此邊もよく〱御こゝろえ成されてひたすら御孝養なされ私の分をも補ひ下され候やう願ひ入り候　かしこ

●夏の夜

本所　宮内千代子

涼しさに衣の袂風にまかせて、そゞろに宿たちいづれば、花やかなりし夕日は、いつしか沈みて力なく、四方の山々やう〱暗うなりゆきて、きらめく星影のいときよし、行手の森に幾すぢとなく煙のたなびくは、賤が濁酒鮮魚に夫の歸りをなぐさめむとて、その調度をものするに急がしきゆゑならむ

心にまかせてゆくほどに、とある谷川のほとりにいたりぬ、すみわたりたる月は清けき水に影をながし、なかば崩れたる土橋のあたりには、玉の如き露をやどして夏草ところ得顏なり、しばし佇むほどに、さは〱と涼風わたりてその美くしき玉の、はらり〱とこぼれて、衣の袖をうるほすも心よきに、對岸よりは二つ三つと次第々々に螢の飛びいづるおかしさ

折りしもあれ、何處なるらむわか葉の風にうちそひて、吹きすましたる笛の音の、身もひえ渡るまできこえぬ、あはれいかなる人のすさびなるらむ、我が身ばかりと思ひしを、さては今宵の月にあくがれいでゝなむ。思へば去年になりにけるかな、ともにあはせて笛を吹きしは此の川邊なり、小徳たづさへて共に螢狩せしもこの川邊なり、われ今かの笛の音をきゝて、いかでむかしをしのばざるべき、君を送りて訣れしもこの川邊なり、楢をはらふすゞ風、せかるゝ水の響、さえぐ蛙の聲、すべて見るもの聞くもの一として昔のさまをあらためぬに、變りしは君が身の上なるかな、あゝ水よ、當時の水となりて、われと共にその音をかたれかし、君は水上の花片ゆきて歸らず、われは岸の糸柳、影を水にひたして君にともなはれざりしをいかにせむ。つきぬ思ひは行く水の流れにましてたえぬに等しく、君がおもわの忍ばれて、心苦しき折りしもあれ、かすかに見えし一つ星は、柳の上に流れきて、はたと光をうしなへり

評　發想高雅にして筆致輕婉、得易からぬ文といふべし(日東)

◉嬉しき夢

長野　丹羽はる子

楽しみを分たんは、いと易き事なれど、苦しみを共にせんと云はれなば、誰しも、耳掩うて逃げ去るべし。これ人情の常なれば、あながち咎むべきことならずとはいへ、頼みなき事ならずや。

かゝる習はしの世にありて、たゞ頼もしきは兄弟にぞありける、苦しみ楽しみ物として分たぬはなく、事として共にせぬはなし。かくばかり親しく、かくばかり嬉しきものは世にあらずなむ。已れ常に思ふやう遠くへだゝりてさへいと忍ばるゝを、まして兄弟なき人よ、いかに心細からん。幸と云ふ幸は多しよき父母兄弟そろひ居るに、こしたるものは何かあらん。已れも其幸にはもれずして、父母同胞そろひ居るは、こよなき身のさきはひになむ。されど兄君は早くより、もの學びの爲都にものし、先つ年定めの業終へ給ひしが、近きころ亞米利加に渡りぬ。さらでしも曇りがちなる此五月雨の空、いかに過ぐし給ふらんなど、いと／＼戀しくて、夜な／＼一家集ひては、ひたすらその歸りを待つのみ。今宵しも、いとゞ忍ばれて文机に向へど、好めるふみさへ、心に入るべくもあらず、いつか我こゝろは數千里の海越えて兄君のほとりに、さ迷ふなりけり。折から電報々々と叫ぶ聲す。走り出て見れば、こはそもいかに、夢か、現か、待ちに待ちにし兄君の、今横濱に着き給へりといふ知らせなりき。家内はさながら、薰の氷の床に、春風のおとなひしもかくやと思はるゝばかり、喜びさわざ、わきて母君の御悦びはたとふるにものなし、弟共も明日は兄君の御歸りぞと聞き、喜び勇みて、兄君萬歳と唱ふるも嬉れしきに、末の妹の廻らぬ舌に、和したるも愛らし。折しも次の室より母君のみ聲にて「何を獨りごち給ふぞ、いたく夜も更けぬるに、いて休み給へ」とのたまふ。と驚き正氣に歸れば、是なんはかなき机上一睡の夢にて、皆人を喜ばしめし電報すらいづ地行きけん。殘るはほの暗き燈火のかげのみ。あはれ夢なりけり。嬉しき、喜ばしき、楽しき、夢なりけり。あゝ夢よ夢、いかなれば兄君に逢はぬ間にさめ果てしぞ。名殘惜しみ限りなるかな。今一度先の夢路にもどれかしと迫れど、無形の夢には聲なくて淡き一縷の煙となつて、何處ともなく消え去りぬ。折しも幽かに空なき渡る時鳥一と聲、やがて燈火かいたて、墨すりながらして、かいつくるは、この嬉しき夢。あはれ此硯の主もまた兄君なりけり。

評　筆づかひは上手なれど、想は平凡をまぬがれず（日東）

◉春雨のあと

信濃　阿佐野みよ子

之れともわかぬ細き雨の、日每〱に降りつゞきて、鬱々しきを、今し空は晴れて、日影うらゝかに、窓にさしいれば、あまりのうれしさに、ゆくりなくも、野邊にぞさまよひ出てぬる。木の芽、若葉は、一雨每にのびゆきて、時知らぬ松さへ一しほの色そへぬ、もえ出てしばかりの若草は、皆露にうるほひて、はづかにのこれる夕日を浴びて、玉の如く輝けるは、得も云はれぬ風情にこそ。古へ人が都を玉敷と云はれけんも、この野邊は、また玉敷と云ふべくならん。

評　短文字なれど、頗る妙趣あり、さながら、蕭々霏々たる春雨の音を聞くが如し、ともいはんか（日東）

◉一日の旅

廣島　岩崎よし

やみ難き要事の有りて吳にいます兄上の許に行くべく母上より命ぜられ

ぬ今日は明日はと氣のみあせれど雨天續きにていふも思ふも兎角に其甲斐無く空しく日をぞ過しける或日も風さへいたく吹き加りて浪の音凄じく斯くては明日も望みなしとてとくより臥床に入りぬ夜半過ぐる頃より雷鳴甚しく今にも落ちぬらんかと安き心もなし暫くして漸々鳴りも靜まりければ何時しか夢路に入りにけんやがて目覺むれば小やみなかりし雨も風も名殘りなう晴れ渡りて朝日の影うらゝかに舟子共嬉しげに罵りさわぎつゝ沖を差して出て行くわれもそゞろに心嬉しく仕度調へ下婢もて汽船出港時間問はせぬれば十一時三十分なりといふ切符は後刻持參すべしとの事なれば唯其時をのみ待つやがて十一時過しと思ふ頃切符持ちて來る程近き所なれど乘り後れなば詮なしとて出掛く

待合所にて待つ事久し十二時も過ぎ一時も過ぎ早や二時も過ぎぬれど船の影だに見えず寄り集いにし人々もまだか〳〵と退屈げなり多分昨夜來のしけに後れしならむ軈て三時過ぎし頃若者汽船見えしとて走せ歸る人よみ返りたる様にて浮船に乘り沖合遠く漕ぎ出づ打見やれば是れなん利根川丸とて中國通ひ中有數の大船なり漕ぎ付くや先を爭ひて乘る様いとあさまし汽笛の音と共に動搖し初めぬ我は家人等の如何に待ちあぐみしならんと急ぎ三階なる運動場に登る此所は上等中等のみ限りなればいと靜かなりやがてわが家の前に至るや妹等のいち早く見付てもろ手揚げつゝ差しまねく我れもハンカチーフ打振りつゝある程に船は島山の間に隱れ見えずなりぬ遠近の山を望めば過し年の清遊そゞろに偲ばれぬ「曇りなき山の姿や波の音果敢なき人と物思へとや」「過し年遊ひし旅の偲ばれて變らぬ道の懐しきかな」など口吟みぬ程なく吳灣に入る初瀨敷島宮古吉野嚴島吾妻千代田明石の諸艦嚴めしく淀泊し壯觀得もいわれず是等の艦より吹き出す喇叭の音波を隔てゝ聞ゆ兵士等は甲板に出で何事か急がしけなりあゝ勇ましとあかず見てある程に汽笛一聲汽船は吳港に着きぬ浮船に乘りて上陸す直に腕車をかりて和庄町に至り兄上に對面しぬ時に午後四時少し過ぎなりき

評　文は巧みならねど、事實をありのまゝにしるせは書き振りは、大いによろし、そは叙事文に最も必要なる用意なれば(日東)

◉花あやめ見に誘ふ文

但馬　和多田文子

胡蝶の夢のまだ覺ぬ間に花は青葉に成りはてゝやうやう夏氣を催し候頃あくがるゝ心も同じう散りはてなばいと宜かるべきを夫れのみなごりとゞまりてきのふけふ暮し詫候ひぬされば兼れて一度はもろともに御契り申候堀切の花菖蒲最早四五日を過ぎなばいと盛の由申し來り候ふ故同じ心の渡田文子下坂矢子の君達と明日の朝早う出立し向ふ五日の豫定にて行くとに相成り候御許樣も御同意たまはらばいかばかり嬉しう候はん思召のほど受給り度おなじうは最上川の稲舟ならずもがな御返しごとはつほど〻ぎすよりも待ちわたり候あなかしこ

◉梅　雨

信濃　丹羽はる子

日をふるさみだれの雲、いぶせしともいぶせしや。あけなばさりとものそらだのみも、めさむるすなはち、軒の玉水耳につきて、かうしあくるもものうくなん。例の物のほんども、いとせめてつれ〴〵の心やりに、づしの中よりとりいでゝも、雨づゝみにやかたらはん友もとひ來ず、いとさう〴〵しうなん。あひ知れる友の山邊にすまへる、其人がりたづれなば、花橘にやどりして、ぬれつゝなのる郭公の、初音きくよしもあらんかとはおもうものから、心に思ひたてるのみにて、たけき事とは、な

やみなき空をのみながめつゝをるに一こゑいうびんといへるは、つれはめづらしからぬことなれども、かうつれ〴〵なるをりは、かゝるおとづれさへ、例の初音よりもうれしうて、いそぎわらはしてとりもたせて見るに、女學界世もて來れるになん、こと事なくひらきつゝ見もてゆくに、おのれがえせ歌さへ、ものゝはしにのれる、さらば汗あゆるこゝちすれども、ひと〴〵の文にうたに、天なる地なるめもあやなるまでにて、なかしき品定めさへ、めかゞやくばかりなる、なにがしのよびの雨にはやうかばりたる、つれづれのまぎらはしになん。

評　別に巧みといふほどにあられど、いつもながら苦のなき書きぶりに感服也、作者も本誌文壇の珍才、勉めてます〳〵其文才を揮はれむことをのぞむ(日東)

●女子文學雜感

大阪　藤井とみ子

小說家としては知らず、詩人としての女性には能く何程の望みを繋ぎ得べき、女性は到底詩人として立つを得べからざるものか、吾人をして忌憚なく言はしめよ、女子の性情は例へば藤の花の紫に美はしく咲けるも、其蔓のねぢくれたるが如き乎、理に脆くして情に強きは女子の通有性なり、情に强きが故に能く泣き能く笑ふ、女子をして無敎育ならしむれば即已む、多少高等の教育を受け高尙の思想を有たしめば、其涙や丈夫一掬の涙にあらずといへども、一莖の野菊に向へば能く自然を讃むの涙となる、其笑や冷かに苦き笑に非ずといへども、春風花を吹くの天使の笑とやならむ、其思想の如何に一小天地に限られたるを言ふ勿れ、女子の涙女子の笑以て能く人を動すに足る也、起て江湖の姉妹よ、女子は抒情詩人として成功すべき一の要素を具へたるものぞ。

我邦萬葉集時代には女子の和歌に雄大なるもの多く、衣通姫以後女子の和歌に堪能なるもの頗る多かりしなり、蓋し優美は女性の最もよく適する所、其和歌に成功し易きも亦怪しむに足らずといふべし、故税所篤子女史は明治女性の才子、和歌に巧なる點に於て、かの宮內派群歌人より遙かに優る所ありしが如し、今や其を繼ぐものやある、竹柏園門下和歌に堪能なる才媛多しと聞けど、未だよく咏みたる歌を聞かず、近くは明星流の女性鳳あき子出で、其歌未だいかゝはしき評はあれど、稍歌に奇才あるを認む、請ふ大に囑望せむ、平安朝の昔にかへりて明治の世に、閨秀の一團を見才媛輩出せしは、そもはや昔となりぬ、中にも明治文壇の名花一枝ともたゝえられ、あはれ東洋のヱリオツトといはれし一葉女史一たび逝きて、巾幗の奇才茲に空しく、閨秀作家また數ふるに足るものなし、今やたゝ女子大學の國文科に才媛の囑望すべきものありといへども、今幾年を經ざるべからず、省みて本誌文壇に早くより頭角を顯はし來りし、宮澤すみれ、藤田いさを、水橋康子等の諸女史よ、語を寄す卿等の文詞才藻共に秀でたるは、文學愛好の念に於て妾等の日夜仰慕に堪えざる所、思ふに諸女史は芳紀未だ若かるべし、幸に積みたるが上にも修養を怠るなくして、行く〳〵は、あはれ我邦女子文學を代表するの才媛と、世にたゝえられんことを祈る

評　珍らしき論ともいへれど、詩人としての女性を簡明に說かれたり(日東)

●學びやの友

和泉　井上とみ

退きてより早や一とせを經ぬ、わが學びやは堺市のさる女學校、こゝに袖を列ねて校門を出入し、級をも同じうせし、學びの友は總て幾人かあ

りけむ、さるものは日々にうとき習ひ、遠ゆくふりに知らぬさまして行過き玉ふつれなき方はこゝに數へずして、稍にも昇降の途すから掛襟候掛の玉の假岡ひもし答へもしつる、この手柏の裏表なき友、指なれば纔て十二三人とぞ數まへらる、三日見ずばとは男の事をいふものなから、女も一年たてばいたう變るもの哉。この春近隣に住む友と櫻狩の歸るさ汽車を同じうせし友の君、見まがふ許り美しうおとなびさせ給ひて、御髮の樣も引詰めの束髮に一輪の薔薇響し給ひしに似ず今日の麗かさ、此頃嫁ぎ給ひしと聞きしが實にて、今日實の君のあと追ひ給ふ密月の樂しみ幸の限りは此君の上にこそとは、未だ獨身の此友が言葉なりき。名はこゝに洩さじ何某の君がか卒業後五つ月たゝぬに可愛ゆき坊樣設け給ひしは、嫁きておはしゝを御腹に秘めて學びやに通ひ給へりしを、誰も知らでありし、さてもおかしきは人の運命よ、かの君がかく早く母君と呼ばるゝやうなり給はむとは、此事つたへ聞きなばこゝらの友垣の惑やいかならんと、獨微笑まれてなむ。級の年長におはして女子獨立論に熱心し給ひし友の一人、今は南海の濱に小學校の女教師を勵め給ふがあり、靈の童を導き給ふ事の如何に骨折るゝわざならむ、風雨はげしき日とて校に君を見ぬことなしといふ其忍耐と堅志とを以てせば、私立學校を設けさせむ君が宿志の、其成功は期してまつべし、げに有望しきは此君にこそあれ。われより齡二つ下にて其頃はさい髮の綠ふさ〴〵しきに、白きリボンつけていと氣品よく、心はいと無邪氣におはしゝ君の、今は東都青山のパイオレツトの匂しるき學びやにていそしみつゝありと聞く。才學共に級中に秀いてさせ給ひ、心やさしく衆望ありし某の君、卒業後まもなく亡き人の數に入り給へり、世に定まれる君さへありしと聞くを、其方の恨みはさる事ながら、愛て給ひし父母の君が嘆きはさこそと、こゝらの友が集ふ每に彼の君の事語りて袖濕さぬはなし、其校に在るの日十六夜日記の講義を聞きて、歸るさわれと、慈母の子を思ふの厚きに泣きし事ありき、今は此やさしき君が面わ見むよしもなし、われ長しへに忘れじこの泉下の友を。

評　同窓の友のさま〴〵をしるすは、興なき業にあられど、これはと思ふ節なきをうらむ(日東)

●兄樣よりの手紙

埼玉　守谷きもと

一、兄樣はけふ都をば立たれしはづ、あの杉山の彼方には我親はしの兄樣がと、朝日の方を都とたのしみ、あさな〳〵の早起、わけても今日はうれしかりしよ。指折りて待つ旅の空よりのお雁信、心もどかしうも母樣への告言、平素すぐれさせ給はぬおからだの、異りし空にお風もやと、心の憂さもとり〴〵に。

二、今日磯部の宿よりの御玉章、昨日の物憂心も何處へか、さて押切る封も手あらゝかに、親心の母樣の待てよ妾がと仰せらるゝも、此時ばかりは心にくゝ、母樣と額をあつめて見る〴〵、雨に濡れても飴の名物に體は恢復せりとの御文やさしく、明日つとめて妙義山へ登るとありしにぞ、母樣ゝ妾も如何なるけはしき山にや、かつて城峯山にて見し霧をかうむれる鋸の樣したるおそろしき山がそれとかや、事なう山登り果てさせてやと、眼と眼を見合ひはべりては又文をよみかへしぬる。

三、前橋のやどりにてとありて、妙義山登りのくはしきお話、水くきのあと細やかに油繪の景色を見る心地して、泣岩の石門のと、母樣も妾も胸のうちはら〳〵と躍り動きぬ、さる大尉殿が鯱立ちに名ある旭嶽の一節に涙落しはべりしを母樣に心つけられて知りぬ、兄樣も、深山育ちの余さへもさるおそろしき岩山ははじめてなり、前橋のおなじき校にあら

たなる友數多えて、うれしき心地に飾ろしき山渉る心ひも去りぬと記し給ふ。

四、中禪寺よりとて、足尾の銅山の話は歸りて後詳しく申すべし、(中略)心掛けにし男體登りを果しぬ、余は此山にて鹿の角の片われを拾へり、余が之を拾ひたるは吉祥か否か、たゞかなしむ、之の角は他の片われにめぐりもあはで何時までかあらむ、戀しかるべきにと、細工屋之の角を見て値すべきほど、そを余によといふ、きざまむとにや、いとにくし、「拾ひ親のなさけもあれば人の手に、いかで渡さむ片われの角」、とあり又、湖に舟うけて乘りめぐる、まことに快なり、あすは華嚴瀧を見て心を洗ひ、さて後日光に向ふべし、とあるさる、鹿の角早く見まほし、旅物語早くきかまほしと、母樣も妾もいひあへり。

五、もはや届くべき日數なるに、日光よりも水戸よりもおたよりなし、今宵は大洗の宿ならむに。

六、〻〻中學校よりとありて兄樣の手蹟にあらず……。(完)

評　いま少しおもしろく書けぬものにや(日東)

新體詩

●夏の夕

(天)　佐々木和子

西に照りたる天つ日は
山のかなたに落ち行きて
うばらににほふ夕映の
光はまたくうすれたり
入相つぐるかねのおと
靜けきひゞき傳へつゝ
蘆の葉そよぐ川岸に
夕じほ遠くみちて來ぬ
ゆめみる如き星くづは
くしき光を放ちつゝ
かみのいませる樂園に
導くことぐがゝやきぬ

靜かなる暮色の、うつし出して、眞に迫る。新體詩といへば女子も、男子のそれの如く、晦澁蕪雜なるが多きに反して、此作者の只管優雅ならむとつとめられたる尤も見るべし。

(住所不明至急申込あれ)

●曉の歌

(地)　伯耆米子町大字紺屋町船越方　池田みつ子

雲井の宮の欄干に
焔の男神立ち倚りて
輝く御手をめぐるとき

千條の線は海に垂れ
磯馴松が枝風立ちて、
呼ぶは樂しき曉の歌。

其あけぼのゝ歌にさめ、
玉の宮居のまどあけて、
龍の宮姫ゆるやかに、
かきなす琴の一曲に
闇もさ霧もきえゆきて
あけてそわだれ浪の上。

うるはしき、調清らしき詞、さながら曉の風と浪とにも似たらむか。

●我が歌

（人）　信州上水内郡榮村大字住良木四八一番　小林つね子

蘭となりて岸の邊に、　きよき姿をほこらむか、
さはれつれなき夕風に、　散り逝く運命をいかにせん。
胡蝶となりても、草の、　花に居うつさむか、
さはれいつしか蜘蛛の、　綱にかゝるをいかにせん。
清水となりて岩かげに、　たのしき戀をかたらむか、
さはれ流れて末つひに、　海に入る身をいかにせん。
雲とならばや大空に、　ひとり自在に翔るべく、
さはれ嵐の襲ひなば、　影だにとめぬ儚なさよ。
いづれ　情に　つらき　世は、
そよ　夕ぐれの　なづ　かしき、
星とならばや　むらさきの、
光りまばゆく　きらめきて、
とこしへ戀を　かたる　べく。

流滑宛轉よく其云はむと欲する處をいふ。蓋し前者の壘を摩するもの。特に下して人となすは、此種のもの勘しとせざればなり。

●巖頭に立ちて

（秀逸）　信濃　小松のぶ子

そはうらぶれ、少女が、　戀の懊惱の忍び音か、
あらず淋しき荒磯に、　闇を私語く浪の音。
ゆくては遠き波の上、　闇にも走る白銀の、
かほそき光今更に、　戀の行方を思はする。
白きひかりの薄れては、　いたましかなわた海の原、
はてしもしらぬ波の上に、　たゞ／＼闇の墓なるを。

眞理に似たる手をのべて、浪の滴を掬び見よ、
わびしかるとも君が手に、奇しき運命を解きえなん。
見ずや消えゆく夕づゝの、その行末を思ふまに、
淋しの磯よ露こめて、浪は靜けき夜となりぬ。
蝶の羽袖をかへしては、晨の花にいかふごと、
秘めて彩ある星くづの、人を咒ふか紅に。
風や千里の浪に鳴る、闇に私語く音をきけば、
浪のしぶきのしくしくに、忍ばるゝ哉戀の行末。

前三四節大に佳、然れども後數節いつれも晦澁の跡あるは惜むべし。

●夕妹の墓をとひて

（秀逸）　信濃　阿佐野みよ子

靜かに鐘のひゞき來て　夕の窓に二つ三つ
散りくる花を見てし時　悲しき我身と知りにけり。
困しき胸のおもひをば　ひくき調の詩にずして
そことしもなく逍遙へば　流るゝ星のかげ青し。

いつとは知らず己が身は、夕闇とほくたどり來て
今は世になきいもうとが　み前にひとり立てりけり。
色も昔のまゝにして、春美くしく咲き出でし
かほりも清き白桃の　一枝をかるく携へて。
夕べ園生に手を取りつ　樂しく見てし此花を
手向の料になさんとは　はかなき蝶が夢のごと。
よみちの花は赤くとも　そはまどはしの色なれば
情の露はみえずして　葉うらに潜む魔もあらん。
石も冷たきおくつきは　あつき涙はそゝぐとも
色うつろはぬ花かげの　君が眠りはさめやらず。
よし朧夜を風あれて　松の梢はさわぐとも
なき名きざめる碑の　底の夢路は安からん。
折しもそらの星一つ　奇しき光に流れつ、と
仰げど影は見えやらず　あはれ妹が靈かそも。

女學世界定期增刊夏の卷
第貳卷第八號
ほととぎす

（六月十五日發行）

ほととぎすは、女學世界才媛詞藻第貳卷夏の卷として六月十五日を以て發行す、時方に夏季滿目の綠陰蓊鬱として翠微窓前に滴るの好季節に會す、本誌の增刊は體裁高尚にして趣味の多饒を以て知らる其の內容は例に依つて紙數二百八頁、中才媛の競爭になりたる▲小說十五種▲抒情文三十種▲和歌百五十種▲新體詩二十種▲消息文三十種▲敍事文三十種を以て成る眞に是れ奇葩瓊章の展覽會たり、猶附錄として左記八編を收め、口繪には內外の人物風景の新鮮奇拔なるもの十二面を添ふ。

附錄

▲**英國の家庭**　英國劍橋女子高等師範學校長　ミス、ヒュース

▲**支那の婚禮**　在漢口理學士　西澤公雄

▲**古代日本女文豪**　塚越停春

▲**泰西御伽話**　長田蕙香

▲**隱れたる日本の風俗**　文科大學講師　小泉八雲

▲**清少納言**　鹽井福子

▲**將軍の寡婦**　華族女學校講師　淺岡一

▲**父親**　武田櫻桃

雜報

●東宮妃殿下御着帶式

去月十五日東宮御所に於て妃殿下御着帶の御式を御擧行あらせられたり當日齋藤東宮太夫、木戸同侍從長、村木同武官長、桂主事、錦小路主事心得、萬里小路、正親町、生源寺、富田各女官は午前六時より東宮御所に伺候し諸般の準備を調へ同八時頃鷹司熙通公は夫人順子と同乘大禮服にて參着齋藤太夫、桂主事、萬里小路、生源寺女官等御玄關に出迎へ直に表御殿に誘引此所にて御帶を捧げ太夫各女官、產婆等恭しく之を受けて妃殿下に奉り鷹司公爵夫妻は種々の御饗應を受け一旦退下茲に目出度く御式を終り同十一時より皇太子殿下は御正裝の上齋藤太夫、木戸侍從長、村木武官長、侍從、武官等を從へさせられ表御殿に御出座參賀の爲め伺候したる田中宮相、同夫人、德大寺内相、香川皇后宮太夫、花房次官、岡侍醫局長、橋本顧問官、九條道孝公、同道實氏、同夫人、鷹司熙通公、同夫人等に拜謁仰付けられ畢て有栖川宮、同妃兩殿下を召され御開宴あり田中宮相以下各女官等に御陪食仰付けられ掛判任官以下には夫々酒饌を賜りたる由尚ほ右の御式御擧行に付き兩陛下其他より左の如く御祝儀の御贈進ありたり

聖上陛下より皇太子殿下へ	生鯛	一折
聖上陛下より皇太子妃殿下へ	生鯛	一折
皇后陛下より皇太子殿下へ	生鯛	一折
皇后陛下より皇太子妃殿下へ	生鯛	一折
常宮周宮兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
富美宮泰宮兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
有栖川宮同妃兩殿下より皇太子同妃兩殿下へ	生鯛	一折
九條公爵より皇太子同妃兩殿下へ	五種交魚	一臺
典侍柳原愛子より皇太子同妃兩殿下へ	鯉	二尾
中山一位局より皇太子同妃兩殿下へ	三種交魚	一臺

又皇太子同妃兩殿下よりは兩陛下に對し奉り生鯛一折宛の御答禮あり前記各宮其他へも五種又は三種交魚の御贈答ありたる由

●文相の女子敎育方針

此頃文部省に開かれたる全國高等女學校長會議に於て菊地文相の演說せられたる要概は左の如し、近來女子敎育論のかまびすしき時節柄、まづ第一に當局者の意見を聞かむとて何人も望む所なるべければ此に紹介す。

△我國の女子は多數の諸外國人と異り良妻賢母となること即ち結婚を目的とするもの普通なるが故に女子教育は職業的專門、高等の學科よりは普通教育の方一層必要にして適切なりと信ず△また我國の家庭も外國の家庭と異なるを以つて今日の如き思想過度の時代に於ては、動もすれば新舊思想の衝突を來たし家庭の不和之れより生ずるの實例尠しとせず、我が女子教育の目的之れに鑑み品性の陶冶は勿論智育の例に於ても特に新舊思想の衝突を避くるの考案を以て教授に努めざるべからず△人は感情の動物ながら殊にも女子は感情に强き性質を有するものなれば感情の激發に際しては往々にして常智常識を沒することあり之れを救ふの道は理學思想の變遷即ち理學的智識を與ふるに在りたとへば近來中等以上の家庭にてすらも淫祠邪教の迷信非常に流行し居れるが如き亦た此感情の奴隷と爲れる結果に外ならず△特に望むべきは日常生活に必要なる智識と趣味とを與ふるを最初の目的と爲すことなり換言すれば女子に必要なる常智常識を主とする教育の方針を執るに在り

▲而して右等の目的を達するが爲めには學校と家庭との連絡必要也而して斯教育を以て任んずるの人士は、よく〳〵生徒の父兄の實際的企望を逑ぶるに向つて、懇切に耳を傾くる雅量と衷情となかるべからず云々と

◉女子職業學校製品展覽會

去月十日（土曜）午前八時より神田一ツ橋外同校に於いて校友大會を兼ね生徒製作品展覽會を擧行せり今其景况の一班を記さんに同校玄關傍右方の敎室を來會者の控所に充て此室に東京府教育品展覽會へ出品の大花籠外造花二籠を置きあり少憩の後生徒に導かれて裁縫、編物、刺繡、造花、圖畫等各科の授業を順次觀覽したる後販賣所に充てたる同校北部大敎室に入れば生徒の製作に成れる靴下、手拭、錢入、帶止、洋袴下、枝折、羽織紐、皿敷抔數百點を花の如くに置き飾りあり且編物にの錢入、枝折等を柳て枝に結び陳列所の諸所を装飾し頗る美麗なりし次は圖畫科陳列場にて繪畫、額、同書畫帖用、帛紗、夏の半襟、帶上げ、扇子、團扇、名刺入等へ總べて圖畫を應用せしものにて女子の特有性とも云ふ可き綿密なるもの多く陶器附繪も共に會場に陳列し皿、湯呑、菓子器一輪瓶等これも亦總べて圖畫を應用しあり次は刺繡科陳列場にて信玄袋、人形、帶止、寫眞入ハンカチーフ、紙入、小楊枝入、額等にて最も人目を惹きしは鹽瀬に刺繡せし額面なり次は裁縫科陳列場にて小兒夏洋服、人形衣服、涎懸け、信玄袋、紙入、小兒夏帽子等種々あり時節柄小兒の洋服帽子等殊に需用者多かりし次は造花科陳列場にて花簪、花籠等數百點あり山吹の一枝五十錢薔薇一枝六十錢等にて多數の造花大瓶に挿みあり最も廉價なるは花簪にて三錢高價なるは花籠

にて十圓のものあり次は西の別室にて割烹科の實習あり各生徒をして鍋、盛方、道具、洗方、立廻り等の役を分ち教員監督して薩摩汁を作りつゝあり其他の料理の口取(二色卵)肉けんちん(隱元金團)鉢(照燒伽羅蕗)甘煮(章魚の櫻煮あげ慈姑)等にて各生徒手襷にて甲斐々々しく從事しつゝありしが總て同校生徒の製作は固より販賣のみの目的に非らざれば比較的親切に製作し且廉價なれば來覽者の婦人等手土產に購買せしもの多かりしが總て、當日の製品賣上金額は一千四百餘圓の多きに上れりと。

●華族女學校運動會

同會は去月十四日校內に擧行せられ皇后陛下を始め奉り四內親王殿下も御臨校あらせられたり今其景況を記さんに名にし負ふ同校の事とて富貴の花の魏紫姚黄を一園の中に蒐めたらんが如く眩ゆき計り美はしかりしが中にも初等中等一級二級の生徒が打揃ふて方形運動を爲せるは恰も蝴蝶の春風に舞ふが如くダンスと體操の調和太だ可なるものあり女子の運動としては誠に相應したるものなり、初中等三級の毬籠競爭に北白川宮の御息女が金枝玉葉の御身に御在しながら御身輕げに出でたゝせ玉ひいつも勝を占め玉ひしは喝采四もに起れり高中第二の啞鈴體操意外に調子よく、幼稚園の遊戲はいつもながら可愛らし霞む夕日の舞、小鳥の舞は舞と體操の調和を計りたるものにて奇麗言ふ計りなし、高中全體の配膳競爭は滑稽にして高等小學第一第二の生徒がピアノに連れて回轉行進螺旋運動を爲したるは優美なり、ローンテニスには意外の巧手多く鐵啞鈴の體操には男まさりの力者も見へたり、初中一の障礙物競走は趣ありて面白く高小三、初等一の表出體操は雅にして優なり、高等中學全體の方形運動螺旋運動はさすがに姿勢能く整ひ態度能く肅にして頗る見るべきものあり其他蛇行進、漁獵競爭の奇なる踵趾運動、柱環りの美なる人目を喜ばせしが中にも高中一の生徒が擔架競爭の名の下に赤十字社員が戰地に於ける負傷兵に繃帶を施して擔架に運べる實狀に擬したるは甚だ感動を與へたり、最後の綱引は卒業生と職員が競爭にて一勝一敗相當りしに喝采の聲四邊より起り壯觀いはん方なかりし、

●荻野千壽子

同女は當年取つて僅かに八歲と九箇月、父を荻野登一

郎と云ひ廣島市西本川に生る、先代は相應に資産ありしも右父の代となりて衰へ今は小やかなる賣藥其他小賣りを營み居れり千壽子幼より物覺え敏く且記憶に富み平生遊び戯むる中にも人の言語を聽き居りて忘れず漸く小學校に入るや學問の進み優に群童を抜き其後故あり卒業せざりしかど今日は其識力慥かに高等小學卒業の上にありと新聞を讀みて社説論文を解し又演説に巧みにして先日九段偕行社に招かれ貴顯紳士滿座の間滔々おめず臆せず愛國婦人會の主意を述べたるには一同アッと舌を卷きしとなん、彼は號を鐵嶺と稱し筆揮縱横未だ熟すると云ふにあらざるも其達者なるは殆んど大人も及ばざる風あり又同女は一昨年九月以降關西各地を巡り、神社佛閣に奉りし扁額、各學校生徒の面前に揮毫せしもの等其數を知らずといふ、今度の上京は、益々其技を研き旁諸學科を修めて其天才を大成せしめん爲なりとぞ、されば撫育者其の人を得次第、之に少女史が一身を委托し、父は直に歸郷の途に上るべく、上流社會の令夫人中、已に少女史の將來に囑望し居るものもありとかや、由來神童に大成者少なく、曾て四國に鐵門といへる少童あり書名夙に江湖に鳴り、神童の稱一世に高く、終に知を博文老侯に辱うして伊藤の姓を賜はり、明治の瑞なりとの意を以て、明瑞の號を付せらるゝに至りしに拘はらず、爾來志滿ち意驕りたる爲なればにや、將附隨者の其人を得ざるに依ばにや、盛名亦た疇昔の如くならず、將に曲書者流と其選を一にせんとすと傳ふ、鐵嶺女史たるものよろしく自重して可ならんか。

●寺田翁の節車談

高等商業學校長寺田勇吉氏は曩に帝國教育會に於て人力車に就て有益なる演説ありたり曰く『東京には凡そ九萬輛の人力車四萬人の車夫があつて之が爲め費消する高は一年殆んど千萬圓に近いと云ふ驚くべき金額である而して車夫の身躰上より云ふも肺を破り心臟を破り大に健康を害ふは確かなる事實である近來人力車夫が益々増加して苦しいながらも生活を爲して行く譯は乘り人も以前より殖えたからであるがさて乘客はと云へばその身分服裝等より見るも徒歩するが相當なるべきものが妄りに車に頼るやうになりたり惡慣惡化である車に乘る金で牛肉か鳥でも食したならば身躰の營養を助くることが出來て丈夫となるに却て人力車に乘て脚の健康を害することをして居る地方へ行つて見て

も縣知事や書記官や市長などが役所と自宅とは目と鼻の間にありながら車に乘つて往復する又は自分が徒歩して後より空車を曳かせて行く是は實に無駄なことで何も必要もないに躰裁のみを飾るには及ばないことである東京も地方も益々此の如き有樣になつては生活に逐はれた上句の果ては人力車夫とならうと云ふ惡しき事例を作る如何しても今の内に防ぎ止めて此賤業を減じ一方には乘る人曳く人の健康保全を計らねばならぬ一躰當節の人達が車に限らず旅行をするときにも停車場に着くと自分にも持てる輕き荷物をさへ直ぐ「赤帽」に渡したり旅館の下男や下女に蝙蝠傘迄持せるなど漸次無性になりて來た外國人などは重々しき荷物を身躰も曲ずに悠揚としてヒツ下げて歩み行く姿態は立派なものぢやナニ躰格が違ふと違ふぢやない十分健康を養へば誰にも出來る事である所謂活潑なる精神は健康なる躰軀に宿るてあるから我國民は一層躰力を養成せねばならぬ節車會は脚力躰勢を丈夫にする一の方法で極めて必要なり故に諸君も進んで實行し亦奬勵して貰ひたいものぢや」云々

●女子の友誌友會　東洋社の發起に係る同會は去月十一日神田明神社内開花樓に開き席上成瀬女子大學校長の家庭教育に關する演說、寺田文部書記官の歐洲婦人と日本婦人との體格比較談、淸水濟風氏の玩具の話等あり畢つて一同撮影、餘興に丸一大神樂あり福引あり午後五時散會

●吉村寅太郎氏と成女學校　吉村氏が今回第四高等學校長となりて金澤へ赴任されしに就て成女學校の方は自然責任を解かれしならんとの事なるも、同校は吉村氏が特別なる目的を以て設立されしのみならず爾來長足の進歩を以て校運隆昌に赴きたる此の際責任を辭せらるゝが如き事はなく。同校の休戚に關しては依然責任を負はるゝ事にて同氏不在中は水谷直孝、嘉悦孝子、宮田修の三氏に一切の校務を委任し一層の熱心を以て盡力せらるゝ由、

●女子裁縫學校　本校は女子に必要なる和洋服の裁縫を教授し傍ら修身、家政、禮式、刺繡、造花、挿花、編物、茶の湯等の諸科を兼修せしむ專ら日常必須の智識養成を目的として設立されたるものにして學科を本科及撰科の二種とし、本科は裁縫を專門とし自餘の科目を撰科とし、本科の修業年限を二ヶ年とし、別に補習科なるものを設け古代物の裁縫を教授す月謝は本科五十錢、撰科は一種に付四十錢二科以上は中額の事、猶ほ遠國の者には寄宿を許す食費一ヶ月五圓校舍は東京牛込區北町三番地に在り

●栃木婦人會　同會は爾後益々盛況にて去五月四日第三回大會を開き東京よりは下田歌子、上杉文秀諸氏出會して有益なる談話あり、當日決議の事項は貧民の學校設立、婦人界の風俗矯正、貧民救濟等にて爾來着々實行を急ぎつゝある由會長香野松子、幹事平岩幸吉氏專ら會務に鞅掌して盡力さるゝ由

◉大隈伯の女子教育意見●●●●●●●●●●●●　大隈伯頃日客に對して曰く余は女子の高等教育に關しては絶對の賛成者なり成瀨仁藏氏の校長たる日本女子大學校には創立委員の一人として盡力し尚今後も應分の助力を與へんと欲す然れども余は女子の高等教育に付一の憂ふべきものあるを認む其は他に非ず乃ち高等教育を受けたる結果唯智育のみ進みて物識と作り藝人と作る是なり婦女子は天性上別段智識の涵養を主とせずとも自然に相當の進境に入り得るものなれば余は德育と體育とに重きを措かんことを當局者に希望して止まず體育の必要なるは勿論一般の既に知了する所なれば喋々を要せず德育は一層重大の問題にして世の學者、敎育家の苦心する所なるが余の考にては常識以外の德育は女子の涵養上害あつて益なく殊に乾燥無味なる宗敎趣味を含有する德育法の如きは大なる害毒を施すものと確信す故に余は女子に對する高等敎育の第一義は常識以內の德育を重しとし體育之に次ぎ智育の如きは最下に措く可きものと思考す此調子にて女子を涵養し來らば遂に圓滿なる結果を收むべきを信じて疑はず云々

◉大學醫院の受診手續●●●●●●●　東京帝國大學醫院にて診察を受け又は此處に入院せんとする者の中には同門前に入院手續案內などゝの看板を掲げし狡猾なる案內者に不法の金錢を貪らるゝ事少からざりしが醫院にては兼て此通弊を一洗せんと是迄午前の一定時間內に先着したる患者十五人に限りて診察する方法なりしを改め今度は其來院の遲速に拘はらず抽籤を以て診察者を定むる事としたるに尙ほ彼の營業者等が不都合を働く摸樣ありしかば更に現時の如く外科內科共に午前六時迄に到着せし者は其人數に制限を置かず先づ助手をして一應悉く診察せしめ其中重病と認めたる十五人を限りて主任醫が診察する事と改めたれば從來の手續に比しては一層簡便にもあり且つ前記の如く六時迄に同院に至りし者は悉く助手の診察を受け得る事ゆゑ受診者は能く此邊に注意して狡猾なる案內者の爲めに無益の金錢を貪られざること肝要なるべしとなり

◉玉川の鮎●●●●　本年は鮎の生育非常に好く目下既に五寸以上七八寸位のものあるより遊漁の順路は甲武鐵道の國分寺停車場にて下車し府中を經て赴けば五十丁この往復車代一圓位なるべく又立川、日野(驛)に下車すれば玉川迄廿丁程なり遊漁の方法には種々の好みあれども鵜一番(漁夫三人)にて二圓五十錢、筌一圓七十錢、

大船(二十二三人乘合)二圓、小船七人乘一圓五十錢、また跳綱は水幅と人數に依て一定せず右の相場は立川、日野ともに同様なりとぞ

◉女子文學會　神田區小川町一番地に新設の同會は一般、女子敎育の隆盛につれて入會者頗る多しといふ、會長は木村博士、顧問は井上、小杉兩博士にして講師には井上頼圀(枕草子)尾上文學士(三鏡)大川茂雄文學士、(制度)吉丸文學士(十訓抄、女子風俗史)藤井靜子(作文)小杉博士(有職、源語)佐々木信綱(古今集)南茂樹(文典)新村文學士(言語學)木村博士(萬葉)畔柳文學士(文學硏究法)等の諸氏なる由

◉家事講習會　前記の女子文學會內に新設の同科は入會者既に定員に達せしも大敎場を得たれば此際尙若干名の入會を許すといふ、
講師は女子高等師範敎授松本文學士(兒童敎育)同敎授佐方鎭子(衣食住、家事敎授法)同敎授矢田部順子(裁縫敎授法)同敎授岩川理學士其他學士數名なりと。

◉圖案の流行　目下裾模樣或は帶地織物などの圖案に在來の趣味を用うるものは東京よりも寧ろ京都の方割合に優れり、先頃白木屋、三井などの呉服店が懸賞にて募集したるも優等當選者の多くは京都の出品なりし裾模樣帶地、其他衣服の模樣及び友仙等は數百年間殆んど專賣の如くに京都の特有工藝品でありし故、圖案家の數の上より見ても又多年經驗の上より見ても東京は京都に及ばざるべし我國固有の圖案に於ては東京が京都に及ばざる點もあらんか、併し近頃歐米の圖案を參酌して製作したる染模樣は未だ充分に趣味あるもの尠し、されどこの歐米の新趣向を加味したるのは京都よりも東京の方割合に發達せり、故に京都は歐米の圖案を學術的に順序を經て學び、東京は我國在來固有のものを探究せしならば双ながら完全に近き者が出來るならん

◉露國皇帝の日課　露國皇帝は每日午前八時三十分を以て起床し自ら衣服を着替へて先づ茶を啜り九時に至れば直に堆積せる諸文書につき一々點撿し或は國務大臣を召して種々下問し給ふことあり十時より十一時の間において晝餐を喫し晝餐後一時までは或は國務大臣の覆奏に對し一々意見を陳述し或は幾百の文書につき御璽を鈐され或は各地方官よりの報告を披見する等殆んど繁劇を極むるに係らず陛下には時に少計の菓子と茶とを喫する外は少時の休憩をすら取り給はず斯くて一時に至れば一先づ別室に退き此に三女王殿下を相手

に四時まで種々の遊戯に耽り給ふこと常なり即ち一時より四時までは陛下の休憩時間にして此間に侍臣をして内外諸新聞を朗讀せしめ熱心に聽取さる外國新聞は倫敦タイムス、巴里フオガロー及びコロせ、ガゼツトの三種に限られたり斯のごとく陛下には新聞を愛讀するも書物は殆んど手にされたることなしかくて四時より七時までは再び國務を見らるゝこと午前のごとく午後七時に至て晩餐の宴を開かれ此に初めて陛下が家庭團欒の樂には入らるゝなり通帝寢室に入らるゝは午後十時と定まりたれど國務多忙の折は深夜まで眠に就かるゝことなくその熱誠に且勤勉に在すこと洵に驚くべきばかりにて以上の日課は病氣其他事故ある折を除き未だ嘗て一日も怠り給ひしことなしといふ

◉慈善感化事業の熱心家●●●●●●●●●●元市ケ谷監獄署看守にて目下文部省の小丁なる磯井彥次郎氏は去る明治十九年中より大に見る處ありて衣を割き食を減じて慈善感化の事業に熱中し特に囚徒匡正の事に留意せし結果幼年免囚及び其他不幸者數名を自宅に同居せしめ或は其他便宜の地に於て救養するなど大に斯業の爲盡力せしが這回遂に周圍及び感化せられたる囚人等の勸誘に從ひ日本慈善種德協會なる者を設立せしと警視總監に願書を提出したり其計畫によれば資金募集額一千圓に達したる時公然事業に着手し其五萬圓に達するを俟て感化院の建築に從事すべしといふ

◉仙臺侯龜千代丸の産衣（口繪解）　右は三井呉服店陳列場參考品として出品せしものなるが龜千代丸（綱村公）の方は地質紋羽二重お納戸地寶づくしの模樣紋は五つにて仙臺家の定紋竹に雀又卯の助丸（これは綱村公の養子吉村公）の方は地質は羽二重にて茶色千網に貝づくし模樣いづれも丸袖丈は今日よりも短く吉村公の方には白羽二重の繻絆あり是は伊達家の舊臣平野保章の出品にして此人の話によれば九代前の祖は伊勢守といひし神官なりし由、同公七夜の祝に御祈禱の節拜領せしなりと伊勢の守は伊達騷動の時奸人の讒により浪人となりしが龜千代の七世の時再び元の官職に付維新に至れる由尤も維新の際流浪せしも今日まで保存せし が去年同店にて政岡の衣を陳列せしより同品も出所確かなりし故陳列したるものなりといふ

◉懸賞文受賞者中住所不分明の分●●●●●●●●●●

本誌第六號紙上に掲げたる懸賞文當選者中左の五名は住所詳記無之爲め賞品送附致難く候間至急御通報有之度候

▲新小枝（廣島）▲井上よし子（靜岡）▲重松竹子（備前）▲吉村とし子（相撲）▲彦坂信子▲山家ゆき子（米澤）

女學世界第貳卷第九號記事豫告（七月五日發行）

其他、家事、衛生、禮法、生花、裁縫、編物、圖案等例により材料豐富

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢	郵稅
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢	一冊
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	二錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	

內　定刊數……十二册　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

廣告料

二十四字詰	一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●特別目錄御入用の方は二錢郵券御添へ申込あれ。

明治三十五年六月五日發行　第貳卷第七號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

大町桂月君著

美文韻文 **黄菊白菊**

全一冊洋裝袖珍美本
正價二十五錢
郵稅六錢

大町桂月氏の文は、蠻貊を動かすと已に久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に呌ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の摸範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可憐の冊子なかるべからず。

●内外遊戯法 ●全一冊洋裝並製 ●正價二十錢郵稅六錢
●新撰假名遣活法 ●全一冊洋裝並製 ●正價十五錢郵稅二錢
●支那學術史綱 ●全一冊洋裝並製 ●正價三十錢郵稅四錢
●冠詞例歌集 ●全一冊洋裝上製 ●正價二十五錢郵稅四錢

大和田建樹君著

散文韻文 **深山櫻**

全壹冊洋裝袖珍
正價金四十錢
郵稅金六錢

此書は大和田先生の散文韻文を輯めたる者、一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

●新体詩歌自在 ●全一冊洋裝上製 ●正價一圓郵稅十二錢
●新体詩學 ●全一冊洋裝並製 ●正價十五錢郵稅四錢
●歐米名家詩集 ●全一冊洋裝並製 ●正價金十五錢郵稅四錢
●花さくら ●全壹冊洋裝上製 ●正價二十五錢郵稅四錢

●國民教育の方針 ●全一冊洋裝並製 ●正價七十五錢郵稅十二錢
●況翁閑話 ●全一冊洋裝上製 ●正價二十五錢郵稅六錢
●海軍出身案内 ●全一冊洋裝並製 ●正價四十錢郵稅六錢
●通俗治療救急法 ●全一冊洋裝上製 ●正價三十錢郵稅四錢

大和田建樹君著（第六版）

散文韻文 **雪月花**

全壹冊洋裝袖珍
正價金三十五錢
郵稅六錢

其文は、清楚婉麗其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生ずるものは、大和田先生の筆と爲す。蓋し落寞振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又た何かある。

●新撰歌典 ●全一冊洋裝並製 ●正價四十錢郵稅八錢
●霓裳歌話 ●全一冊洋裝上製 ●正價三十錢郵稅四錢
●竹柏園集 ●全壹冊洋裝袖珍 ●正價三十五錢郵稅六錢
●藻木鹽 ●全壹冊洋裝上製 ●正價四十五錢郵稅六錢

文學士 土井晩翠君著

天地有情

全壹冊洋裝袖珍
正價金二十五錢
郵稅金六錢

峨々の山洋々の水以て晩翠君の詩を評すべし此集君が今日迄の吟峨を錄したるものにして新体詩中別に一旗幟を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず請ふ愛讀を玉へ。

（續付の二）

● 明治俳句
● 全一冊洋裝上製
● 正價三十五錢郵税六錢

● 俳諧成美全集
● 全一冊洋裝上製
● 正價四十錢郵税四錢

● 謠曲文粹
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税六錢

● 詩文良材
● 全一冊和裝並製
● 正價五十五錢郵税六錢

● 四書讀本
● 全一冊洋裝並製
● 正價三十錢郵税六錢

文學士 笹川臨風君著

元祿時勢粧

元祿は其風俗に於て文藝に於て時勢に於て最も趣味ある時代なり社會のあらゆる方面の勃興し膨脹したる時代なり此書は即ち元祿の時代觀なり時代史なり文藝史なり社會史なり其如何なる觀察をなしたるか如何なる趣味ありや興味ありやは本書即ち能く語らんか

● 全壹冊紙皮袖珍上製
● 正價三十錢郵税四錢

● 漢文講讀法
● 全一冊洋裝並製
● 正價二十四錢郵税六錢

● 時代管見
● 全一冊洋裝上製
● 正價三十錢郵税六錢

中央新聞社編輯

名士の嗜好

● 黒田長成侯 ● 徳川家達公 ● 福地源一郎君 ● 岸田吟香君

● 大倉喜八郎君 ● 馬越恭平君 ● 松平正直君 ● 野村素介君

● 益田克德君 ● 渡邊昇子 ● 田中光顯子 ● 鄕純造君

● 全壹冊洋裝紙皮袖珍美本
● 正價二十五錢郵税四錢

● 警世評論
● 全一冊洋裝上製
● 正價三十五錢郵税四錢

● 名流談海
● 全一冊洋裝上製
● 正價三十錢郵税四錢

● 五十家訪問録
● 全一冊洋裝上製
● 正價四十錢郵税六錢

● 溪韻松聲
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税四錢

● 月の光
● 全一冊洋裝並製
● 正價十八錢郵税四錢

● 文法評論
● 全二冊和裝並製
● 正價四十錢郵税六錢

● 續文法評論
● 全二冊和裝並製
● 正價四十錢郵税六錢

無何有道人編

名士の平生

● 伊藤博文侯 ● 大隈重信伯 ● 大山巖侯 ● 伊東巳代治男

● 石黒忠悳男 ● 品川彌二郎子 ● 近衛篤麿公 ● 曾我祐準子

● 渡邊國武子 ● 桂太郎伯 ● 寺内參謀長 ● 黒田清隆伯

● 全壹冊洋裝袖珍美本
● 正價二十五錢郵税四錢

● 雨絲風片
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税四錢

● 龍吹鶴語
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税四錢

● 小文章
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税四錢

● 袖珍作文寶典
● 全一冊洋裝上製
● 正價六十五錢郵税六錢

● 作文法
● 全一冊洋裝並製
● 正價三十錢郵税八錢

● 作文資料
● 全一冊洋裝並製
● 正價十五錢郵税四錢

● 作文六大秘訣
● 全一冊洋裝上製
● 正價二十五錢郵税四錢

● 創作要訣
● 全一冊洋裝並製
● 正價二十五錢郵税四錢

文學士 笹川臨風編著

奈良朝

本書は笹川文學士特絶の麗筆に由て奈良朝の旺盛なる人文の極致を描出せるものにして苟も本朝文學の精體を知らんとするの學者は是非一讀の要なり

● 全壹冊洋裝袖珍美本
● 正價廿五錢郵税四錢

● 明治書翰文大全
● 全一冊洋裝上製
● 正價壹圓郵税十八錢

● 明治書翰文大成
● 全一冊洋裝並製
● 正價四十五錢郵税十錢

(後付の三)

鹽井雨江 武島羽衣 大町桂月 三君合著
美文韻文 **花紅葉**
全壹冊洋裝袖珍美本 正價三十錢郵税六錢

雨江、羽衣、桂月三文學士の錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、集つて此册子に在り。才華爛發、紙上珠を聯れ、洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たり。

●英文典語句慣用法
●英和應用會話指針
●實用英和作文
●新撰日本文典
●文章字典
●歷史字典
●日本大辭典
●日本小辭典
●日本辭林
●美辭寶典
●山陰麒麟
●芳哉義士の譽

●全壹冊洋裝上製 ●正價六十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税四錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税四錢 ●全貳冊和裝上冊 ●正價九十五錢郵税八錢 ●全壹冊和裝上製 ●正價七十錢郵税六錢 ●全壹冊和洋上製 ●正價六十錢郵税八錢 ●全壹冊洋裝上製 ●價二圓廿五錢小包四百匁 ●全壹冊洋裝上製 ●正價七十五錢郵税八錢 ●全壹冊洋裝並製 ●正價三十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價廿五錢郵税四錢 ●全一冊洋裝並製 ●正價三十錢郵税六錢

日本體育會員西川政憲君著
育兒體育 **健康要訣**
●全壹冊洋裝袖珍美本
●正價三十錢郵税四錢

我國の家庭を見るに育兒の方法其宜きを得ず往々にして敎育を妨げ反て身の不健康を招くの弊あり著者久しく之を憂ひ日常の經驗に徵し本書を著はさる其記述の懇篤なるは敢て喋々の辯を俟たず

●**演說討論軌範**
●全壹冊洋裝並製
●正價三十五錢郵税八錢

文學士大町桂月君著
大絃小絃
●正價金三十錢
●郵税金八錢

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、琵琶の聲のみならんや。桂月先生の此書、才氣潑剌筆力縱橫、以て普通文の摸範とすべく以て作文の指南とすべし。

●突貫
●戰塵
●千山萬水
●續千山萬水
●耶馬溪
●一蓑一笠
●檜木笠
●南船北馬

●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税六錢 ●全一冊洋裝上製 ●正價五十錢郵税十錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價五十錢郵税十錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價四十錢郵税四錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價三十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價四十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價四十錢郵税六錢

破竹居士著
健康と遠足
●全壹冊洋裝紙皮金字入
●正價三十錢郵税六錢

凡そ政治家たると事業家たると學生たるとを問はず其身の健康を保全せすんば健腕も振ふ能はざるべく目的も達し能はざるべし本書は著者二十有餘年の實驗に徵し健康保全の最良法を詳述したるもの而も其議論文章の多姿多樣なる讀者をして覺へず嗒然たらしむ

●續南船北馬
●旅硯

●全壹冊洋裝上製 ●正價四十錢郵税六錢 ●全壹冊洋裝上製 ●正價四十五錢郵税六錢

（後付の四）

東西二十四傑

●全壹冊 洋裝袖珍美本
●正價三十五錢郵稅六錢

●源爲朝……(桂月)
●ハンニバル……(天溪)
●秦始皇……(鯉洋)
●シーザル……(空花)
●山田長政……(鳥城)
●コロンブス……(天溪)
●項羽……(質軒)
●加藤清正……(秋香)
●ペートル大帝……(華水)
●大石良雄……(青軒)
●フリドリヒ大王……(成友)
●鄭成功……(露伴)

●ワシントン……(不染)
●木戸松菊……(水哉)
●鐵木眞……(紫山)
●ネルソン……(左川)
●新田義貞……(關雪)
●北條早雲……(麗水)
●唐太宗……(絅齋)
●ガルバルジー……(春汀)
●李鴻章……(柏軒)
●モルトケ將軍……(霞城)
●木村重成……(小波)
●ジヤンダーク……(愕牛)



近世世界十偉人

正價五十錢郵稅八錢

●(伊國)カミロ、カヴール……松村介石
●(土國)オスマン、パシア……小山正武
●(露國)ゴルチヤコツフ……中西牛郎
●(獨國)ビスマーク……松本君平
●(支那)曾國藩……川崎紫山
●(英國)ベーコンスフイルド……尾崎行雄
●(日本)西鄉隆盛……三宅雪嶺
●(米國)ハミルトン……島田三郎
●(佛國)ナポレオン三世……高山林次郎
●(墺國)ルイ、コツスート……石川安次郎



●歐山米水
●歐米小觀
●歐米漫遊雜記
●大英國漫遊實記
●米國漫遊雜記
●白山黑水
●燕山楚水

●全壹冊洋裝特製 ●正價一圓五十錢郵稅十錢
●全一冊洋裝上製 ●正價四十錢郵稅四錢
●全一冊洋裝上製 ●正價四十五錢郵稅六錢
●全一冊洋裝上製 ●正價七十錢郵稅十錢
●全一冊洋裝上製 ●正價三十八錢郵稅六錢
●全一冊洋裝上製 ●正價四十五錢郵稅六錢
●全一冊洋裝上製 ●正價四十五錢郵稅六錢

●波斯之旅
●[illegible]俗紀聞
●支那人氣質
●實歷清國一斑
●歐洲巡遊通信
●日本名勝地誌
●改正漫遊案內

●全一冊洋裝並製 ●正價二十錢郵稅六錢
●全六冊和裝上版 ●正價一圓郵稅十四錢
●全一冊洋裝並製 ●正價二十錢郵稅八錢
●全一冊洋裝上製 ●正價二十五錢郵稅四錢
●全二冊洋裝並製 ●正價二十錢郵稅八錢
●全十二冊洋裝並製 ●一冊三十錢郵稅八錢
●全一冊洋裝上製 ●正價四十錢郵稅八錢

●枕頭山水
●紀行文集
●續紀行文集
●續々紀行文集
●俳諧紀行文集
●紀行文選

●全一冊洋裝並製 ●正價十五錢郵稅四錢
●全一冊洋裝上製 ●正價六十錢郵稅十六錢
●全一冊洋裝上製 ●正價六十錢郵稅十六錢
●全一冊洋裝上製 ●正價六十錢郵稅十六錢
●全一冊洋裝並製 ●正價三十錢郵稅八錢
●全一冊洋裝並製 ●正價十五錢郵稅六錢

日清戰史 全七册洋裝 大判 頁 特價一圓九十錢 郵税五十六錢

平城包圍攻撃 全一册洋布上製 大判七八二頁 正價七十錢 郵税十八錢

黄海大海戰 全一册洋布上製 大判八三八頁 正價九十錢 郵税二十錢

北清戰史 全二册洋裝 大判六六六頁 正價六十錢 郵税四錢

米國獨立戰史 全一册洋裝 中判三一二頁 正價十八錢 郵税六錢

米國南北戰史 全一册洋裝 中判三〇八頁 正價十八錢 郵税六錢

英米海戰史 全一册洋裝 中判三二〇頁 正價十八錢 郵税六錢

伊太利獨立戰史 全一册洋裝 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

希臘獨立戰史 全一册洋裝 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

英國革命戰史 全一册洋裝 中判三三〇頁 正價十八錢 郵税六錢

佛國革命戰史 全一册洋裝 中判二九七頁 正價十八錢 郵税六錢

英佛聯合征清戰史 全一册洋裝 中判三〇〇頁 正價十八錢 郵税六錢

印度蠶食戰史 全一册洋裝 中判三一〇頁 正價十八錢 郵税六錢





文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 **暗香疎影**

全壹册洋裝袖珍 正價二十五錢 郵税金四錢

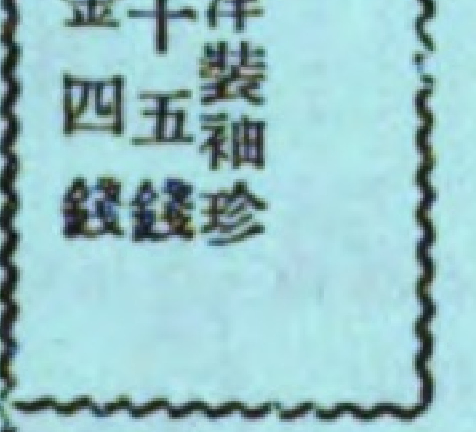
雨江先生の文溫籍にして氣韻自から高く恰もこれ梅影清水に落ち暗香黄昏の月に浮むする如き天下讀書家願くは一本を備へて詞藻を味はれよ。

千河岸櫻所君著

近世百傑傳 全壹册洋裝袖珍上製 正價金五拾錢 郵税金八錢

續近世百傑傳 全壹册洋裝袖珍上製 正價金四拾錢 郵税金六錢

本書は勉強耐忍忠孝節義の事蹟を歴叙し以て少壯子女修身立志の基礎龜鑑さすべきものを主眼とせり其正編に於ては林子平より原垣山まで百人の評傳何れも其眞髓を描出し續編更に長沼澹齋より小永井小舟まで一百人の名士を輯めぬ千河岸先生精到壯嚴の筆をもつて此正續二編を著はし大抵近世の名士を網羅せり。



ナイル海戰史 全一册洋裝 中判三四七頁 正價十八錢 郵税六錢

フレデリッキ大王七年戰史 全一册洋裝 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

三十年戰史 全一册洋裝 中判三二八頁 正價十八錢 郵税六錢

歴山大王統一戰史 全一册洋裝 中判三一六頁 正價十八錢 郵税六錢

ヒユニック戰史 全一册洋裝 中判三二五頁 正價十八錢 郵税六錢

希臘波斯戰史 全一册洋裝 中判三五三頁 正價十八錢 郵税六錢

シーザーポンペー羅馬戰史 全一册洋裝 中判三二六頁 正價十八錢 郵税六錢

南洋之風雲 全一册洋裝 大判一二四頁 正價二十錢 郵税四錢

[illegible]建國 全一册洋裝 大判二一六頁 正價四十錢 郵税六錢

(後付の六)

文學博士 高山林次郎君著

文藝評論

正價三十錢 郵税八錢

本書は著者が多年研鑽攻究の餘に成れる論文を集めたるものにして滔々數萬言、寸鐵人を殺すの底の小品あり、或は文を談し詩を說き或は史を論し讀を品す。讀者一たひ之を繙かば必すや手の舞ひ足の踏むを知らざるものらあんさす。

岳飛 文學士 笹川種郎君著
コロンブス 法學士 桐生政次君著
ガリバルヂー 法學士 岸崎昌君著
彼得大帝 法學士 佐藤信安君著
華聖頓 文學士 福山義春君著

岸上質軒君編

明治二百五十家絶句

正價六十錢 郵税十二錢

二百五十家詩たる總て二千五百首花の艷、月の淸、山の高水の永、雪の潔、雨の濃、風の輕、雲の澹、備はらざる所なし誠に是れ文壇の偉觀、一代の盛事なりさす、

釋迦 文學博士 高山林次郎君著
孔子 文學士 吉國藤吉君著
耶蘇 文學士 上田敏君著
比斯麥 法學士 笹川潔君著
漢尼抜 文學士 大町芳衛君著
マホメット 文學士 坂本健一君著
漢高祖 文學士 三浦菊太郎君著
子ルソン 法學士 島田文之助君著
ガーフヰルド 文學士 酒井小太郎君著
デモスセ子ス 文學士 十時彌君著
シェクスピーヤ 法學士 中村可雄君著
ナポレヲン 文學士 土井晩翠君著
孟子 法學士 永井惟直君著
成吉思汗 法學士 太田三郎君著
クロンウェル 法學士 松岡國男君著
戈登將軍 法學士 赤松紫川君著

各編共
一冊金十三錢
郵税四錢

孔明 法學士 安東俊明君著
ソクラテス 文學士 久保天隨君著
グラッドストン 法學士 近松宇太郎君著
歷山大王 文學士 幸田成友君著
王陽明 文學士 白河次郎君著

內田不知庵君著

文藝小品

正價三十五錢 郵税十錢

作者獨得の犀利なる筆鋒を以て機警なる批評精到なる叙事文其他の雜著積んで堆を成すに至る本書は其精英を抜きたるものなり、淸瑩明𤏲、一讀寢食を忘るゝの快味あるべし。

百束持中君編

作文熟語字典

正價壹圓 郵税十四錢

幾萬の熟語をいろは別に集拾して訓解考證極めて明確なり文章を綴り熟語を求めんさするもの此一本を机上に置かば側より指導する如く自在に雄編傑作を得らるべし

志賀重昂君著

日本風景論

●正價金四十錢 ●郵稅金六錢

本書は審美的さ理學的さを調和し以て風景の洵美なる所因を立論せしもの、日本近代の名著述今や新樹空に連なる季節に當りて此書を繙閲せは殊に趣味の言ふべからざるものあらん。

虞蘭得將軍　法學士布施謙太郎君著

ウエリントン　文學士高木尙介君著

クリスピー　法學士名尾良辰君著

メッテルニッヒ　法學士森山守治君著

カビテンクック　法學士谷野格君著

ジヤンダーク　文學士中內義一君著

シーザー　法學士柿山淸君著

査列斯大王　法學士中大路正雄君著

フランクリン　文學士熊谷五郎君著

ニユートン　文學士三好愛吉君著

●以上各編共正價金一冊十三錢郵稅四錢

英米文人傳　●全壹冊洋裝中判並綴 ●正價金十二錢郵稅四錢

英傑之典型　●全壹冊洋裝小判並綴 ●正價金十錢郵稅四錢

志賀重昂君著

地理學講義

●正價金三十五錢 ●郵稅金四錢

本書は東西在來の地理學講究の方法に全く別機軸を出したるものなり日本全國の公私學校には或ば敎科用に或は參考用に或は敎師用に擧りて使用するのみならず淸國各地の學校に使用せり

通俗百科全書

全部二十四冊菊判洋裝並綴

定價 ●自一編至十五編一冊二十五錢 ●六冊一圓四十錢 ●十二冊二圓七十錢 ●十五冊三圓三十五錢 ●郵稅一冊八錢

百科の學自ら登高自卑の序なかるべからず本書此目的を以て當代知名の文士に囑し百科の學に付き勉めて其文辭を簡易にし其の意義を通俗にし以て門に入り堂に昇るの楷梯ならんことを期せしが今や全部完成を告ぐ何人も座右必備の寶典とせられたし

定價 ●自十六編至二十四編一冊三十錢 ●六冊一圓七十錢 ●九冊二圓五十錢 ●全部五圓八十錢 ●郵稅一冊八錢

島田豐君　島田弟丸君著

學生用英和字典

●全壹冊總皮上綴 ●正價壹圓三十錢郵稅十錢

島田豐君　島田弟丸君著

袖珍學生用英和字典

●全壹冊總皮上綴 ●正價一圓五十錢郵稅八錢

島田豐君　島田弟丸君著

學生用和英字典

●全壹冊總皮上綴 ●正價一圓八錢郵稅十錢

井上敏夫君著

作文錦囊

●全壹冊洋裝上製 ●正價三十五錢郵稅六錢

（笠原製本）

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳巻第七號
（明治參拾五年六月五日發行）
（明治參拾參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

東京秀英舍印刷